
~ とある刀のフェアリーテイル.....あれ？違くない？ ~

茜雫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

〜とある刀のフェアリーテイル……………あれ？違くない？〜

【Nコード】

N9840T

【作者名】

茜雫

【あらすじ】

ありきたりな理由で転生した主人公、式崎・k・詩織。落っこちた瞬間に死にそうになるわ襲われるわして行き着いたのはフェアリーテイルの世界。ま、主人公は原作知識どころか物語事態を知らないけどね！ちなみにニルヴァーナ編の少し前からスタート。べ、別に最初から書くのが面倒くさかったわけじゃないんだからね！しばらくオリジナルストーリーやります

プロローグ(前書き)

しよっぱなからハイテンション

プロローグ

「……………うぐう……………」

いきなり何事か！とツツコミをいれた画面の前のあなた！……………至
つてまともな思考回路だと思えます。どっかの幽体離脱少女

（え？そんな表現をしたのはお前が初めてだって？だってあれどう
みても幽体離脱じゃん。肉体ありながら主人公にあってるんだよ？
そう考えるとあれってどうなっ……………）

話なげーよ！！

（うるせえよ！だってあれ永遠の感動作だよ！？語らせるよ！）
やかましいわ！てか地の文どうして会話するなよ！てか早く生まれ
よ！いきなり「うぐう」じゃ題名と違う話じゃん、みたいな感じで
ブラウザバックのオンパレードだよ！？

（それは困る！……………特に作者が！）

お前違うのかよ！？誰だよお前は！？僕は作者と話してるつもりだ
ったよ！てか状況説明プリーズ！！状況がわからねえよ！僕も読ん
でる人も！……………てかなんで僕はさつきからデンプレ小説の主人
公みたいなことをいつてるんだ？

（見上げて〜ごらん〜 君の〜頭上を〜）

あ、綺麗な星空が……………って見えるかい！？なんつにも見え
ないよ！一寸どこの話じゃないくらいの闇だよ！

（さて、回想に逝くよ！）

変換間違いだよな？そうだよな？答えてく……………

「うぐう……」

「……」

「あ……う、うぐう？」

「……」

沈黙が痛いよね、立ち読みしてたら思わずキャラの口癖真似ちゃったよ。学校とか家とかならノープログラム、しかしここは書店。そんでもって僕の横には冷たい目をしたおじさんが……

ま、都会ならいざ知らずド田舎の小さい書店で立ち読みしてたら見つかるよね？こんなときだけ田舎生まれ田舎育ちの我が身を祝って……字が近いと思考の中で謝った変換しちゃうよね……呪つてみたり

「また君か……」

「また僕です」

「飽きないよね、君も……」

「そんなおじさんは呆れてますよね」

「別にうまくないよ？」

誤魔化せない！相変わらず強敵だな、さすがエンドボス！……すいません、ラスボスを格好つけようとして自滅しただけです気にしないで

これならビッグボスののがよかったか？単身で戦車破壊は当たり前、へりは撃ち落とすし、この頃はなんだっけ？AI兵器相手にやらかしてるらしいいろんな意味で最強のあの人の師匠……ところで僕は何を言いたかったんだ？忘れちゃったZE！

「いきなり黙られても困るんだけど、」

「すいませんビッグボス！」

「ビッグボス？」

「……………またやつちまったZE！」

直前まで思考していたことって思わず口から出ちゃうよね？そうだよね？僕だけのオンリーワンじゃないよね？

まさかとは思うけど神様しか知らないセカイの読書好き少女と僕だけってことはないよね！？

「とりあえず買うの？買わないの？」

「あ、じゃあこれください」

頭の中ではハイテンションだけどこの人の威圧感を前にすると下げざるを得ないこの現実！とりあえず怖いから本棚から適当に本を取り出し手渡す

「まいど」

「どうも」

繋げても文章になりそうな会話をしながら足早に立ち去る。あ、そういうばさつき適当に買ったけど何を買ったんだろう、僕

「えっと、なになに？暗くて読めない！」

言っでなかったけど今夜中！独り暮らしだから門限なんざねえよそんな訳で電灯やらやら光のある場所に到着。信号機の下だけで、交差点だが車通りは少ないのがこの地域

さて見よう！と、思い本を出そうとしたら……………

「んあれ？」

交差点を挟んだ先に一人の少女が、意外だったせいか奇妙な発音をしてしまった自分に後悔後悔

それにしても剣呑な光景だ。あれ？剣呑の使い方がくない？どこぞの殺人鬼家族の近親相姦で生まれた殺人鬼っぽいけどちよつと違うらしい人間失格なお友だちがいる方のように間違つてない？そして僕はなにを目的としてこの例えを出していたの長いよ、原文忘れたよ

そんな思考もそこそこに、剣呑（使い方違うよ、たぶん）な光景をみていると

「あ、」

飛び出しましたね見事に、そんなもってちょうど大型バスが突っ込んでくる

こんなとき、どうする？

1 助ける

2 助けて死ぬ

3 「フ、危ないぞお嬢ちゃん」と言っ助けて死ぬ

4 とりあえず助ける

「よし！3で！」

「え！？終わり！？見せ場じゃん！格好よく死ねたんじゃないの！？」

『いや、実際はこう』

真つ暗な空間にスクリーン表示

『フ、危な……ぎゃあああああああああ！！死ぬうつつうつつ！？』

無惨に轢かれながら叫ぶ僕が……

「ダサい、鬱だ、死のう」

『いや、死んだから思いつきり無様にくたばりやがりましたよ？』

「だいたい選択しおかしいよね！？」

『お前の思考だよ？』

「ブラックホールがあつたら入りたい……！」

『スケールでかいな！？』

「そだね、ところでそんなことがありながらふつつにかいわしているのはあれか？まれにいうてんせいでせうか？」

『脱力しすぎて退化してるよね？読みづらいからもどってね？』

とりあえず、そうゆうわけだそうです

つて、判るかあ！！なんだよこの会話！主旨がわからねえね！重要な問題が何一つ解決してないし未だに状況がわからないからね！？てか何も見えないもん！

右見て何もなし、左見て何もなし、後ろ見て何もなし、上見て何も

なし、下見て何もなし！！前にいる同い年くらいの半透明な青年？
風景だ！闇の中に突如現れてさつきから会話してるけど闇の一部だ
っ！！

『認めないの！？あくまで風景とみなすのこの状況で！？』

「僕はね、神様なんて信じないんだ。信じているのは小説の中のキ
ャラクターが実在している可能性だけだ！！」

『最初に「うぐう」の話し出したら否定したよね！』

「最初から数えて1つ目の（ ）は僕のだ」

『どっちがどっちだかわからねえ！てか自分でツツコンだの！？そ
して俺が何故かいきなり出てきたの！？』

暫し沈黙

後、喧騒

「で？ふーあーyou?」

『一部が完全に日本語なのに対して最後だけ本場に負けず劣らずの
発音だったな……』

「youしか判らないもん」

『意味わからずに使ったのかよ！？英語やれよ！きちんと学べよ現
役高校生！』

「うるさいよ！てかまた話がずれたよ！いつになったら僕の現状が
わかるんだよ！あんたの概念的素性は全作品共通だからいいけどさ
！神様とか言うんだろ？俺はどっか別世界にとばされるのか？いや
だよ学園黙 目録とか、緋弾の リアとかえぶりいで死にそうに
なるところ！！」

『え、そんな……』

「いかにも残念そうな表情をどうも！残念だけど嫌だからな！」

『じゃ、とりあえず転生後の特典についてだけど……』

「聞けよ！話を！聞いてないの！？無視なの！？」

てかなんで？だいたい何かしらの理由があるでしょ？死んだ数が丁度なん兆人目とか、神様自身がミスったとか、意味もなくいきなり来世？

なにか？普通なのか？僕が知らないだけでこれが共通の現実なのか？

『いや、お前が助けたあの子ね？俺の娘な訳よ』

「お前のガキか！現世に出すなよ天界で育てろよ今時の日本は小さい子供に欲情する危ない人がいるんだよ！！」

『いや、あれは俺が現世で作った子なんだよね』

「人間創造するなよ！あの子はなんだ！イヴか！人類3人目の人の原点か！」

『違う違う、家庭があるんだよ。綺麗な人だよ』

「なんで神様がそんなことやってんの！？」

『暇だったからイケメンに化けてナンパしたら流れで……ね』

「知らないよ！相手はだれだよ！神の子生む勇氣は称えるけどダメだと思うよ！人ならざる者を現世に産み出しちゃ！」

『相手か？たしか中学1年生とか言ってたな？』

「犯人はお前か！結構前に見たあのニユースの犯人はお前か！！」

なんか本人の必死の訴えで終息したらしいが………かなり問題視されてたよ？てかこいつどっかで見たことあるかと思えばあのニユースの女の子の横にいたチャライ奴だ！

『今は幸せいっぱいです！』

「知らねえよ！？」

『そんな訳でいつといで』

「話の接点が皆無すぎてまったくもって付いていけない！」

『幸せの、お・す・そ・わ・け』

「キツツツモ！」

きもちわるいね、ポーズとかポーズとかポーズとか顔とか

『バイバイキーン』

「ちょ！僕はどこに逝くの！？てか字が違っ！特典は！？ちよつと
まてやロリコン野郎！あ、ごめん、嘘！だから落とさないでぎゃあ
あああああああああ！！！！！」

そんな訳で……………僕こと式崎・K・詩織しきまきは幸せしあわせのおすそわけとやら
のためにとある異世界……………

つて！最終的に僕はどこに飛ばされたんだああああああああああ
あああ！！

よし！着い……あれ！？ピンチ！？（前書き）

読みづらい、かな？

あ、ちなみに僕はフェアリーテイルではウエндыーが一番好きです

ロリコンじゃないよ！

よし！着い……あれ！？ピンチ！？

「いや、ここまで予想通りとはね……………」

いやまったく、転生後はパラシュートなしのスカイダイビングだよね……！

よく聞くけど普通に死ぬよね……！
と、半分諦めたように自由落下していますこのわたくし。右のポケットを漁りますれば……………

【ヤッホー 生きてるかな？ 適当に落としたから行き先は知らないけどチートってるから多分生きるのには不便無いと思うよ……】

つて、手紙が入っていた

知るかぁ！！確かに大体の力の理解はできたけどどう考えてもこの状況を回避できるであろう【空を飛ぶ】ことのできる力がないわ！
！あっても間に合わない！地面がもう目の前！！

「死ぬよね！？また死ぬよ！ギャアアアアアアアアアアアアアアア……！！」

「でも生きてる俺ってチート……！！」

ガバツ！つと跳ね起きながら叫ぶ

いや、実際は死にましたよ？首とか背骨とか同時に重要な部分が複雑骨折して！ま、そこはギャグ補正なのか治ったけど腕やら足やらはまだへし折れてますはい

小さくコキコキ鳴りながら少しずつ再生してるみたいだけど痛いね！泣きそうだよ！周りでなんか猿みたいのが鳴いてるけどね！！

「ウホッ、ウホッ！」

「うわ！見た目通りすぎてつまらない！」

「ウホッ？」

あ、怒った。と思った瞬間出るわ出るわ、猿みたいなのがゾロゾロと…………

転生早々ピーンチ

「まてや、常時ならいざ知らず……………片腕片足折れてるんだけど？」

よっ、と力を入れて跳ね上がる。空中で数回回転しクレーターを抜け出す。ま、抜け出した先に猿みたいなのが丁度いるんだけど……とりあえず無視しながらズルズルと足を引きずり手を庇いながら猿みたいな奴等の間を通り抜ける

「はいはい失礼。ちょっと病院行くから道開けてね〜」

「ウ、ウホッ……………」

「どうも」

が
人語が理解できるのかは知らないが一応道を開けてくれた

「……………ウホツウホツウホツ!？」

ってんなわけあるかい!みたいなツツコミと共に案の定飛び掛かってきた

ですよね〜、世の中そんなに甘くないですよね〜……………
はっ、

「……………?」

刹那、数体の猿が飛び掛かってきた姿勢のまま空中で(…)静止する

僕は振り向いてもいない、けど、なにもしていない訳じゃない

「いいね〜、これ」

これ、が指すのは鈍い光を放つ背中を突き破り生えている数本の刀それらが猿を空中で串刺しにし静止させているのだ。なぜか痛みはないが背中から何かが生えているというなんとも不気味な感覚が気持ち悪いが、気分はいい

「さああああて、力の実験台になってもらうぞ?」

そう、僕は地を蹴った

「ハア、ハア、ハア、ハア……………」

辺りを木々で囲まれた森の中、どこか急いだように駆ける少女と羽の生えた猫のような生き物がいた

少女は深い青色の腰まで伸びた髪、右肩になにか生き物を模したようなタトゥーが書かれていて今はまだ幼い顔を疲労のためか少々苦しそうに歪めながら小さな手足を使い走っていた

「こ、このさきだよね？シャルル」

「たぶんね、というよりあれだけの衝突音がしたんだから聞くまでもないでしょう？」

「ううゝ、ごめんなさい」

「すぐに謝らない！今はそれより急ぎましょう！」

「う、うん」

シャルルと呼ばれた白い毛並みの猫が少女を急かすが、まだなぜこんな森の中にいるのか不思議なほど幼い見た目の少女はそれほど早くは走れない

「別に、ウエンデイがいいなら行く必要はないのよ？」

「うゝん、でもシャルルも気になるでしょ？」

「ま、そうだけどね……………」

ウエンデイとシャルル、二人はこの森まで薬草を取りに来ていたのだがつい先程、誰かの叫び声と巨大な岩でも降ってきたのではないかというほどの衝突音が聞こえてきたのだ

いくら得たいの知らないものだとしてもそれだけのことが近辺で起きれば、しかも人の悲鳴まで聞こえたとなれば魔導師ギルドの一員

としてはほづつておける筈もない

「ウエンディ！そろそろ着くわよ！」

「う、うん！」

そして、ウエンディが現場と思われる場所、いや、何かが落ちたと
思われる巨大なクレーターがあるのでそこで間違いはないのだが
ウエンディとシャルルが一番驚いたのはそのクレーターではなく、
異常に集まったバルカンでも、切り刻まれた木々でも、所々でノビ
ているバルカンでもなく
左腕と右足があり得ない方向に曲がり、片手片腕しか使えない状態
で、掌から直接生えた刀で笑いながらバルカンを叩き伏せている黒
い青年の姿だった

「おらおらおらおらおらおらおらおらおらあああー！！」

とりあえず叩き伏せる。最初にテンション上がりすぎて猿殺しそう
になったのはヤバかったね！

いまは自重して刃のない刀で叩いている状態。

それにしても別の意味でヤバイ……暴れすぎて只でさえ折れていた
手足が遂に大変なことになりました

痛てえ〜

「こんなときは、うん、あれだな。……………不幸だあああああああああああ！！！！」

そんな雄叫びが空に溶けるよりも早く詩織の姿は消え、後には目を回した大量のバルカンのみが残されていた

「ウエンデイ！」

シャルルの絶叫とも悲鳴ともつからない声がバルカンの声にほとんどかき消されながらも木霊する

先の戦闘。ウエンデイが詩織の体から刀が生えているのを見て刀で串刺しにされていると勘違いしそれをたしなめていた少しの間、そのわずかな時間でいつの間にか近づいていたバルカンにウエンデイが連れ去られたのだ

シャルルは咄嗟にエーラ、翼を使い逃げたがすぐに後悔した。自分がいてどうとなるものでもないができればウエンデイのそばにいたかった

エーラではすでに視界から消えようとしているバルカン達には追いつけない。せめて、

「さっきの、あの男……………」

一挙一動がすさまじく速く、一瞬でバルカンを数十体吹き飛ばす様はただ者には見えなかった

が、振り返っても彼の姿はない。満身創痍の状態でもあったのだ、バルカンが逃げ出したと同時に帰ったのかもしれない

だからそれは、星に願うような、叶うことのない呟きのはずだった

「それは、僕のことかな？」

「え、」

シャルルが今いるのは背の高い木々のさらに上の場所。人間が位置できるような場所ではない

しかし、彼はいた。シャルルのエーラによく似た、しかし漆黒の翼をもつてして浮いていた

「え、あ、あ、あ、あなた、なんで？」

「あ？ああ、これ？ごめんごめん、勝手に貰った」

「は？」

シャルルは、なぜここにいるのか、と聞いたつもりだったが詩織は、なぜ自分と同じ魔法が使えるのか？と聞かれたと勘違いしたようだ。そのため、シャルルからすれば意味のわからない返答になってしまっていた

「ちがうわよ！なんでここにいてることよ！」

「え？ダメだった！？ここって君のプライベートルームだった！？」

「どうみたら私の部屋に見えるのよ！ここは空中よ！」

な、なんなのこの男！？そう思うのは仕方ないだろう。バルカン何十体を相手に余裕で戦うような強者がケタケタ笑いながらまるで漫才のようなことを言い出したのだから

「いや、飛んでるから……」

「理由になってないわよ！って、そんなこと言ってる場合じゃないわ！ウエンデイが、」

「ん？ウエンデイ？」

「そう、バルカンに拐われちゃったのよ。私じゃもう追い付けない、貴方、お願いできないかしら？」

悲しそうに、頼む。その目には誰が見てもわかるであろう明確な悲しみ。

「ああ、さっきの悲鳴はそのウエンデイって子の悲鳴か？」

「何を他人事みたいなこと言ってるのよ！元はと言えばあんたがバルカンを全部倒しておかないから……」

言ってしまった、シャルルに絶望のような感情が広がる。今、ウエンデイを助けられそうなのはこの破天荒な男しかないのにこんなことを言ってしまうのは気分を害した、と帰ってしまうかもしれないそんな考えからしばらく口をつぐんでいると男から意外な一言が返ってくる

「じゃ、行こうよ。その子を助けに」

「え？な、なんで？」

「いや、お前が助けてくれないかと言ったんじゃないか？」

「そ、それはそうだけど……ううん、お願い！後でちゃんとお礼はするから！」

「僕、人の弱味に漬り込んで見返りを求めるように見えるのか……」

……

「え、あ、ちょ、ちょっとあんた！」

先程の暴言を聞いていなかったようにスルーしたにも関わらずなぜか頭垂れる。手足が折れていて頭を下げ、ダラリと空中に浮かぶ様はウエンディが見たら気を失うだろう

が、次の瞬間にはガバツと頭を上げ右手を天に振り上げ

「しゃあああ！！名誉挽回のためにも全力で行くぞ！」

「……………やる気を出してくれたようで何よりよ、」

シャルルは、もうこの男を理解しようとするのを諦めたらしい

「れでい……………「うー！」

「ちよ、きゃああー！」

いきなり黒い翼を消して落ち出したかと思えば無事な方の右腕でシャルルをガシツ、と掴み細い木の枝に左足で着地

タンツ、と軽い音がしたかと思えば森の木々が線になりだした。男が自分を掴んで凄まじい勢いで跳はつていたのだと、気づいたのはしばらくしてから

風景が線や模様としてしか見えないほどの早さで木から木へ移動しているにも関わらずまったく空気の抵抗を感じないことにもシャルルからしてみれば驚愕するには十分だったが、何より魔法を使った様子もないのに魔導四輪など足元にも及ばない勢いであることには目を見張った

「あ、あんた……………いったい何者？」

「名前を聞くときはまずは自分からだぞ？猫」

「（名前を聞いた訳じゃないんだけど……………シャルルよ）」

シャルルがそう言うと、男は薄い唇を楽しそうにニッと歪め……………

「僕は、クライス」

クライスはさらに加速し、ウェンディの拐われた方向へ消えていった

「あれか？」

「ええ！急いで！」

今、なぜか僕は猫をひっ掴んで走っていた。いや、走るというのには少し違いかもしれない

左足だけで跳ねている、というのが正しいだろう。

それにしても、まさか本当に人がいたとは……判っていればゴリラもどきを、バルカン？とか言うらしいが……

とにかく、バルカン？を逃がさなかったのに……。悲鳴が聞こえた方向に行ってみれば逃げていくバルカンと空に浮かんでいる猫がいた。てか、このシャルルとかいう大層な名前を持ったこの生き物は猫なのか？どうみても二足歩行っぽいし、話してるし、服着てるし、空飛ぶ魔法を使ってるし……

ちなみに名前は猫がシャルル、と外国っぽい名前だったから名前は僕の外国名であるクライスを名乗った

とりあえず猫を【アルファ・ステイグマ】で見てもたら翼を出すやり方が一瞬で判ったから少し改造してから近づいてみれば僕がやりそこねたバルカンにウェンディという少女が拐われたらしい

シャルル曰く、少なからず僕のせいみたいだし追ってきたが……見つけた

「ウエンデイ！」

「え、シャルル！？どこ、どこなの！？助けてっ」

一瞬でバルカンの目の前に回り込む。片足立ちだから格好がつかないが……

そんなことより、バルカンのごつつい腕に抱えられていた少女、ウエンデイは可愛い子というのがピッタリな子だった

深蒼の綺麗な長髪、幼いながらも整っている顔立ち、10歳くらいだろうか？今は、相当怖かったのだろう目が真っ赤でずいぶん泣いたことが判った

来たことがない世界、人間にはありえない力、そんなものにかれてこんな小さな子を危険なめに会わせてしまったのか、『俺』は……

「ウホ！？さっきの人間！」

「なんだ、テメエ話せるのか？だったら話しは早い。その子を放せ、そして消えろ」

「嫌だもんね、この子は僕のお嫁さんにするんだもんね」

「ひっ、い、嫌ですっ！」

「俺の話し、聞いてた？」

バルカンには、この場にいた誰にも俺の動きは見えなかったと思う俺の腕の中にはそのまま移動させてきたようにウエンデイが、俺の足の下には頭を踏み潰されたバルカンが

「ウ、ウホ！？な、なにを………！」

「忠告、したよな？」

簡単なことだ、このゴミの腕を切り落として（……………）
ウエンディを持ってきてついでに足蹴にしたらただ
ヒタリ、

鈍く輝く俺の手から生えた刀をゴミの首に突きつける

「さあ、死ぬか、死ぬか、死ぬか、選べよ」

「ヒイ！た、助け……………」

「選べよ」

鋭い刃は、その首にゆったりと吸い込まれていった……………

はい！セーフ！！

いや、危なかったよ。まさかこうなっても（チートになっても）
この症状が出るとは……………

簡単に言えば先天性の多重人格障害。ピンクのツインテール、カド
ラ？だかの異名を持つさまざまなツンデレキャラの声を超越してい
るあの方が声優をしているあの子の奴隷？パートナー？の人のヒス
テリックなんたら怒りが頂点に達した場合バージョンと考えるてく
ださい

ギリギリで腕の中で震えるウエンディのことを思い出して『俺』か

ら僕、に戻れたけど……
危うく幼い女の子に醜いものを見せるところだったよ

「あ、あの………」

「ん？あ、ごめんごめん。今降ろすよ」

そういえば、ウェンディを持ったままだった。とりあえず怪我や目立った傷はなさそうだ

軽く服を叩いてバルカンの毛を落として身だしなみを整えてあげたあと

「まつことに！！すいませんでしたあああー！！！！」

「ええ！？」

土下座。そりやもう酷いめに合わせちゃったからね……
しばらくそのまま静止していると、

「あ、あの……ええーと、あ、ありがとうございました！！」

なぜか感謝された。なんだ、土下座は感謝されるものなのか？
しばらく沈黙。それを破ったのはシャルルだった

「なに2人して頭下げてるのよ！というよりいい加減上げなさいよ
！？」

「いや、酷いめにあわせちゃったし」

「た、助けてもらったから………」

「ん？」

「え？」

互いの言葉に同時に頭を上げる

「いやいや！確かに助けたけど原因は僕だから！お礼を言われる資格はないよ？」

「え、でも、助けてくれたことには違いありませんから……」

「いや、でもね……」

「ええーと、……」

「ああもう！焦れたいわね！！」

お互いに歯切れの悪い会話をしているとシャルルがキレた。

翼、たしかエーラだったっけ？を生やしウエンディの頭の辺りまで来て止まり

「細かいことはいいじゃない。あんたはウエンディを助けた、ウエンディはこいつに助けてもらった！それだけのことになにイジイジとしてるのよ！」

「うう、ごめんなさい」

「……ごめんなさい」

「わかればいいのよ」

猫に謝ったのは生まれて初めての気がする……

「それにしても、あんた痛くないの？その折れてる手足」

「ああ、これ？………そういえば超痛てええー！

！！」

そうだった！折れてたんだよ僕の手足！！痛い！思い出したら急激に痛くなってきた！！てか、意識も、遠退い、て………や、ばい………

「え？え？え！？あ、あの！どうしたんですか！？」

「いや、なんでも、ない。ただ、意識が、遠退いてきた、ただだか

ら……」

「それって重症じゃない！ウエンディ！治療魔法を………」
「う、うん………」

遠退いていく意識の渦中で、シャルルとウエンディが焦って僕を支えようと手を伸ばす姿をみて、

僕の意識は深い闇の中に消えていった………

よし！着い……あれ！？ピンチ！？（後書き）

（予告）

「知らない、断じて知らない……」

「こゝ、殺す気!？」

「頑丈だからな」

「なんでよ!？」

「へ？な、なにがですか？」

「あなたは、何者ですか？」

会話っぽくなっているけど特にながりはしないよ！
感想や、意見などありましたら是非お願いします（＾Ｏ＾）／

主人公設定（前書き）

主人公のステータス一覧です

いろんな作品の技を所々オリジナル仕様にしてあるだけの気がする

…

主人公設定

【名前】式崎・k・詩織

しきやま・くわいさ・しおひ

外国人の母と日本人の父を持つが生憎黒髪黒目。ボケたりツッコミしたりとどっちもこなす。父が【式裂流】という刀術を使い、幼少の頃から習っていた。しかもとうの昔に父を越えていて、今では木刀でや手刀での物質切断も可能。刀だけでなく、剣術、槍術、棒術、体術など様々な武術をこなせる。物事を真面目にやらないタイプだが自身が気に入ったことや楽しいと思うことはとことんやりこむ。先天性多重人格障害者で時と場合によって一人称と話し方が変わる

【見た目】結界師の火黒が人皮を着ているときの見た目に似ている。服装は黒のズボンに黒のノースリーブを着ていて、その上から黒を主色に彼岸花が所々に描かれている着物を着ている
身長176cm、体重55kg。全体的に細い方だが片手で大木数本なら軽々引きずることができる

【転生後の能力】

〈複写眼〉

アルファ・ステイグマ。魔法を見ただけで魔法の構成を理解し、読み取る。魔力の流れを真似して相手の魔法をコピーすることも可能。使用時は右目に朱の五芒星が現れる。ドラゴンスレイヤーの魔法は見えるがコピーできない

〈殲滅眼〉

イーノ・ドゥーエ。魔力を喰らい一時的に爆発的な身体能力を得る。

もしくは人間の肉体を直接喰らい力を増すことも可能
使用時は魔法が使えない。こちらは左目に朱の十字が現れる。自分
とドラゴンスレイヤーの魔法は喰らえない

く壱匹狼く

ウエル・カミナ。全身に獣を模した黒いオーラを纏う。使用時はた
とえ魔術師千人分の魔力攻撃を受けても傷1つ付かないが代償とし
て肉体が常時破壊されている
使用限界は666秒で、それ以上は暴走してありとあらゆるものを
破壊し尽くしてしまう

く身刀く

全身から刀を生やせる能力。皮膚を突き破りながら出現するがそれ
によるダメージ、傷みはない

く五封刀く

五指に封じられた刀を使う能力

壱・毒刀【腐】：ありとあらゆる毒を生成し操る刀。黒一色の刀で
刀身に黒緑色の不気味なオーラを纏う。

弐・限刀【千】：数に限りのない刀。白い直刀で柄に黒い十字が刻
まれている。脆いが切れ味は高い

参・墮刀【滅】：消滅をまとう刀。龍燐のような模様をした柄とガ
ラスの様に美しく脆そうな紅い刀身をしている。形状を変えること
も可能

四・討竜刀【圧】：竜殺しの刀。見た目は刀からほど遠く長方形を
半ばで湾曲させたような巨大な刀身を持ち、刃の下方に巨大な回転
式弾倉が備え付けられている。柄を引き延ばすことで薙刀のように
することも可能

五・憑鎌【歪】：自身の負の感情を限界化した大鎌。不気味な見た
目に違わず相手に対する負の感情が大きければ大きいほどその切れ

味と自身の力を増す

【魔法】

複写眼の関係で制限はないが魔法は風の魔法を得意とする

主人公設定（後書き）

引き続き感想、意見をお待ちしています（＾ｖ＾）

シユウ設定(前書き)

割り込み投稿です

シュウ設定

【名前】シュウ

クライスがウエンデイ達と木の実を採りにいった先にいた妙な魔法で操られていた少女。表情の起伏が異様に薄くクライス、ウエンデイ、シャルル以外にはその変化は理解されないほど。ドラゴンスレイヤーだが、主に喚装で呼び出した武器で戦うことが多い。記憶の一部を失っているためと考えられる。性格は人見知り、無感情(クライス達の前ではそこそこ感情を見せる)無頓着。退屈になるとクライス、ウエンデイのどちらかに寄り添って眠ってしまうこともある。話し方もマイペースで、幼い方の姿だと舌足らずなのでかなりゆっくり、戦闘時の姿でもあまり早くは話さない。

【見た目】(幼)黒髪を肩の辺りまで伸ばしていて、胸元に白い星が描かれた黒いワンピースを着ている。(戦)ブラックロックシューターまんまの姿。(幼)身長105cm体重18kg(戦)身長154cm体重34kg。肌が雪のように白く、瞳が宝石のように蒼い。クライスより細身だが弱々しい感じはない。力は(戦)の状態ではクライスの上をいくほど。

【魔法・能力】

〈喚装〉

ドラゴンスレイヤーの魔法ではない魔法。ブラックシューター、魔導二輪などを取り出すはまだ使っていないものが多々あるらしい。

〈?〉

幼い少女の姿から中学生ほどの見た目まで成長する。シユウ曰く『なんとなく』でやっているため名称は不明。

〈ブラックシューター〉

今のところ唯一ドラゴンスレイヤーの魔力を使って攻撃する武器。単発、レーザー状などに魔力を加工して放てる。砲撃ができなくなるかわりに、ブラックシューター自体に刃が生え、巨大な剣のようにもできる。

シュウ設定（後書き）

正直言つて、シュウの「蒼竜の……！」みたいな技、考えてないんですよね。

と、いうわけで！

アンケートです。シュウの”ドラゴンスレイヤーとして”の技を募集します。

シュウのドラゴンスレイヤーの力は【蒼い光を操る】ことです。物質のように硬化させたり、何かに纏わせて特殊な力を付与したり、決まっていなくても効果は自由です！
武器でも構いません！

みなさまのご意見、お待ちしております！

え？ギルド？なにそれ？ま、とりあえずよろしく！（前書き）

ウエンディ相手になにしてんだー！

って叫ばないでね？

え？ギルド？なにそれ？ま、とりあえずよろしく！

「……………知らない、断じて知らない……………」

「……………」
ブツブツと呟く僕の腕の内に、とうるか僕が自分自身の腕で『彼女』を包み込むようにしていた

いや、断じて僕が望んで『彼女』と添い寝紛いのことをしている訳じゃない、

なんてつたつて僕は今さつき起きたばかりだし、意識が途絶えた瞬間を後に記憶もないし

「なんで、いるんだよ……………」

僕の腕の内で気持ち良さそうにすやすやと眠っている『彼女』……………」

……………ウエンディ……………」

ビクビクするどころじゃないよね！？目が覚めてボーっとした頭の中で『あー、よし。恒例のあれやろうか、知らない……………』まで考えた

ところすでに治っていたらしい左腕にフニフニと柔らかい感触……………」

僕もまだ寝ぼけてたらしくなにかなあ、としばらく強弱をつけながらフニフニやってましたよ。そしたら『……………っん……………』

って聞こえてきたよ、少女の声が！

同時に意識が覚醒してきて腕の中に感じる体温、息づかい、柔らかい感触……………」

……………ってわけで、第一声があれだったわけよ……………」

「……………」

「すー、すー……………うう、ん……………すー……………」

ま、フニフニしてたのはウエンディの頬であって胸じゃないから僕に引け目はないんだけど

てか『……うう、ん』とか言いながら身を寄せないでくださいウエンディちゃん

まだ会話すらまともにしたことのない僕と一緒に布団のなかでここまでやすやす眠れることには感嘆するけど……

「よし、気を取り直して……。知らない天井だ……」

なにを今さら感はあるが実際知らない天井だった。辺りを見回すと小さいながらもきちんと整理されている部屋のなかのベットに僕は寝ていたようだ

さらに見回せば小さい丸机に座布団の様なものが2つ、寝室のためかあとは本や雑誌などがいくつか置いてあるだけだ

「うーん、眠気もないし……起きるか」

このまま寝ていたらいろんな意味でヤバイイベントが発生しそうだウエンディちゃんを起こさないようゆっくりと毛布から這い出る。

出てきたせいで荒れた毛布を簡単にウエンディちゃんにかけ直しておいて部屋をでる

そこは前世？というリビングの様な場所だった。さっきのより少しだけ大きめな四角テーブルにイスが2脚、どうやら2人暮らしらしいそこも抜け、外に出る。2人暮らしのはずだが、靴はウエンディちゃんのものと思われる小さい靴が1つ、僕のスニーカーが1つ、あ、シャルルか2人暮らしの内の1人はそんなことを考えながら外へ

「くあー！っん、くっ………ふう、」

盛大に体を伸ばし辺りを見回す。小さい集落のようにも、村の一角にも見える

「ま、なにせよ日課はやらないと……………はっ！」

掌を突き破り出てきた刀を一線。普段は木刀やレプリカでやっているのだがそれはただ刀がないからで今はこんな便利な力がある
突きから停止するより早く右に切り上げ、左に下ろす。身を引きな
がら刀を上段まであげ、構える

「……………フツ……………！」

切り上げ払い回転しながら切り下ろし上げながら突く。次第に加速
していき自分でもなにをしているのか判らなくなってきたところで
……………

「【式裂流・壱の奥義】……………」

口の中で呟く、同時に刀を両手に持ち勢いそのままに……………

「空刃、絶……………」

「あら？あんな起きてたの？」

「は！？」

「え？」

ヒイイーン……………

いつのまにか背後にいたのか、しかも奥義の渦中にでてくるとは…
刃はシャルルの首を斬り飛ばすのにあと数ミリと言ったところで止ま

っていた

硬直しているシャルルに反省しながら刀をしまう

「……………こ、殺す気!？」

「すみません。演舞の途中でいきなり現れるもんだから……………てかなんでここに?」

「いきなりって、そりゃこんなに朝早くから外からヒュンヒュンと変な音が聞こえてきたら気になるわよ」

あ、そりゃそうか。木刀じゃなくて真剣でいつも通り、いやいつも以上に素早く鋭い演舞やってたらそれくらいの音は出るか

「で?調子はどうなの?昨日いきなり倒れるからウエンディがとっても心配してたんだけど?」

「そりゃ悪かった。けどもうこの通り、全快してるよ」

「そのようね。だけどいくらウエンディの治療魔法を使ったからってあんな大怪我が一晩で治るものなのかしら?」

「頑丈だからな」

「答えになってないわよ!だいたい頑丈ならなんであんな大怪我負ってたのよ?」

「雲の上から減速しないでそのまま地上に叩きつけられた」

「……………そう、」

あれ?なんか呆れられた気がする、本当のこと言っただけなのになぜ?

「そろそろウエンディも起きるでしょうから、朝食をとってその後にマスターに会いに行くわよ?一応よそ者なんだし、詳しい話とかも聞かせてちょうだい」

「詳しい話とはもかく、マスター?お前やウエンディは誰かに仕え

てるのか？」

「はあ？なに言ってるのよ、ギルドマスターよ。ここは【化け猫の宿】（ケットシエルター）ってギルドなのよ」

「ギルド？」

「……あんだ、なにも知らないの？」

知らない、よな？だいたいこれはなんの世界だ？魔法がでてくるアニメや小説、マンガなんて星の数ほどある。それにシャルルとウエインデイがこの世界の重要人物とは限らないし
そもそも、これは存在している1つの世界というだけで僕の世界にあつた物語の1つとは限らないし

「知らない。ガキの頃に親に捨てられて以来生きるために必死で山で自給自足してたから」

いきなり『異世界から来たからなにも知らない』と言っても信じてもらえるかわからないし、なによりそんなこと言ったらまた呆れられそうだからね！

「……通りであんなに強かったわけね」

「（信じた！？疑われるかと思つたのに！！）ま、人間限界まで鍛えればどうとでもなるさ」

「そうね。さて、話しはこれくらいにしてそろそろ戻りましょう」

「いや、もう少し演舞やってくよ。半時くらいで済むから」

「……辺りのものバラバラにしないでよ？」

「……だが断る！！！！」

「なんでよ！？」

「冗談だ」

「……………もぐもぐ……………」
「……………いただきます」
「いただきます」

上からシャルル、ウエンデイ、僕だ。いつも通りのノルマをこなしてから戻るとシャルルとウエンデイが朝食の用意をしていた手伝おうかとも思ったがサンドイッチとスープという至って単純なものだったため待つていてくれと言われた

暇だったからとりあえず『なんで朝同じベットにいたのか?』と聞いたらウエンデイが皿を落としたので僕がキャッチ

ウエンデイ曰く、『夜まで看病していたから……………たぶんウトウトして……………うう〜』

シャルル曰く、『私は違う部屋にいたから知らなかったわ。ま、別にいいんじゃない?』

僕は、『特に何にもしてないぞ?』

「そつえば、お礼をいってなかったな?」

「へ? な、何がですか?」

「ウエンデイ、口から落ちたわよ」

「わわわっ!……………うう〜」

「……………こつゆつ子なのか、シャルル」

「…ええ」

ずいぶん気が小さすぎやしませんか？朝のことでまだ気が動転しているらしい

ウエンデイが机を拭き終わったところで再度話しかける

「いい？」

「え？あ、すみません」

「いや、謝らなくてもいいんだけど。ま、いいや。昨日はありがとう。倒れた僕のためにずいぶんがんばってくれたみたいだし」

「いえ、私も昨日は助けてもらいましたし」

「（やばい、またループする）……………そういえばまだ自己紹介してなかったな？僕はクライス」

「あ、ウエンデイ・マーベルです」

「うん。よろしく、ウエンデイちゃん」

「はい、クライスさん」

軽く会釈。しばらくして食事を終えて食器の片付けを終えるて……

「じゃあ、行きましょう。マスターの所へ」

「あいよ」

2人の先導のもと、ギルドマスターとやらのもとへと向かう。ウエンデイ達はどこか違うところへと行くのかと思ったがどうやらこの集落自体がギルドとなっているらしい

「へー、でかいギルドなんだな？」

「はい、果物とか織物とかの生産もしてるんですよ」

「だからこんな森の中でもやっていけているわけか。いいところだな」

「ギルドのみんなもみんないい人たちですよ。あー！」

第一村人発見。このギルドのカラーなのか、縦穴式住居でくらし
ていそうな格好をしている

「おはよう。マグナ、ペテル」

「おう、ウエンディとシャルルか！おはよう」

「おはようウエンディ、シャルル。えっと、そっちの男の子は誰か
しら？」

「クライスさんだよ。昨日薬草を摘みに行ったときにバルカンに拐
われたところを助けてもらったの！」

「ま、もとはといえばバルカンを逃がしたのはクライスなんだから
当たり前よ」

「シャルル！」

端から見ればたいした会話をしているようには見えないだろう。実
際、ウエンディ達にして見ればいつもと違い日常風景だろう
だけど、僕はなにか、確実に嫌な気配を感じた。いや、詳しく言え
ば感じなかった（……………）
生き物の気配がないのだ。確かにマグナ、ペテルと呼ばれた男女は
ウエンディとシャルルと楽しそうに会話をしている。きちんと意思
のある人間にしか見えない。だけど……………

「クライスさん？」

「……………ん？なんだウエンディちゃん」

「いえ、ポーっとしていたので……」

「ああ、いや。ウエンディちゃんの言った通りいい人たちなんだな、
と思ってな」

「そうですね！だってよ2人とも！」

「はっはっは！正直な奴だ！ほれ、これやるよ。俺が作ったやつだ」

男の方が僕にリンゴを投げてきた。大きくて綺麗な赤色、とても美味しそうなリンゴだ

『俺が作った』……………やはり、妙な違和感は異世界に来た影響だろうか？

「ありがとうございます。ありがたくいただきます」

「敬語なんて使うなよ？ウエンディの恩人なんだから？」

「フフ、ウエンディの王子さまね」

「も、もうペテル！／＼／」

「じゃあね」

赤くなって怒るウエンディと僕たちに手を振りながら歩いていく2人
僕は、左手でリンゴをかじり、右手を2人に向けて振りながら笑った
たせいで細くなった【右目】で2人をじつと見ていた

ウエンディとシャルルにも半分あげたリンゴは、とても甘くおいしかった……………

「マスター、連れてきましたよ」

猫の頭のような形をした建物に入ると奥にこれまたどっかのなんたら族みたいな格好をした小さい老人が座っていた

その姿は、今の僕なら力を使うまでもなく呆気なく蹴落とすことが

できそうなのにどこか威厳に満ちていた

「なぶら、おまえさんがウエンディとシャルルを助けてくれた青年か。ばんびやる」

「いや、助けてもらったのは僕ですよ。それと、酒全部出てますよ」

威厳に満ちていた、とか思ってしまった自分が恥ずかしい！これどうみても変なおじいさんだよ！！

なんでコップに酒を汲んでから酒瓶で飲むんだよ！なんで飲み込まずに話すんだよ！足下びちゃびちゃだよ！？飲めよ！！嫌いなのか！！

「なぶら、気にするでない」

「これを気にしないやつは滅多にいないよ！！」

「クライス、いつものことよ」

「マジで！？」

「あははは……………」

ここでは当たり前の風景らしい

汚い風景だ、珍百景に応募しよう。題名は『酒戻し爺』

なんか酒の妖怪みたいだな…………

「お主、シャルルの話によればかなりの強者だそうじゃが？どこかのギルドの者か？」

「いえ、しいて言えば放浪者ですね。気の向くまま風の向くまま」

まさかつい昨日この世界に来ましたとは言えまい

「ならばこれからもどこかに腰を落ち着けるつもりはないのかね？」

「ないと言いますか、今まで人にあってもその場かぎりだったので」

「え？じゃあ私が連れてきちゃったのは迷惑でしたか？」

「いやいや！嬉しかったよ。かわいい女の子に助けてもらえたんだから」

「か、かわいい…………… / / /」

「あんだ、狙ってるの？」

「さあ？」

はあ、と呆れるシャルルと赤くなるウエンディ。たしかに、いきなり可愛いと言われたら赤くもなるか

事実だからいいよね！お世辞はダメだけど事実だからいいよね！ギヤルゲの主人公みたいに無意識ではないぞ？あんなのあり得ないし

「なぶら、ウエンディ達とはもう打ち解けているようじゃの」

「2人が優しいお陰ですよ」

「そうかそうか、よかったの、2人とも」

「うん！」

「私はどうも苦手だけど、まあ悪い奴じゃないんじゃないかしら」

ま、2人がいなかったら今頃あの森をさ迷っていたかもしれないし
な……………

なんにせよ、2人には感謝しないとな

「それで、ものは相談なんじゃが……………」

「はい？」

「おまえさん、このギルドに入らんか？」

「……………は？」

今、この人はなんと言った？ ギルドに入らないか、だと？ いや、別に嫌じゃないんだけどね？ そんな唐突に決めていいものなの？ しかも個人の意見で…………… って、この人はギルドマスターだった

！！ てかこの人くらいしかいきなり入れなんて言わないよたぶん！！

「ま、マスター？ いきなりそれは、クライスさんが困りますよ」

そう言いながらもなにか期待を込めたいけな瞳でちらちら僕を見るのはなぜ？

「このギルドには戦えるものがないからの、おまえさんのように強い者がおるとギルドとしても心強い。それに、ウエンディのことも頼みたいんじゃないよ。シャルルもいるが、やはりいざというときには心強い仲間がいたほうがいいからの」

「戦えるものがない？」

「あ、このギルドはほとんど物資の生産に力を入れていて私は各地の病や呪いにかかってしまった人たちの治療や解呪をしてるんです」
「ウエンディは頼まれると依頼以上のことをするから見てる私は毎回頭を悩ませてるのよ」

「む、だって困っている人がいて私で力になれるなら力になりたいから……」

「……なるほど、よくわかったよ」

ウエンディは、優しすぎるんだな。優しすぎて自分より他人を優先して、今はまだ平気だけどその内ウエンディだけでは対処しきれない仕事も出てくるかもしれない

シャルルもしっかりしてるみたいだけど、この前みたいにモンスターとかに襲われたら危ないからな

ま、どちらにせよ答えは決まってるさ

「無論、願ってもないはなしですよ」

「おお、入ってくれるのじゃな？」

「喜んで。よろしく願いします、マスター」

まだまだ知らないこの世界、こんなにも早く衣食住が整うなんてかなり幸運なことだろう

僕はその場にしゃがみウエンディと、シャルルに左右の手をそれぞれ差し出す

「というわけで、新しく【化猫の宿】（ケットシエルター）に入りましたクライスだ。改めてよろしく、2人とも」

「本当に、いいんですか？」

「おう！一人旅も悪くはないけど、やっぱり仲間がいたほうが楽しいしな」

「そう、ですよ！よろしく願いします、クライスさん！」

「フンツ、せいぜいウエンディに怪我がないようにしてよね」

「無論だ！身を呈して護るさ！」

2人の手と、僕の手が結ばれた

「それで、話というのはなんじゃ？」

「いえ、大したことじゃありませんよ」

今、建物には僕とマスターしかいない。ウエンディやシャルル、ギルドのみんなにもマスターと話があると言って出てもらった

僕がマスターと話したいこと、それは………

「あなたは、いや違うかな。このギルドは、なんですか？」

「っ……………なぜ、それを知っているのじゃ」

「僕は特別な目を持つてるんですよ。魔力を解析、分析、その魔法の能力を見ることのできる目が、ね」

「むう、ならばおまえさんには僕がどう見える」

「魔力の塊、ウエンディとシャルル以外のギルドメンバーも同じように」

僕自身、まだこの力に慣れたわけではないが【複写眼】でシャルルを見たときは魔力であろうエネルギーの流れが見えた。それを真似してあの魔法を複製したのだ

さっきの2人を見たときは、魔法が流れているのではなく2人自身が魔力の塊だったのだ

「こんどは質問を変えます。あなたは、何者ですか？」

「……………」

「あ、すいませんマスター。言いたくないことなら、もしくはなにが言えない事情があるなら僕も追求もしませんしウエンディに言ったりもしません。入ったばかりの僕なんかには話せなんと方がおかしいですからね」

反省の意を込めて頭を下げる。今言ったことは別に皮肉とかではない
実際まだ新入りでしかない僕にマスターがこんな苦しそうな顔になることを話してくれなんておこがましいにも程がある

やっぱり、知らず知らずの間にテンションが上がりすぎて少し調子に乗っているみたいだ

「ウエンディ達はかならず護ります。さっきの話は忘れてください。
では、」

「……………待て」

もう一度頭を下げ出ていこうとしたところで呼び止められる。さっきの話の続き、というわけではなさそうだ

「なんですか？」

「さっきの話はいつかはなそう。今はウエンディ達と、仲良くしてほしいのじゃ」

「？ そんなこと当たり前の……………」

「お主は、ウエンディとシャルルの本当の（・・・）仲間になってくれ」

「本当の、仲間？」

そこまで言うとマスターは目を閉じてしまった。話すことはもうないらしい

僕にはマスターの言葉の意味はまだわからない、でもいつか話してくれるなら……………待とう

今は、

「あ！クライスさん！あの……………」

「やっと来たわね？ウエンディに新しい依頼が来たのよ。さっそく手伝ってもらおうよ」

「シャルル！私が自分で言っつもりだったのに……………」

「クク、分かった分かった。行こう」

この2人を護る。それが僕の仕事だまだまだ慣れない力でどこまでできるかは判らないけど、2人の笑顔　シャルルは笑ったところ見たことがないが　を護れるように……………

え？ギルド？なにそれ？ま、とりあえずよろしく！（後書き）

ウエンディにしるシャルルにしる、キャラが違うような……

ま、そこは、ほら！オリジナルだしね！（いいわけ？すみませんおっしゃる通りです）

予告？なれないことはしないべきだと学びました…

感想、意見など随時お待ちしていまーす

危険な木の实探り（前書き）

修正しました

危険な木の実採り

「よっ、」

居合い抜きの変領で大木を切り落とす。【化猫の宿】(ケットシエルトー)に入って早1ヶ月、やってることはほとんどギルド内での生産活動

最初に依頼が来て以来まったく来てないのだ。ウエンディを危険な目に会わせないためにたまに行く薬草積みなどにギルドを出る以外は街にもあまりでないし、外界との接点少なすぎるよこのギルド！そんなわけで僕は畑手伝ったり家々の修繕をしたり鍛練したりと、まあそこそこ充実した日々を送っていた。この大木も新しい倉庫作ったりするらしい

「軽い軽い」

なんて言いながら大木を5本をズルズル引きずる姿は最初はドン引きされたが今では慣れたものだ

「ジエイコブ！持ってきたぞ〜！」

「おお！わるいなクライス！お前がいると一気に終わるから毎回頼んじまって」

「いいよ別に。たいした事じゃないし……あ、ウエンディどうしてる？」

「ん？ウエンディか、確かあっちにいたぞ」

「ありがと。じゃ、また何かあったら言ってくれ」

これまたガツチリした男、ジエイコブに持ってきた大木を預けウエンディ達のもとへと向かう

別に用はないんだが同じ屋根の下に住んでるわけだからなにかと一緒にいることが多いのだ
しばらく歩いてみると、見つけた。シャルルと一緒になんかでかいカゴ持つてるし……

「よっ！ご苦労さん2人とも」

「あ、クライスさん。そっちは終わったんですか？」

「あんた確か木を切りに行ってたんじゃないの？」

「やってきたよ、あのくらいしたいしたことないからすぐに終わるさ。ほら、手伝うよ」

「木を切り倒すことがたいしたことないなんてあんたくらいよ……」

「それほどでもないよ」

「別に誉めてないわよ！」

「あははは、」

そなんことを話しながら2人が持っていたカゴ、女物の洗濯物が入っていたから一瞬怯んだが下着がないことを確認してから持ち直す

「あ、いいですよこのくらい。クライスさんも今働いてきたばかりなんですし」

「あんなの朝の鍛練より楽だよ。ほら、昼も近いしさっさとやるぞ」

「元気ね、あんたは」

この頃学校と言う苦痛から解放されたから気分がいいんだよ！ギルドで働いてるけどどちらかというと小さな村でまったりしている感覚しかないし

そんなこんなでもう慣れきった家に帰ってきた。机やら椅子やらベツトやらは自作したぜ！さすがに増築は無理だったからなんか狭いが……

ウエンデイに謝つたらなぜか笑顔で『いいですよ』と言ってたし、シャルルは『私は別に気にしないわよ』と言っていた。ま、シャルルはそんなにスペース使わないからな

「さて、いただきますしょう」

「いただきますーす」

「いただきます」

今日の昼食は毎度のことながらパン。軽く焼いたパンの上にギルドの畑で採れた野菜と森で取ってきた鶏肉（僕が取ってきたやつだから少し食べづらい）をのせたものや、溶かした砂糖を薄くたらし甘くしたもの。他にも兎型に切られたリンゴなどの果物やスープなどもある

作るのを手伝ったりもしたのだが野菜や果物を切るときに手から刀だして切ろうとしたら怒られた。リンゴを兎型にするのには包丁を使った

今日の仕事やこのごろの生活の様子を話したりしながらパンを食べていると

「あ、そういえばクライスさん」

「むぐ、（ゴクンツ）…なんだ？」

「お昼の後に遠くに行くんですけど、一緒に来てもらえませんか？」

「遠くに？なんだ、街にでも行くのか？」

「あはは、街にもたまには行ってみたいですけどね。今日は月に一度の木の实取りです」

「木の实？そんなのギルドの近くにたくさんあるけど……？」

ギルドの近くには周りが緑豊かな森のため自然の木の实がなっている木もたくさんある

中には体によくないものもある。それは実際に食べてぶっ倒れてか

ら懲りてウエンディによるお勉強会で学んでは間違えていないでも美味しい木の实の方が多い、なのになぜ遠出するのだろうか？

「ギルドの近くのものもとても美味しいんですけど、今日行くところにあるのはそれよりもとっても美味しいんですよ」

「へへ、ウエンディが涎垂らして言うほど美味しいと言うなら相当のものなんだろうな」

「え！？私、涎なんか垂らしてましたか！？」

「ウソだよ」

「ビツクリさせないでください！」

ごめんごめん、と謝りながら違うパンを口に運ぶ。少し冷えたせいでサリサリとした甘い砂糖の食感がする

僕が思い付きで発案したものだ。がシンプルなりにウエンディとシャルルに好評だ

「そうゆうことなら手伝うよ。ウエンディのためなら火のなか水のなか毒の漂う森のなか、つてね」

「毒の漂う森のなかは危ないですよ……」

「こいつならやりかねないわよ」

「シャルル、いたのか？」

「いたわよ！」

会話に入ってこないから気づかなかった……

「シャルル、そんなに怒らなくてもいいと思うよ？クライスさんも本気で言ったわけじゃないんだから」

「そう？ウエンディがそう言うなら……」

「いや、わりと本気」

「やっぱり怒っていいと思うわっ！……」

「シャルルが怒ったところで……………フッ」

「何よバカにしてー!!」

「あははは…、2人ともほどほどにね……………」

僕はウエンデイの横にいたのでウエンデイの前にいる（机の上にいる。なぜ椅子があるのに使わないのかは不明）シャルルと喧嘩僕からしてみればシャルルをバカにして遊んでるだけだけどするとウエンデイを挟むようにしなければならぬのだが、ウエンデイからしてみればすでに当たり前の光景になっているらしく自然な動作で避けていた

そんなこんなで昼食の時間は過ぎていった

「……………なんだって〜」

昼食を終えてしばらくして、ギルドを外出することをウエンデイとシャルルがマスターに伝えに行くと言ったので僕は軽く演舞をしながら待っていた

暇だったので道中食べようと思っていたリングをかじりながら立ちしたりブレイクダンス紛いなことをしている間にウエンデイ達が来たので行き先を聞くと……………

「徒歩で半日かかるっ〜?」

「はい。だから月に一度の、なんですよ」

らしい。基本的に乗り物などが無いギルドだが、その前にこの世界に来てから見たこともないからあるかどうかすらあやしいが……。

とにかく移動の際には必ず徒歩だ
常に浮遊しているシャルルは例外として、徒歩で半日かかる場所に半日で行ったら日が落ちますけど!？」

「シャルルで飛んでくのは？」

「私にどれだけの距離を飛ばせる気よ！」

「僕も持っていてね？」

「飛ばないわよ！それに私たちをつれていくのはあんたよ！」

「僕が？」

ビシッ！と疑似音でも付きそうなくらいハッキリとシャルルに指？を突き付けられた。ウエンディは横で苦笑いしている
僕が、連れていく？

「道知らないよ！」

「教えるわよ！」

「嘘だつ!!！」

「なんでよ！しかもなによその顔！ハンパなく怖いわよ!？」

「あ、あのクライスさん。迷惑ならまたこんどにしま……」

「はりきって行くよー!！」

「あれ!？」

ウエンディの首と膝の下に手を入れ一瞬で抱き上げてついでにシャルルも乗つけて瞬間的に加速、同時に風の魔法で自身とウエンディ達を覆い空気抵抗をなくす

「よっ、はっ、ほいっ」と

「は、速いですね……」

「あれ？ウエンディは初めて一緒に跳ったっけ？」

「そもそもこんなに速く移動できること自体ウエンディは知らなかったはずよ」

「あゝ、そういえばこうやって跳るのも久々だしな」

トンッ、トンッ、トンッ、と木の枝を蹴りながら猛スピードで森のなかを疾走する

ま、ウエンディとシャルルに配慮してかなり力をセーブしているけど

「あ、あの……」

「ん？なんだウエンディ」

「2つ、言いたいことがあるんですけど……」

「いいぞ？」

「そ、その……この格好、かなり、はずかしいです」

「？」

今のウエンディの格好、僕にお姫様だっこされていてお腹の上にシャルルが乗っている

「なんで？」

「あなたはもうちょっと人の心を理解しなさいよ！」

「うう……」

「……じよ、冗談だよ、冗談

！」

「今ウエンディの顔見て必死に考えたでしょ、」

うん、と素直に言うのもなんなので何も言わずにウエンディを背中に背負っようにする

「これでいいか？」

「は、はい……／＼／」

「そか、それで？もう一つは？」

「……………シャルル」

「自分でいいなさいよ」

なぜかシャルルに涙目で助けをことうエンディ。数瞬して意を決したように

「クライスさん！」

「は、はい？」

「ほ、ほ、ほう……………」

「いや、落ち着けよ？」

「は、はい。スー、ハー……………」

しばらくの深呼吸のあと、ウエンディから言われたのは

「えっと、方向、逆……………です」

いろんな意味で泣きたくなる一言だった

「着いたぞ……………はあ」

「これからが本番なのになにダラダラしてるのよ？」

「いや、徒歩で半日の距離を一時間で移動したらさすがの僕も疲れますよ！？」

「あの、クライスさん。木の实採りは私とシャルルでやりますから

休んでいてください」

「ああ、ありがとうウエンディ。でもできれば僕の見える範囲にいてよ？」

「はい！行こうシャルル」

「ええ」

僕は近くの木の背もたれにして腰を下ろす。さすがに全力ではないにしろ、魔法を使いながら長距離の移動は疲れた……

あのロリコン野郎（神）、どうせなら体力を無限にしてくれればいいのに……。ま、これだけ走ってもちよっと息切れするくらいだから問題はないか

ウエンディはシャルルを背中につけてフワフワと飛びながら木の実をとっている。

「それにしても、いいところだな」

辺りにはきれいな草花、時折なく鳥の声と風に揺れる木々の音色が一層森を美しくしている

ギルドの周りもとてもいいところだが、なるほど。こんなに気分が清々しくなる場所ならウエンディの言っていたとっても美味しい木の実もあるかもしれない。

目を瞑って心地よい自然のなかに身をゆだねていると、人の気配がウエンディだ

「どうした？」

「あ、起きてたんですか？寝てたら迷惑かと思ってたんですけど……」

「いや、起きてたよ。寝てたとしても気づいて起きれるけどね。で？なにか用があったんじゃないのか？」

「あ、はい。これ、よかつたらどうぞ」

そう言っつてウエンデイが取り出したのは綺麗な白の果実。ウエンデイの小さな手と比べても小ぶりの実にもかかわらずここまで甘い匂いが漂っつてくる

たぶん、これが今日の目的の品だろう

「これを、僕に？でも貴重なんじゃないの……………？」

「えつと、はい。暖かい時期に何回かに分けて実をつけるんですけど、少しずつしかできないんです」

「それなら、尚更僕なんかじゃなくてギルドのみんなにあげなきゃ」

「クライスさんもギルドの一員ですよ？」

「……………ふう、妙なところで頑固だな」

「ここまで連れてきてくれたり、ギルドのみんなの倍以上お仕事をがんばっつてくれてますし私からのお礼ですよ」

「ギルドメンバーとして当たり前のお礼してるだけだよ。ま、ウエンデイからのお礼だしありがたくいただくよ」

「はい！どうぞ、疲れも少しはとれると思いますよ」

ウエンデイの手から白い実を受け取りそのまま小さく噛む。すぐに広がる果物独特の少し酸味を含んだ甘さ、果肉はやわらかく例えるならブドウのようだ

「どうですか？」

「うまいよ、これ！はじめて食べたけど、これなら半日かける価値はあるかもな」

「やっぱりそう思いますよね！私も初めて食べたときそう思いました！」

「誰でもそうだろうな……………やっぱり環境もいいしな」

「ここは空気もおいしいですから」

「あゝ、ウエンデイは空気を食べるんだっけ？」

ウエンディしかドラコンスレイヤーを知らないから断言はできないけど、【滅竜魔法】を使う魔導師は自分と同じ属性のものを食べることができてそれによって体力、魔力、回復力などを回復、活性化させることも可能らしいもつとも、ウエンディの使う魔法はかなり魔力を使うのに対して空気の汚い場所ではさらに力が減衰してしまうと言うのだからあまりメリットとは言えないが……

「クライスさんの使う風の魔法もなんだか優しい感じがしておいしいですよ？」

「自分の魔法の味を聞けるとは、滅多にないことだな」

「あははは、そうですね……あ、シャルルが1人でまだ探してるから行きますね？」

「ああ、あんまり遠くに行くなよ」

父親か！と突っ込みたくなるな……

それとはかく。平気ですよ、と踵を返して歩き出したウエンディを呼び止める

「ウエンディ！ほれっ」

「え？わわっ！」

僕が投げたものを慌てながらもなんとかキャッチ。今投げたのは先程もらった木の実を半分に切ったもの（風の魔法で切ったから切り口はきれいだよ？）

一瞬、全部食べてしまおうかとも思ったがそれはなんと言うかもつたいなかったなのでウエンディにもあげることにしたのだ

「僕だけで食べきっちゃうのはもつたいないからな、ウエンディも

「食べなよ」

「いいんですか？」

「半分食べたからな」

「そうですか？……えへへ、じゃあいただきますね」

「おう」

年相応の可愛らしい笑顔をうかべて白い実を小さい口で食べながら歩いていくウエンディを見送ったあと、僕は再び美しい森のなかに身をゆだねるようにゆっくりと目を閉じた

「あ、ウエンディ！ やつと来たわね？」

「ごめんねシャルル」

ウエンディがクライスの視界を外れて少し歩いたところにシャルルはいた。木の実が貴重なのは数が少ないことも1つの理由だが、見つけるのにも少なからず手間がかかるのだ
実自体が小さく、それにも関わらず高い木の枝に隠れるようになっていることが多いのだ

「ん？ウエンディ、なんかあなたから甘い匂いがするんだけど……？」

「え？……あ、木の実を少し食べたからだよ」

「木の実を、つて……クライスにあげるんじゃないの？」

「クライスさんが半分くれたんだよ。ズルして食べたわけじゃない

よ？」

「あなたがそんなことしないのは誰よりも判ってるわよ。さ、いつもより時間に余裕はあるけどまだあんまり見つけてないんだから。もう少し先まで行くわよ」

「え？でも、クライスさんにあんまり遠くに行くなって……………」

「大丈夫よ、あいつならモンスターに会ってもウエンディが悲鳴を上げる前には倒してるわよ」

それはさすがに、と思わなくもなかったがクライスさんならあり得るかもという思考が割り込み

「うーん、じゃあもう少しだけね？」

「ええ、わかったわ」

ウエンディからしてみればこの空気はとても心地がよく、だからこそ異変に気がつくのは早かった

シャルルとしばらく歩いたところ、きれいだった空気に少しだけ違うものが入り込んだのだ

それは本当にわずかな違いで最初はウエンディも気のせい程度にしか感じていなかった。が、

「シャルル、なにかおかしくない？」

「ええ、いくらなんでもなさすぎよ……………」

必ずというわけではないが少し探せば最低1つか2つは見つかるはずの木の実がまったく見当たらないのだ

さっきの空気の違和感もあったのでウエンディがシャルルに進むのをやめようと言おうとした瞬間、ウエンディの目に苦しそうに木に寄りかっている人の姿が映った

「あつ、大丈夫ですか！」
「ちよつと、ウエンディ！」

シャルルの静止の声も聞かずにウエンディは老人に走りより治癒魔法を発動する。青白かった顔に血の気が戻っていくのと同時に乾いた老人の唇がなにかを呟く
近づいてきたシャルルがそれを聞き取る

『ここに、近づいちゃ……………ダメだ……………』

老人はかすれた声で呟いた

「……………ここに近づいちゃダメだ、ってどうゆうことかしら？」

「……………ふう、ひとまずこれで平気かな？シャルル、クライスさんと呼んできてくれない？この人を運ばないと」

「ええ。でもウエンディも一緒に来た方がいいわよ、さっきの言葉も気になるし」

「うん、でも一応見てないと……………」

「……………わかったわよ！すぐ戻ってくるから動いちゃダメよ！」

「うん」

シャルルが飛んでいくのを見送ってからウエンディはさっきの空気の違和感を知ろうと少し大きめに息を吸った

刹那

「っ！？」

頭がボウツとし、体から力が抜け落ちる。同時に吐き気のような、ダルさのような感覚が全身を襲う

目の前が暗くなり意識が急速に失われていく

「シャ……ル、ル、……ク、……クライ、ス……さ、ん……」

全身を襲う唐突な異常に恐怖しながらもその名を紡ぐ。ゆっくりと倒れていくのを感じながら、ウエンディは意識を失った……

君、いるべき世界が違つよね？（前書き）

いろいろやっちゃまったZ E!! そんな感じの話です。

反省はしていない！

君、いるべき世界が違うよね？

真つ暗だった。何も無い、そんな場所にウエンデイは1人で立っていた

「……………どこは、どこ？」

眩きは闇に飲み込まれすぐに消えてしまう。自分が立っている場所も、判らない。なぜ、こんなところにいるのかも判らない。判らないことが多すぎて、怖い。泣き出してしまいそんな恐怖をまぎらわす様に歩きだす
何歩、歩いたのだろう。なにも感じなかった足元に何かかぶつかった。反射的に足元を凝視するが暗すぎてなにも見えない
恐る恐る、拾う。ぼんやりと見えたそれは……………

「……………ひっ……………！」

血まみれのシャルルだった。短く悲鳴をあげながらバランスを崩して倒れると、地に付いた手に何か触れた
すでに泣いているウエンデイには、涙で歪んだそれが一瞬にか判らなかった

「イ……………イヤ……………っ」

腕と足の千切れた、クライスの顔だった

恐怖、恐怖恐怖、恐怖恐怖恐怖恐怖恐怖恐怖恐怖恐怖……………

「イ、イヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！」

「！！」

「イヤッ、イヤッ！シャルル！クライスさん！嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ！
ウソ、こんなの！誰か、助けて……………」

毛布を跳ね上げ、完全に冷静さを失い叫ぶ。今の彼女には何が何だか分からないだろう
頭を抱え、小さな体をさらに丸めるようにして小さくなりながら言葉でない言葉を叫ぶ

そんな彼女に触れるなにか、

ビクッ、唐突なその感覚に跳ねる体。『何か』は次第にウエンデイの体を包み込むようになっていく

……………」

そして抱きしめられている、と気づいたとき震えていた体は次第に震えが止まり、異常なほど高鳴っていた心臓は静かになっていく
『何か』は暖かくて優しく、ウエンデイは『何か』……………クライスの腕のなかでだんだん落ち着きを取り戻していった

「……………落ち着いたか？」

「……………はい、」

そうか、とクライスが離れようとするウエンディは彼の着物の裾を小さく引つ張り引き止めた

「もう少し、このままお願いします」

「……………わかったよ」

・
・
・
・
・
・

「じゃあ、私が見たのは……………」

「そう、擬似的に見せられた悪夢だ」

しばらくしていつも通りのウエンディに戻ったところで僕はウエンディに今までのことを話していた

シャルルに呼ばれて、呼ばれる前に嫌な予感がして駆けつけてみるとウエンディが倒れていたこと、あの辺りには人の魔力に作用して様々な症状を発生させる毒のようなものが立ち込めていたこと、そのせいでウエンディが酷い悪夢を見たこと

あの場所からは僕が風を使って毒を吹き飛ばしながらウエンディと老人を助け出した。老人の方はウエンディの治癒魔法のお陰で話ができる程度に回復していたので近くの村まで案内してもらったのだ。ここは空き家らしく親切な村の方々の計らいで使わせてもらっているのだ

「あの時感じた違和感はその毒だったんですね、」

「うん。僕が見たところによればあの毒は普通の人にも毒だけど魔力を持つ人にとっては本人の魔力を媒体に死に至るかもしれないほど強力なものになるらしい。ウエンディはドラゴンスレイヤーだからとんでもなく危なかったよ?」

「そうだったんですか、助けてくれてありがとうございます?」

「なに、ウエンディのためなら毒の漂う森のなか、って言っただろ?」

「あはは、本当のことになるとは思いませんでした……………あれ?さつき死に至るかもしれないほど強力な毒って言ってましたよね?」

「ん?ああ、そうだが……………。実際ウエンディ一回心停止したし」

「ええ!??そ、それなら尚更、私どうやって助かったんですか?」

「ああ、それなら……………目には目を、毒には毒をとてね」

僕は左手の親指を右手で擦るようにして一本の刀を取り出す。漆黒の刀身、白いラインが入っていて刃には黒緑のオーラの様な物を纏っている刀。毒刀【腐】

「そ、それは……………?」

「毒を纏う刀、毒刀【腐】だ。これの毒をウエンディに流し込んだ」

「え!?!?そんなことしたら……………」

「違う違う!ウエンディの体内の毒を殺す毒だよ。毒もうまく使えば良薬になるから」

「そ、そうですか?」

「薬は元は毒だぞ?」

うーん、まだ納得していないようだったが実際にそうなのだから仕方ない。ま、まだ完全に中和できていなくて悪夢を見せてしまったことは誤算だった

毒刀はさまざまな毒を操ることのできる刀だがその毒刀を操るのは

僕だ。毒刀の纏う強力な毒は下手をすればウエンディを殺してしま
うかもしれないのだ、用心しすぎて少し中和し損ねたのだろう

「そういえば、シャルルはどこですか？」

「シャルルか？ウエンディを一晩中僕と看病してたんだけどウエン
ディが起きる少し前にダウンしちゃって今は隣の部屋で寝てるよ」

「シャルルにも迷惑かけちゃったんですね、クライスさんも私が気
を失っている間ずっと見ていてくれたんですね？すみません、私
のせいでとんでもない迷惑を……」

体を起こして謝ろうとするウエンディをそっと押さえる。中和した
とはいえ、強力な毒が2つその小さな体を襲っていたことには変わ
りない。本来ならこんな危険に会うことがないように僕がいたのに…

「ごめんね。こんなことが起きないように僕がいたのに……」

「クライスさんは悪くないですよ。私が違和感を感じたときに進む
のをやめていればこんなことにならなかつたんですから」

「あそこにあつた妙な魔力は本来なら空気とまったく違いがないく
らい判りづらいものだったから仕方ないさ」

「そうなんですか？」

「うん。僕もこの『目』がなければまったく判らなかつたからね」

実際気づかずに少し吸い込んでしまったがそれほど大量に吸い込ま
なければ本人の魔力に掻き消されてしまう程度のものだった

同じように吸い込んだシャルルが平気だったのは長時間その場に
なかつたからだろう

なぜ気づいたか、僕自身にもよくわからない。その辺りの木々が他
に比べて格段に弱まっていたこと、ウエンディが倒れていたことな
ども1つの理由だが……なにより、嫌な気配を感じたのだ

先ほども言つたように、あの毒は生き物の体内に入るまではいたつ

て無毒なのだ。僕が感じたのはそれではなく、もつと奥の方から漂ってきた不気味な気配。

それで、とっさに右目を発動させればそこは毒のなかだったというわけだ

「さて、ウエンディ。もう一眠りしなよ？まだ体がダルいだろ？」

「え？……あ、確かに少しだけ体が重い気がします」

「さっきも言ったけど、一瞬とはいえ心停止したんだぞ？そこから生き返らせるために強力な毒を体に流し込んだんだ、中和されて無毒になっても体へのダメージが抜けきつたわけじゃない」

「でも、ギルドのみんなも心配してると思いますからいつまでも寝ているわけには……」

「それでまた倒れられたらさらに心配するわ！」

「……すいません」

「この村の人達もいって言うてくれてるから。なに、ウエンディが次に目を覚まして体調もよくなってたら僕が来たときみたいに背負って帰るよ」

「……わかりました。もう少し眠りますね」

「ん、じゃあ僕はちよつと外に………どうした？」

立ち上がるうとするとも布の下からウエンディの手に着物を摘まれるその表情には、怯えの色が。……そうか、悪夢を見たんだっとな

「怖いのか？」

「………」

無言で頷く。何を見たかはわからないが、悪夢は見た内容もそうだがそれ以上に『また見るかもしれない』というあとに残る恐怖があるのだ

「私が寝るまで……見ていてくれませんか？」

「寝顔見ちゃうよ？」

「あはは、家でいつも見てますよね？」

「まあね」

「……………私の寝顔は見てもいいですから、お願いします」

「……………甘えん坊だな」

「そうゆう年頃なんですよっ」

そうなのか？と一瞬考えたがそれは恐怖をまぎらわすための空元気の様なものだろう

「わかったよ、ウエンデイが寝るまで一緒にいるよ」

「……………ありがとうございます」

ゆっくりと目を閉じたウエンデイの手を僕はそっと握ってやった。しばらく頭を撫でたりくすぐったり（怒られた）しているうちに、彼女はいつのまにか眠りについていた

「ふう〜……………行くか」

僕は村の出入り口付近でそんなことを呟いた。その後、復活してきたシャルルにウエンデイを任せて僕は一見きれいな森を見据えていた。森自体はなんの汚れもない、きれいな森だ。だが、そんな中に僅か

に淀みが

僕はいまからそれを絶ちに行くのだ。この森を殺し、人々を苦しませ、なによりウェンディをあんなめにあわせたその根源を、絶つ

「とは言っても、なんでこれが発生しているのか、なにが原因なのか……さっぱりわからないんだけどね、」

両手の指で数えるうちに僕は毒の漂う場所にいた。風の魔法で自身の周りにバリアの様なものを張っているので毒の影響は心配ないいざとなれば毒刀で辺りのどくを中和すればいい（毒刀は一応、腰に差してある状態だ）

「酷いな、」

とにかく、酷かった。奥に進めばそれだけ辺りは暗くなり、木々や草花は死んでいて……まさに地獄だった

鳥や獣、モンスターの類いの死体がないのはすぐに逃げたからだろう。動物は人より異常に敏感だ

しばらく進みながら【複写眼】で辺りを見回す。一見ランダムに空気を漂う魔力（毒）だが、集中すれば一定の方向から流れてくるのがわかる

「そつちか？」

わずかな魔力の流れを読み取りながら歩いていく

どれくらい歩いたか……それはあった

「アクセサリー？」

深紅の十字架。それが切り株に刺さっていてそれから膨大な魔力が湯水のように垂れ流されていた
赤く、不気味な魔力が辺りの植物を侵食し殺しているのがわかるくらいに膨大な魔力

「だれだ、こんな危険なものをこんなところに置いたのは？」

誰にでもなく呟く。しかし困った、あれは魔力を自ら生成している上あれだけ膨大なものとなるとおいそれた刀で叩つ切るわけにもいかない。そんなことをしたら解放された魔力で僕ごと森が吹き飛んでしまう

ま、僕は肢体がバラバラになっても死にはしないが、回復するまで地獄の苦しみを味わうことになる

だがそれしかない。このままではウェンディ達のいる村まで侵食の範囲に入りかねない

音もなく毒刀を抜く、黒緑色の毒が刃から溢れだしオーラを纏っているようにも見えるこの刀。あのアクセサリーもどきがどれ程の強度なのか、どんな物質なのかわからない以上手加減は許されない

「【式裂流・壱の奥義】っ！」

大上段まで振り上げた毒刀がその刃に纏う『破壊』の毒を強くする。鈍い黒緑の毒がより一層強く輝く

「空刃絶刀！」

溢れ出た毒を置き去りにして漆黒の刃が空を切り裂きながら紅い十字架を切り裂いた

……………そう、思った刹那

ガギンツ！！！！

巨大な岩を鉄の塊にぶつけたようなけたたましい音が空気を揺るがす
漆黒の刃が、漆黒の少女によって防がれていた

「はっ！？」

「……………」

その無言で無表情な少女は、一言で言えば精密に作られた陶器人形
のような人離れた見た目をした信じられないほど綺麗な少女だった
真っ白な肌は白すぎるにも関わらずとても美しく、惜しげもなくそ
の肌を強調する黒の露出度の多い水着のようなものの上に黒いロン
グコートを着ている。艶やかな黒髪は左右で長さの違うツインテー
ルでウエンディより頭1つちよい高い身長にも関わらずその手足は
ウエンディと同じくらい細い
にも関わらずその細腕に装備された巨大で漆黒の筒のような大砲の
ようなそれで僕の一撃を止めていた
黒い少女の宝石のように綺麗な蒼い瞳が、しかし感情をまるごと失
ったように悲しい瞳が僕を見据えた

「……………」

「ぐっ、」

無造作に大砲のようなものを振っただけ、それだけの動作で僕は吹
き飛ばされた。大木を2、3本へし折りながらもなんとか着地
警戒を怠らずに毒刀を中断に構え改めて少女を見据える

露出度の高い黒い衣服、不骨な大砲を携え感情の欠落した蒼い瞳の
少女。その姿は、この世界じゃない。元々僕のいた世界にあった。

・ ・ ・ 姿

「ブラッククロックシューター？」

それをそのまま人にした様だった。それほど、彼女はブラッククロックシューターに似ていた

だが、ちがう。彼女は这个世界に生きる人物だ。もしかしたら僕のような転生者の可能性も考えられるが………そんなことよりっ

「……………」

「がっ!？」

今の僕がギリギリ反応できる(と言っても残像を引き連れる程の)速さで近づいてきた少女は、自身の背丈程もある黒い大砲をまるで鈍器のように叩きつけてきた

その一撃は、とてつもなく重い

少女の細腕から繰り出されたとは到底信じられない威力。受け止めた毒刀を持った左右の腕が悲鳴をあげ、足元の地面が数メートル沈む毒刀と大砲が不気味な火花を散らす。今にも腕が折れそうだ

「いや、これ以上は……………折れるわ!」

「……………」

毒刀を斜めに傾かせ大砲を受け流しながら沈んだ地面から脱出するあれだけの一撃を繰り出しながら少女は声を出すどころか表情一つ変えなかった

「……………」

その瞳に映るのは、相変わらず虚ろのみ。感情を殺すにしてもここまでやるのは人間には無理だ。これでは命令されたことしかできない操り人形だ

パペット

だが、彼女は間違いなく人間だ。魔力も流れている、しかしその流れに干渉する違う魔力が彼女には見えた

「操られているのか……？」

「……………」

「会話のキャッチボールしろや！」

返事の代わりに少女は大砲の発射口を僕に向ける。なん口径あるのか、どうみても戦艦のミサイル発射口にしかみえない巨大な銃口火を噴いた

「おいおいおいおいおいおいおい！！！！」

見た目に似合わず、すさまじい勢いで連射される光の球。サブマシンガンのように連射されているにも関わらず一発一発は木を砕き地面を抉る

何発か毒刀で受け流すが衝撃はほとんど殺せない

しかもこの光弾、【複写眼】でみると圧縮された魔力のため着弾時の衝撃と着弾時の爆発で受けたら爆風でぶっ飛びそうになる

「ちい、どうするか……………」

光弾もなれてくれば大したこともない、残像すら残さない勢いで右へ左へ上へ下へ超速移動を繰り返しながら【複写眼】で少女を見る彼女の体に流れる違う魔力、それはあの紅い十字架から流れ出てくるものだ。あれから流れる魔力自体には大した力はない毒がどのように作用するかは判らないという危険なのかそうでないのかよくわからないものだ

逆のことを言えば詳しい魔力効果がわからないのだ。【複写眼】で魔法の能力詳しくも判るはずなのだがこの少女に発現した毒は、見

えない(……)

一つ、確認をしておこう。

僕は(……)ドラゴンスレイヤーの(……)魔
力が見えない(……)

ウエンディに発現した毒はウエンディの血を見て理解し、毒刀で中和したのだ。僕はドラゴンスレイヤーの魔力が見えない。つまり見えないその魔力を媒体にした毒の効果が判らないということなのか
もしれない

つまり、彼女は

「ドラゴンスレイヤー、か。厄介だな……」

「……………」

その間にも彼女は砲撃を続ける。すべて外れているがその表情に変化はない

苛立ちも、焦りも、怒りも、こちらの動きを読もうと集中することもなく、ただただ僕をこの場から遠ざけることしか考えていないようだ

それは一つのことを忠実にこなすことしかできない自立石像ゴレムのようだ

「あゝ、よくわからないが……これはまた、面倒なことに巻き込まれたな」

人間のものではない魔力が流れているからにはその影響なのだろうが……それはなんだ？ウエンディの時のように毒の一部でも体外に出せればそれを見て毒刀で中和する毒を流し込めばいい
僕が見えているのはアクセサリーの魔力がぼんやり彼女の体内を流れる様子だけ。女性の体に傷をつけるのは気が引けるが……

「仕方ないか」

肩を竦め、毒刀を納刀する。無防備な僕、操られた彼女は今までと変わりなく光弾を撃った
今までなら掠りもしなかったそれは、僕に直撃した

「……………」

少女は吹き飛んだ地面と男を気にした様子もなく無表情で武器をしまい何処かへ消えようとした
だが、それは叶わない

「……………」

相変わらず無表情な少女。その白い皮膚に2筋の赤い線が刻まれていた

「ごめんね、後で謝るよ」

光を映さない瞳に、木の枝に立つ男が映る
その男の左目、黒いその瞳に浮かぶ朱の十字。それが生き物のように輝いていた

「これは魔法が使えなくなるからあんまり使いたくなかったんだけど……………」

「……………」

男の独白に、少女は無言で漆黒の大砲を構える

「ああ、ちょっとまってよ……………ん、判った。もういいよ」

少女としては待ったわけではなくただ自身の武器に自らの（・・・）
魔力を込めていただけだ

その間に男の瞳の朱は左目から右目へと移り、右目の朱の五芒星が
浮かびその瞳で今さつき自分を斬ったときに付着したらしい血を見
て顔をあげる

しかし、少女はすでに砲撃を放っていた。先程までとは違う、ただ
でさえ巨大な口径を何倍も上回る単発ではなくレーザーのような一撃
地をえぐりながら放たれたそれ、男はそのど真ん中を突っ切ってきた

「この『目』に対して魔法での攻撃は無意味だよ！」
「……………」

懐に入られた。男が携える不気味な刀、少女はすでにその範囲に入
っていた

「悪いな」

一閃、黒緑色のなにかが少女を包み体内に侵入する
しかし、それは決して不快ではなくむしろ少女を縛っていたなにか
を解き放っていった

「……………あ……………う」

薄れてゆく意識のなか、少女は初めての言葉を紡ぐ

「……あ……り……が………と、う」

少女はその意識を暗い闇に閉ざされた

「おわっ！危なっ！」

倒れそうになった少女を抱き止める。白く美しい肌は冷たかったがその顔にはほんのわずかに表情があり膨らみの乏しい胸は静かに上
下している

どうやら術式の破壊は成功したらしい

彼女を縛っていたのはあのアクセサリーの毒ではなくなにか違う、
強力な術式だった

【殲滅眼】で彼女の砲撃を喰らい常時をはるかに上回る速さで彼女の
皮膚を薄く裂き爪に付着した血を【複写眼】で見たとき、それは
判った

彼女のドラゴンスレイヤーの魔力で見えづらかったからどうにも見
違えたらしい

「問題は、だれがなんでこの子にこんなことをさせていたかだよな」
着物の裾を引き裂き、切ってしまった少女の傷を覆う用に巻き付ける
帰ったらウェンディに治癒魔法をかけてもらわなければ

そんな言葉で無機物が制止するはずもなく

紅い十字架は、僕の腕に融合した

僕の腕の中指の付け根から肘にかけて模様にも見える複雑な文字で描かれた紅い一線が引かれ、手の甲の中間辺りで同じ線が引かれ2つの線が交差していた

「ええ、なにこれ……」

取り敢えず魔力の放出は止まっているし、僕自身にも特に変化はないが……

不安！

だって今まで毒振り撒いていた物が体に埋め込まれたみたいなものだよ！？不安で眠れないよ！？こんなの、こんなのって酷いよ！！

「ま、いいや」

気にしても仕方ないよね！そうだよね！その内爆発したりしないよね！僕はいいけどウエンディやシャルルがいるときに爆発したりされたら泣くよ僕！

………ま、もういいや

「とりあえず帰ろうかな」

気にするのをやめにし、僕は少女を座らせておいた場所まで戻ってきた

この子がどんな事情を持っているか知らないが、ここに置いていくわけにもいくまい

軽い体を持ち上げ僕はウエンディ達のいる村へと走りだした

蒼竜 アイリス (前書き)

暑いですねー……

小説の執筆が少々億劫なこの頃、なんとか書いていきたいです。

それでは、どうぞ

蒼竜 アイリス

「一応、私にできることはしました」

「うん。悪いな、ウエンデイ。病み上がりいきなり……」

「大丈夫です。クライスさんは心配しすぎですよ？」

僕とウエンデイとシャルルは黒い少女を見ていた
人間離れした少女……

僕が毒霧の根元を絶つてきて帰ってきたところをウエンデイ達に出
迎えられ事情を話して治癒魔法をかけてもらったのだ

今は僕の使った毒もウエンデイによって排除され少女は静かに眠っ
ていた

「それにしても、あんたも無茶したわね？1人であんなに危険な場
所にいくなんて」

「私、目が覚めたときクライスさんがいなくてとつても心配したん
ですよ？」

「ごめんね、できればウエンデイが目を覚ます前にかたずけて来る
つもりだったんだけど……」

「この子に邪魔されたってわけね？」
「うん」

最初に説明したときはシャルルに「なんでそんな奴連れてきたのよ
！」と言われたがこの子は操られていた、ということの説明してある
少女が目を覚ましたら詳しいことを聞こうということでは今は落ち着
いている

「それにしても、綺麗な人ですね……」

「ええ、ここまでいくと逆に人間に見えないわよ」

「歴とした人間だぞ？ドラゴンスレイヤーだから魔力の能力は見えないけど魔力が流れていることは確かだから」

「この人も、私と同じドラゴンスレイヤーなんですよ……」

ウエンデイがなにかを考えるように首をかしげる。たぶんウエンデイに滅竜魔法を教えたというドラゴン【グランディーネ】の事を知らないか聞こうと思っっているのだろう

777年7月7日にウエンデイの前から突如姿を消したらしい。育ての親ともいえる存在、少しでもそのドラゴンについての情報がほしいだろう

「いろいろ聞きたいことはあるみたいだけど、まだ起きそうにないな」

「そうですね……」

「どうする？村の人は別に構わないと言ってくれてるらしいけど、帰るか？」

「この人も連れて、ですか？」

事情が判らないからあまり移動するのはよくないかもしれないが……あまりギルドに帰らないのもよくないだろう

「仕方ない、連れていこう。この子が起きてからアクションを起こしても遅くはないさ」

「私は、あんまり気が乗らないけど？」

「うーん、でも私は聞きたいことがありますし……それに、いつまでもここにいても迷惑ですよね」

シャルルは渋っていたが、いつまでもここにいても仕方ないというわけで明日の朝帰ることになった

日はすでに、空をオレンジ色に彩っていた

・ ・ ・ ・ ・

「夕食です」

「ああ、すいません。寝床も借りてるのに……」

「構いませんよ。あなたはこの村を救って下さったんですから」

「大したことした覚えはないんですけどね。夕食、ありがとうございます
います」

「はい。それでは」

そう言っただけで女性は去っていった

部屋に戻ると相変わらずベットで眠っている少女と椅子に座り『週刊ソーサラ』という雑誌を読んでいるウェンデイがいる

「あ、クライスさん。それは？」

「ああ、なんでもお礼だそうだ」

僕が森を破壊していた霧の根元を絶ってきたことはすぐに広まったらしくいろいろしてくれようとしていたが僕が丁重に断ったならばせめて、というわけで夕食を用意してくれたらしい

「ウェンデイ達もお腹空いてるだろ？ありがたく頂こうよ」

「そうですね、私もお腹ペコペコです」

「私も頂くわ」

室内にしばらく食器のカチャカチャという音と黒い少女の寝息だけが聞こえてくる

よく眠っているが、彼女は食事をとらなくてもいいのだろうか？寝てるからいいのか？今までの操り人形の状態で何を食べていたかは知らないが……

見る限り不健康な様子もないからなにかしらの食事をとってはいたのだろう。明日の朝はギルドに戻るのだからできればそれまでには目を覚ましてもらいたいものだ

しばらくして、夕食を食べ終わり満腹になるとウエンディはすぐに眠気が来たらしく目を頻りに擦っている

「ウエンディ、眠いのか？そろそろ遅いからな、もう寝たらどうだ？」

「そうよ。ただでさえ今日は大変だったんだから」

「はい、でもクライスさんやシャルルもがんばってるんですから私だけ……先に……寝るのは……」

「おお！？あぶない」

スー、っと目が閉じてウエンディが倒れそうになるところをなんとか支える

相当眠いらしい

「よし、今すぐ寝ようか？ウエンディ」

「でも」

「寝なさい」

「私だけ先になん」

「寝ろ、いますぐ」

「……はい」

僕に蹴落とされるように渋々頷くウェンディ。1つしかないベツトは黒い少女を寝かせてしまっているため使えないが、毛布は1つだけあった
決して豪華ではないが粗末なものでもない。それほど寒くもないから平気だろう
ウェンディが横になりそのよこにシャルルも潜り込む。僕？僕は椅子に腰かけたままだ

「クライスさんはまだ寝ないんですか？」

「あ？ああ、寝ない。その子に何かあっても困るから今夜は起きるよ。ま、僕は半月くらい眠らなくても平気だから一日くらい」

「ダメです！」

「なんで!？」

ガバツ！と起き上がりながらウェンディが言った。なぜにお怒りで？

「眠らないなんて体に悪いですよ！」

「いや、だから僕は寝なくても平気なんだって、」

「そつよ、ウェンディ。こいつが2、3日眠らないくらいで倒れると思つ？」

「…………でもダメです！」

しばらく間があつてから答えるウェンディ。考えたな、今

「判ったよ、ここで寝るよ」

僕は椅子に座つたまま腰を沈ませ腕を組む。そのまま眠れる姿勢、高校の休み時間によくこうして寝ていたものだ

これで満足したかな？とウェンディの方を見るとなぜか不機嫌そう

な顔をしている

「何が不服だ……?」

「そんな寝方したら寝違いますよ?」

「それは、ほら…… ウェンディが治癒魔法でなおしてよ」

「嫌です」

「…………… ねえ、シャルル。僕、なんかウェンディに嫌われてる? 僕、なにかした?」

「それが判らないのが1番ダメだと思うわ」

シャルルもウェンディもなんか冷たいぞ、今日は! 何があった!?

「ならどうするんだ? 床に直接寝ると? もしくは、なんだ? いつかみたいに一緒に寝るか?」

「っ!?!」

ピタッ、と動きが止まるウェンディ。さすがにこれで諦めるだろうあの日はかなり時間がたった後でも赤面するほど恥ずかしがっていたはずだ、まさか是^{イエス}とは言わ

「そ、それでクライスさんがしつかりと眠れるなら…………… / / /」

「ええ…………… 否定しませんか、」

まさかの是。クツ、どうする? なんかスペース空け始めてるし今更『いや、大丈夫。毛布は借りてくるから』とは言えない……………

なにこのゲームみたいな展開。いかがわしい方向に向かっていることばせめてもの救いだ……………

仕方ないよね! 悪夢見たこともあるしウェンディもまだ怖いんだよね!…………… すいません、逃げ道を見つけれないだけです

「……………じゃ、失礼します」
「ど、どうぞ……………／＼／」

いつかの様にウエンディに添い寝する形になる。ま、シャルルもいるからいくらかスペースがあるからいいか……
シャルルはすぐに寝てしまったようだが、ウエンディはしばらくぎこちない動きをして、慣れてきたのか話しかけてきた

「今日は本当にすみませんでした、」

「なんだ？唐突に」

「私がクライスさんの言う通りあまり遠くまで行かなければ迷惑をかけなかったのに……………」

「またそのことか……………何度も言ったよな？ 僕もシャルルも気にしてないよ。それに、お陰でグランディーネの情報もつかめるかもしれない。ちよつと疲れたけど、悪いことばかりじゃないよ」

ウエンディの柔らかい髪を撫でながら優しい声で囁く。それにくすぐったそうに微笑むウエンディ

1ヶ月同じ屋根の下で生活して判ったことだが彼女は頭を撫でられるのが好きらしい。その反応が可愛らしくて僕もなんだか楽しいし

「私にも、戦える力があればいいんですけど……………グランディーネが教えてくれたのは治癒魔法や補助魔法で戦える魔法はないんですよ……………」

「いいじゃん、それで」

「え？」

「逆に考えればウエンディは人や物を傷つけないってことだろ？僕なんか人を傷つける力がほとんどでウエンディを助けるときにすら毒を使って無理矢理やるしかない。僕は傷つけるしかできないんだよ」

「そ、そんなことないですよ！」

跳ねるように起き上がりながらウエンデイが言う。

「クライスさんは私やシャルル、ギルドのみんなをいつつも助けてくれます！クライスさんは誰も傷つけてなんかいませんよっ！」

「いや、あの……………ウエンデイ……………？」

「そんなネガティブに考えないでください！クライスさんはみんなにとっても、私にとっても……………大切な仲間なんですから！」

普段はおどおどして僕やシャルルに流されることの多いウエンデイがこうゆうときはハッキリと自分の意見を言う

めったに見せない強い意思の灯った瞳。大切な仲間なんですから、か……………

違う世界に来てからすぐにこの子に会うことができたから僕は今、充実した毎日を送れている。余所者の僕を嫌な顔1つせず快く迎えてくれたこの子に……………

ま、出会いはあまり綺麗なものじゃなかったけど……………

まだ1ヶ月程度の付き合いしかないのに大切な仲間と言ってくれて、ガラにもなく感動してしまった。

が

「ウエンデイ、そういつてくれるのはかなり嬉しいんだけど……………

……………今は、ね？」

「え？……………あっ！」

今の状況を思い出したのか口を紡ぐウエンデイ。うん、シャルルと少女が寝ているこの狭い部屋でそんな大声だしたらダメだね？

ううゝ……………と恥ずかしそうにしながら布団のなかに隠れるウエンデイ。

あゝあ、シャルルがはみ出ししてるはみ出ししてる

「まったたく……」

「わっ！」

グイツ、と毛布を引つ張りウエンディを引きずり出す。そのまま包み込むように右手で覆った

「え、え、ええ？な、ななななにを……… / / /」

「まったたく、可愛いやつだな」

「~~~~~ / / /」

「ありがとう。ウエンディに大切な仲間って言うってもらえて嬉しいよ。自分の力についてももう少し前向きに考えてみるよ」

そう言いながらより一層、赤くなっているウエンディを抱き寄せる

「僕の力は誰かを傷つけるんじゃない。ギルドのみんなも、シャルルも、ウエンディみんなを守るためにあるんだっ、てね」

「……………そんなこと、クライスさんは会ったときからやってますよ？」

「そうだっけ？」

「私を助けてくれました」

「原因は僕だけどね？」

しばらく僕達は沈黙する

そして、どちらからともなく小さく笑った

「クク、さあもう寝ようか？倒れそうになるくらい眠かったみたいだし？」

「あはは、そうですね。明日も早いですね。まだ悪夢がちよっと

怖いから、このままにしておいてくれると嬉しいんですけど……」

「こんな抱き心地のいい抱き枕を離すわけないじゃん」

「私、抱き枕じゃないですよっ」

「例えだよ、例え。……じゃ、おやすみ」

「はい。おやすみなさい」

限界が近かったのだろう。ウェンディは目を閉じるとすぐに寝息をたて始めた

僕はそんなウェンディの綺麗な髪を1回だけ優しく撫でながら

「大切な、仲間………ね」

そのときの僕の顔は、情けないくらいにニヤけていた…

2人が寝静まった頃、

「まったく、この2人は私のこと忘れてるのかしら？」

窮屈な2人の間から抜け出しながらそう呟く白い猫がいたとかいな
いとか

「いや、できればなにか喋ってもらえると僕としてはありがたいんだけど……？」

「……………」

「じゃ、じゃあ質問をしよう！……な、なんで縮んでるのかな？」

「……………」

「くっ、なんて威圧感だ！」

「……………」

「ぐあああ ……！！なぜ話さないんだあー！！」

朝、まだ割りと早い時間に叫ぶ少年が1人

僕だけどね！

朝起きたらウエンデイの顔が目の前にあってビックリしながらも起こさないように起きたら視線を感じたので振り返ってみれば、幼女がいた

綺麗な肩くらいまで伸びた黒髪、宝石のような蒼い瞳、幼いながらも人形のように整った顔立ち、陶器のように白く柔らかそうな肌。昨晩までそこにいたのは僕より少し年下くらいの少女だったはずなのだが、今朝起きたときにいたのは昨日の少女をそのまま小さくしたような幼女。服装も露出度の高かったあの服装ではなく、黒いノースリーブのワンピースを着ていた。相変わらず無表情で無言だが……………

「名前は？」

「……………？」

「住まいは？」

「……………？」

「話せる？」

「……………？」

小鳥のように首をかしげるだけで会話になりやしない！可愛いなコノヤロウ！（関係ない）

だけど相手が相手なだけに怒鳴ることもできないし……………どうしよう？

途方にくれて室内を見渡す。まだ寝ているウエンディとシャルル、あとは特になにもない殺風景な部屋だと、僕の視界にあるものが掠める

「あゝ、これ食べる？」

僕が差し出したのは昨日の木の実だ。部屋の隅に置いてあったのだが、数が少ないから持つてきていいものかとも考えたがそれ以外この幼女との微妙な沈黙を保つ術が無さそうなので、仕方なく少女は相変わらずキョトンとしていたが僕が差し出した木の実をウエンディより小さな手でそっと持ち、口に運ぶ
それこそ鳥が啄んだのではないか、というほどの小さな噛み痕ができてしばらく咀嚼する。すると…

「……………おいしい」

鈴のような、しかしとても言い表せないほどの愛らしい声が少女の口から紡がれた

「よつつしゃああああ！喋ったああああ！」

「……………」

そんな僕の獅子吼を聞いていないかのように少女は小さく木の実を咀嚼し続けていた

・
・
・
・
・
・

「お名前は？」

「……………」

「なんであんなところにいたのかは？」

「……………」

「ああもう！じれったいわね！」

「シャルル、この子も混乱してるみたいだし……………」

「……………」

少女が木の実を食べ終えた頃、ウェンデイ達が起きて僕と一緒に少女に質問を繰り返していた
木の実を食べたからか、話しはするようになってきたのだが所々忘れていくらしくなかなか会話が進まない

「名前がないのか？」

「……………」

「アイリス？」

「……………」

「ドラゴン！？」

少女の言葉にウエンディとシャルルが反応する。やはり、彼女はドラゴンスレイヤーのようだ
ウエンディが少し興奮したように少女に近づく

「そ、そのドラゴンは……今、どこにいるかわかる？」

「……うん。少し前にいなくなっちゃった……」

「……そう、なの」

ウエンディが残念そうに頷垂れる。当たり前か、やっと同じドラゴンスレイヤーに会えたのに少女のドラゴンも自分と同じようにいなくなっていると言うのだ

僕としてもこの子にはなにかを仕掛けていてほしかったのだが……判らないなら仕方がないだろう

「いなくなった、と言ったな？なら君は昨日までどうやって生活してきたんだ？」

「……わからない。アイリスがいなくなって、探してて……気づいたらここにいた」

「アバウトだな、」

もしくは本当に記憶の一部がなくなっているのか、
いまは僕の左腕に埋め込まれている紅い十字架。その影響なのかは判らないが、どちらにしても一朝一夕では解決しなさそうだ

「ん、じゃあとりあえず。名前を決めないか？」

「……な、まえ？」

「うん。いつまでもこの子とか君とかじゃ呼びづらいし。嫌か？」

「……いやじゃ、ない」

少女がわずかに、本当に小さくとまどいの表情を浮かべた。嫌じゃない、というからには普通に戸惑ってるだけだろういきなり名前を決めないか？なんて言われたらそうだろうな……よし、ここは彼女が喜んでくれる名前をつけなきゃな！

「よし！まずウエンディ！」

「わ、私ですか！？え〜と、……………クロちゃん？」

なぜに疑問系……………？てか見た目が黒いからクロちゃんか、僕も当てはまるぞ？

「……………いや」

「ええ！？そ、そんなにはつきり……………うう〜」

「はい、残念。次はシャルル！」

「クライスさん！？慰めの言葉がないような気がするんですけど！？」

「よし！じゃあ僕の腕のなかに飛び込んでおいで！抱き締めてあげるよ！」

「……………シャルル？なにかいい名前思い付いた？」

「ゴファツ！？ウエンディに無視されるなんて……………僕はもう生きていけない！自害してくる！！」

「わー！待ってください〜！！」

ウエンディが僕の腕に抱きつくようにして必死に引き留めてきたのでなんとか思い止まった

そんな様子を、シャルルは呆れたように見ながら

「何バカなことやってるのよあんたたちは……………」

「ごめんね、シャルル」

「ソーリー！」

「……………そー、りー」
「あなたはいいのよ……………」

少女が無垢な幼女のように僕の見よう見まねで頭を下げる
いや、実際今は見たまんまだが……
なにこれ可愛い！おっもち帰り……

「クライスさん？」

「はっ！？僕はなにを？」

「ふらふらと危ない表情でこの子に近づいてたわよ？」

危ない！危うく犯罪者！てか無敵レ 状態化！

確認するけど、僕はロリコンじゃないよ？

「で、名前だったわよね？」

「そそ、シャルルはウェンディみたいに見た目でアオちゃんとかドラゴンの名前からとってアイちゃんとか言わないよね？」

「……………あ、当たり前よ！」

あ、言おうとしてたんだな……………

「うーん、ならあなたはどつなのよ？」

「僕？」

「あ、そうですね。クライスさんはなにかいい名前あるんですか？」

「いや、女の子だしさ。同じ女の子がつけた方がよくない？」

「……………」

「な、なんだい？」

なぜか期待する（気のせいだよな？）ような視線が少女から向けられる

なんだ？僕なんかなにを期待するっていうんだ？

僕は、あれだよ？前世じゃ関係のある女性と言えば母さんだけだったんだよ？女友達もないし妹や姉もいなかったし。少女やウエンデイ達が知るはずもないが……

そんな僕が名前なんかつけていいの？

「……………」

「判った！判ったからそんな無垢な瞳で見ないでえ！」

少女としてはただ視線をこちらに向けているだけなのだろうが、この少女は無表情にも関わらず恐ろしく愛らしい見た目をしているため女性耐性（ウエンデイやギルド関係で生前よりはあるが）が少ない僕には効果は抜群だ！

「名前、ねえ……………」

自分で発案しておきながらたいして考えていなかった。それにしてもこの子はブラックロックシューターに似てたよな、いまはなぜか縮んでるけど…………

ん？ブラックロックシューター？ブラック、クロちゃん。ダメだな。ロック、………… 思い浮かばない！シューター、シュー、シュー………… おお！

「シュー、ってのはどうだ？」

「…………… しゅっっ！」

「うん。シューちゃん」

「……………」

しばらくキョトンとする仮名シューウちゃん。これでダメならもう僕の手札も山札も伏せカードもない（なんの話だ）

ぶつぶつと』しゅう、……シユウちゃん。……』と呟いて
いたが、やがて

「……うん。シユウ……いいなまえ」

「そうか、やっぱりダメか　　って、え？いい名前？」

「……うん」

無表情だった少女　シユウの表情が笑顔をつくる。今まで無表情
だったせいかわ、もしくはもともと可愛らしいせいかわ……その笑顔は、
ウエンディやシャルルまで見とれているほど花のように綺麗だった

「じゃあ、いろいろお世話になりました」

「いえいえ、我々の方こそ村を救っていただき……本当にお礼を
しなくてもよろしいのでしょうか？」

「いって。そんなことするくらいな死んでしまった森に木を植え
たりした方がいいですよ」

「はい、それはもちろんのことですが……」

シユウも目を覚ましたので帰ろうと言うことになったのだが、村長
や村人に引き留められている。ここまで感謝されるとやかま……

…困る

ウエンディは苦笑いをしているしシャルルは頭をかかえている。シ
ユウに関しては人見知りするらしく僕の着物をギョッと掴んで怖が
っていたので今は抱っこしている。少しは落ち着いたようだが、そ

れでも怖がっているのでできれば早く帰りたいのだが…
なにかを要求すれば満足するのか？てかしないとダメなのか？

「……おにいちゃん、」

「あ、ああ。すぐ終わるから、ね？」

「……うん」

「クライスさん、どうしましょう？」

「ウエンディ、任せた」

「む、無理ですよ！」

「シャル「無理よ」ちっ……」

「なによその舌打ちは！」

ちなみにシユウは僕のことをおにいちゃん、ウエンディのことをおねえちゃん、シャルルのことをねこさんと呼ぶ。シャルルは不服そうだったがウエンディは『妹ができたみたいです』と満面の笑みで喜んでいた

しかし、無視して帰るか？いや、それは良心が許さない。………そういうえば、ここにきたもとの理由って木の実集めだったよな？

「あゝ、じゃあこれと同じものがあつたら分けてもらえませんか？」

「え？ああ！それでしたらたくさんあります！今持ってきてきますよ」

僕が指し示したのは朝シユウが初めて喋ったときに食べていたあの木の実だ

昨日はいろいろあつたせいでほとんど集まらなかったのだ。たくさんあるというならありがたい

ウエンディやシユウ、僕もこの木の実が好きだし、シャルル曰く簡単な薬の加工にも使えると言うのだから余ることもないだろう

「これくらいでよろしいですか？」

「十分だよ。ありがとう」

持ってきた木の実は小さからず大きからずの植物素材で作られたカゴに入っていた

きちんと保管されていたものらしく甘い臭いを放っている

「じゃあ、僕達は帰りますので」

「はい。また何かありましたら遠慮なく立ち寄ってください。歓迎しますから」

「わかりました。それじゃ！」

「ありがとうございます」

手を大きく振りながらやつと解放さ……村をあとにした村が見えなくなった辺りでウエンディが沈黙を破った

「木の实、たくさん手に入ってよかったね」

「そうね。まさか近くに村があつてそこも木の实をとっていたなんて思いもよらなかつたわ」

「でも、私たちだけじゃたくさんとれても持って帰れなかつたし、ちようどよかつたんじゃない？」

「まあね」

昨日とれた少ない方はウエンディが今日もらったカゴは僕が持っている

小さな木の实とはいえ、これだけの量となるとウエンディには長距離持っていくのは辛いだらう

「さて、予定より一晩遅くなつたわけだし走って帰るか？」

「あ、そうですね。マスターやみんなも心配してると思います」

「それはいいけど、あんたそんなにいろいろ持って走れるの？私と

ウエンディも担いでいくのよ?」

「あゝ、」

確かに。木の實の入ったカゴと袋、シユウとウエンディとシャルルを一度に持つていくのは難しいかもしれないでも、慎重にいけば……と考えたところでシユウが口を挟んだ

「……おにいちゃん、私が連れて行く?」

「へ?シユウが?いや、無理だろ。それにシユウは病み上がりだし……」

シユウの以外な提案をやりわりと遠慮する。シユウはこの小さくなつた状態でも僕と同じくらい力があるから不可能とは言わないがなんかシユールな絵になりそうだからいやだ

「……大丈夫」

ヒョイツ、と僕の腕から飛び降りて何度か深呼吸をするシユウそして……

「……んっ……」

一瞬、シユウを蒼い光が包み次にシユウを見たときには昨日の姿、露出度のたかい服を来たツインテール姿の少女がそこにいた

「……どうやった?」

「判らない。なんとなくやったらできた」

なんとなくで急成長できるのか……?まあ、魔力の流れを感じたからドラゴンスレイヤーの魔法だろう

「す、すごいね。シユウちゃん。シユウちゃんの魔法は始めてみるけど……同じドラゴンスレイヤーでもやっぱり違うんだね」

「お姉ちゃんも、私みたいな力を使うの？」

「え？うん、種類は同じだけど使う力は全く違うよ？」

「お姉ちゃんと、同じ……」

シユウは無表情だ。そのことを十全に理解していなければ表情の変化は判らないだろう

ウエンディと同じということが嬉しかったのか小さく微笑んでいたのが僕には見えた

そしてそのまま、シユウは手を突きだし

「『換装』」

蒼い魔力が迸りシユウが何かを呼び出した。それは、巨大で漆黒のバイク

バイクとは名ばかりでその大きさは軽自動車並みだ

「ま、魔導二輪？」

「魔導二輪？なんだそれ？」

「クライスさん、知らないんですか？この乗り物の名前ですよ？」

なるほど、こちらでは乗り物のことを魔導なんたらと言っらしい

「これなら、みんなを乗せていける」

「まあ、たしかにこんだけ大きければ全員乗れるが……シユウ、お前免許持つてるの？」

「メンキヨ？」

「あ、うん。なんでもない」

この世界にんなものないか。あつたとしてもこんな森のなかで誰が取り締まるんだよ

「よし！じゃあそれで行くか」

「…ん」

「運転は誰がするの？ギルドまで行くとなるとかなり魔力を消費するわよ？」

「え？これって魔力使うの？」

「あなた、本当にこの世界の人間？」

さらりと核心を付かれたので無視

「私が、運転する」

「僕が運転するよ。シユウはまだ全快してないだろ？」

「でも、」

「いいからいいから、僕に任せとけて」

「わかった」

するとシユウはまたもと幼女の姿に戻る

どうやら力を使うときはブラックロックシューターの姿になり平常時はちっこい姿でいるらしい

ともあれ魔導二輪には前からシユウ、僕、ウエンデイ、シャルルの順で乗り込む。シユウが一番前にいるのは僕の腕のなかに収まっているからだ

生まれて初めての運転がずいぶん危険な状態のような気がするが、気にしない

「よし！最初っからクライマックスで行くぜ！」

「クライスさん？安全運転で　　きゃああ〜〜！」

ギヤギヤギヤ！と、地面の草や土を抉りながら急発進する魔導二輪調子にのってアクセル噴かしたが、この魔導二輪、見た目通りにもすごい勢いで走る
行き同様、風の魔法でみんなを覆っていなければ数秒で誰もいなくなっていたかもしれない

「すごいなこれ！やつほ」

「ちよつとクライス！前！」

「お？あぶつね！」

木にぶつかりそうになったので急カーブ

僕の魔法のおかげで風の抵抗はないが魔導二輪が凄まじい勢いで走っていることにはかわりないので木にぶつかりそうになるたびにウエンディやシャルルが悲鳴をあげる

シュウは『……………』と無表情に楽しそうにしていた

・
・
・
・
・
・

そんな感じで二時間ほどでギルドについた

「つ、着いたね……………」

「ええ。やつと着いたわ……………」

ウエンディとシャルルはぐったりしていた。まあ、ずっと叫んでたからね……

シュウはとくに疲れていないようだが、気に入ったのか僕の腕のなかにいる

ウエンディはシャルルを、僕はシュウを同じように抱き抱えていると言っなんともシュールな光景だ

ちなみに魔導二輪はシュウがとくに魔法空間に戻してある

「さて、マスターに報告しに行ってくるよ。ウエンディとシャルルは、先に帰ってていいよ」

「はい、そうします…」

「あゝ、なんか、ごめんね？」

「あははゝ、平気ですよ」

間違いなく平気じゃない人の返し方だ！

ふらふらと歩いていて何度か転けそうになっていたがシャルルが支えていた（エーラを使って）いたので平気だろう

「……おねえちゃん、大丈夫かな？」

「たぶん、ね」

「……たぶん？」

「そう。たぶん」

「……………（ジー）」

「わかった！帰ったら謝るから！責めるような目で見ないで！」

「……ん」

ウエンディ達を見送って、僕とシュウは（シュウは僕が抱っこしている状態だが）マスターのいる猫の頭の様な形をした建物の前までできていた

珍しくシュウが無表情ではなくハッキリとキラキラした目で猫の頭型の建物を見ていたのしばらく時間を喰ったのは余談だ

なかにはいると、まるで時が止まっていたかのように初めて僕がこ

のギルドにきたときのままの姿勢でマスターが鎮座していた
置物の様だったマスターの目が静かにひらく

「ただいま戻りました、マスター」

「おお、クライスか。確か、昨日のうちに帰ってくるのではなかつたか？みなも心配しておつたぞ？」

「はあ、アクシデントに会いましてね。ウエンディとシャルルに少し怪我をさせてしまいました。すいません」

「怪我を？おまえさんがミスをするとは珍しいのお」

「恥ずかしながら、森の雰囲気には飲まれてしまいました……でも、今は疲労以外に目立ったことはないの、まあ平気だと思います」

「そうか、大事なかつたのならよいわい。……ん？その子は誰じゃ？」

「あ、この子ですか？」

マスターが見ていたのは何故か僕の腕から降りないシュウだった
本人は自分が話の話題になっていることに気がついていないように
キョトンとしている

可愛いなコノヤ（ついさっきやった）

「アクシデントの被害者の一人、ですね。ウエンディと同じドラゴン
スレイヤーで同じくドラゴンがいなくなったそうです。それで行く
宛もないなら、というわけで連れてきました」

「ドラゴンスレイヤー、とな？ウエンディより幼く見えるようじゃ
が……」

「ああ、シュウは見た目変えられるんですよ。どっちが本来の見た
目は判りませんが、僕と同じ年くらいにはなれますよ」

「それはドラゴンスレイヤーの力かの？」

「だよな？シュウ」

「？……わからない」

「記憶が混乱しているみたいで大体こんな感じですよ」
「なぶら、」

マスターはそう言いながらいつものように酒をコップに注ぎ、なぜか酒瓶から飲んでから

口から酒を戻しながら呟く（ツッコミ？もう諦めたけどなにか？）

「それで？」

「え？」

「その子はどうするのじゃ？」

「あゝ、よければ記憶が戻るまでここ（ギルド）に置いてもらえないかと」

「僕は構わぬが、その子はどう考えておるのじゃ？」

「あ、」

そういえばシュウ本人の意思を聞いていなかった

とりあえずそのことしか考えていなかったからシュウの意思を聞く
と言つー一番大切なことを忘れていた

「ならば問おう！シュウ、このギルドに入らないか？せめて記憶が
戻るまで」

「……………ギルド？」

「あゝ、いい人たちの集まりだ。いいところだぞ？【化猫の宿】は」

前半がなにか間違っている気がする

「……………おにいちゃんも、いる？」

「え？あ、ああ。もちろん」

「……………おねえちゃんも、ねこさんも？」

「うん」

「……………それなら、うん。入る」

僕、ウエンディ、シャルルがいることはすでにシュウのなかで絶対条件になっているらしい……

なににせよ、シュウも不服はないらしいことが確認できたので

「というわけで、マスター？」

「なぶら、構わんよ」

「ありがとうございます。あ、目的の木の実ここに置いていけばいいですか？」

「うむ。……………いや、待て」

「どっちですか……………」

「ずいぶんとあるようじゃから少し持っていきなさい。ウエンディやシャルルもこの木の実は好きじゃからのう」

そう言いながら袋に入っている方の木の実をさしだすマスター

袋の中には10個ほどの木の実が入っていた

「いいんですか？」

「うむ。毎回少ししか手に入らないといってウエンディもシャルルも我慢しておったからの。おまえさんも好きじゃろ??」

「……………(コクコク)」

「あはは、じゃあありがとうございます」

「なぶら、」

そう呟くとマスターは目を閉じてしまった。毎回思うのだが、なぶらってなんなのだろうか？

建物を出ると日の光に目がくらみ、少し立ち尽くす。シュウがギルドに入ったこと、ウエンディ達に言わなきゃな……………と考えているとどこからか覚えのある甘い臭いが

「……………」
「あ、シュウ……………まあ、いいか」
「……………？」

臭いの元はシュウだった。いつのまにか僕が持っていた袋から木の
実を取り出して食べていたらしい

数に余裕がないわけでもないし、まあいいやと考えながら空を仰ぐ
雲のない、きれいな青空。僕がこの世界に来てから1ヶ月。ウエン
デイを精神的にも肉体的にも傷つけてしまったのは悔やまれるが、
そのようなことはこれからないようにしようと思っしさらには護る
ものが増えた。シュウ……………記憶をなくした少女

大変なことも多いが、僕は今の時が……………この幸せなときがいつ
までも続いていってほしいと、続けてみせようと、誰にもなく誓
った

「……………おにいちゃん」

「ん？なんだ？」

「……………ありがとう」

「は？」

「……………」

なにがありがとうなのか判らない……………
ま、いいか。楽しいなら

楽しいことは、いつまでも続くものじゃない
僕は、まだそれを知らなかった

そっだ、マゲノリアに行こう！（前書き）

長い、長い間小説書いてきたけど今までで一番長い……。
19000越えた、

ウェンディ×クライスの話です

そうだ、マゲノリアに行こう！

「ちっ、」

回転しながら全身から生やした刃で襲い来る攻撃をすべて弾きとばすはじきとばされた魔力が辺りの木々を破壊し地面を抉っていく。あれの直撃を受けたらさすがの僕も無事ではられない
回転した勢いを殺さぬままに地面を蹴りながら攻撃してきた彼女に
急接近

地を切り裂きながら下段から抉るような一撃を放つがそれはあっさり阻まれる

お返しと言わんばかりに鋭い一閃が頭上から降り下ろされたが、斜めに傾けた刀で受け流す。しかしそこに予測していたかのように強力な蹴りが叩き込まれる

「っあっ！つぶないな…」

「まだ、まだ」

「マジかつ！」

無理やり体を捻るようにして避けたところにさらに追撃。巨大な鉄の塊が降り下ろされる

「……………なんてな」

バチィ！とそれを片腕で受け止める。彼女が一瞬見せた隙を見逃さず滑るように間合いに入り込み足を払う

「……………」

ストーン、と僕に支えられながら尻餅をつく少女。

「今日も僕の勝ちだね？ シュウ」

「ん……」

無表情ながら少し拗ねたような声を漏らす少女 シュウ。

今、僕は日課の鍛練をしていた。と、いつてもシュウが来て半月。

この頃は模擬戦のような感じでやることが多い

シュウの滅竜魔導師としての力は申し分ないほど強力で、本気を出してないとはいえ僕ともそこそこやりあえるほどだ。まあ、本気を出していないのはシュウも同じのようだが

「また、敗けた……」

「でも惜しかったよ？ 接近してからの追撃は正直危なかったし」

「敗けは、敗け……」

「ま、日々精進ってね」

シュウの腕をとり助け起こす。鍛練が終わったことでシュウがちっさい姿に戻った頃、人の気配が

「クライスさん、シュウちゃん、そろそろ朝食ができましたよ？」

「おうウェンディ。ちょうど今終わったところだよ」

「そうですか？……あはは、またシュウちゃん敗けちゃったの？」

「……うん」

ウェンディだ。どうみても無表情のシュウの表情を見てとれるのはさすがはお姉さん、といったところか……

一番したの子（実質シャルルが一番下だが）は自分より年下の子がくると面倒をよくみるというのは本当の事らしくたまに僕でも判らないシュウの表情をみてとることすらある

ちなみに僕とシュウが鍛練していたのはギルドから少し離れた森のなか。シュウの大砲（シュウ曰く、BRACK SHOOTERという武器らしい）はギルド内で放つと数分でギルドが廃墟と化すので、という理由だ

「じゃ、行くか」

「……ん」

「あはは、シュウちゃんはやっぱりそこなんですな……」
「もう諦めたよ」

すでに当たり前の事、と言わんばかりに僕の腕に収まるシュウ。ウエンディも苦笑いをするしかないようです。にリアクションも薄いために、羨ましそうに見ていることがあるがシュウの目の前ということもあってか特にアクションを起こしたことはない
こんどシュウが風呂に入ってるときにでも聞いてみようかな？

「……おちつく」

「そうか？」

「……あたたかい、から」

「シュウが冷たいんだけどね……」

シュウって体温が低いんだよね、心配なくらい

僕も低い方だから冷たい、じゃなくて温かいと感ずるのはシュウくらいだろう

「……………」

「ウエンディ？どうしたシュウみたいに無言になって？」

「え？あ、な、なんでもないですよ！は、早く行きましょー！」

……………うん。今見てたね、シュウを羨ましそうに

それを知ってか知らずか、シユウはやっぱり』……………』とご機嫌のようだった

シユウちゃん……………いいなあ

「ウエンディ？どうしたシユウみたいに無言になって？」

「え？あ、な、なんでもないですよ！は、早く行きましょう！」

いつのまにかシユウちゃんを見てボクっとしていたみたいでクライスさんの心配したような声に少し戸惑ったような声を出してしまった。2人の少し前を歩きながらたまに後ろを振り返ると苦笑いしながらも拒絶しないでシユウちゃんを抱っこしているクライスさんとその腕のなかで幸せそうな表情を浮かべるシユウちゃん。他の人からみたら無表情にしか見えないかもしれないけど私にはシユウちゃんの幸せそうな表情がはつきりとわかった。

「はあ……………」

意味もなくなため息がでた。ここ数日、なぜか奇妙な感覚が体を巡っている気がする。

気分が悪いとかダルいとかそうゆうハツキリとしたものじゃなくて、なんと言うか……………モヤモヤするような感じ。

シユウちゃんが来たばかりの時は妹ができたみたいでクライスさんが『化猫の宿』に入ってくれた時くらいワクワクした気持ちでい

っばいだっただのに、このごろクライスさんとシュウちゃんが仲良くしているところを見るたびになんだかモヤモヤが強くなってきた。別にクライスさんがシュウちゃんばかりを見ている訳じゃない。私が困っているといつのまにかいて助けたり頭を撫でてくれたり、前と、なにも変わってないはずなのに……

「おーい、どこまで行くんだ？」

「……おねえちゃん？」

「え？」

2人の声に振り向くと、いつのまにか自分の家を通り越していたみたいだった

心配そうな2人に大丈夫ですよ、といいながら扉を開けるといいにおいが漂ってくる

シャルルがすでに用意しておいてくれたみたいでテーブルの上には出来立ての朝食が並んでいた

「あ、帰ってきたわね？ ちょうどよかった、もう用意しておいたわよ」

「うん、ありがとうシャルル」

「うまそうだな、今日もウエンディが作ったのか？」

「あ、はい。そうですけど……」

「そっかそっか、いつもありがとうな」

「あ……」

ボン、とクライスさんの大きな掌が私の頭にのせられる。一瞬、モヤモヤがはれたように幸せな気持ちになるけどそれもクライスさんが離れて行くと同時にすくになくなる

やっぱり、わからない

クライスさんとシュウちゃんが美味しそうに食べてくれている朝食

も飲み込むのが難しかった
そういえば、前にシャルルに相談したことがあったのを思い出した
そのときに、

『だいたいのことはわかったけど、それがなんなのかって言われて
も私には判らないわね』

『シャルルにも判らないの?』

『ええ、でもクライスといるときは感じないのね?』

『うん...』

『なら』

』

2人で、どこか息抜きにでも行ってみたらいいんじゃないかしら?
と、シャルルは言っていた
そういえばクライスさんが来てからは温かい時期ということもあつ
て忙しかったから町にもしばらく行つてなかったな、と私が考え
事をしてしていると

「おい、ウエンディ」

「へ?」

「ちよつと失礼して...:よつ、と」

「え、あ、あの、ええ!?!」

気がつくのと、たつた今考えていた事柄の張本人が私の目の前にいた
それはもう、近すぎて相手の顔がボヤけてしまうほどに
同時に額に感じる少し冷たい感覚、クライスさんが私と自分の額を
くつつけていたのだ
いきなりすることに混乱しながらもなぜか急激に顔が暑くなるのがわ
かった

私を引き寄せるために首の後ろに回されたクライスさんの左手が異
様に冷たく感じた

「ん〜、やっぱり少し熱があるかな〜？」

「え、あ、あの？」

「なあウエンディ、具合でも悪いのか？」

「え、えと、……具合は、悪くないですけど」

「けど？」

「な、なんでもないです！」

そうか？、と私が戸惑っていることを感じ取ったのかクライスさんがゆっくりと離れていく

それは、少し残念なような、ホツとしたようなやはりどこか妙な感覚今のことで少し考え事から意識を離すと自分がみんなから心配したような視線をうけていることがわかって再び赤くなるのがわかった

「……おねえちゃん、ちょうしわるいの？」

「だ、大丈夫だよ！少し考え事をしてただけだから」

「……………うそ、ついてない？」

「え？…う、うん。ついてないよ？」

考え事をしていたのは嘘じゃなから。ただ、なんで自分でもボーっとしてしまうことが多いのかは判らないけど

シャルルのなにかを訴えるような目と視線が合う

『このまえのこと？』といたいみたいだ。目だけをわずかに動かして頷く

だったら、とシャルルが心配そうになにかを促す。なにを促されているのか、それは判る

けど、本当にそんなことでこれが解決するのは判らない。だからこそ今日まで言えずにいたのだ

それに、クライスさんにとでもなついている（シユウちゃんには失礼だけどなんだか『なつく』というのがしっくりくる）シユウちゃ

なんにんだか悪い気もする

なんでそんな風に考えてしまうのかは、やっぱり判らないけど

「ウエンデイ、今日はなにか急ぎの仕事とかなかったよな？」

「え？は、はい。今日はあんまりありませんよ？」

クライスさんの唐突な発言に言い淀みながらもなんとか言葉を返す
ふうん、とクライスさんはなにかを考えるような素振りを見せてか
ら細い唇をニイ、とイタズラを思い付いたように楽しそうに歪めて

「なら、今日は出かけようよ。2人だけで、」

「で、出かけるんですか？」

「そう、2人でデートしよう」

「……………ええー！？」

そんなことを言った

・
・
・
・
・
・

「で、いいですか？」

「うむ。このごろは忙しそうじゃったからそうゆう機会も少なかっ
たじゃろつ。楽しんでこい」

「ありがとつございませす、ってそれは？」

「金じゃ」

「どこから金が出てくるんですか、外界との接触もないのに」

「聞くな」

「まさか盗ん……………」

「疚しい金ではない」

いや、ならその分厚い紙幣はどこからでてきたんだよ。依頼も僕が来てから1回2回くらいしかなかったし金を貰った覚えもないよ？
作った野菜や果実でもどこかに売りにいつているのか？

詮索するとなんか妙なことになるりそうなのでそれ以上にも言わずに受けとる

「じゃ、行ってきます」

「うむ」

なんの話をしているのか、無論今日ウエンディとデート（という名の息抜き）に町に行くことをマスターに話していたのだ
ここ数日、ウエンディのようすが目に見えておかしい
でも調子が悪いようにも見えないし本人もそう言っている

ならばなにか、と考えても判らないのでとりあえず『がんばりすぎ』
と言うことにしてウエンディを息抜きに誘ったのだ

その後ウエンディは渋っていたがシャルルとシュウによる説得によつてなんとか了承した

なぜシャルルとシュウを連れていけないのか、それは僕なりの考え（・・・）があるからだ

建物をでると壁に寄りかかるように立っているウエンディがいた
外出用の服なのか、それともオシャレなのか……青と黄色を主体にしたシマシマ柄のワンピースを着ていて手首と足首のあたりに羽のようなブレスレットとアंकレットをしている

その表情は戸惑っているような、楽しみにしているような正直無表情のシュウより理解しにくい表情をしていた

「おう、ウエンディ」

「あ、マスター何て言っていました？」

「楽しんでこいってさ」

「そうですね……。でも本当にいいんでしょうか、私達だけ……」

「みんないいって言うてくれただろ？それに、ウエンディも毎日頑張ってるんだからたまには息抜きにしないと倒れちまうぞ？」

「でも、」

「あゝ、しつこい！一日くらい楽しい日があってもいいじゃん。それともなんだ？僕なんかとデートすんのは嫌なのか？」

「っ！そんなことないですよ！」

とんでもない、とばかりにブンブン頭を振りながら否定するウエンディ。『むしろ……』となにかを呟いていたが小さすぎるその声は僕でも聞き取れなかった

でも、嫌がってはいないようなのでよかった

「マスターからお金も貰ったし、今日は楽しもうぜ！」

「は、はい！私も、楽しみです」

「そっか、ならよかった。じゃあ行くか」

「はい」

行き先はギルド【妖精の尻尾】があることでも有名なマグノリアだ【妖精の尻尾】には『ナツ』というドラゴンスレイヤーがいるという話も聞くが、とりあえず今日はマグノリアの町で楽しむことを優先するつもりだ

ウエンディ先導のもと、マグノリア行きの電車のである駅までたどり着いた

駅にはたくさんの人がいて、あまりの外界との接触の少なさにこの世界にのことはあまりわかっていなかったただけになんだか新鮮だ

「お〜！人がいっぱいいるな〜」

「あ、クライスさんってずっと森のなかとかで生活していたんでしたっけ？」

「あ、……うん。実際にギルドのみんな以外の人をこんなにたくさん見たのは初めてかな」

嘘はいつていない

「電車の乗りかたとか判りますか？」

「ああ、だいたいは……… って、ウエンディ！僕たちの乗る電車もうすぐ行っちゃうぞ！」

「へ？……えっと、もう間に合いませんね。次を待ちますか？」

「んにゃ、間に合わせる！」

「間に合わせる、って………え？ きゃあああ〜！」

ウエンディの手を掴んで猛烈に加速する。階段の手すりをどこぞの青い針ネズミのように滑り降り電車を数台飛び越えながら目的の電車に滑り込む

同時に背後で扉の閉まる音、ギリギリセーフとはこのことが

「ミッションコンプリート！」

「び、びっくりしました……… そんなことより！こんな無茶苦茶な電車の乗りかたはだめです！」

「すみません」

「次からは気をつけてくださいね？とりあえず座りましょうか」

まだ朝早くなこともあつてか車内には人はまばらで座るところはたくさんあつたので適当なところに座る

窓の外を見れば次々に流れていく風景がある。ちらほらと建造物も見え始めていた

「そういえば、マグノリアまではどれくらいかかるんだっけ？」

「えっと、たしか1時間くらいですよ？」

「以外に遠い……」

「あはは、ギルド自体が首都から離れてますからね」

1時間と言っても少し雑談をしていればあっというまに過ぎていつていつの間にか目的地についていた

さすがは大きな町なのですでに人は多い。気を抜けば人の波に流されていつてしまいそうだと、

「く、クライスさん！」

「早速かよ！」

そんなことを考えていたら案の定、ウエンディが僕の視界から消えかけていた

いくら人が多いといっても本当に流されるのもどうかと思うが……ヒョイヒョイと人の隙間を縫いながらウエンディの元までたどり着きその手を握る

「ひとまず駅から出るか。いろんな意味で危ないし」

「あはは、そうですね」

人の波に逆らってはいるがそこは人外な身体能力をもつ僕にはたいした障害にもなり得ず、すぐに駅を脱出する

「ふう、さて！どうする？」

「え、えっと……その前に、手繋いだままなんですけど……」

「ん？いいじゃん。またどっかに流されてっいたら困るし」

「そんなに人いませんよ？」

「そんなに嫌か……………（グスツ）」

「そ、そんなことないです！だから泣かないでください！」

「よし！じゃあいくぞー！」

「嘘泣きですか！？」

「いや、マジだった」

「……………」

マグノリアはいい町だった。活気もあるし町の人々の表情も明る
し、かといってガチャガチャとうるさいわけでもなく雰囲気の良い
町だ

飲食店、衣服店、書屋、魔法アクセサリーやアイテムの店まである
品揃えも良さそうだし、1日では楽しみきれないだろう

「山ほど回りたいところはあるわけだが、ウエンデイ。どこか行き
たいところあるか？てかなかつたら困るんだけど」

「そうですね、私もギルドの外に来るのは久しぶりなので服とか
見てみたいです」

「服？」

「はい ギルドの織物も可愛いんですけど、久々の町なのでいろい
ろみたいかなって」

「ふーん、なら行くか。つと、その前に書店だな」

「なんでですか？」

「場所がわからんから」

「あ、確かにそうですね…。私もマグノリアに来るのは初めてだか
らわかりませんし」

書店は適当に歩いていたらときに見ていたのでなんとなく見つけだして
『マグノリアを歩くならこれ！』とかいう宣伝文句の書かれたもの
を1冊購入

信用に足らぬ題名の割にはこの町について事細かにかかっているし、地図には各店舗の見所やおすすめ商品なども書かれてあったので初めて僕たちにはちょうどいい本だね
服屋について書かれてあるページを見つけて、詳細を読みながら良さをそうなところをピックアップしていく

「ん、っと。この本によるとウェンデイくらいの子の服が売っているのはこのこと、このこと、このこと、ここかな？ どこに行きたい？」

「迷いますね、どれも綺麗なお店みたいですから」

「制限時間は10秒」

「制限時間があるんですか！？」5、4、3……「もう時間がないじゃないですか！？ え、と、じゃあここがいいです！」

ウェンデイが指を指したのはレディース専門の店ではなく12〜18歳の中高生あたりの男女を対象にした（中学も高校もないが……）『ラビリンズ』という名前の店だった

対象が広いせいか店舗も広大で（名前の由来はこのせいか？）品揃えもいいようだが、どうせならレディースを多く取り扱っている『エデン』という店の方がいい気もするが

「『ラビリンズ』でいいのか？こっちの『エデン』の方が女の子の服をたくさん取り扱ってるみたいだよ？」

「いいんですよ。クライスさんの服も見るとすから」

「僕の？ 僕はいいよ。これ汚れてもなんか勝手に綺麗になるし、丈夫だし」

「そうゆう問題じゃないですよ、たまには違う服も着てみてくださいさ
い
い」

「なんで？」

「……さあ、行きましようー！」

「何故に無視！？」

早く見に行きたかったのか、ズルズルとウエンディに引きずられる形で『ラビリンズ』に到着
店内に入ると名前の通り迷いそうな広さだった。無論、その分いい店でもあった

「さあ、まずはウエンディだ。僕は後でいいからゆっくり見ていいよ」

「そうですか？」

「うん、気に入ったのがあったら着てみたりしてみるのもいいし」

「えへへ、じゃあお言葉に甘えて　あ、クライスさんも来てくださいよ？」

はいはい、と楽しそうに服を見て回っているウエンディについて行く。久々に楽しそうに笑うウエンディを見て少し安心する

この頃どこか思い詰めたように考え事をしている姿を見て心配をしていたのだが聞いてもなにも教えてくれなかった

本人は心配させないようにと自分のなかに押し込めているのだろうが……僕からしてみれば余計に心配になる

無理に聞き出しても意味はない。が、それでも何を考えているにしろずっとそんな調子ではいつか倒れてしまう

今日のデートで少しでも気が紛れてくれればいいが……

まあ、何をそんなに悩んでいるか……まったく判らない訳じゃないけど

「クライスさん！」

「……ん？なんだ、ウエンディ」

思考の波に割り込んできたのはいつの間にか目の前に立っていたウエンディだった

その手にはそれぞれ緑と青のワンピースが

「これとこれ、どっちがいいと思いますか？」

「ん〜……」

わからねえ、ウエンディが小さな女の子とはいえっても僕はこうゆうときどう答えたらいいかまったく判らない

ゲームやアニメの主人公みたいに気のきいたことが言えるわけもなし仕方ない、これでいこう

「どっちも似合うと思うよ？なんてったってウエンディ自信が可愛いんだから」

「え…ノノそ、そんなことないですよ！」

「そんなことある。ウエンディなら何を着ても似合うよ」

「そう、ですか…？ノノノ」

なんか可愛いという言葉を使って答えを濁らせた気がしなくもないが……前も言ったけど真実だからいいよね！

それからは、なんだろう。いろいろ着替えてた気がする。ジーパンにノースリーブ、ミニスカートにブレザー、吊りズボンとブイネツクシャツ、着物（どっから出てきたし）ets…

他にもいろいろ着替えてたがとりあえず上記の着物以外を購入。なんで着物買わなかったかって？値段が高いんです、札束全部吹っ飛びかねないんです

ウエンディがかなり粘っていたが下手すると帰れなくなる、と言ってなんとか説得して我慢してもらったよ

ちなみに、着物を置いてきたあとのウエンディは半泣きだった

『クライスさんとお揃い…』とか呟いていたのは気のせいだと思う

「さて、次はどこに行く？」

「まだクライスさんの服を買ってませんよ？」

「流れて忘れてると思ったのにつ」

「あはは、忘れてませんよ」

嬉しそうな、楽しそうな、そんな笑顔を浮かべたウエンディに連れられて僕の衣類を買いに行く

結論を言えばウエンディの時より時間がかかった
何故かって？

『じゃあ僕はこれでいいや』

『あ、ダメですよ！いつも着てる着物も黒いのにもた黒い服なんてこっちはどうですか？』

『白っ！？ 上から下まで真っ白じゃん！』

『たまには違う色もいいですよ？ クライスさんならきつと似合いますよ！』

『せめて単色じゃなくていろいろ混ぜてほしいんだけど……』

『じゃあ……これはどうですか！』

『ベビーピンク！？ 絶体無理！！』

『何色ならいいんですか？』

『く』黒以外ですよ？』………だがあえて黒がいい！』

『ダメです！』

と、いうわけだ。いろいろ言い合い、結果、僕は白いジーパンに薄い長袖（白い生地には黒い文字が書かれているがさすがにこれは妥協してくれた）といった服装だ

ウエンディも珍しくワンピースではなくズボンと袖無しブイネックシャツという服装だ

そんなこともあり、休憩をかねて今はちょっとした喫茶店にいる

「うぐう…一件目で疲れた、」

「そうですか？私は楽しかったですよ」

「ま、今日はウエンディに楽しんでもらうことが目的だから僕が死人のような目をしていてもなんでもいってよ」

「えっと、さすがにクライスさんがそんなことになってたら私も休憩しますよ……？」

「大丈夫だ、後30秒はもつから」

「かなり限界に近くないですか!？」

僕はコーヒーを啜りながら、ウエンディは小さめのクレープを頬張りながらそんな会話をしていた

ウエンディは、本当に楽しそうだ。行き掛けに少し渋っていたからもしかしたら本当は嫌なんじゃないかとも心配したけど、そんな必要はなかったようだ

時間はまだ昼、まだまだ楽しむ時間はある

「よし、体力も回復したし次の場所にいこうか？どこにいきたい？」

「私ばかりじゃなくてクライスさんの行きたいところはないんですか？」

「僕の行きたいところ？ う〜ん……」

パラパラとページを捲る。どうせなら前世ではあり得なかった所に行ってみたい。該当するのは魔法関連の店舗……

魔法薬、なんか危ないものも混ざっていきそうだな……。魔法アイテム、武器か？興味はあるけど女の子と行く場所ではないよね。幻書っておい！ダン リアンの書架か！魔法アクセサリー、お？ここはいいっばいな？

「ウエンディさえよければここに行かないか？魔法アクセサリー専門店」

「アクセサリーですか、私も見てみたかった所なんですよ 是非
行きましょう！」

「お、おう」

さすが女の子、アクセサリーとかには興味があるらしい。喫茶店で
昼食も済ませてさっそく目的の場所へ。外見はただのアクセサリー
シヨップだったが、試しに【複写眼】を発動させるとそれぞれのネ
ックレス、ブレスレット、アンクレット、イヤリング、チエーンな
どのすべてが微力な魔力を放っていた。効果もさまざま、体の体温
を下げて暑い場所でも快適にみたいなやつ、その逆もしかり。魔力
をチャージする必要があるけど数回だけ同じアクセを付けた人のと
ころに飛んでいけるやつとか、弱いモンスターを寄せ付けなくして
くれるようなやつとか、安眠を誘うやつとか、とにかくさまざまだ。

「いろいろあるな、どれも安いし」

「そうですね、私こうゆうアクセサリーとか持ってませんからど
れがいいのかよく判りませんけど……」

「まあ、僕もよく判らないけどね」

「え？クライスさんは何か欲しいものがあつたからここに来たんじ
やなかつたんですか？」

「まあ、ね。なんか残るものが欲しかったから、かな？」

「残るもの、ですか？」

「うん。僕とウェンディの初デート記念」

「は、初デート……ノノノい、息抜きじゃなかつたんですか？」

「ん？そうゆう名目で僕がただウェンディとデートしたかっただ
けって言ったらどうする？」

「え、あ、えつと、その………う、嬉し」

「ま、冗談だけだね」

「え？」

真っ赤になっていたのが一変、スッとウエンディの顔から表情が抜け落ちる

僕としてはジョークのつもりだったが……ウエンディはそう受け止めるにはいろいろ急展開過ぎて処理落ちしたらしい
同時に回りから集中する冷たい視線

「……………」
「えっと……う、ウエンディ？」

「……………」
「ごめん！別に冗談とはいってもそうゆう思想が無かった訳じゃないから！うん！ここに来た理由もさっき言った通りだから！ウエンディとお揃いの何かがほしいなあ、って思っただけでここに来たんだよ！」

肩を揺さぶりながらそんなことを叫ぶように言つと徐々にウエンディの目に意識が戻ってくる

「本当、ですか？」

「うん！本当だよ！」

「クライスさんが、今日の息抜きをデートって言ったのは嘘じゃないんですね？」

「無論！ウエンディとの初デートに残るものが欲しいってのも嘘じゃないって本当のことだよ！」

「そう、ですか……………／／／」

なんとか機嫌を治してくれたらしくウエンディは少し上機嫌にアクセサリーを見て回りだした

同じ列を見ている意味がないので僕も適当に歩いて回る。アクセサリー事態の値段は大したことないのでどれでも良さそうだが、ど

うせなら良いものを買いたい。僕は特に好みはないがウエンディはどんなアクセサリーが好きなのだろう？手足の羽みたいなやつは服とセットになっていたらしく自然につけているが、やはりネックレス辺りが妥当だろうか？

そんなことを考え聞いてみようと思えばウエンディを探すと

「ん？」

目に映ったのはなにかを凝視するウエンディの姿。しばらく見ていたがその内激しく頭を振ってその場を離れていった。さすがに気になり僕もそこまで行ってみる
はたして、そこにあっただのは

「ペアリング、かよ……」

2つで1つ、それこそカップルが付けそうな2つ揃って初めて意味をなすネックレスだった

微細な模様の刻まれた天使の片翼が銀の細いチェーンで繋がれていて男女用として作られているが故か、小さいものと大きいものが重なるようにして飾られていた

翼の所々には透明な石が嵌め込まれており値段より遥かに高級な見た目をしていた

説明によれば、相手が付けるネックレスに自分の血と魔力を込めてお互いに付けると魔力などの供有や簡単な念話が可能になるらしい（ただし長距離は不可）

ただし、それはあくまで機能でありその行為に込められた本来の意味は

『どんなに離れても、2人の心はいつでも繋がっている』
つまり、たとえ1人になっても寂しがる必要はない、という証の品

らしい
カップルが買うなら結婚指輪の次に深い意味を持つアクセサリーだ
ろう

それをこんな低価で売るのはどうかと思うが……
とりあえずその場を後にしてウエンディの所へ移動する

「なにかいいものあった？」

「へ？い、いえ！まだです……」

「そうか、じゃあどうする？まだ見つかってないけどあんまり長居
するのは気が乗らない場所だし、次に行く？」

「え？………そう、ですね」

僕の言葉に一瞬ウエンディの視線がさっきのネックレスに向かうが
すぐに僕に向き直り

「ギルドのみんなへのお土産も買いたいですから、そろそろ行きま
しょうか？また来ればいいんですし」

「そうそう、別に二度と来れない訳じゃないんだから見たいところ
をささっと見ていかないと」

ウエンディもいつまでもいるのは少し嫌だったのか（確かに周りには
カップルなどもいるような店だし）すんなりと了承した
次にどこに行こうか？などと会話をしながら店を出ようとしていた
ギリギリで

「あ、悪いウエンディ。ちょっと御手洗い行ってくるから待ってて

「え？ あ、はい。じゃあここで待ってますね？」

「うん、ごめんね」

と、なんとも情けない姿を見せてしまったことを後悔しながらも僕

は店内に戻って行った

・
・
・
・
・
・

「お、これもうまいな」

「クライスさん！食べ過ぎですよ！」

「ウエンディだって食べてるじゃん？」

「クライスさんみたいにバクバクとは食べてないですよっ！」

ギルドのみんなへのお土産はお菓子にしようという話になり今はちよっとしたお土産屋さんにいた

そこで試食品を食べまくっている少年が1人。僕だけだね

「わかったわかった、やめるから怒るなよ」

「みんなへのお土産を買いに来たのにクライスさんが試食品で楽しんでどうするんですか…」

「ははは、まあ若気の至りってことで」

「よく判りませんが、とにかく気を付けてください！」

お土産屋さんは前の世界の物とさして変わらず、饅頭やチョコレートのお菓子、煎餅とか一口ケーキみたいな物もあった

お金にはまだ多少の余裕があるのでギルドの全員に配れるほどのお土産は買えそうだ

「留守番してる2人にもなんか買っていくか」

「そうですね、シャルルはこれが好きって物はないから……シユウちゃんと同じものでいいと思います。シユウちゃんってどんなものが好きなんでしょう?」

「シユウも甘いならなんでもいいような気がするぞ?」

「うくん、やっぱりチョコレートとかですか?」

「だな、まあシユウのことだ。甘けりゃ食べるだろ」

「あはは、そうですね」

見てるこつちが気持ち悪くなるくらい甘党だからね、シユウは。

その後も、あの人はあんまり甘くない方がいいとかしょっぱい物もどうかなんて会話をしながら買っていったらいつの間にか1人では持ちきれないほどの量を買っていた

山積みの箱を僕が、午前中に買った衣類はウエンデイが持つということでなんとかすべて持ちきることにはできた

フラフラと揺れる箱をなんとか支えながら商店街の中心あたりにある噴水までたどり着きひとまず休憩

「買いすぎだろ……」

「お金ギリギリまで使いましたからね」

「我ながらほんとにギリギリだよ……」

まあこれだけの物を買って漁ったわけだし、当たり前だが……

帰りの電車まではまだ時間はあるが金を使いきってしまったからには娯楽施設などに行くわけにもいかない。どうにも、暇になってしまった

「ウエンデイ、もう行きたいとこないか? できればお金を使わないところで」

「私は、もう特にはないですね。クライスさんと町を歩けたただけです。でも楽しかったです」

「そりゃ十全。う〜ん、ならちよつといいかな？」

「行きたい所があるんですか？」

「まあね、でもウエンディは興味ないと思うぞ？ 魔法武器を少し見ていきたいんだよ。僕は武器を使って戦う魔導師だからどんなものがあるのか興味があるから」

「武器、ですか？ でもクライスさんが行きたい所なら私も行きま
すよ？」

「ウエンディには退屈だろ？」

「そんなことないですよ、早く行かないと時間がなくなっちゃいま
すよ？」

「ん〜、ならお言葉に甘えて」

よっ、と立ち上がる

同時に魔法を発動。山積みの購入品を魔法空間に転送する。シユウ
の『換装』の応用だ
びっくりしていたウエンディにそれを説明しながら僕たちは歩き出
した

・
・
・
・
・
・

「ここ、ですか？」

「マップ上はここであってただけだね……」

僕たちの目の前には年期の入った建物で雑誌曰く『知る人ぞ知る名
店』らしい。いや、確かに知らない人はこんな不気味な店には近よ

りもしないだろうけど
とりあえず、ドアを押し開き店内へ

「お邪魔します……」

「……………」

「ウエンディ、シユウ化するなっ」

「で、でも……………なんか怖いですっっ」

店内は見た目を裏切らずテーマパークのお化け屋敷なみに暗く不気味な雰囲気醸し出していた。明かりはロウソクのみで、飾られている武器も見れば良いものかもしれないが僕にはボロい変な鉄の塊にしかみえない

ウエンディが僕の着物をちょこん、と指先で摘まんでいることを確認しながらさらに店内へ入っていく

それにしても、人の気配がない。本当に営業してるのか？ それともなにか魔力的なものでカモフラージュでも？ 雰囲気からしてあり得なくない、と僕は右目を瞑り力を発動させながら見開く、すると

「……………」

「…らっしゅい」

「ひいっ！」

とあるどこかの魔女さんがいた。ウエンディの手前、悲鳴こそ上げなかったが心底驚いた、僕の影に隠れていたはずのウエンディはおもいっきり僕に抱きつくようにして悲鳴を押し殺している。その瞳いっぱい涙をためながら…

にしても、僕の間合いに気づかせずに入ってきたのは偶然か必然か、
なんだか底知れない婆さんだった

「珍しい客だね、カップルにしては歳が離れてるね？まあ、わたし

や否定しないけどね。ここは初めてかい？」

「珍しい営業スタイルだなコラ。連れが青くなったり赤くなったりして死にそうな顔してるんですけどお？」

「ハツハツハ、死にそうな婆さんを目の前に何をほざくか小僧」

「いつそ死ね」

「まだまだ先は長いよ」

「さつき死にそうな、とか言ったのアンタだろ！」

「忘れたよ、そんな昔のこと」

「あんたの記憶の劣化速度を疑うぞコラ」

「なにも出やせんよ」

「どろどろに溶けた脳みそがでるよたぶん」

「ハツハツハ！」

婆さんの派手な笑い声が店内に響く。それがまた不気味で、腰にあるウエンディの手にさらに力がこもった

「で、なんの用だい？」

「あゝなんかあった気がするけどとりあえず今はあんたを殴りたいよ」

「そりゃ困る。これで許しとくれ」

婆さんが何かを僕に投げる。2つ飛んできたそれを両手で掴みながらそれを確認する

今僕が着ている服よりも白く、それでいて凶悪なそれは

「銃、か？」

それは真っ白な超大型の銃で回転式連発拳銃と自動式連発拳銃を合結させたような奇妙な銃だった。目見当で銃身は50cmもあるというくらいだ

発動させたままだった【複写眼】で見るとこの銃は使用者の魔力を銃弾に変換し撃ち出せるというものらしい。他にも機能が多々あるらしい

「これは？」

「化け物だよ、誰も使えやしないんだ」

「金はないぞ？」

「いらないよ、もし使いこなせるならそんな物もってつく」

ツツツドン！！！

凄まじい爆音と共に放たれた銃弾が店の壁をぶっ飛ばしながら飛んでいく

まるで大砲でも撃つたみたいな威力だ、これでは普通の人間は使えないはずだ

「…納得だよ」

「たまげたねえ、あつさり使いこなすとは」

「引き金引いただけなんだけど？」

「今までに来た自称強者は引き金を引くこともできなかつただけどねえ、ハッハッハ！」

また、婆さんが豪快に笑う。恐怖のあまり僕に抱きついたまま固まっていたウエンディがついにはガタガタと震えだした。それを知つてか知らずか、婆さんは大声で笑いながら僕をビシィッ、と指差す

「持つてきな、それはもうアンタのもんだよ！」

「いいのか？こんな凄いものただで貰って」

「使い手がいなくて埃にまみれちまうよりはいいさ」

ハッハッハ！ と、また豪快に笑う

「じゃあ、ありがたく貰ってくよ」

「それでその嬢ちゃんを護ってやるんだね」

「こんなのなくても護れるよ。てか何知ったような口聞いてやがんだババア」

「ハッハッハ！年寄りなめんじゃないよ、ほらわたしの気が変わらない内にさっさと帰りな」

「喰えないババアだな、じゃあ貰ってくよ」

震えるウエンディに急かされるように僕は店を後にした

「あ、壁ぶっ壊しちゃったままだな……ま、いつか」

・ ・ ・ ・ ・

「また遅れる〜〜!」

「クライスさん! 電車飛び越えながら移動するのやめてください〜」

私はまた、クライスさんに抱えられるようにして駅内を飛び回っていた

そして、来るときと同じように電車に滑り込んだ

「うし! セーフ」

「朝気を付けてくださいって言ったばかりなのにさっそくですか…」

「まーまー、一応ウエンディのせいでもあるんだし大目に見てよ」

「むう〜…」

確かに、あのお店の恐怖がしばらく抜けなくて時間をとっちゃったのは私ですけど…と言いながら空いてる席を探しながら車内を歩く意外に車内は混んでいてクライスさんも、席ないな〜、と困っているみたい

そんな中、何故かふと後ろを振り返った

「後ちよつとだから、ね! ね!」

「ぐあ〜…気持ち悪り〜………」

「もう、いつになったら治るのよっ」

でも、そんな会話が聞こえてきただけで自分でも振り返った意味は判らなかった

「ウエンディ? どうかしたのか?」

「あ、いえ。なんでもないです」

次の車両まで行くと、ちょうど空きがありそこに腰を降ろした

カタン、カタン、と小さく揺れる電車のなか。空を見上げるとすでに星と月が輝くきれいな夜空が広がっていた

今日は、楽しかった。何もかも忘れて楽しめた。クライスさんと服を買ったり、美味しいもの食べたり、お土産屋でいろんなこと話ながらお土産選んだり、今日はずっと笑っていた気がする。あ、でも最後に行った武器屋のお婆ちゃんも怖かつなく、必死にクライスさんに抱きついていたことは今思い出しても一瞬で顔が暑くなりそうだでも、楽しかった

ずっと心で渦巻いていたモヤモヤも全然感じないくらいに

今日がずっと続けば、なんてことも考えてしまつくらいに幸せな一日だった

「ウエンデイ、」

「……………え？なにが言いましたか？クライスさん」

「いや、さつきから笑ったり赤くなったり寂しそうな顔したりニヤニヤしたりコロコロ表情が変わるから何かあったのかなって」

「あ、私、顔に出てました？」

「うん。不気味なくらいに」

「不気味って……それは酷いですよ」

ウソだよ、なんて言いながら私の頭を撫でてくれるクライスさん優しげな、思わず見入られたようにジッと見つめていたい笑顔は怒っていたって寂しいときだって私を穏やかな気持ちにしてくれる

「…ずるいですよ」

「ん？何か言ったか？」

「な、なんでもないですよ！それよりも、今日はありがとついでいきました。とつても楽しかったです」

「うん、僕も楽しかったよ。ウエンデイはちょっと怖いこともあったみたいけどね」

「恥ずかしいんですから思い出させないでください！」

もうっ、と少し機嫌が悪いですよとアピールするように窓の外を向いてみた。ごめんごめん、と言いながらクライスさんも外を向いていた

綺麗な星空、それを見つめていてしばらく沈黙が落ちる

今日のことを思い出しながら楽しい気分でしたけど、ふと、窓に映ったら自分を見ると何故か不安が降りてきた

こんなに幸せで、明日になったらどうなるの？ また、モヤモヤする気持ちが私を不安にさせるの？

そんな気持ち。

一度考えてしまうともう止まらなかった。どうしようもなく不安な気持ちになって、目の前にいるはずのクライスさんが何故か急にいなくなってしまうような、心臓はバクバクと音をたて、背筋をゾクゾクといやな何かが駆け回った

焦り、不安、恐怖、そんなものが積もりに積もって、耐えられなくなり私は何かを話そうと口を開けた

「あ」

「なあ、ウエンディ」

でも、それを遮るようにクライスさんが外を向いたまま言葉を紡ぐその声音はどこか心配しているような、寂しがっているような、そんな声

「なん、ですか？」

乾いた唇で無理矢理に返事をした

「何か悩みごとかないか？」

「悩みごと……」

無論、ある。でもこれをクライスさんに話すのは何故か気が引けて話せなかった。だけど、今の私は自分の体を襲い続けている感情を吐き出すように自然に言葉を紡いでいた

「あります。悩み」

「よければ話してくれないかな？ 僕でよければ一緒に考えてあげるよ」

深呼吸。まったく落ち着かない、でも、しっかりと話し出す

「……………」

話終えて、クライスさんは無言だった。私も、無言だった

シユウちゃんと仲良くしているクライスさんを見ると胸元になにかモヤモヤした感覚が広がり不安をなること、クライスさんが近くについてくれるとそれがなくなることに、そして、それがどうゆうものなのか自分でもまったくわからないこと

無表情で、でも何かを考えているような顔をしているクライスさんを見ていると何故かまた不安になる

長すぎる沈黙、でもそれは私にとってと言うだけで実際は数秒のことだったのかもしれない

唐突に、クライスさんが笑いだした

「ク、クク、アハハハハハハハハ！」

「え？ え？ え？ ど、どうしたんですか？」

まるで目の前で面白いことが起きたかのように楽しそうに笑っていたけど、しばらくしてポンポン、と自分の横を叩いた

「ウエンデイ、ちょっとこっち来てみる」

「なんでですか？」

「いいからいいから」

「は、は、は……」

よくわからないまま、私は立ち上がってクライスさんの横まで移動しようとしたけど、いきなり腰の辺りを掴まれてヒョイツと移動させられた。私が座っていたのはクライスさんの膝の上だった。しかも、そのまま後ろからそつと抱き締められる

「な、なにを……／＼／」

「そんなことで思い詰めてたのか？　しっかりしてるとはいえ、まだまだウエンディも子供ってことだな」

混乱しながらも、今の状況を自分なりに整理してみる。まず、私はクライスさんに悩みを聞いてもらった。そうしたら笑われた。そして抱き締められながら子供って言われた。まったく判らない！ 私なりに結構深刻に考えていたことだからちよつと怒ったけど、それ以上になんでこんな状況になったのかがまったくわからない。今すぐにも理由を聞いてみたいけどこの状況をずっと味わっていたという欲望がわいてきて真っ赤になりながらもジツとしていた。首もとにまだ笑っているクライスさんの息がたまにかかってくすくすたかったけど、それでもジツとしていると

「よくあることだよ」

「え？」

いる場所が場所なだけに振り替えることもできなくて耳のすぐ近くで発せられた優しいげな声をどんな表情で彼が口にしたのかは判らなかつた

「ウエンディはシュウのことどう思ってる？」

「シュウちゃんのこと、ですか？」

「うん。妹か？　可愛い女の子？　友達とか？」

「うん、可愛い妹だと思ってますよ？」

「クク、やっぱりね」

「？」

私はたぶんキョトンとしていたと思う、でもクライスさんは笑ったままだった

「ウエンディはまだまだ甘えたい年頃ってことだな」

「甘えたい年頃？」

「うん。たとえば姉妹がいたでしょう。最初はお姉ちゃんだけだったから親がよく相手にしてくれたけど妹が産まれてくると

今度は親が妹ばかりを相手にしてお姉ちゃんは少し寂しい気持ちになる。ウエンディはこれのお姉ちゃんの気持ちににてるのかな、僕はよくわからないけど」

「えっと、つまり私はシュウちゃんと仲良くしているクライスさんを見て寂しい気持ちになってたってことですか？」

「たぶんね。うん、僕としては等しく接してたつもりだったんだけどな。考えてみればなにかにしろシュウと一緒にだった気もするな……」

言われてみれば、なんとなくそうかもしれないと思った。あのモヤモヤした気持ちは寂しい気持ちに似ている気がする

私がそれをどんなものなのか判らなかつたのは今まではなかつた状況だから？

確かに、私はシュウちゃんを妹みたいに思っているけど、クライスさんといっつも仲良しにしているシュウちゃんを見て羨ましく思ってた

しつかりしなきゃ、と違ってこの頃は今までは以上にがんばってたでも、それは心のどこかでクライスさんに誉めてほしかったから、相手にしてほしかったからなのかかもしれない

「ま、シユウは無感情だけどまだまだウエンディ以上に子供だからハッキリ甘えてくるからな
僕もそれを受け入れすぎてウエンディのこと忘れちゃうこともあったし」

「酷いです」

「ごめんな、お詫びといっちゃなんだけど……これ、貰ってくれよ」
スツ、と首の後ろにクライスさんの手が回されて何かが首にかけられる

それは、小さな銀色の天使の片翼がかかったネックレスだった

「こ、これ……………！」

「安かったからな、買っちゃった」

「買っちゃった、て……………このネックレスの意味は」
「だからこそ買ったんじゃない？ ほら、見てみるよ」

促されて翼をよくみると、透明だったはずの石が白銀に染まっていた

このネックレスはお互いの魔力をと血を込めて相手と一緒にかけることで初めて本物になる

その行程がすでにすまされていた

「シユウは記憶もないし、まだまだ小さな子供だからウエンディよりシユウを優先することも多いかもしれないけど……
これがあればウエンディの寂しい気持ちも少しは和らぐかな？」

いきなりのもので、まだ頭が混乱していたけど……
嬉しかった。誰もいなければ跳び跳ねてしまったかもしれないくらい嬉しい

でも、私が出来たことは

「ありがとう、ございます……………／／／」

真つ赤になりながら消え入るような声でお礼を言うことだけだったそのあと、クライスさんのネックレスにも私の魔力と血を込めて私のより少し大きい翼の石が水色に色付いた

「悩みは解決？」

「とりあえずは、です。これがあるからってシュウちゃんばかりと仲良して私のこと忘れてたりしたら嫌ですよ？」

「わかってるよ」

モヤモヤが完全に晴れて安心したせいか、なんだか眠くなってきたこの幸せな気分にもうちよっと浸っていたけど、さすがに疲れた

「眠そうだな？」

「眠いです……」

「んじゃ……………ねていいよ」

「……………この恥ずかしい格好はなんですか？」

またいきなり持ち上げられたかと思ったら私はクライスさんの膝を枕のようにして横になっていた

「ん〜、いいじゃん。撫でやすいし」

「そう、ですか……………？」

睡魔のせいで頭がボンヤリしてくる。それに、撫でられている心地よい感覚が私をどんどん夢の世界に誘っていく

「クライス、さん……」

「なに？」

優しい声、そこで私は寝ちゃったからなにを言ったのかは判らなかつた

「私、クライスが　だよ……」

そうだ、マゲノリアに行こう！（後書き）

最後のシーンは書いててゾクゾクしました

なにを言ったか？ それは秘密です

六魔將軍 ―オラシオンセイサー（前書き）

やっとな原作に入ります。

注意

この作品は原作の途中から書かれているためある程度原作知識を持つていないと訳がわからない箇所が多々存在します。

まったく原作を知らない方は申し訳ありません。

よければ他の作者様方の作品を読むなどしていただければなんとかわかるかと存じます。

暑さでグッタリしながら書いたので妙な箇所があるかもしれません。その点はよろしければご感想に書いていただければと思います。

それでは、どうぞ

六魔將軍　ーオラシオンセイサー

「もう一回、聞いてよろしいですか？」

「うむ、」

「誰が」

「お主が」

「いつ」

「明日」

「なにをするって？」

フェアリーテイルフルベガス

ラミアスケイル

オラシオンセイサー

「妖精の尻尾青い天馬蛇姫の鱗のギルドの仲間達と共に六魔將軍を討つのじゃ」

「なあんじゃそりゃー！！！」

日も暮れた頃、天に向かって絶叫する黒い少年が独り

もちろん僕だけどね！

何故って？1日の仕事も終えてウエンディとシュウとシャルル達と一緒に家に帰ろうとしたらマスターに呼び出され、なにかと思えば…

「何故に闇ギルドの最大勢力の1つを僕が討ちに行かなきゃならんのですか…」

と、言うわけだった

普段は普通のクエストすらまったくないくらいなのに何故にいきなりSS級クエストを受けなきゃならないのか…

このギルドの運営にいろいろ問題があるんじゃないかと心配する

「このクエストにはウエンディも志願しているのじゃ」

「ウエンディが？」

「うむ、妖精の尻尾に『ナツ』というドラゴンスレイヤーがいるのは知っているな？ 其奴に聞きたいことがあるそうじゃ」

「ナツ、ドラゴンスレイヤー……あゝ」

そういえばそんな話しもあったな……

ウエンディが志願している理由は判ったが、まず、なぜ化猫の宿にこんな依頼がくるんだ？ 僕とシユウ以外に戦える人間のいないよ
うなこのギルドに

だが、その答えはマスターからは返ってこなかった

「なにか、あるんですか？」

「うむ、すまんなクライス。頼めぬか？」

「別に、いいですよ？ 闇ギルドだかなんだか知らないけど僕はウ
エンディが行くなら彼女を護るためにどこへでも」

「ありがたい、出発は明日…… 集合地点は青い天馬のギルドマスタ
ー、マスター『ボブ』の別荘ということになっている

地図はウエンディに渡しておいた」

「判りました」

「うむ、頼んだぞ」

建物から出ていく一瞬、何気なく振り向いたときに見えたマスター
の表情は、どこか辛そうだった

「ただいま、っど？ いないのか？」

家に戻ってくると先に帰ったはずの3人（シャルルは『1ぴき』と

数えるべきではないだろう）は居なかった

料理も用意されていないことから考えるとまだ帰っていないのか？

でも、靴はあるし……

とりあえず今日は少しハードだったからか、疲れた

風呂でも入るか、と着物を放り投げタオルを持って浴室へ。あくびをしながら何気なくドアを開けた

……気づくべきだった。というか普通に考えれば気づけたはずだ、やろうと思えば僕は数十m離れた生き物の気配だって感じ取れるし普通に考えればウエンディたちがどこにもいなくて、でも帰ってきているというなら……

「……おにいちゃん？」

「ク、クライスさん……！？」

浴室のドアを開けた瞬間、僕の目に映ったのは2人の少女の裸体。ウエンディのまだ膨らみのない胸元には銀の翼があった

お風呂から上がったばかりなのか髪や体はしっとり濡れていて白い肌は赤く上気している

シユウは頭に白いタオルがふんわりとのせられていてウエンディがシユウを拭いてあげていたことがわかった

キョトンとしたようなシユウ、絶句しているウエンディ

「……どうしたの？」

「えーっと、」

「……一緒に、入る？」

ゴガンツ！

シユウのとんでもない一言に思わずバランスを崩し頭を壁に強打

「い、いや、そうゆうわけじゃないんだが……」

「……とりあえずドアを閉めてください！」

「すいません！」

ピシャッ！

ウエンディの叫ぶような声に急いでドアを閉めた

あゝ、後が怖いな……あは、あはははははゝ

・
・
・
・
・
・

「……おかえり、おにいちゃん」

「うん、とりあえずシユウは羞恥心がないみたいだね」

しばらくして、合う服がないためこの前買った僕の薄手の長袖だけを
を着て浴室から出てきたシユウが僕にギョッと抱きつく

さすがに風呂上がり、体温の低いはずのシユウがほんのりと暖かく
まだ少し湿っている髪からは柔らかな石鹸の香りが漂ってくる

見た目、行動ともにそっちの趣味を持った人なら大興奮するだろう
が……

シユウは僕以上の怪力を持っている。甘えているだけとはいえその
シユウに『ギョ』、なんて抱きつかれたら普通に骨が悲鳴をあげる
僕だからこそシユウができる好意だ表現だ

「…………… / / /」

シウウではない、確実に風呂上がりのせいではない赤面をしたウエンディだ

「クライスさん……」

「すみません」

「見たんですか？」

「すみません（結構じつくりと）許して下さいっ」

「わざとじゃないんですよね？」

「はい」

「………なら、いいです。（クライスさんなら見られても……）」

終始真つ赤になったまま言われたがどうにか許してくれたようで良かった

シャルルはあとから出てきたようでした。さっきの絶叫はなに？ と聞いてきたので説明しようとしたらウエンディに全力で阻止された

しばらくして夕食の準備も終わり食事をしながら僕は明日のことをみんなに話した

「クライスさんも来てくれるんですか？」

「当たり前だろ？ 僕が化猫の宿に入ったのはウエンディとシャルルを護るためにといつても過言じゃないんだから」

「ま、ウエンディだけじゃ危ない仕事でもあるからあんたが来てくれるなら助かるわ」

「でも、迷惑じゃないかな？」

「なにいつてんの、本人が進んで来てくれるって言ってるのよ？ 拒んだらクライスが泣くわよ」

「そつだぞ、泣くぞ、全力で、みつともないくらいに」
「あはは、」

事実だよ？

そんな会話の中、シユウだけは不思議そつな顔をしていた

「……おにいちゃん、おねえちゃん、ねこさん、明日お仕事？」

「ああ、危ないお仕事だからシユウは留守番な？」

「やだ」

ピタッ、と空間が止まった気がした

何故って？ シユウが即答したんだよ？ さつきみたいにすっ裸みられても平然といつも通りに話すシユウが

「やだ、つて言ってもな」

確かにシユウは強い。たぶん多少の魔導師ならちっさい状態（魔法などは使えるが弱体化している）でも倒すだろう

だが、相手は闇ギルドの最大勢力の1つ。下手をすれば血を見るかもしれない

ウエンディは自らの意思で決めてしまっているのしょうがないが、できればそんな戦いにシユウまで巻き込みたくない
でも、シユウは

「……私も、一緒に行く」

有無を言わせない意思のこもった瞳でそう言ってきた

どうやら、シユウもウエンディと同じでいざというときは絶対に譲らないらしい

ふう、とため息が出た

「判った判った、連れてくよ」

「いいんですか？」

「構わないよ、全員まとめて僕が護ってやるわ」

「……………」

「あんだ、がんばるわね」

そうして、その日の夜は更けていった……

「これで3つのギルドがそろった。残るは【化猫の宿】の連中だけだ」

青い天馬のギルドマスター、ボブの別荘にはすでに【化猫の宿】以外のギルドの選別メンバーがそろっていた
先程までちょっとしたことから険悪な状況に陥りかけていたが、【蛇姫の鱗】のエースにして聖十大魔導の1人『岩鉄』の二つ名をもつジユラによって収まっていた

「【化猫の宿】も【蛇姫の鱗】と同じく3人だと聞いてまあ」

緋色の髪をした女性に槍でぶら下げられているガチムチのおっさんにスーツを着せて縮めたようなとにかく奇妙な男がそんなことをいった

しつこいようだが、とにかく奇妙なおっさんだ

「3人だと？ なら結構な奴等が来るんじゃないか？」
「そんなすごい人たちばかり来たら困るわよ」

何故か上半身裸の男、弱気そうだがどこかお嬢様のような金髪の女、
どちらも体に【妖精の尻尾】のマークがあった

見た目だけではよくわからないが、こんな所にいるからにはある程
度の実力の持ち主だろう

【蛇姫の鱗】は聖十大魔導の1人であるジュラがいるからこそ3人
で来ていた。だが【化猫の宿】に聖十の一員は所属していないはず、
それでいて3人だと言うならばそれぞれが相当の実力を持っている
のだろう

と、金髪の少女 ルーシイの弱気な声が消えるか消えないかのう
ちに聞こえてくる爆音。そして…

ドツツツガアアアアアア ン！！

木製のドアはおろか、かたい壁の部分まで破壊しながら入ってきた
のは巨大すぎる漆黒の魔導二輪だった

「ギリギリセーフ！間に合ったぜ！」

「間に合っていないですしなんで魔導二輪ごと建物に突っ込むんです
か！」

「それが僕のクオリティ」

「……………壁、無くなった」

「出入りが楽になっただろ？」

「そうゆう問題なのかしら……………」

「問題ない問題ない、どうせ僕には関係ないし」

「壁、ぶっ壊したのはあんただからほとんどあんただけの問題よ？」

その上で1人の着物姿の少年とまだ年端もいかない2人の少女と白い猫がなにやら言い争っていた
しばらく絶叫したようにそれを眺めていたようだった3つのギルドメンバー達だったが、

「ま、とりあえず降りるか」

少年が魔導二輪から降り、それに習うように少女達も降りて絶句しているメンバーに

「【化猫の宿】所属、式崎・クライス・詩織。よろしく」

「えっと、遅れてすいません。ウェンディ・マーベルです。よろしくお願いします」

「……………」

「シュウ、自己紹介しろ」

「…………… シュウ、です？」

「うん、それでいいや……………」

「はあ、シャルルよ」

なんとも人種さまざまな挨拶をする【化猫の宿】のメンバーにやはり絶句していたが、さすがにいつまでも静かなわけもなく

「女の子が、2人？」

「しかも子供……………」

「猫もいるぞ？」

「あのドでかい魔導二輪操ってた男はなんだ？」

「てか、扉開けて入ってこいよ……………」

皆の混乱は当たり前前だろう。ド派手な登場、強者が来るかと思えば細身の少年とまだ幼い少女が2人、なんとなく拍子抜けだった

「これで全てのギルドが揃った」
「この状況で進めるのかよ!?!」

半裸の青年　グレイのツツコミにもまったく動じずに話を戻そうとするジユラ

さすが、聖十大魔導と言ったところか
皆がまだ拍子抜けしているなか、桃色の髪をした青年というよりまだ少年のような雰囲気の子　ナツが『ウエンディ…』となにか心当たりでもあるかのように呟いていた

「うーん?なんか空気ですか僕達」

「あんたが壁ぶち破るからよ」

「シャルル、クライスさんのせいじゃないよ」

「……………?」

なんと言うか、仲の良い兄妹のような3人+猫1匹にジユラ以外のメンバーはしばらく話しかけられないでいたが1人、緋色の髪をした女性　エルザが踏み出す

「私は【妖精の尻尾】(フェアリーテイル)のエルザ・スカーレットだ。よろしくたのむ」

「うわあゝ　本物のエルザさんだゝ」

「思ってたよりいい女ね?」

「エルザ、ね。僕はさっきも言ったけど、クライスだ。なんか物騒な作戦みたいだけどよろしく」

「あ、ああ…」

手を差し出すクライスに戸惑いながらも握手をするエルザ

なんやかんやでエルザすら圧倒させる【化猫の宿】だった

うん、やっぱり建物のドアをぶち破って入ってきたのは不味かった
かもしれない

さつきから妙な視線が僕達に集中してる。ウエンディはなんかオド
オドしてるしシュウはいつも以上に話さないし

だって朝の手合わせをいつも以上に気合い入れてやってたら時間を
間違えちまったんだもん！それで焦ってシュウのバイクとばして
きたら、あのバイクのクオリティで急停止何てことができるはずも
なくぶち破っちまったんだもん！
などと物思いにふけっていると…

「あの子達、将来美人になるぞ」

「今でも十分可愛いけどね」

「さ、お嬢さん達どうぞこちらへ」

「え？ あの、」

「……………！」

あ、まずい。あの優男……

「ん！」

「え？うわあああああああああ！？」

ドカンッ！

シュウとウエンディの肩に手を置いていた優男がシュウによってぶん投げられた。

言っでなかったが、シュウは何故か僕以外の男が触れるとほぼ反射的にぶん投げるのだ、マスター投げ飛ばそうとしたときはさすがに止めたけど……

「ひ、ヒビキ！？」

「なっ！ いまあの小さい子が投げなかったか！？」

優男の残り2人の方が驚愕していた。当たり前だよ、ヒビキ？とか呼ばれた優男に対してシュウの身長は相当小さい

しかも柔道のように技術で投げたのではなく無造作に片腕でぶん投げたのだ

さっきの登場にも平然としていたデカイ坊主頭すら呆然としていた

「すみません」

とりあえず謝ってみる

「イタタ、長いこと女性を相手にしてきたけどいきなりぶん投げられたのは初めてだったよ」

「すみません」

「あ、いいよ。こんな可愛い子に投げられるなら別に嫌な気分じゃないから。……ただ、ちょっと自重するよ」

「シュウちゃん、ダメだよ？」

「……………ん？」

いくら優男とはいえ、何度も投げられるのはごめんらしい
シユウにとっては脊髄反射のようなものらしく自分のせいというこ
とすら判ってないらしい

「あの3人、なんとというパルファムだ……………ただ者ではないな」

「気づいたか一夜殿。あの者達は全員ワシ等とはなにか違う特殊な
力を有しておる。2人の少女もかなりの魔導師のようだが、あの着
物姿の青年、彼はなんだ？ とてつもない力を感じる」

「さすが、3人だけで来るだけのことはある」

なんかおっさん2人に見られてるような気がするけど気持ち悪いの
で故意的に意識からカットする

と、1人つり目の男が近づいてくる。誰だ？ マークからしてあの
坊主の方のおっさんと同じ所属のようだが……………

ヒュッ

数m離れたところから氷の鳥が飛んできた

まあ、製造行程ですでに腕から生やした刀で切り裂いていたのでそ
れは僕の目の前でパカリと斬れて掠りもせず背後で砕けた

「……………お前、ただの魔導師ではないな」

「試すなっ！」

「すまないクライス殿。それにしても、今なにをしたのだ？ 僕の
目にはリオンの攻撃が勝手に砕けたように見えたのだが」

「ああ、これね」

ヒタリ……………

「っ!？」

掌から出した漆黒の刀がリオンの頸動脈に紙一枚いかの距離で置かれる

無論、リオンはおろか、ここにいる全員（シュウ以外）にも頸動脈に行く行程は見えず首に当てられた結果のみしか見えなかっただろう

「僕的能力、『身刀』を高速で操っただけ。あ、頸動脈に当てたのはお返しね?」

「……………クッ、」

あえてゆっくりと掌の中へ刃をしまっていく。刃が人の腕の中に入っていく様は知らない者がみたら驚愕の一言だろう
現に、金髪の女が腰を抜かしたように座り込んでいる

「クライスさん！ダメですよそんな危ないことしちゃ!」

「あはは、ごめんごめん」

あゝ、なんか視線がいたいよ。やり過ぎたかな？ 後悔はしてないけど

いきなり攻撃してくるような奴はちょっと死の恐怖を感じてもらわないとね

「さて、なにはともあれ全員揃ったようなので私の方から作戦の説明をしよう（キラン）」

気持ち悪い方のおっさんが何故かライトアップされながら話し出した
一言言い終わる度にポーズを決めるのはなぜなんだろうか？ 無性に切り刻みたくなるからやめてもらえると嬉しいんだが……

「まずは六魔將軍、オラシオンセイスが集結している場所だが……」

ん？ ふと足元を見るとシャルルの横にもう1人猫がいた

青い猫で緑の風呂敷のようなものを背負っていた

その目にはハートが……

やめとけ、青いの。叶わないから

「あれ？ おっさんがいなくなってる？」

そんなことを考えていたらいつのまにかあの気持ち悪いおっさんがいなくなっていた

「ウエンディ、おっさんどこいった？」

「え？ お手洗いみたいですよ？」

「なんで作戦の説明をする間際に………？」

見た目だけでなく、すべてが気持ち悪いおっさんだった

「ここから北に向かうと、ワース樹海が広がっている。古代人達は
その樹海に、ある強大な魔法を封印した
その名は、ニルヴァ……ナ（キラン）」

ああ、切り刻みたいっ

「「ニルヴァーナ？」」

フェアリーテイルの2人が同時に呟く

「聞かぬ魔法だ」

「ジユラ様は？」

「いや、知らんな」

ラミアスケイルのメンバーも知らないらしい。無論、僕やウエンディ達も知らない。シユウに関してはすでに僕に寄りかかるようにしてうとうとしている。ブルーペガサスのメンバーは少しは知っているようだが、それでも古代人が封印するほどの破壊魔法、ということだけしか判らないらしい
それにしても、破壊魔法か。六魔将軍だけでも面倒なのにそんなものまであるのか……

「クライスさん……」

「安心しろウエンディ。どんな魔法だろうが僕が喰らってやるよ」

「あはは、食べるのは危ないですよ」

そうだね、とウエンディには返事をしておいたがいざとなったらいくらでも喰らってやる

僕の守るべき者を傷つけるものは僕がすべて……

「オラシオンセイスが樹海に集結したのは、きっと、ニルヴァーナを手に入れるためなんだ」

「我々はそれをそしするため……」

「「「オラシオンセイスを討つ（キラリン）」」」

全員で何故かポーズを決めながら言う。なんか周りにキラキラした
ものが見えるのはきつと幻だ
そう思わないとブルーペガサスをブラッティペガサスにしてしまい
そうだからね

「こっちは14人、相手は6人、でも侮っちゃいけない。その6人
がとんでもなく強いんだ」

数だけで言えばこちらがかなり有利だが、相手はその6人で闇ギルド
の最大勢力を担っているんだ。1人1人がギルド1つ分の強さを
持っていると考えていいはず……。僕としては誰にも負けるつも
りはないけど、あまり過信しすぎるのはよくない。極力ウエンディ
達を守りながらできるだけ守る戦いだけに専念しよう…

「これは、最近やっと手に入った奴等の資料だ」

そう言いながら先ほどシユウにぶん投げられた優男、ヒビキが妙な
魔法を発動させる

空中に浮かぶ無数の画面、近未来の科学技術を連想させるそれはジ
ユラ曰く『アーカイブ』という魔法らしい
そして次々に映し出されていく写真

「毒蛇を使う魔導士『コブラ』」

「悪そうな顔してんなく、このつり目野郎」

「お前も似たようなもんじゃねえか！」

確かに、ナツの発言に対するツツコミとしては適切だ

それにしても、コブラ、と呼ばれた男に巻き付くようにしている紫
の大蛇……あれが毒蛇か、いきなり不気味な奴だな

「その名からしてスピード系の魔法を使うと思われる『レーザー』」
「ダサイ顔、かつこいと思ってるのかこのモヒカン」
「モヒカンって……」

何故かルーシイがツツコミをしてきたがどう見てもそうだろう
金のモヒカン、グラサン、顎の辺りの妙な金属。まあ、不気味とい
うよりバカみたいな顔だな

「大金を積みば1人で軍を潰すという、天眼のホットアイ」

「お金のため？」

「下劣な……」

いや、それもそうだけどまず見た目に驚こうよ！なにあの顔、ポリ
ゴンか！？髪もなんかとんでもない質感だし、体格は……なに？
梨を逆さまにしたみたいな上から下にかけて細くなってる奇妙な
体格はなに！？

「心を覗けるといふ女『エンジェル』」

天使って言うか、腹黒女？　なんか顔を見た瞬間に殴りたくなるよ
うな感じがする……
てかなんでポーズを決めてんの？なんかの記念撮影でもしてたの？
にしても最初のコブラいがい奇妙な奴しか出てこないな……

「この男は情報が少ないんだけど……『ミッドナイト』と呼ばれて
いる」

「真夜中？　妙な名前だな」

エルザの言う通り、妙な名前だ

でもやっとならば奴じゃなくてまともそうなのが出てきたよ！

何故に寝てるのかは謎だが…

「そして、奴等の司令塔。『ブレイン』」

うわ、またバカっぽい奴きたよ……なにあの模様だらけの顔、頭悪いんですか？ ってイメージを持つよ？

てかなんで裸にコート……

六魔將軍……案外僕だけでも平気な気がしてきた

「それぞれがたった1人で1つのギルドを潰すほどの魔力を持つ。だから僕達は数的有利を利用するんだ」

「あのく、私は頭数に入れないでほしいんだけど……」

「私も戦うのは苦手です」

「気にするなウエンデイ、僕が守ってあげるから」

「は、はい……」

「……」

「勿論、シユウもだよ？」

「……」

「あなた、2人に好かれてるのね……」

「まあね」

どっちも可愛い妹だみたいなものだし。僕も2人とも大好きだしね

「安心したまえ、我々の作戦は戦闘だけにあらず。奴等の拠点を見つけてくれればいい」

「拠点？」

「ああ、そつだ。今はまだ特定していないが樹海には奴等の仮設拠点があると推測されるんだ」

「もし可能なら、奴等全員を拠点に集めてほしい」

「どうやって？」

「「切り刻んで（殴って）に決まってんだろ？（ー！）」
ナツとかぶった

「おお！お前もそう思うか！」

「無論、ウエンディ達を傷つける前にこの世から消し去る」

「クライスって、意外に危ない人？」

「優しい人ですよ？」

「ああ、そうなんだ……」

意外に僕とナツ、ウエンディとルーシィは気が合うらしい
そんな会話をしている横でエルザが呟くように言う

「集めてどうするのだ？」

それに対し、一夜が短い指で天を指した

「我がギルドが大陸に誇る伝馬、その名も『クリスティーナ』で拠
点もろとも葬り去る」

ほう、気持ち悪いおっさんにしてはよい案だ…

それだけのものがあるなら最低限の戦いだけでこの作戦を終えられる

「てか、人間相手にそこまでやる？」

「そうゆう相手なのだ」

「うっ、はいいい！」

さすが、威厳があるなこのおっさん。ルーシィを怖がらせるのはや
めた方がいいと思うけど…

「よいか！敵1人に対して必ず2人以上で殺るのだ」

その言葉に全員が頷く。ただし

「うわああゝ、そんな物騒な」

「困りますっ」

2人、情けない声を出しているのがいたが…

今までの会話を聞いていたのか、いや聞いていなかったであろうナツは早々に出入しやすくなったドアのあった場所から飛び出していた

たぶんドアがあったら突き破っていっただろう

そんなナツの行動に呆れていたメンバーだが、やがて負けてられな
いと走っていった

「ほら、ウエンディにクライスにシュウ！私たちも行くわよ！」

「待ってよシャルル」

「……………ん、まって」

ウエンディ達もそれに習って（というか青い猫をふりきろうと急が
したシャルルが強引に）走っていった

普通なら、僕もすぐに走り出すのだが……

スツ、と僕は首にかかっている翼に手をかざし魔力をこめる。それ
に翼が反応し、薄く輝き出した

『ウエンディ、聞こえるか？』

『あれ？クライスさん、一緒に来てたんじゃなかったんですか？』

『まあ、なんだ。野暮用ができてな、僕は少し遅れるから何かあつ
たらできるだけ隠れるようにしてくれ。

大丈夫、すぐに行くから』

『判りました。早く来て下さいね』
『うん』

ネットレスから手を離し念話を終了する
さて……

「む、クライス殿？ まだとどまっておられたのですか？」

「メェーン、置いて行かれた、というところですかな？」

「別に置いていかれたわけじゃないんだけど、そうゆうお二人さんもまだいたんだな？」

「うむ。しかしいつまでもこうしているわけにもゆくまい。我々も行くぞう」

「その前に、ジユラさん（キラリ）」

ジユラの言葉を遮るように一夜が言った。相変わらずポーズを決めていが

その目には、どこか怪しげな光があった

「あなたは有名な聖天大魔導の1人、と聞いていますが…」

「いかにも」

「あんたってなんかすごい人だったのか？」

「まあ、聖天の称号は評議会が決めるもので儂などは末席。

同じ称号でも、マスターマカロフなどと比べられたら、天と地ほどのさがある」

「ふん」

「ほう…それを聞いて安心しました。マカロフと同じ実力をもっていたらどうしようかと思いました」

ポン、という音がしたかと思うと一夜がなにか怪しげな瓶を開けていた

同時に周囲に立ち込める奇怪な香り
その香りにジユラが驚愕をその顔に浮かべながら膝をつく

「これは、相手の戦意を喪失させる魔法の香り（パルファム）…」

「一夜殿…っ！これはいつたい……」

「ピエエレピエエレ…」

一夜の形をした何かが、人ならざる者の声を発しながらまた瓶を開ける

強い痛覚を刺激するその香り、だが、それに苦悶するものはいなかった

「……？ なぜ、倒れない」

「どうした？」

「何故だ！ これは吸い込んだ相手の痛覚を刺激する香りのはず！
なぜ貴様らは倒れない！」

「ああ、僕が魔法の効力を無視して喰らったからだよ」

僕の左の目には、朱の十字が輝いている

こんどは一夜の姿をした何かが驚愕をその顔に浮かべた

「くっ、どうやら厄介なのはジユラの方ではなく貴様の方だったよ
うだな」

「クライス殿！一夜殿！何をいつ」

「ジエミニ、いったん戻れ」

突如響く、女の声。目線だけ動かすと気影から白い服を着た女が出てくるところだった

髪から服まで完全に白い、まるで天使のような見た目をしたその女は…

オラシオンセイイス
「六魔將軍、エンジェルか」

「ご名答、だゾ。まさかジユラ以外にも厄介な奴がいるなんて思っ
てなかったから油断したゾ」

心を覗ける女、エンジェル。僕は左の目を閉じ、朱の五芒星が浮か
んだ右目で彼女を見据える

エンジェル、という女自体は魔力の高い魔導師……魔力を持つ鍵を
持っているだけだ

ただ、その鍵……どうやらただの鍵ではないみたいだ

僕の見た情報によれば【異界との道を開き、こちらの世界に異界の
住人である精霊を呼び出せる鍵】のようだ

エンジェルの横に浮遊している人形のような生き物、さっきまで一
夜の姿をしていたが今は本来の、精霊の姿をしている

召喚者の魔力を糧にしているため、その力は理解できた

「なぜ、気づいた？」

「その精霊の能力、触れた相手の見た目、思考、考えていたことな
どをすべてコピーできる。違うか？」

「っ…………その目が怪しいゾ」

「さすが最大勢力の一員、察しがいい」

右手を左手に滑らせる。次の瞬間、右手に掴まれていたのは黒緑の
毒を纏いし漆黒の刀：毒刀【腐】

死の毒を纏う刀から垂れ流された毒が、大地を浅く殺していく

「聖天大魔導のジユラ、そしてこの僕。さて、エンジェル？ この
状況、どう回避する？」

「逃げるゾ」

「させるとでも思ってるのか？思考を読み取られたんじゃ作戦を知

られてるだろうしな」

「うむ。そうでなくても今回の作戦の目的はオラシオンセイスの討伐、1人でいるなら今こそが期。ここで討たせてもらおう」

「でも、逃げるゾ」

「だから」

「逃げれないってか？ 残念だけどできるんだよね」

「なっ……」

ガキンツ！

それは、僕だった。黒い着物、黒い刀。常人なら認知不可能な動き僕に今攻撃してきたのは、紛れもない僕自身だった

「これはいいな、今までコピーしたなかで一番強い気がするよ」

「いつの間に、降れないとコピーできないはずだろ？」

「お前があの小さいガキにヘラヘラしてた時にコピーさせてもらったゾ」

僕よ、なにしてたんだ！バカだろ！いつ何時も警戒を怠らないなんて基礎の基礎だ……

バカッぽい奴等の集団だと思って甘く見てたか……

「じゃあ、私は行くゾ」

「待て！まだ俺がいる！」

「残念」

『僕』が毒刀を取りだしそれを振り撒く
その属性は、溶解

「ちっ、」

瞬時にジユラを庇うためそのから後方に跳躍、ジユラの腕を掴みさらには後退する

その一瞬、それだけでもう誰もいなかった

「さすが、僕ってとこかな……」

「すまない、クライス殿。僕のせいで……」

「いや、もとはといえば僕が油断してたからいけないかったんだ。あんたは一夜を探してくれ、たぶん気絶でもしてるはずだ」

「心得た。クライス殿は皆を追うのか？」

「ああ、あのエンジェルとかいう女が僕をコピーしたからな……下手するとヤバイことになる」

眼前に広がる森を見据える。ぐずぐずしている暇はない

ジユラに一夜のことを任せ、僕は地面を碎きながら全力で走り出した

六魔將軍　ーオラシオンセイサー（後書き）

ご感想お待ちしています。

欲を言えば励ましのお言葉も……

と、突然ですがアンケートです！

正直クライスの戦いを見直してみたら……刀や体術しか使ってない

！　ことに気がつきました。

というわけでクライスの魔法を募集します！

クライスには目があるので魔法をコピーすることも可能なので風に
限らなくても構いません！

もしくは武器でもいいです。こちらは刃物なら効果や能力や見た目
は制限なしです！

よろしくお願いします！

弱い俺と弱い僕（前書き）

今回は展開が早めです……

アニメだと自然なんですけど、小説で一気に20人以上のキャラを、しかも戦闘させながら動かすなんて、いくらなんでも無理！

と、言うわけで多少無理矢理展開させましたので読みにくかったらすいません

弱い俺と弱い僕

「ウエンディ？　どうかしたの？」

「……え？」

シャルルの声に気がついて顔をあげる。ウエンディはいつのまにか立ち止まっていたらしい

ネックレスを掴んでいるのは先ほどクライスから思念通がきたから、そちらに意識を集中させていたから立ち止まったらしい

「あ、今クライスさんから少し遅れるって連絡が来たの」

「少し遅れる？　そういえばついて来てないわね」

「……おにいちゃん、どうしたの？」

「うーん、野暮用ができたって言ってたけど、すぐに追い付くって言ってたから大丈夫だと思う」

「そう、なら行きましょう。他のギルドはみんな行っちゃったわよ？」

「あ、本当だ。いそぎましょ」

「……ん」

荒い崖を降りると、怪しげな森が広がっていた。ウエンディにしてみれば少し怖い場所ではあったが

シャルルとシュウがいたのであまり気にならなかった。しばらく走り続けると前に立ち止まっている他のギルドメンバーの姿

全員が上を見上げていたので、それにつられるようにウエンディ達も空を見上げる

空に浮かんでいたのは、巨大な翼のはえた馬を模した魔導爆撃艇【クリステイナーナ】。その姿を皆は感嘆の表情で見上げる

ウエンディ達も最後尾にいたルーシィ、ハッピーと一緒にそれを見

上げる

「うわゝ、凄いですね」

「ええ、さすがブルーペガサスの誇る天馬ね」

「おっきいね」

「あれなら、ちよつとは期待できそうね」

「……………なに、あれ？」

シユウは理解していないようだが…………。

だが、天馬の登場で皆の士気も上がったようで最初のようなピリピリした雰囲気はなくなっていた

クライスが不在ということもあり、不安に思っていたウエンディもその優雅に空を進む天馬に少なからず勇気をもたらったようだ

「よし、皆で手分けをして奴等の拠点を探すぞ！」

「ん？ なんのことだ！」

「オメエなあ……………」

「あはは、ナツさん作戦聞いてなかったんですね」

「みたいね」

前方から聞こえてきた会話に苦笑しながらそんな会話をしていたときいきなり、轟音と黒煙を吐きながらクリスティーナが爆発した

「え！？」

「なっ、クリスティーナが！？」

さらに爆発は連鎖してクリスティーナがあつというまに黒煙に包まれながら空から大地へと墜ちていく

そして、爆弾でも落としたかのような火炎と共にクリスティーナが大爆発を起こす。

どうなっている、そんなリオンの眩きが爆発にかきけされたウエンディはシュウを抱きつくように庇っている。だが、シュウはクリスティーナの爆発をなぜか睨むような視線を向けていた数瞬を置き、ナツとグレイも黒煙を睨む

「おい」

「ああ、誰か来たぞ！ 氣い抜くなよ！」

『……………っ』

グレイの言葉に、全員が氣を引き締めた。まあ、ウエンディは……

「ひえええ〜」

「ウエンディ！」

「……………ん、ねこさんも隠れて」

「え？ なによシュウまで？」

シュウは右足を少し引き、重心を低くする。クライスに習った【いつでも反応できる姿勢】だ

油断なく構える皆の前に、黒煙から歩み出てくる影

全員が怪しげな格好をしていて、ただならぬ魔力を感じる

「こいつらが、オラシオンセイブス六魔將軍」

ルーシイがそう呟くがそれにたいする反応は誰からもこない

まあ、敵を目の前にそんなことを呟く暇など本来はないはずなのだが……

そんな連合軍の姿に、刺青だらけの男　ブレインは今にもため息をつきそうな表情をしていた

「蛆どもが、群がりおって……………」

「君達の考えはお見とうしだゾ」

「一夜もやつつけたゾ！」

「後の2人もしばらくは来れないよ」

「バカな！？ 一夜様が！？」

一夜、連合軍の青い天馬以外には変なおっさんとか映っていないか
つただろうがあれでも一応実力をもつ魔導師
それを聞き、連合軍に動揺がはしる

「クク、動揺しているな。聞こえるぞ」

「仕事は速い方がいい。それにはあんたら、邪魔なんだよ」

「お金は人を強くする、ですね！いいことを教えましょう。世の中
は金がすべて、そして」

『お前は黙ってるホットアイ』

なにやらコントのような会話をしているオラシオンセイス ー1人
寝ているし だが、それにも油断しない

「まさか、そちらから現れるとはな」

エルザが言う。両者の間に流れる緊張

だが、そんなもの知ったこっちゃないとばかりにナツとグレイが飛
び出した

「やれ」

「了解」

短いやり取りの中レーザーと呼ばれる男の姿が消える
超高速で移動する彼に反応できずにナツとグレイが蹴り飛ばされる

さらに、それに対し叫んだルーシィが何故か2人になり一方が攻撃されている

戦闘の幕が開き、それに乗じて走り出したリオンとシェリーもホットアイによって軟化された地面に引きずり込まれる

「僕はエンジェルを！」

「ずるいや！」

「俺は頭を殺るっ」

走り出すブルーペガサスのメンバーだが瞬時に移動してきたレーザーがそれを阻止する

レーザーには何もダメージを与えられていないにも関わらずレン、イヴ、ヒビキと一瞬で沈黙する

「『換装』！」

「クク、聞こえるぞ」

換装により姿を変えたエルザによって大量の剣がコブラに降り注ぐだが、コブラは怪しげな笑みを浮かべたまま体を揺らした程度でそれを避ける

太刀筋が読まれていることに気づくエルザ、その背後にレーザーが迫り蹴りを放つ

ギリギリで回避し、さらに姿を変えて斬りかかる。だが

「聞こえるぞ、ティターニア。次の動きが！」

「（やはり、読まれているっ）」

エルザの思考、だがそれすらコブラは聞き取る

「読まれている？ ちげえだろ？ 聞こえるっつってんだよ」

「……っ」

激しい攻防が続いたが、ナツはレーザーに、グレイはジェミニに、リオンとシエリーはホットアイに、さらにエルザすらコブラの操る毒蛇に噛まれ戦闘不能に陥った地に這いつくばる連合軍をブレインは見下しながら呟く

「ゴミ共め、まとめて消え去るがよい」

不気味な魔力が大地を揺るがす。動けないメンバーは絶望しながらそれを見ていた
しかし、ブレイン、オラシオンセイスは知らなかった。まだ、倒れていない最強がいることを

「がっ!?!」

ブレインの顔が歪む。それも、物理的な力で歪まされてさらにはそのまま何メートルも吹き飛んでいくなにが起こったのかすら理解できていないオラシオンセイスのど真ん中に降り立つ小さな影 シュウだ

「……あれは、あぶない。おねえちゃんにあたる」

「な、なんだこのガキ!」

「……あなたたちも、あぶない」

「うおっ!?!」

空気を揺るがす回し蹴りがレーザーの顔面ギリギリを通りすぎる身長の何倍も飛び上がったシュウの回し蹴り、その早さは連合軍の誰よりも速かったレーザーを凌駕していた

「1」のっ！」
「……ん」

すぐさま反撃するレーザーだがシュウは一瞬で後方に跳躍しそれを避けた

「ぬう、なんだあのガキは」

所々に切り傷を刻んだブレインが僅かにふらつきながら戻ってきていた
ユラリ、と無表情でたたずむシュウを睨み付け自らがもつ不気味な杖を向けた

「ダーククロンド！」

不気味な魔力がシュウに殺到し小さな体を包み込み爆発を起こす

「シュウちゃん！」

その光景を見ていたウエンディが咄嗟に岩影から身を乗り出した
その声に、ついさつき不意をつかれ蹴り飛ばされたブレインは身を固くするがウエンディの姿を見て別の意味で驚愕した

「ウエンディ……」

「え？」

ブレインの眩きが聞こえたのか、ウエンディはビクッと動きを止める

「なんだブレイン？ 知り合いか？」

「ブレイン、そっち系か……」

「ドン引きだゾ……」

「違う！ ……んんっ、ウエンディ、天空の巫女だ」

「な、なに、それ……」

妙な会話が混じったが、ウエンディは自分が標的にされたことを感じ取って後ずさる

ニヤリと不気味に笑うブレインが杖をウエンディに向けながら言う

「こんなところで会えるとは……。これはいいものを拾った。来い！」

「え？ きゃああー！」

『ウエンディ！』

ブレインの杖から魔力で作られた腕が飛び出しウエンディを連れ去る助けようとしたナツ達はホットアイによって地面ごと吹き飛ばされシャルルもハッピーもウエンディには届かない

悲鳴をあげるウエンディには誰も届かない、はずだった

「え？」

ストンツ、とまるで小枝でも斬るように魔力の腕が切り裂かれた

落下するはずのウエンディはなにかに抱き抱えられている

ウエンディを助け出したのは……

「誰だ、うぬは……？」

左右非対称のツインテール、陶器のように白い肌、露出度の高い服装、宝石のように綺麗な蒼い双眸

人形のように整った容姿にも関わらずその細い手に持っているのは巨大な刃がついた武骨な筒のような武器

「しゅ、シユウちゃん……」

「大丈夫、お姉ちゃん……？」

「うん、ありがとう。シユウちゃんも、無事でよかった」

その、助けられた姫と助けた騎士のような構図　どちらも少女だが　一瞬言葉を失ったオラシオンセイス

その間にシユウはウエンディを岩影に隠れるように言って向き直る

「許さない。全員、たおす……！」

ガチャンツ、と筒　BLACK SHOOTERをオラシオンセイスに向ける

形状が変化してバズーカのようになったそれに、膨大な魔力が集中していく。そして

空間を揺るがすような衝撃と共に放たれた蒼い砲撃がオラシオンセイスに直撃した

「す、すごいねシユウちゃん。1人で全員たおしちゃった……」

「さすが、と言ったところね。クライスなんかいらなかったんじゃないかしら？」

「……………」

「シユウちゃん？」

シユウの勝利に対して喜んでいたウエンディ達だったがシユウの表情は険しいままだった

無表情、ただどウエンディにはその顔に浮かぶ困惑の色が見えた

爆煙が晴れていくなか、誰かがその中から歩みだしてきていた。シユウが全員たおした、と思っていたウエンディにはそれだけで

十分驚愕に値したがその人物を見て言葉を失う。黒い着物、黒い髪、

黒い目、黒い刀　クライスだった

「お兄ちゃん、なんで……」

「ああ？　まあ、何となくだよ。暇潰しかな？　ほら、いつもみたいに鍛練でも………しようよっ」

地面が割れた、そう思った瞬間には漆黒の刃はシュウを襲っていた
手加減などない、全力の一撃
とつさに防御はしたが音速を越えたその斬撃がシュウの皮膚を切り裂き抜いていた

「……っ」

「手加減なんてしないぞ？　今日は殺すのもありだからね？」

「お兄、ちゃん……」

「クライスさん！なにしてるんですか!？」

「あん？」

あまりにも信じられない光景に耐えかねてか、ウエンディが叫ぶように言った。クライスが今更ながら気づいた、
というように見るが、その目に映っているウエンディはいつもの護る対象としてではなく傷つける対象としてだった

「ウエンディか？　僕って前から思ってたんだけどさ、ウザインだよ、お前」

「……へ？」

一瞬、なにを言われたのかまったくわからずに思わずポカンとした表情をしてしまったが、すぐに伝わってくるその言葉の意味
今までの彼の笑顔の裏にはそんな感情が含まれていたのか、と。優しい言葉も全部嘘だったのか、と

普通に考えればそんな馬鹿げたことは考えることすらなかったかもしれないけど、

目の前でそのクライスに切られて苦しんでいるシユウを見てしまっているのだから、混乱した頭は物事を悪い方向へと考えてしまう

「だから、死んじやってよ？」

ウエンディには到底反応することのできない速さで接近したクライスが漆黒の刃を振り上げていた

シャルルが何かを叫ぶが、死を目の前にしてウエンディには絶望以外のなにも感じられはしなかった

見開いたその瞳から涙が流れるが、無情にも刃は降り下ろされた

「貴様が死ね」

空気の層をいくつも貫く爆音とともにクライスが頭から爪先にかけて、完全に一刀両断された

さらに瞬きする時間すら与えずにもものすごい勢いで鈍器で何かを引きちぎったような音が響き

クライスの腹部が消失し、四分割されたその体がオラシオンセイスの方へとすっ飛んでいった

「クライス……さん？」

クライスを殺される、その事実から解放されたウエンディは一瞬安堵するが同時にクライスが殺されたことに気づき無意識に悲鳴をあげようと大きく息を吸い込んだ。だが、頭の上から降ってきた声にそのまま静止した

「クソが、俺がいないからってふざけたことしやがった。おい、大丈夫か？」

「えっ、……………え！？ く、クライスさん！？」

クライスを殺したのは、クライス本人だったのだ。だが、殺されたほうと違ってこちらは泣きそうな表情で大丈夫かと言ってきた座り込んでいる自分を、泣いている自分を安心させるように心配そうな目で見つめて腕や顔などを触って怪我がないか確かめている

「よかった、怪我はないみたいだな。悪いな、俺が遅れちゃったせいで……………」

「クライス、さん……………ですよね？」

「ん？ ああ、遅れるっていつたる？」

「じゃあ、さっきのは……………」

「オラシオンセイスのエンジェルって野郎が作った偽者……………っておい！ウエンディ！？」

ガクンツ、と体から力が抜けて辛うじて座っていた体制を崩して倒れ込みそうになった

だけど、いつもの少し冷たくて大きな手がウエンディを支えていたそうだったんだ、あれは偽者でこっちが本物のクライスさんなんだという安心感から力が抜けたのだ

「よかった……」

「ああ、間に合ってよかった シュウ？」

クライスが一瞬ウエンディから視線を外した。その視線の先にいたのは決して少なくない出血をしてうずくまるシュウがいた

そう、さっきのクライスが偽者でもそれにシュウが斬られたという事実が覆る訳ではないのだ

世界が一瞬歪んだ、そんなことを思った瞬間ウエンディとクライスはシュウの横へと移動していた

「お兄ちゃん……？」

「ああ、本物の方のお兄ちゃんだ。さっきのは偽者だ」

「うん。判ってる……ケホッケホッ！」

「シュウ！ウエンディ、治せるか？ 結構重症だが……」

「はい、大丈夫です。でも、クライスさん……」

「判ってる」

音もなく立ち上がるクライス。膨大な殺気を含んだ視線がオラシオンセイスへと向けられて彼らがわずかにたじろいだ

それを睨みながら、大地が震えるような殺気を放ったままクライスはゆっくりと歩き出した

「俺が全員、八つ裂きにしてやる」

・
・
・
・
・

殺気、殺意、そんなものが今にも爆発しそうなくらい俺の中で渦巻いていた。いや、すでに『俺』になっている以上少し漏れてるけど右目で魔力を探しながら全力で走ってここを見つけると、ちょうどウエンディが偽者に切られそうになっているのが見えたぎりぎりウエンディを偽者から護ることができて最初は間に合ったと思っていたけど、間に合ってなかった

「たく、俺ってなにかとすぐに約束やぶっちゃうな……」

ヒュン、

毒刀を一振り、撒き散らされた毒が地面に当たり焼けるように溶けていく

「まだいたのか、」

「ブレイン、気を付ける。あいつたぶん一番強いゾ」

「確かに、俺が見てもあいつの速さは尋常じゃなかった」

「てか、エンジェルお前あいつのことコピーしてあんなんなんか教えるよ。恨みの言葉しか聞こえてこねえぞ、あいつ」

「さつき殺られたからしばらく出せないゾ」

「ちっ、使えねえ……」

オラシオンセイスが何か言っているようだが、俺の知ったことからシユウに怪我を負わせた罪は……

「重いからよお！」

ほぼ音速に近い勢いで接近した俺に反応できたのは、レーザーくら

いだろうか？

確かに、ヒビキが言っていた通りそこそこに速さには自信はあるよ
うだな

「お、速いなお前！速いことはいいいことだ！」

黙視できない勢いの中、さらに加速が加わった拳が俺の顔面に叩き
つけられる寸前にわずかに頭を振って避ける

「速いことはいいいこと、か？」

「ああ、だがお前は俺にはかなわない。俺は誰よりも速」

「じゃあ、貴様はダメだな」

回し蹴りが食い込んだ。悲鳴すらあげる暇もなく遙か彼方に飛んで
いくレーザーを後目に俺はエンジェルに向き直った

あの気色悪い笑みを浮かべてはいたが、わずかに焦りの色が見える

「貴様が、シユウを傷つけたのは……」

「正確にはジエミニだゾ」

「知るか」

毒の刃が翻り、エンジェルの首を撥ね飛ばした　　と思っただが

その間につり目の男　　確かコブラだったか？　　が割り込んで毒

刀をその手で白刃取りのように止めていた

「聞こえるぞ。いくら動きが速くても俺には無意味だ」

「聞こえる？……読心術か、いや違うな？」

「ああ、聞こえるつつつてんだからな」

コブラの体に巻き付くようにしていた毒蛇が鋭い歯の並んだ口を開く

身を引くことで交わそうとしたが、ニヤリとコブラが笑う

「聞こえてるぞ」

毒蛇が俺に食らい付いた。ふむ、やはり聞こえたか……

「キュベリオスの毒はお前をゆっくりと蝕む、ティターニアと同じ道を歩むんだな」

「……終わったならどけ」

「はっ？」

毒がなんだ、今の俺にそんなくたらないことに構ってる暇なんざない奇妙な色に色付いていく左腕を無視してコブラを蹴った勢いそのままにエンジェルを蹴ってやるうとしたが土の塊に邪魔された

「確かにエンジェルが言っていた通り強い、ですね！しかし、金持ちの私にはかなわない、ですね！」

「ホットアイ、助かったゾ」

はぁ、とため息をついた。すぐに死ぬ奴が少し延命したくらいで何言ってやがるんだか……

次は邪魔させない、毒刀を逆手に構え直し姿勢を低くしながら飛び出し

「クライスさん！」

「クライス！」

突如響いたウエンディとシャルルの悲鳴のような声を聞き急激に体を反転させる

無理矢理な反転のせいで体に激痛がはしるがそんなことはどうでも

いい。ウエンディが、ブレインによって連れ去られようとしていた！

「あの野郎っ！」

ウエンディを掴んでいる魔力で作られた腕、まずはそれを切り落とす。と、振り上げた腕が思いきり蹴られて折れた

「ブレインがなんであの小娘に執着するのは知らないが、邪魔はさせないぞ！」

「邪魔だあ！」

すでに質量を持った殺気をレーザーにぶつけ、怯んだ一瞬でウエンディへと跳せる

「ウエンディ！」

「あっ、クライスさん！」

肩の間接が破壊されていたが毒された左腕を差し出す訳にもいかず無理矢理右腕を伸ばす

あと少し、腕を伸ばせばウエンディの腕を掴める。そんなところで

俺の腕が消失した

同時に吹き飛ばされる俺の体。咄嗟に左腕から刀を生やし地面に突き立てるようにして受け身をとるが、さらに追撃

下げた頭の上を漆黒の刃が通りすぎる。俺を、不意打ちとはいえここまで圧倒するのは誰だ？ 顔を上げ、相手を見据えることで

その疑問は一瞬で消え去った。……俺自身だ

ウエンディは、ブレインの杖の中へと吸い込まれ消えてしまった

「クク、残念だったね〜」

「ちいつ、ブレインー!!」

目の前の偽者を無視してブレインに向かって走る

「いいのか？ うぬの仲間が死ぬぞ」

「なっ!？」

そして、放たれる魔力。それは確実にシュウを、他のギルドのやつらを狙っていた

連合軍のやつらはどうでもいい、だが……

「ずああああああああああああああっ!!!!」

ぎりぎりでも回り込み風の魔法で強化した斬撃をブレインの魔法にぶつける

だが、足りない

右腕は肩骨破壊、左腕は毒に犯され度重なる強制反転のせいで俺の超再生が間に合わなくなっていた

シュウはウエンデイのお陰か傷は癒えていたがまだ目を覚ましていなかった。彼女だけでも、と毒刀を盾のように構えた瞬間

「岩結壁!」

誰か、男の声が響いたと思うと岩が変形し魔力の爆撃を防いでいたあれを防ぐほどの魔力……ジュラカ

「クライス殿、無事か!」

「……ああ」

「よかった。だが、皆は無事ではないようだな クライス殿?」

放心したような俺に不信感を抱いたのか、近づいてきたジユラが俺をジッと見た
そして、気づいた

「クライス殿、その腕は……！」

肘から下が切り落とされたようになっていく俺の腕。だが、驚いているジユラも、ボタバタと血の流れ落ちている
右腕も無視して俺は膝から崩れ落ちた

なんで、こうなんだ

いつもいつも、大事なときに俺は誰も守れない。怒りに任せオラシオンセイスを殺そうとなんてしてないでさっさと逃げればよかった
ウエンディ達を護るためについてきたのに、一時の感情に任せて暴れたせいでウエンディは連れ去られてしまった

情けない……

情けなすぎて泣けてくる。実際に、俺は泣いていた。バカな自分を哀れんで、女の子1人護れない自分を哀れんで……

「アアああアアああアアアアああアア

ツツツ

！！！！！！！！」

その獅子孔だけで空間が揺さぶられ、八つ当たりで降り下ろした拳は大地を叩き割った

拳が砕けた

知るか

そんな程度で弱い俺が強くなれる訳じゃない。力があっても、俺は弱い

俺は昔となんにも変わっちゃいないんだ。親父はこう言ってた

『詩織、お前は強い。力と技だけなら誰もお前にはかなわないだろ
うな。でもな……』

そんなものは強さじゃない

その通りだよ、親父。俺は弱いんだ。うん。どんな力も、うまく使
えば誰かを守り、バカが使えばそれは力じゃない
うずくまりながら泣いていた俺に、誰かが触れた

「……シャルル、か？」

「ええ」

「……ごめん。俺は弱いんだよ。だから、誰も護れない」

「そんなことないわよ、シユウもウエンデイも、あんたがいなかつ
たら死んでたわよ」

「でも、俺がもう少し強ければこんなことにはならなかった」

「ああもう！なんで弱気なの！あんたがそんなんじゃないやウエンデイを
誰が助けるのよ！？」

もちろん、俺だ

ああ、そうか。そんなことに気がつかなかった俺が情けなすぎて、
なんか、もう可笑しくなってきた

ハハハ、と笑う

そうだよな、と涙を拭いながら立ち上がる

まったく俺は、いや、僕は本当にバカだよ。シャルルに言われなき
やわからないなんて

「バカな自分を慰めてる暇があったら、1秒でも早くウエンデイを
助けに行かなきゃね」

「当たり前じゃない。ウエンデイだってあんたが来てくれることを
信じてるはずよ」

そつだな、と僕はすでにいなくなつてゐるオラシオンセイイスが
いるであらう森を睨み付けた
待つてろ、ウエインデイ。すぐに僕が……

「助け出してやるから」

弱い俺と弱い僕（後書き）

アンケートは随時募集中です！

みなさまのアイデア、待っています！

助けるために（前書き）

更新、遅くなってすみません。

今回は語りが多めです。

助けるために

しばらくして、気絶していたメンバーたちが疎らに意識を取り戻し始めていた。

『僕』は、その間に右腕を再生させるために目を閉じて集中していたから気づかなかったがいつの間にかシユウも目を覚ましていて僕のことを無表情に、でもシユウにしては明確に心配そうに見つめていたので、できるだけ優しい笑みを浮かべて撫でる。

シユウは一瞬猫がじゃれるような仕草で安心したようなになるが、すぐに悲しげに頭を下げてしまった。

「……………ごめんなさい。おねえちゃんを守れなかった……………」

「シユウが謝る必要なんかないよ。僕が遅れたからいけなかったんだから」

「……………」

それでもやはり悲しそうな表情をしながら顔を伏せてしまう。

シユウの黒いワンピースの襟元からわずかにその白い肌が覗き、そこにはうつすらと赤い線が引かれていた。

偽者の僕にやられた傷……………こんな怪我を負ってまで守ろうとしてくれたんだ、シユウは胸を張っていいくらいなのにな……………。

「おい、あいつらどこ行った!」

最後に意識を取り戻したらしいナツがそんなことを叫んでいた。

そういえば、あいつの横にいた青いのがいなくなっているな……………ウエンディと一緒に連れ去られたか。

そんなことを考えていると、苛立ちを隠さない足取りでナツが近づいてきた。

「あいつらどこいったか知らねえか？ ハッピーとウェンディが…」
「さらわれたのは知ってるよ。僕だって今すぐ助けにいきたい」
「ならなんで行かねえんだよ！」
「……んー」

顎で指す。

その先には一夜が放った痛み止の香り（パルファム）のなかにながら苦しんでいるエルザの姿があった。

ナツが血相を変えて走っていく。

僕もまだ足元がおぼつかないシユウをおんぶしてエルザに近寄る。近くで見ると、エルザは予想以上に重症だと言うことがわかった。紫の毒が皮膚を変色させ、ゆっくりエルザの命を犯している。

「エルザ！」

「しっかりしてエルザ！」

いや、毒に犯されてんだからしっかりもなにもないだろ……。

「蛇に噛まれたところから毒が回ってるのね……」

「……クライス、そういえばあんたも毒蛇に噛まれてなかった？」

「ん？ うん、噛まれたよ？」

シャルルに言われて左の袖をたくしあげた。

そこには、エルザと同じく紫に変色した腕がある。しかもエルザより傷は深く既に毒は肩口まで達していた。

「え！？ クライスも噛まれてたの？」

「平気……なのか……？」

エルザとルーシィが驚いたように聞いてくる。

「いや、身体中に回ったら僕でも死ぬよ？」

「なら……」

「だから、こっつする」

人差し指を左肩に滑らせると、なんの前触れもなく左腕が僕の体を離れて落下する。

っ！、と息を飲む音が聞こえた。

「な、なにしてるんだよお前！」

ナツが叫ぶ。

「心配するなよ、僕は普通の人間じゃないから」

「……おにいちゃんっ」

「クライス、あんたっ！」

「だから心配するなっ……」

心配するシュウを撫で、シャルルやナツ達に苦笑いをしながら、左目に朱の十字を灯す。

同時に薄く開いた口に一夜が放った痛み止の香りが吸い込まれる。

本来なら痛み止の効果しか持たない魔力。

でもこの目は、魔力を自身の力に還元するのだ。

取り入れた魔力が一瞬で失われた、が、同時に左腕が瞬時に再生する。またも、回りの啞然とする雰囲気を感じた。

僕は困ったように笑いながら切り落とした左腕を拾い、その腕の力を新しく再生した腕に移す。

五指に封じられた刀だけを移動させたつもりだったが、無条件で紅

い刻印も移動してきた。
なんなんだよ、これは……。
とりあえずシウウとシャルル、他のメンバーに向き直る。

「な？ 平気だろ？」

「……そうよね、あんたはそうゆう人間なのよね……」

「……おにいちゃん、すごい」

『（え？ なにその反応！？）』

シウウとシャルル以外がなんか繋がった気がするのはい気のせいかと、エルザがなにかを思い付いたように顔をあげた。

「……そうか、ルーシィ！」

「え、なに？ エルザ」

「ベルトを借りる」

「え、あ、ちよ……！」

無情にも引き抜かれるベルト、まあ、当たり前だが落下するスカートの。

うん……僕は見てない。

ほら、証拠にブルーペガサスのやつらみたいにルーシィが蹴ってこないし。

その間にルーシィのベルトを腕に巻き付けるエルザ、つておい、まさか……

「エルザ、まさか！」

「ああ、クライスと同じ方法がもっとも最適だ。……切り落とせ」

足を組み、口に布を噛んで毒の回った腕をつき出す。
投げられた剣が軽い音をたてて地面に突き刺さった。あれ、僕なん

かダメな手本見せちゃった？
当然、反発が起こった。

「バカなこといつてんじゃねえよ！」

皆の意見を代表してグレイが叫ぶ。正直言つて僕は『穢滅眼』があるからなんの抵抗もなく腕を切った。だがエルザには超回復もなければ『穢滅眼』もない。そんな普通の人間が腕を切り落としたり、再生などしない、死ぬまで腕のない状態で生きるはめになる。

「頼む、誰か……！」

……まあ、僕が悪いんだし。

「僕がやるよ」

「な、テメエ！ちよつとまてよ！」

「大丈夫だって、僕なら痛みなんか感じる間もなく切り落とせるから」

「そんなこと言つてねえよ！」

叫ぶグレイを無視して、僕は毒刀を取り出す。
刹那、毒刀が凍りついた。

「……やめろ、ほかに方法があるはずだ」

「……あるの？」

「それを探すんだよ！」

「はあ、その間に死んじゃうよ？」

凍りついた毒刀に魔力を込めるとあつという間に氷は溶解しなくな

る。

「グレイ、その男なら本当に痛みなど感じる間もなく切り落とすはずだ。その男に任せておけ」

「リオン、テメエ……」

「俺たちは今、この女を失うわけにはいかない」

「……っ」

グレイが言葉につまる。

このままではエルザが死んでしまうことくらい誰の目にも容易だ。僕は、毒刀の毒を変化させる。

「ちよつと、本当にやるの……?」

「うん」

「ほかに方法が……」

「はいはい、切らなきゃいいんだろ?」

「うん、でもなにか　え?」

ルーシイがキョトンとしたように僕を見た。エルザも、グレイも、全員がだ。

シャルルが声をあげた。

「そうよ、クライスはその剣でウエンディの毒を中和したことがあったのよ。だから切らなくてもいいんじゃない」

「……っ、な、なんか私のアイデンティティーが脅かされてるよう
な……」

「そんなことが、なら」

「違う違う。中和なんかできないよ」

「え?」

本日何回目かのキョトンとした表情。

「ま、言うよりも行うがごとし……すこーし、痛いからね？」

「あ、ああ。　　ッ！」

ドスリ、と毒刀をエルザの肩に突き立てた。

だが血の一滴すら流れずにすぐに引き抜いた。

「な、なにをしたの？」

「応急処置。エルザ、どうだ？」

僕が聞くとエルザは絶句したような表情で毒された腕を動かしていった。

「……応急処置、なのか？　痛みがなくなったぞ……？」

「なによ、中和できたんじゃない？」

「だから違うって、」

驚く2人に説明すべく刀をしまつ。

「今、エルザに流し込んだ毒は神経を麻痺させる毒と血圧を下げて心拍数を低くする毒」

「なに？　ならば今のこの状態は……？」

「うん。神経が麻痺してるから痛みを感じないだけ。心拍数を低くしたのは毒の回り方を遅くするためだよ」

「そうか、だが、これなら私も戦え　　」

「ああ、まてって！」

グラリと傾くエルザの体を支える。

当たり前だが、腕から肩にかけて完全に麻痺しているのだからバランスはとりづらিদらうし、少し歩くだけでも貧血を起こすくらい

血圧が下がっているからいきなり立ち上がったら当然倒れる。
その事を説明してとりあえず座ってもらおう。

「僕ができるのはここまで、ここから先はウエンディがやってくれる」

「ウエンディ、あの小さい子が解毒の魔法を使えるの？」

イヴが驚いたような声を上げた。

「ええ、解毒だけじゃなくて解熱や痛み止、傷の治療も出来るのよ」

「……うん、わたしも治してもらった」

「な、なんか私のアイデンティティーが再び脅かされているような

……」

シャルルとシュウの言葉に一夜が焦ったような声を上げた。

あれのことなど僕の知ったことではないが……。

そこに、シエリーが口を挟んだ。

「でも、治癒の魔法ってロストマジック……失われた魔法じゃなくて？」

「まさか、天空の巫女ってのに関係があるの？」

ルーシィはブレインの言葉を聞いていたらしい。

それにシャルルが頷いた。

「ウエンディは、天空のドラゴンスレイヤー……天竜のウエンディ」

「ついでにシュウもドラゴンスレイヤーだよ？ 蒼き光の竜、アイ

リスのドラゴンスレイヤー」

ドラゴンスレイヤー、この世界ではよほど珍しいのだろうか？

異様に皆が驚いている。

見たところ、ナツもドラゴンスレイヤーみたいだしこの人数のなかで3人もいるんだから特に珍しいとも思えないのけど……。僕からしてみれば魔力を見ることができないという分珍しいと言えるが。

「ドラゴンスレイヤー、しかも2人!？」

「化猫の宿に2人もいたのか? 通りで……」

「あのとき感じた魔力はそのせいだったか……」

次々と飛び交う意見からいうと、やはりドラゴンスレイヤーは珍しい魔導師らしい。

僕はそんな2人と知り合いだったんだね、役得?

つと、そんな話してる場合じゃない。

「話しはあとだ。今はエルザのためにも、ウエンディのためにもさつさと助けに行くことが先決だよ。あのクソどももウエンディになにかをさせるためにさらったみたいだし……一秒でも時間が惜しいんだ。エルザの毒だつて押さえたところで毒が消えたわけじゃないんだ」

「ならば、やることは1つ」

「ウエンディちゃんを助けるんだ」

「ハッピーもね!」

それはどうでもいいや、用途ないし……。

言ったらナツが怒りそうだから言わないけどね。

「うおーし、行くぞー!」

『おっ!』

ナツの掛け声に合わせ皆が手を突き出した。
待ってるよ、ウエンディ。すぐに助け出す！
待ってるよ、オラシオンセイス。この世に生まれてきたことを後悔
させてやる。

僕は、走り出した。

・ ・ ・ ・ ・

ワース樹海の奥

かつて古代人が祈りを捧げたと言われるその場所は、今はオラシオンセイスの隠れ場所となっていた。

「きゃあー！」

「うわあ！」

その暗く冷たい岩床にウエンディとハッピーが投げ出された。
それをブレインが冷たく見下ろす。
ウエンディは痛みに顔を歪めるが、ハッピーがすぐに立ち上がる。

「乱暴するな！女の子なんだぞ！」

「ハッピー……」

ガシッ

勇ましい行動ではあったが所詮は猫、あっさりとブレインに掴まれ地面に叩きつけられて沈黙してしまった。

恐怖でウエンディは無意識に後ずさった。

そんな光景に見向きもせずにいるオラシオンセイスのメンバー。どうやら傷の手当てをしているらしい。

「ちっ、なんなんだあの小僧は！心の声を体の速さが上回ってたぞ
」！
」

コブラが苛立たしげに吐き捨てる。

黒い男に蹴られてぐったりしているキュベリオスを心配そうに撫でてはいたがその目には怒りが灯っていた。

「ああ、あいつこの俺の速さに追い付くどころか遙かに上回ってやがった……。クソッ、俺が速さで敗けただと……！」

己の速さに絶対の自信をもつレーサー、だからこそ、黒い少年に『速さ』で負けたことがよほど気に入らないらしく、相当イラついている。

「確かに、あの男は油断ならないゾ。ジェミニでもほとんど考えていることもどんな力を持っているかもわからないらしいゾ」

ポンッ、と肩の辺りに浮いていたジェミニを消しながらエンジェルが言う。

本来ならほとんどの情報を読み取ることができるジェミニ二の能力をもつても、黒い男のことはわからずじまいらしい。

そんなメンバーの苛立ちなど気にする様子もなく、ブレインは不気味な笑みをその顔に張り付けたまま、ウエンディを見下ろしていた。そういえば、と、レーサーが怒りを紛らわすように呟く。

「ブレイン、この娘はなんなんだ？ 今回の俺たちの目標はニルヴァーナを手に入れることだろ。そんな小娘をさらってきてどうする？」

「ニルヴァーナに関係してるのか？ そうは見えないが……」

コブラも、苛立たしげに聞く。

「そうか、売ってお金にするつもり、ですね！」

「うるせえな、ホットアイ……。今イラついてんだから下らねえ」と言っんじゃねえよ」

「金さえあれば愛でも買える、ですね！」

「ちっ、ああそうかい……」

コブラは、自分の話を聞かないホットアイに見下すような視線を向けるが、無駄だと考え直し、もとの場所に戻った。

その会話に、ブレインは、やはり不気味な笑みを浮かべたまま答える。

「こやつは天空魔法…… 治癒魔法の使い手だ」

なっ、とブレイン（と寝ているミッドナイト）以外のメンバーが驚いたような声をあげた。

「天空魔法、ロストマジック、治癒魔法…… まさか！」

「その通り……奴を、復活させる！」

不気味な笑みが、全員に広がる。悪人顔、そんな言葉がピッタリと当てはまりそうな、そんな笑み。

怯えていたウエンデイがその笑みを受け、さらに怯えるが、でも、と口の中で呟き、

「よ、よくわかりませんが、私は、悪い人たちに手は貸しません
！」

胸元の翼を強く掴みながら、ハッキリとした意思と表情で言う。

だが、ウエンデイのそんな強い意思ですら、ブレイン達にはなんの迫力もない。ただの強がりにはしか聞こえなかった。

「貸すさ、必ず。……うぬは必ず奴を復活させる」

ブレインに冷たく言い放たれようと、何の意味はなくとも、ウエンデイはその瞳に強い意思を込めたまま、ブレインを睨み付ける。

それにすらブレインは気づかないように、

「レーザー、奴をここに連れてこい。エンジェル、コブラ、ホット
アイ貴様らは引き続き、ニルヴァーナを探せ」

「奴をここに、ね。少し遠いが、あの男に勝つためには少しウオー
ミングアップを必要そうだからな。丁度良い」

「でも、あの人をレーザーが連れてくるなら私たちは動く必要す
らないと思うゾ？」

「万が一、ということもある。蛆共に先を越されては何の意味もな
いだからな。念のため私とミッドナイトはここに残る」

レーザーは瞬時に消え去り、コブラ、エンジェル、ホットアイも続

いて出ていく。

残ったのは二人のみ、もし、この場にクライスがいたならば、一瞬で叩き伏せてウエンディを助け出すだろうが、彼女にそんな戦闘能力はない。

だから、たった今聞いた理解できない会話に不安そうに、

「いったいどんな魔法なの、ニルヴァーナって……」

と、呟くしかなかった。

小さく呟いただけであった言葉だが、ブレインはそれに対しさらに不安を煽る化のように、不気味に言い放つ。

「光と闇が、入れ替わる魔法だ」

謎かけのように、また、理解できない言葉。

なにが起こるのか、なにをさせられるのか、そんなわからないことだらけの不安に押し潰されそうになりながらも、ウエンディはなにもできない。だから、

「（クライスさん、シュウちゃん、シャルル、助けて……！）」

小さな翼を強く握りしめながら、そんな風に願うことしか、できなかった……。

ツツツツドン！

静かな樹海に、そんな爆音が響いた。

僕とシユウが超大型魔導二輪で森のなかを疾走しているからだ。

シユウは、いつでも戦闘ができるようにいつもの幼女姿ではなく、ブラックロックシューターの姿をしていて、あの大砲を背中に斜め掛けにしている。僕はそんな彼女を背後に乗せながら超高速で走る魔導二輪を操っていた。何度も乗っているので操作には慣れているし、正直、僕が走った方が速いくらいなので木にぶつかったりなどというバカなことはしない。

あの後、戦えないエルザにはルーシィとヒビキが付いていることになり、その他のメンバーはチームに分かれてウエンディと青いの（ハッピー）の搜索をしている。

何故、シャルルが僕たちと一緒にいないかといえば、シャルル自身が拒否したからだ。

『とんでもない速さで動けるあんたたちと一緒に私がいたって邪魔にしかならないわよ。それに、もしあんたたち以外のチームが先にウエンディを見つけたらすぐにとんで連れてこられるしね。なにより、二人の方が動きやすいでしょ？』

それは射た意見だった。

シユウは僕と同じくらいの速さで動ける（僕が本気を出したら無理だろうが……）から一緒に行動してもさして差し支えない。

それに、この魔導二輪もある。これなら無駄に体力を消耗することもなく戦いに挑める。

「シユウ、怪我はもう大丈夫？」

「ん、平気。お姉ちゃんが、ほとんど治してくれたから……」

見れば、すでにうつすらとあった赤い線すらシユウの白い肌からは

消えかかっていた。

ドラゴンスレイヤーの力が、シユウは僕ほどでなくとも傷の治りが以上に早い。怪我のせいで戦闘に刺傷が生じるようならエルザのところにおいてこようとも思っていたが、無駄な心配だったようだ。

「お兄ちゃんも、見つからない……？」

「うん、嗅覚、聴覚、視覚、感覚、ネックレスによる念話……いろんなもので探してるけど易々とは見つかりそうにないかな……」

当たり前だ。そんなに簡単に見つかるような所にオラシオンセイスが隠れているはずがない。

でも、見つけ出す。

ウエンディは、今この瞬間だって助けを待っているはずだ、

「止まれ！ オラシオンセイス傘下『刻蝶の羽』、この先には行かさ　ぎゃあああああー！！」

僕が不甲斐ないばかりに、さらわれてしまった……

「な、こんなにあっさり和我らが　ぎゃあああああー！？」

だから、一刻も早く助け出さなきゃならない。

僕は、僕を助けてくれたウエンディを護るために、『化猫の宿』に入ったんだ、

「ちょ、待って！ 轢いてる！ おもいつきりそのでかい魔導二輪で轢いてるか　ぐあああああー！！」

まったく、毎回こんなじゃ、ウエンディに嫌われちゃうよな。

シャルルにだって、シユウにだって、嫌われちゃうかもしれない。

僕は、みんなの笑顔を見れなくなるのは、嫌だ。

「ごめんなさい！ 通って良いから！ だから轢かな ぎゃああああああああああー！！？」

だから早く、見つけないと、いつまでもウエンディに怖い思いはさせられない。

ん？

背後にいるシュウが僕の背中をつついてきた。

なにかあったのか、と思い魔導二輪を急停止（と、いつても50m以上に滑ったが……）させる。

「どうしたの、シュウ。なにか見つけた？」

「ん……」

無言で背後を指し示すシュウ。

それにつられるように振り向くと……

「うわ、なにこの大惨事……」

かなり離れているから普通ならよく見えないだろうが、僕とシュウには関係ない。

血まみれの闇ギルドの奴らが転がっていた。まあ、おどろおどろしい流血のしかたじゃないし、シュウにとって最初の左腕切断よりは対したことないようだが……。

物騒な装備をしているし、間違いなく闇ギルドだろうに、なぜか例外なく全員がなにかに轢かれて撥ね飛ばされたかのように奇妙な格好で転がっている。

「連合軍の誰かな？ やりすぎだよ、これは……かろうじて生きて

るみたいだけど」

「……………」

「な、なに？ その蔑むような目は……………」

もしかして、もう嫌われてる？

僕、なにかした？

「いい、進もう……………」

「う、うん……………」

なんか、無表情のなかに呆れが見えた気がするけど、今はそれよりウエンディたちを探さないといけない。

一瞬、闇ギルドの奴らからオラシオンセイスのことを聞き出そうかとも考えたが、全員満身創痍だったので無理だと判断し魔導二輪を再スタートさせた。

それからしばらくは、相変わらず変わらない森の風景だけが続いているいた。が、異変は唐突に現れた。

「なんだ……………」

またも、急停止。

今度は急いだため、無理矢理足を使って止めた。

「お兄ちゃん、これ……………」

「うん、この先だけなにか違うみたいだね」

木が、いや、森が真っ黒に染まっていた。まるで形を残したまま炭火焼きでもしたかのように、黒い。否、これは死の色だ。森が死んでいる、今僕の左腕に埋め込まれている真紅の十字架が突き刺さっていた森より酷い。

シュウも、気味が悪い、とでも言いたげに顔を歪めていた。

もしか、ニルヴァーナの影響だろうか？ 古代人が封印するほどの破壊魔法、そんな大義名文のある魔法なら森がこうなってしまっても領けなくはない。

アルファ・ステイグマ
目に魔力を通わせ複写眼を発動させる。そして、朱の五芒星で黒い森を見ようとした瞬間、

「危ないっ」

空気が震える。

僕のすぐ横でシュウが魔力弾を放った音だった。

そして、それは確実になにかを撃ち落とした 剣だ、物騒な、本物の剣。

「ほほう、私の一撃に気づきましたか」

「誰だ？」

ひとまず、魔導二輪を降りる。だからといって、刀を出したり、構えたりもしていないわけだが……。

木の影から姿を現したのは、全身に剣を装備した傭兵のような姿をした男だった。大きいものから小さいものまで、多種多様だ。

「これは、申し遅れました。私はオラシオンセイイス傘下『無限の剣』(ソード・ソード)の長をしている者です」

「へえ、礼儀正しいみたいだな。でも、不意打ちって戦法はよく言われたものじゃないと思うよ？」

「ハハハ、私達も死にたくありませんから……少々、黙っていただきます」

男がそういった瞬間、ぞろぞろと男と似通った姿をしたギルドメン

バーらしき奴らが出てくる。

うーん、雑魚ではないみたいだ。単体じゃ対したことないかもしれ
ないけど、この数なら十分驚異となり得るだろう。

はあ、とため息をつく。

「シユウ、10分だ」

「ん」

シユウは僕の言わんとしていることが一瞬でわかったらしく、即答
し、ブラックシューターを構える。

それは、男も同じだったようで、

「はっ、舐められたものですね……我々を10分で、ですか？」

「うん？ もう少し短い方がいいかな？」

「……後悔、しますよ？」

「楽しみだ」

「……………やれ」

飛びかかってくる『無限の剣』のギルドメンバー。僕はその姿を不
気味に、楽しそうに、狂笑^{おか}しそうに、笑いながら見つめ、呟く。

「目には目を……無限には、無限を」

抜刀すは……限刀【千】

所変わって、オラシオンセイスの隠れ家。

「ふう、悪くなかったな」

ドカンツ、と重厚感溢れる音と共にレーザーが奇妙な箱のようなものを洞窟の床に降ろした。

鎖で何重にも封じられ、不気味な模様の書かれたそれは、どこか棺桶のようにも見えた。

その棺を、ブレインは、やはり不気味な笑顔のまま、見据える。

「ちよつと重かったが、まあ、俺にとつちやどうってことなかったぜ」

ちよつと重かった……どうみても人に持ち上げられる範囲を越えたそれを、あるうことか担いでレーザーは持ってきたらしい。連合軍が行き来する森のなかを、気づかれずに。速さに対する絶対の自信確かに、道中連合軍がレーザーに気づくことはなかった。

ただし、種を明かせばたまたまクライスがいた場所がレーザーの向かった方向と逆だったからクライスはレーザーを発見できなかったわけで、もし、二人が出会っていれば、もしかしたらレーザーはここにいなかったかもしれない。

もしくは、クライスがここにいたかもしれない……。

残念なことに、そんなことを知るよしもないウエンディは、その棺を驚いたような表情を向けていた。

「あれは……棺桶？」

しかし、ウエンディの問いは無視され、

「ウエンディ、ぬしにはこの男を治してもらおう」

ブレインは今この男、といった。
やはり、この棺桶のなかには誰かが入っているらしい。

「わ、私は、そんなこと絶対やりません！」
「いや、お前は治す。治さねばならんのだ」

ウエンディの否定に対して、ブレインは何故か確信めいた物言いで
言い放つ。

棺桶の鎖を連結していた錠前のようなものが外れ、収納された。同
時に、棺桶の前方の外装が溶けだし、棺桶の中があらわになってい
く。

そこにいたのは、青い髪をしていて、右目近辺に奇妙な刺青をした
青年だった。

「っ！」

それに、ウエンディは驚愕の表情を浮かべた。
信じられないものを見てしまったような、そんな表情。

「この男はジエラルル。かつて評議員に潜入してた、……つまり、
ニルヴァーナの場所を知る者」

ブレインはそう言うが、

「ジエラルル……」

ウエンディの耳には届いていない。それほどに、ウエンディは動揺
しているようだった。

ブレインは構わず続ける。

「エーテルナノを浴びてこのような姿になってしまったのだ。だが、死んでしまったわけではない。もとに戻せるのはうぬだけだ」

ウエンディは、動揺しながらも理解した。

何故、自分がここに連れてこられたのか、

何故、ブレインは自分が彼 ジェラールを治癒することに対してあれほどまでに確信的な物言いをしていたのか、

「この男は、うぬの恩人なのだろうか？」

そう、彼は、ジェラールは、ウエンディにとって、大切な恩人なのだから……。

助けるために（後書き）

ご感想、アンケート、随時受け付けています！

勝負（前書き）

更新が遅れてすいません。

毎回一万文字を目安にしているのですが、よみにくいでしょうか？

僕としては一万文字が一話の話を入れるのにちょうどいいのですが
…。

何はともあれ、今回もよろしく願います。

勝負

カシャン……

そんな軽い音がしたかと思うと、僕の腕のなかで『限刀』が砕け散っていた。

これが初めてではない。すでに何十本も砕けて、折れて、辺りに破片が散乱している。

だが、負けているわけではない。それは、砕けた限刀の破片を背中に乗せながら倒れ伏している『無限の剣』のギルドメンバーをみれば判ることだ。

それに比べ、僕やシュウは怪我はおろか、息すら乱していない。

「クソツ！ 化け物があ！！」

巨大な剣を携えた巨漢の男が僕に斬りかかってくが、そんな鈍い攻撃が当たるわけもなく、剣の腹を叩いただけで軌道を反らす。同時に、剣を踏みつけて男が体勢を崩したところに新たに呼び出した限刀を一閃する。

傷はない。斬られたという結果すらない。なのに、それだけで、比較的背が高い僕より頭二つ分ほど高い男が倒れてしまう。

同時に、限刀も砕ける。が、まばたきするほどの時間で僕の手には新たに二本、白い直刀……限刀が握られている。

まあ、……

「きっかり十分……あんた以外は沈黙。有言実行だよな？ あれ、

「あんたも倒さなきゃダメだったっけ？」

「……………」

もう、ほとんど終わってるんだけどね。

バラバラの剣と刀が散乱し、気絶したギルドメンバーが倒れ伏しているこの空間に今現在立っているのは僕とシュウと最初に出てきた長らしき青年だけだった。

きっかり十分といっても、大体の敵は二、三分で倒して後は時間合わせのために逃げていただけだ。

当たり前だが、ドラゴンスレイヤーであるシュウとほとんど人の域を逸脱している僕達、『化猫の宿』（ケットシエルター）最強の二人に勝てるわけがない。

優しそうな、しかし人をバカにしているような、見下しているような笑顔と限刀を青年（僕も青年ではあるが名前がわからんしこう呼ぶしかない）に向けながら、

「さて、ササツとあんたも倒して大切な僕のお姫様を助けに行かないといけないんだけど……………」

と、言った。

青年が負け惜しみでも言ってくるかと思ったが、

「……………お兄ちゃん」

なぜか先にシュウがなにかを求めるような声を僕にかけてきた。

それも、いつものような無表情の中につつすらとある表情ではなく僕やウェンディじゃなくてもわかるような表情を浮かべて

「ん？ どうした、シュウ」

「……大切なおひめさま……」

「は？」

「今、お兄ちゃん、お姉ちゃんのこと、大切な僕のおひめさま、って言った……」

なぜ、その陶器のような白い頬を赤く染めて目をわずかにつり上げるといってご機嫌斜めな表情なのかは判らないが……。

僕が、なに怒ってるの？ という表情をすれば、さらに頬を赤く
と、いつてもウエンディが恥ずかしがっているときに比べたら
無色に近い　するシュウ。

一つ言おう。僕は確かに親に武道派の父を持ち、何だか知らない『式裂流』とかいう武術を操れるというなんかラノベ（主人公が何故か女の子にモテまくる系の）の主人公辺りにありそうな設定を持つてはいるが、僕はあくまで（自称）通常思考の持ち主だ。だから、シュウがなぜ不機嫌なのか判らないわけではない。

「えっと、シュウ。まさかとは思うけど、嫉妬？」

「しつと？ ……よくわからないけど……お姉ちゃんだけ、ズルイ」

……うん、いくら相手を小バカにする時とはいえ僕とウエンディを慕ってくれるシュウの前でウエンディのことを『僕の』なんて言ったらダメだよな。

「ごめんごめん、そうだよな。ウエンディは僕だけの、じゃなくてシュウの大切なお姉ちゃんでもあるよね。まあ、僕から見るとウエンディもシュウも可愛い妹だけど」

「……ん……違う、気がする」

あれ？　違うの？

シユウは僕がウエンデイのことを独占（言っておくが別に疚しい意味じゃない！　そしてそんな感情を込めて言った訳じゃない！）してると思ったから怒ったんじゃないの？

やばい、このままじゃ鈍感野郎のレッテルを張られてしまう……クソッ、シユウは何故怒って

「どこまで、私をバカにすれば気が済むんですか？」

そんな声が聞こえた瞬間、とつさにシユウを抱き上げて後方に跳躍すると、さつきまで僕たちがいた場所に地面に剣を突き刺した青年の姿があった。

どうやら僕とシユウがいつまでたっても、戦闘を終えてなお緊張感を持たないことにしびれをきらしたらしく凄まじい殺気を放っている。

「怒っちゃった？」

「ええ、かなり」

僕が肩を竦めながら言うと、青年は剣を構え直しながら言い返してきた。

ははは、と笑いながら僕も両手の限刀を逆手に構える。

「シユウ、手出し無用だ。奴とは、一対一でやるよ」

「……わかった」

一瞬、躊躇うような素振りを見せたが、僕の言葉にシユウは素直に従って武器を納めた。

それを見届けて、僕は再び青年に向き直った。

「覚悟は、いいですか？」

「ん？ そんなのいらぬよ。別に会話している間に斬りかかってきてくれても僕はよかつたんだけど？」

「……あなたがその余裕をいつまで保てるか楽しみですよ」

黒く犯された森をバツクに、僕と青年が片や余裕で片や殺気を放ちながら睨み合う。

このような状況でよく『先に動いた方が負ける』と言われるが、僕にしてみれば先に動いたらすでに相手を切れる速さを有しているので先だろうが後だろうが気にしないのだが、相手は一応闇ギルドの長。油断はできない。

でも、万が一のときはシュウがウエンディを助けに行ってくれたらうから心配はないし、なにより負けるつもりは微塵もない。

「名前くらい聞いておこうかな？ 僕はクライスだ」

「いいでしょう。私はリベルです」

ニヤリ、とお互いに不気味な笑みを浮かべる。

そして、

『勝負！』

同時に、地を蹴った……。

「ジェラルが、なんで……ここに」

暗く不気味な洞窟の中で、ウエンディは青髪の青年 ジェラルを驚いたように、放心したように、そんな瞳で見ている。

ジェラルは一見死んでいるようにも見えたが、生きてはいるようだった。

ただ、皮膚の所々に奇妙な色をしたヒビがあり、それが放っておいても治るものではないことがわかる。明らかに普通の人間が負うような傷ではない。

それを見て、ウエンディはずいぶん前……クライスが来るより前にたまたま出てきた町で聞いた噂を思い出した。

『評議員内部で裏切り者が出て評議員は壊滅状態、エーテリオンまで使用されてしまったらしい。その裏切り者の名前が』

ジェラル。

他にも、どこかのギルドのメンバーを殺そうとしたらしい、何て言う話もあった。事件後には行方不明になったらしいが、死んでしまった、なんて噂もあった。

そのことで数日悩んでいたが、すぐにクライスやシュウが現れたり仕事も忙しくなったりといつのまにかうやむやになっていたのだが……今現在、彼はウエンディの前にいた。

もし、ウエンディの背後で気を失っているハッピーが起きていたら激昂しただろうが、ハッピーは未だに目を覚ます様子はない。

「この男は、亡霊にとり憑かれた亡霊。哀れな理想論者……」

ブレインが詩を詠むように言う。

しかしそれに、ウエンディは暗く俯くだけだった。

「しかし、うぬにとつとは恩人なのだろう？」

ブレインが恩人と言った瞬間、ウエンディはさらに深く俯き、小さな拳を力の限りに握りしめた。
その姿は、何かに耐えてるようにも、何かを拒絶しているようにも見えた。

「さあ、早くこの男を復活させる」

そう言われても、ウエンディは動かない。いや、動けないのだ。できることならこの場から逃げてしまいたい、ウエンディはそう考えてからすぐにその考えを振り払う。ジェラルルは確かに自分の恩人だ。でも、良くない行いをしたという話は確かに聞いているし、それに、今ここで彼の傷を治せば今度はオラシオンセイスによって利用されてしまう。

ウエンディはジェラルルが人を殺そうとしたとか、評議員を裏切ったとか、そんな話を信じてはいなかった。

自分を助けてくれた、あんなに優しくかったジェラルルがそんなことするはずない。

でも、今彼を治したら、そんな風に否定することなんてできない。目の前で、ジェラルルが良くないことをする。

そんなのは嫌だった。そんなのは辛すぎる。

でも、だからといって彼をこのまま死んでもいない、生きてもない、そんな姿のままにしておくのはもつと辛い気がした。

助けたい、でも、助けたら彼はもつと辛い目に遭うのかもしれない。何度も何度も、助けたい、

でも助けたら……そんな考えが頭の中をぐるぐると引っ掻き回していく。

いつまでたつても答えをだせないウエンディに、ブレインが追い打ちをかけた。

シャリン、鉄と鉄が擦れる音がして、ウエンディが顔をあげると、

「復活させぬなら」

短いナイフをジェラルルに向けるブレインの姿。

そのナイフは、余程戦いになれていないか不意を突かれないうりたいたいた驚異にはなり得ない程度のものであったが、ナイフが向けられているのは意識がなく鎖によって拘束されているジェラルル。心臓を一突きすることなど造作もないはずだ。

その光景を前に、ウエンディは反射的に叫んだ。

「やめて　っー!!」

鈍い音がして、暗い洞窟を不気味に照らすロウソクの光が揺れる。ナイフが突き刺さっていたのはジェラルルの顔の真横、あとわずかにでも動かせばそのまま頬の皮を引き裂けるだろう。

「おねがい……やめて……」

膝から崩れ落ちながら泣きそうな声で言う。

ウエンディに同情したわけではないだろうが、ブレインはナイフを引き抜きしまう。

そしてゆっくりと掌をウエンディに向けて、魔力の塊を放った。

それは、ウエンディの真横に着弾しその衝撃で彼女は体制を崩し倒れ込みそうになる。

「治せ。うぬなら簡単だろう」

何度目かになる言葉、最初のように否定する気力も、意思も、強さも奪われたウエンディはついにはこらえきれず泣き出してしまふ。大好きだったジェラルルとの再開がこんなにも酷く悲しいものだから、意識のない彼を自分なら今すぐに助けてあげられるのにそれ

が素直にできないから、助けたいのに助けられないことがあまりに辛すぎるから……。

若い彼女には、重すぎる選択だった。

助けないか、助けて辛い目に合わせるか……どちらを選んでも、ウエンディもジェラルムも辛いだけの選択肢だ。

ウエンディの考えれば考えるほど考えられなくなっていく頭のなかで、一瞬？彼の姿が、クライスの姿が横切った。

今あの人がここにいてくれたらなにを私に言ってくれるだろう
無意識に服の下にある小さな片翼をグツと握りしめる。

ウエンディとしては、ジェラルムを治してあげたい。

彼はなんと言つか……やめると叫ぶか、いいよと許してくれるか
きつと、ウエンディが決めたことならそれでいいんじゃないか、
と言ってくれるだろう。

でも、ウエンディ自身もなにが自分の望みなのか判らなくなっていた。

「おねがいです……少し考える時間をください」

涙のたまった瞳でなんとか言葉を紡ぐ。

考える時間、今のウエンディにはそれが必要だった。

「……いいだろう。五分だ」

ウエンディは、悲しそうな瞳でジェラルムを見つめていた……。

「だつはあつは！」

「っはあ！」

ところ変わって、闇ギルドの一つ？ネイキットマミー？と戦い、やっとの思いで倒したナツ、グレイ、シャルルグループ。

ナツとグレイ以外に立っているものはいなく、あらゆるところに猿のような見た目をした？ネイキットマミー？のメンバーたちが倒れ伏していた。

たった二人で闇ギルドを潰したナツとグレイ、その光景を少し離れた位置から見ていたシャルルは啞然としていた。

「なんだよこいつら、雑魚じゃなかったのかよ」

「以外とやるじゃねえか」

疲労困憊の様子で言う二人、一つのギルドを潰しておいてその程度で済むというのはドラゴンスレイヤーであるナツと幼いころから修行を積んでいたグレイだからこそか……。

「当たり前じゃない！ 相手はギルド一つよ！ なに考えてんのよあんた達！？」

シャルルにしてみれば、一つ屋根の下に故意的に成長したり大木数十本を軽々持ち上げながら無表情で歩いたり自分の身長と同じくらいある鉄の塊を軽々扱い武器にしているシュウや、身体中から刃を生やしたり魔導四輪もビックリな速さで走ったり大河を軽く飛び越えたりそれでいてまだ本気の三割ほどしか出していないというクライスがいるのでとんでもない魔導師には慣れていたはずだが、こうして目の前で闇ギルドを二人だけで潰されると驚くのはしかたない。

そんなシャルルを気にした様子もなくナツは？ネイキツトマミー？のリーダーの一人、ザトー兄さんと呼ばれていた（もう一人もガトー兄さんと呼ばれていたのでどっちが兄か弟かは定かではない）アフロの男に掴みかかった。

「おいガホザル！ オメエらのアジトはどこだ！」

「ガホホホ、言うかバアーカ」

ガンツ！

カチンツ、とそんな効果音でも入りそうな表情と共にナツの額に青筋が入りそのまま頭突きをした。

ナツは頭から煙をあげながら気絶したアフロを投げ捨て、

「おいデカザル！」

何故か同じことを繰り返していたガトー兄さんと呼ばれていた（しつこいようだがどちらが兄なのかさっぱりわからない）男に詰め寄った。

「本当にめちゃくちゃねあんた達……」

シャルルは、漫画で書けばあきれたように背に影を背負ってそういった。

めちゃくちゃな魔導師はあのクライスとシュウだけじゃなかったのね……なんて思いながら。

「客人、後は、頼んだ……」

男は、ナツの問いかけに答える前に気絶してしまった。

客人、その言葉はただだれかいるような響きを含んでいた。
案の定、

「いよう、燃えカス小僧久しぶりだな」
『あ？』

と、奇妙なしゃべり方をする白髪の男が木の上に立っていた。

「なっ、お前は……！」

グレイが驚いたような声を上げたが、

「よー、そよ風野郎。ひっさしぶりだな、元気してっか？」

何故かグレイと正反対に旧知の友人に会ったかのようなナツ。
それに、シャルルは友人なのかと思ったが呪殺とか俺が倒したと
か聞こえてきたので味方ではないらしい。

「俺は、この日をずっと待っていた……ハエどもへの復讐の日を、
死神の復活の日を！」

「リベンジマツチか、おもしれえ……」
「燃えてきたぞ」

新たな敵の出現にたいして、逃げるところか楽しそうな表情を浮
かべる二人にシャルルは、

「あ、あんだ達、まだ戦うわけ……？ めちゃくちゃを通り越して
るわよ……」

ハア、とため息をつきながらシャルルは空を見上げた。

僕が繰り出す斬激を掻い潜り、リベルが両手に持つ大剣で僕を切り裂かんとする。

僕はそれを？身刀？の能力で肘から生やした黒刀で受け止める。

「アハハハハ！！面白いぜあんた！この僕様とここまで殺り合えるなんてさあ〜！」

刀を傾かせることによりリベルの剣を滑らせ体制を崩させる。同時に地面に小さな渦巻きが描かれるほどの勢いで回転し回し蹴りを放つ。

剣をクロスさせるようにしてリベルが防ぐが、本来なら剣が砕けてもおかしくないほどの力の蹴り、剣ごと吹っ飛んでいく。

空中でなんとか体制を立て直し樹木に対して平行に着地するが、顔をあげたそこに、僕様はすでにいる。

双の刀を一振り、単なる力だけではなく？式裂流？としての技量も兼ね揃えたその一閃はすぐ目の前の大樹だけでなくその後ろの草木をもバラバラに切り裂いていく。

その恐ろしい一閃はぎりぎりで避けたりリベルが僕様と距離をとるため、反撃するわけでもなく遠方に跳躍した。

「まったく、恐ろしい速さと力ですね……。私が追い付くのがやっとですよ」

グルンと自身の背丈とそう変わらない大剣を振り回しながらリベルが言う。

余裕……いや、強がっているだけだな。

「それにしても、戦いが始まってからいきなり人格が変わりましたが……多重人格かなにかですか？」

「アハハハハ、似たようなもんだよ。てか、今はテンションが高
からこんなになつてただけだ。普段は紳士だぜ」
「信じられませぬ……」

木の枝に足だけ引つ掻けて逆さまになりながら話してるあたり、
僕様も結構今ハイテンションだよなあ。うん、普段は？僕？キレ
ると？俺？好戦的な意味でハイになると？僕様？になるんだ、僕
様自身初めて知ったぜ！

なんかウエンディさらわれて泣いてた人と同じ人間には自分自身
思えないわ。いや、中身は変わってねえから今すぐにでも助けに
いきたいし？複写眼？で見る限り森のあちこちで戦闘が繰り広げら
れてるようだから急いだ方がいいんだろうけどよ、なかなか強い
んだよ、リベル。

「シユウ以外で僕様と満足に殺り合えるやつなんざ初めてだ。まあ、
大剣には物質強化の、肉体には身体能力強化の魔法をかけてるみた
いだがな」

「見破られてしまいましたか。でも、見破られたところで私は、あ
なたを倒すだけです」

普通なら見えないほどの速さでリベルが目の前に現れ、鈍く輝く
大剣を僕様の頭上に向けて振り降ろしてきた。

僕様は普通じゃないから普通に受け止めるんだけどね

「困りましたね、これを素手で受け止められてしまうとは……」

本当に困ったように、でもまだ勝つつもりのリベルに？俺？は殺
気をぶつける。

「飽きたな……」

「え？」

リベルが疑問の表情を浮かべる前に、掴んだ大剣を握力のみで握り砕いた。

さすがは闇ギルドの長、そのことに一瞬驚いたような表情をしたがすぐに状況を判断して後ろに跳んだ。

俺は、それに対して　後ろから（・・・）リベルを叩き伏せた。

「が　っ!？」

地面に叩きつけられリベルは苦しそうな声をあげるが、俺は無視して胸元を踏みつけ首を動かせないように二本の限刀をクロスさせて地面に突き立てた。

「グッ　また、人格が変わりましたね……それに、まだ本気ではなかったのですか？」

「ああ、貴様との戦いは面白かったが……俺にも助けなきゃいけないやつがいるんでな」

地面に突き立てた限刀をさらにリベルの首筋に近づける。彼の力を？複写眼？で見とり限刀の強度を上げているのでそのままいけばリベルの首はきれいに切断されるだろう。

「さあ、言え。ウエンディはどこにいる」

勝てないことを悟ったのか、リベルは小さくため息をついていた。

「判りました、話しますよ。彼らのアジトは西の廃村、滝壺のしたです」

その答えに俺は小さく舌打ちをした。西といえばここから真逆の方向だ、シュウの魔導二輪ならすぐにつく距離ではあったがそれまでにまた闇ギルドに襲われる可能性もある……。でも、行くしかない。途中で闇ギルドの連中が出てきても最低撥ね飛ばせばいい。

「シュウ！ ウエンディがいるのは西の廃村だ！ 行くぞ！」
「ん」

木の影にいたシュウが一瞬で魔導二輪を呼び出し、僕とシュウがそれに乗り込む。

すぐに走り出そうとしたが、一瞬だけ動けないリベルに向き直る。

「リベル、あんたとの決着はまた次の機会に。今回は、僕の勝ちってことで」

僕がそう言うと、リベルは小さく笑った。

「いいでしょう。次会うときは、私もあなたに負けないくらい強くなっておきますよ」

「そう？ ハア、なんかあんたとはどっかの町であってれば友人になれそうなのに……残念」

「私を圧倒するような友人は嫌ですね……」

「あはは、そっか。じゃあね」

また、魔導二輪が爆音をあげながら森の中を走りだした……。

「エルザ、大丈夫？」

「ああ、今はまだクライスが施してくれた？毒？とやらが効いているらしい」

森の一角、ウエンディとハッピーを救出に向かった連合軍のほかに戦えないエルザを守るために残っている者がいた。

？妖精の尻尾？（フェアリーテイル）のルーシイと？青い天馬？（ブルーペガサス）のヒビキだ。

エルザの腕をの毒は今もなお　クライスの？毒？でいくらか抑えられているとはいえ確実に彼女を蝕んでいた。

「ごめんね、私、なにもできなくて……」

「謝るな、ルーシイ。謝るのは私の方だ、アツサリと敵にやられてしまったうえ、お前たちの足を引っ張っているのだからな。……もどかしいものだ、感覚的にはほぼ万全なのに戦えないというのは」「うっん、相手があんなやつらじゃ仕方ないよ」

エルザは今横になっていてルーシイがその横にいる。

クライスの？毒？によつて心拍数が極端に低下しているエルザは、言ってみれば超低血圧状態なのだ。立つのはおろか、座っているだけで貧血を起こしかねない。

「ヒビキ、ウエンディ達はまだ見つからないのか？」

横になったまま、わずかに苛立ちを覗かせながらエルザがヒビキに問いかける。

「それが、誰とも繋がらないんだ……この森の影響か、もしくはオラシオンセイスがなにかしているかは判らないけど」

自身の魔法？アーカイク？の画面をみながらヒビキが困ったように呟く。

「なに？ それでは……」

「大丈夫。必ずつないでみせるよ」

焦ったような表情をするエルザを見て、真剣な表情でヒビキが言った。

別荘で見せていた営業用の笑顔とは違い、真剣そのものである今のヒビキにたいしてエルザは、

「……頼んだ」

なにもできない自分にたいしての苛立ちもあつてか、重苦しく呟くのだった。

「イイヤツホ　　！！」

そんな僕の楽しそうな声とは裏腹に森の中に鈍い音が木霊する。それは襲いかかってきた闇ギルドの連中を撥ね飛ばす音だったり

する。

町中でやったらブタ箱行きの光景だがここは自然溢れる森の中、撥ねているのは半犯罪者の闇ギルド。問題ないよね！

「お兄ちゃん、怖い……」

「……………自重します」

さすがのシユウも、目の前に大量轢き逃げしてる人がいたら怖いらしい。

それが自分の身内ならなおさらかもね……………。

と、ちよつど闇ギルドの襲来が落ち着いたので辺りを見回す。

「リベルは西の廃村と言っていたけど、この広い森の中じゃどこだかわからないな……………」

「ん……………また、誰か来たら、聞いてみる……………?」

「素直に話すかわからないよ」

「その時は、これで……………」

「……………うん。それも選択肢のひとつではあるけど……………ねえ」

さっき僕に怖いと言っておきながら、その、下手したら人を殺せるブラックシューターをもたげるのはどうかと思うよ?

でも、そうでもしないと見つからないかもしれない。この魔導二輪なら適当に走り回っていてもすぐに見つかると思っただけ……………。

せめて誰かと合流できればなんとかかなりそうだけど、こんなに走り回って誰にも会わないくらいだからそう簡単には……………

「お兄ちゃん」

「うん?」

いつもの淡々とした、点の多い話し方ではなく急いた感じのシューの声に振り向く。

「どうかした？」

「何か、聞こえた気がする……」

「本当かつ？」

魔導二輪を運転しながらなので難しいが、できる限り集中して、できる限り早く感覚を広げて行く。

百……二百……五百……八百……千、いた！

ナツとグレイとシャルルの気配、ん？ 誰かもう一人増えた？ とりあえず、と、ブレーキを思いきりかけ、魔導二輪を百八十度回転させる。地面を削りながら数瞬の間バツク走行していたが、完全に止まった次の瞬間には猛烈な勢いで走り出していた。

「シュー！ ナツとグレイが誰かと交戦してるみたいだ！ すぐ攻撃できるように構えといて！」

「ん、判った」

腰に添えられていたシューの手が離れていくのを感じた瞬間、頭上に黒い塊が突き出される。

それからすぐに見えてくるナツ達の姿。

あのバカみたいなのモヒカンやるのは、レーザーか？

木の上で余裕をかましていたが、爆音を発しながら近づく僕たちに気づいたのかこちらを向いた。

「っ！ お前は」

そこまでは聞こえた。

だが、次の瞬間にはシューがブラックシューターの引き金を引き、

蒼い魔力がレーサーを包み込み木々を巻き込みながら彼方へぶつ飛ばしていた。

反動でいくらか魔導二輪が減速したため、なんとか三人の目の前で停止する。

「あんたらが一番乗りか、ナツにグレイ。っと、シャルル？」

僕たちのいきなりの登場に驚いたのか、二人は絶句していたがなぜかシャルルは気絶していた。

「ど、どっから出てきたんだよテメーは……」

「森の中」

「んなこと聞いてねえよ！」

「え〜？ なら、ここより後方に三十度、千と二メートルの位置から」

「無駄にこまけえ説明も要らねえよ!？」

なににせよ、と僕は話を戻す。

「ウエンディ達がいるのはここみたいだな」

「ああ、だけど俺がさっきハッピーを呼んでみたけど返事がなかったぜ？」

「いや、いる」

首にかかったネックレスをつかみながら言う。

間違いない、ここにいる。

「グレイ、あんたはここに残ってくれ。レーサーが戻ってきたら厄介だからね」

「判った。足場は俺が作る……そら！ 行ってこい！」

一瞬で氷の滑り台が造型される。

うっん、こんどぜひグレイの魔法も見とりたいな……便利そうだし。

って、そんな場合じゃないか。

「シュウ、シャルル持つ……連れてきて」
「ん」

魔導二輪をしまっていたシュウがシャルルを人形でも抱えるように持って……連れてきた。

その間に意識を取り戻したのか、シャルルが目を開けた。

「ううん……あれ？ あんたたち、いつのまに？」

「ん、ねごさん、起きた？」

「お、シャルルも起きたみたいだし行くぞ。シュウ、ナツ」

「おう！」

「ん」

「行くってどこに」

次の瞬間、崖から飛び降りる三人とシャルルの悲鳴が響き渡った。

・
・
・
・
・
・

「な、なんだ、これ……？」

ナツが唾然としたように呟く。彼の視線の先には、蒼い髪をした男が無表情に立っていた。

そんなナツの横には、表情を忘れたようなクライスト、目を見開いたまま固まっているシュウ。

「お、い…………ウエンディ…………？」

うづくまるようにして泣いているウエンディに、クライストはなんと声をかけようとするが、その声は乾いていた。

そんななかで、ブレインだけが不気味に笑っている。

「…………ごめん、なさい…………！」

嗚咽を交えたウエンディの声が、暗い洞窟に響き渡った…………。

勝負（後書き）

感想を是非よろしくお願いします。

アンケートもよろしければ…。

苦悩（前書き）

タイトルが微妙……。。

苦悩

「……ごめん、なさい……」

薄暗い洞窟に、ウエンディの鳴き声が響く。

気配を頼りにウエンディ達を見つけ、洞窟の入り口から見た光景は……奇妙なものだった。

ウエンディ、ブレイン……ヒビキからの情報で知っていたミッドナイト、その三人は知っていた。

だが、あと一人。ボロボロの服装の青年が、感情を感じさせない瞳でこちらを見ていた。

知らない顔だ……だが、

「……この人は、私の……恩人、なの……」

泣きながらウエンディはそう言った。

青い髪をした男がウエンディの恩人？

なんで、謝ってるんだ？

なにがここで起きたんだ？

判らないことだらけだったが、ウエンディの様子を見れば何をしたかはある程度理解できた。

「ウエンディ……お前まさか治癒の魔法を　ウエンディっ!？」

ドサツ、と泣いていたウエンディがいきなり糸の切れた操り人形のように倒れてしまった。

やはり、ウエンディはあの男に治癒の魔法を……。

走り出そうとした瞬間、隣からナツの呻くような声が聞こえてきた。

「何でお前が、こんなところに……」

「ナツ、あんたあの男を知ってるのか？」

振り向きながら僕が聞くと、怒りで顔を歪めたナツの姿があった。

「ジェラール　　っ!!」

「あっ、おい！」

僕の声も聞こえていないらしく拳に炎を纏い、男に殴りかかる。

だが、男　ジェラールは無表情のまま掌をナツに向け金色に近い魔力を放ちあっさりナツを弾き飛ばしてしまう。

余波がこちらにも来て？身刀？で切り裂いたが、その威力は意外に強い。僕やシュウほどではなくとも、ドラゴンスレイヤーでも人外でもないことを考えれば十分に強い。リベルすら敵わないと思う。それだけの力を行使しておきながら、ジェラールというらしい男は表情を変えない。

その姿は見たことがあった。

初めてあったときのシュウ……記憶も意識もなかった彼女ほどではないけど、もしかしてこの男……記憶がないのか？

「相変わらずすさまじい魔力だな」

ブレインがジェラールに話しかける。

なんだ？　ブレインまで？ジェラール？という男を知っている口ぶりをしている……ウェンディ、ナツ、ブレイン、まるで接点のないこの三人がなぜ同じ男の名前を知っているんだ？

まずいな、ブレインの口ぶりは旧知の仲の奴に合ったときのように

だった。つまり、少なくとも二人は敵同士じゃないってことだろう？ 気絶しちまったウエンディと戦えないシャルルを守りながらこの狭い空間で戦うのはまずい。それに、今は眠っているがミッドナイトもいる……。

大丈夫だ、僕は今？ 僕？ のままだ。？ 俺？ になつて冷静さを失う前に逃げよう。

シュウにウエンディを連れてすぐに逃げることを知らせようとした瞬間、

「なに！？」

ジェラルルがブレインを攻撃した。

足元が破壊されたらしく地面の下へとブレインが落下していった。ブレインはジェラルルを知っているようだったのに、彼はブレインを攻撃した……。

確実じゃないが、やっぱり記憶がないみたいだな。だから、自分に近づいてきた 少なからず非友好的に 二人を攻撃しただけで、別に誰にも敵意を持っている訳じゃない。

案の定、寝ているミッドナイトもウエンディに近づく僕やシュウをまるで見えないように素通りし、彼は洞窟から出ていった。

「ウエンディ！ しっかりしなさい！」

「お姉ちゃん……！」

「落ち着け二人とも！ そんなに揺すつたら悪化する」

気を失っているウエンディを心配して、逆に悪化させかねないシャルルとシュウを宥める。

「でも、ウエンディが」

「よく見る。さっきも言ったが、ウエンディは治癒の魔法を使った

から魔力を使いすぎで一時的に気を失っただけだよ」

その言葉に、二人は再度ウエンディの顔を見つめ、僕の言った通りだとわかると安堵の息をついた。

でも、回復するとはいえ魔力が少ない状態が続くのはよくないのでウエンディの首にかかるネックレスを手を取った。

本来なら魔力の供給は難しいらしいのだが、このネックレスの特性上それがスムーズにできる。

シユウに出入り口を見張ってもらい、しばらく魔力の供給をしていたところで、瓦礫が動く音がした。

「ぶはあ！ ジェラール！ どこだ！ ジェラール！」

一瞬だが気を失っていたらしい。

「ジェラールならどっかに行ったぞ」

「あんにゃろ……」

岩の壁に叩きつけられたにも関わらず目立った怪我がないのは、ドラゴンスレイヤーだからだろうか？

人間なら骨折じゃすまないはずだが……。

そんなことより、と苛立っているナツに問いかけた。

「ナツ、あのジェラールとかいう男のこと知ってるのか？」

「ああ？ ったりまえだ！ あいつは仲間を、エルザを って、ハッピー！？」

と、途中まで言って相棒らしい青い猫が気絶しているのに気がついたのかナツが走りよっていった。

それにしても、あの男はナツと……いや、仲間をって言ってたか

らフェアリーテイルとなにかしらの因縁があるらしい。

ウエンディの顔色が良くなってきたことを確認して魔力の供給を終え、立ち上がる。

「ナツ」

「ん？ なんだ？」

「あんたとあのジェラルとかいう奴の間になにかあったのかわからないけど、ウエンディは僕たちが連れていくからあんたはジェラルを追えばどうだ？」

「マジか！ じゃあ、エルザを頼んだぞ」

「ああ」

そう言い残して、僕はウエンディを抱き上げ出口にいるシュウとシャルルに駆け寄った。

「あの二人は置いてくの？」

「ああ、さっきの男を追うってさ」

「ん……早く、行こう。さっきのおじさん、戻ってくると厄介」

「そうだな……行こう」

ウエンディは僕が、シュウはシャルルと、黒と白の翼を広げ空に舞い上がった。

・
・
・
・
・
・

薄暗い森の中、リッターバイクなんざ目じゃないほど巨大な魔導二輪が草花を弾き飛ばしながら疾走する。

飛んでいってもよかったのだが、それだと咄嗟の時に困るから、という理由で翼から魔導二輪に変えたのだ。

あの洞窟を出たあと、レーザーに襲われたときは危なかった。そのとき僕はウエンデイを抱えていたから両手が使えず反応が遅れ、危うく蹴り落とされるとこだった。

まあ、悲しいかな、レーザーはシューウがブラックシューターでぶん殴ったせいでカエルが潰れるような悲鳴をあげて叩き落とされたけど……。

魔導二輪でもまだ残っている闇ギルドに襲われないかと警戒していたけど、今のところそんなこともなく順調に進んでいるんだが……別の問題が発生してるんだよね。

「なあ、シャルル」

「なに？」

「エルザってどこだっけ？」

「……まさかわからないのに適当に走ってたの？」

「うん」

「ふざけんじゃないわよー！！」

ぐあ、耳元で大声出されるのはきつい……。

軽い感じで言ったけど結構切実な問題だよ？ 帰り道わからないってかなり切実な問題だよな？

取り合えずなやんでても仕方ないので先ほどナツたちを見つけたときみたいに来る限り意識を広げながら魔導二輪を走らせていると、

『クライス君！』

「おわっ！？」

いきなり頭の中に響いてきた声に驚いて危うく転けそうになるがなんとかバランスを立て直した。

意識を外に向けきつていなくてよかった、そうじゃなきゃ大変なことになってたな。

「お兄ちゃん？ どうしたの？」

「いや、なんか頭の中に声が……」

あれ、さっきの声どこかで……

「クライス君、聞こえるかい？」

「あんた、もしかしてヒビキか？」

頭に直接の念話、アーカイブの一種か。

外へ広げていた意識をもどし、ヒビキとの念話に集中する。

「ああ、よかった。誰にも繋がらないから焦ってたんだ」

「繋がらない？ なにかあったのか？」

「それが僕にもわからないんだ。このワース樹海に何かあるのかもしれない」

ヒビキの念話を阻害するなにか……？

見たところオラシオンセイスのなかにはそんなことができそうなやつはいなかった、森に何かあったわけでも……いや、リベルと戦ったあの場所、たしか森が黒く染まっていたはず。右目で見たわけじゃないから確かじゃないが、もしかしたらあれか？

「まあ、今はそれより、ウエンディちゃんと猫君は？」

「無事だよ。ウエンディはここにいるし、青いのはナツといっしょ

だ

『そうか、よかった……あれ？ ナツ君と一緒にじゃないのかい？』

『ああ、今は別行動してる。っと、それよりちようどよかった。帰り道が判らなくて困ってるんだ、なんとかならない？』

って、なるわけないな。この森に明確な地図があるわけでもなし

……。

仕方ない、ヒビキに今いる場所の特徴でも聞いて

『わかった。今から君の頭にここまでの道のりをアップロードする

よ

』できるのか……』

しばらく待ってみると、なるほど、確かに頭の中に情報が上書きされ道のりが明確にわかった。

情報を圧縮、頭の中へ直接転送か……使いようによってはおそろしい魔法だが、今は助かった。

「ちよつと、クライス？ いきなり黙ってどうしたの？」

ヒビキからの念話が終了すると、いつのまにかシャルルとシユウが僕を不思議そうに見ていたことに気がついた。

いきなり黙ればあたりまえか。

「なに、問題が解決したってことだよ」

「解決した？ 道がわかったの？」

「ご明察」

納得のいかなそうなシャルルを一先ず無視して、僕はより一層スピードを上げて森の中を疾走していった。

「ヒビキ、ウエンディ達はまだなの？」
「たぶんもう少しだよ」

ルーシイが焦ったような声を上げた。
それもその筈、皆がウエンディたちを探しに行つて既に一時間以上が経過している。

ヒビキがクライスと念話で話してからそう経つてもいないし、あちらも急いでいるようではあつたがエルザを蝕む毒はすでに彼女の右半身を血管に沿つて紫色に染め上げていて、いくら本人が平気そうな顔をしていても見ている方が気が気でなかつた。

「そうあせるな、ルーシイ。彼はすぐに来ると言つていたのだから？」
「でも！ エルザのそんな姿いつまでも見てるのは辛いんだもん！
それに、どんだん毒が……」
「毒がどうした？」
「キヤアアアアアアー！？」

いきなり響いた声にルーシイが跳ねるように驚いた。
彼女の背後にいきなり現れたのはウエンディをおんぶしたクライスだつた。その背後にシユウとシャルルもいる。とはいえ、一瞬で現れたのはここに突っ込むわけにもいかず彼が魔導二輪を降りて超高速で走ってきたからなのだが、レーサーすら捉えられない速さにルーシイが反応できるはずもなくいきなり現れたように見えただけ

だ。

ルーシイの悲鳴にクライスがうるさそうに顔を歪める。

「なんだ、せつかく急いできたのに人の顔見て悲鳴あげるなよ」

「あんたがいきなり話しかけるからでしょうが！」

「いや、逆ギレされても……」

ま、いいや、とクライスが背負っていたウエンディを降ろした。
そこでエルザが疑問の声を上げた。

「ウエンディは、気絶、しているのか？」

「そうよ、でもさっきクライスが魔力を回復させてたからそろそろ起きるはずよ」

シャルルが答える。

無理矢理起こしてもよかったが、それはなんというか、やりづらかったので……

「クライス、頼んだわよ」

「僕ですか!？」

「ん……お兄ちゃん、がんばって」

「……シュウまで」

不満そうな声を上げたクライスだったが『じゃあ僕が』とヒビキが言ったら掌から生やした刀を彼の首筋に当て笑顔で断っていた。

ヒビキが強ばった表情で退散していく姿を後目に、クライスはウエンディの肩を軽く揺する。

「おい、ウエンディ。起きろ」

ちなみにそれは朝の早いクライスがウエンディを起こすときとまるつきり同じなのだが、気絶していても効果はあったようで彼女の瞼が小さく動き、眼がゆっくりと開いた。

「……………」

いきなりクライスの姿がドアップで写し出されたのと起きたばかりとでしばらく硬直していたウエンディだが、それもつかの間、

「クライス、さん？」

と、まだ若干覚醒していない様子でとりあえずそう呟いた。

しかし、キョトンとしていた表情はすぐに強ばっていき、その場で頭を抱え込んだ。

「っ……………ごめんなさい！ 私　っ！」

謝罪。

彼女自身混乱していたため、自分がなぜ謝っているのかあやふやだったがとにかく悪いことをしたのは覚えていた。

ギョツ、と目を瞑り子犬のように震えながら謝るウエンディ。そんな彼女の小さな肩に、クライスは手を置いた。

いつも通りの冷たい彼の手に驚いたわけではないだろうが、ウエンディの体が小さく跳ねる。

「ウエンディ、別に僕は君を責めたりしないし、怒ったりするつもりもない。そもそも何で謝ってるのかわからないし、多分謝ったりするようないと思っ」

「で、でも、私は　！」
「大丈夫……だから落ち着け、な？」

ウエンディの肩を掴み、クライスは彼女の目線と自分の目線を合わせながら静かに、でも強く言った。

やがて、さまざまな感情が行き交って泣きそうに揺らいでいた瞳が安定し、掴んでいた肩から伝わってきていた震えも静まり、ウエンディが落ち着きを取り戻したのがわかった。

それに小さく嘆息し、クライスはその手を離した。

「やっと落ち着いたか……まったく」

「す、すみません……」

「ああ、それよりウエンディ。ちょっと頼みたいことがあるんだが、いいか？」

「え？」

「彼女を助けてやってほしいんだ」

クライスが指したのは、すでに右半身が毒に覆われてしまっているエルザだった。

自分でもあらためて見てみて、やっぱり心拍数を下げたくらいじやダメだったか、とクライスは苦々しい表情をした。

麻痺させておいたのはやはり正解だったらしく、それほど苦しんでいる様子はなかったが、いい加減麻痺させておく程度じゃ持たないだろう。

奇妙に彩られたエルザの腕を見てウエンディもすぐに理解したのか真面目な表情をする。

「オラシオンセイスと戦うには、エルザさんの力が必要なんだ」

「お願い！ エルザを助けて！」

「頼む、いつまでも皆の足を引っ張っているのは嫌なのでな」

ヒビキ、ルーシイも頭を下げながら頼む。

エルザにいたっては麻痺と毒で動かすのも辛いはずの体を起こしながら、だ。

「も、もちろんです！ はい、やります！」

ウエンデイのハッキリとした答えにエルザ達に歓喜の表情が広がる。

正直大量の魔力を使う治癒の魔法をウエンデイに使わせるのは、クライス達にしてみるとあまり嬉しくないことだったが彼女が苦しんでいる人を目の前に放っておくことなどあり得ないことを知っていたので、彼らは止めることなくウエンデイがエルザに治癒魔法をかけるのを静かに見守っていた。

彼女から消費されていく大量の魔力に比例してエルザの体から毒が目に見えて消えていくのがわかった。

それに、治癒を受けている本人であるエルザは目を見張っていた。自分の体から毒が抜けていく感覚と、幼い少女が見たこともないような魔法を使うことに驚いているのだ。

それはヒビキとルーシイも同じだった。

失われた魔法？ロストマジック？である治癒魔法が目の前で使われているのだからそれは当たり前だろう。

しばらくして、エルザの腕を覆っていた毒の色が消え去った。

「終わりました。ちゃんと毒は消えたと思います……痛みとかありませんか？」

治癒の魔法で魔力を大量に使ったせいで少し疲れたような表情をしながらウエンデイがエルザに問いかけた。

クライスが入れた麻痺毒や、心拍数を下げる毒も同時に消えたら

しくずいぶん顔色もよくなったエルザが自分の腕を軽く振ったり握ってみたりしながら調子確かめる。

その姿をルーシィやヒビキが心配そうに見ていたが、やがて、うむ、とエルザが小さくうなずき、

「ああ、もうダルさもないし、完全に治っているようだ」

よかつた、と全員が安心するなかなぜかウエンディだけは素直に笑えていないようだったがその事には誰も気がつかなかった。

「じゃあ、エルザさんも助けられたことだし、ついに反撃の時だね」

「うん！ 打倒オラシオンセイス！」

「ルーシィ、あんた確か戦いもせずやられてなかったか？」

「うっ、それは……あはは……」

図星を突かれ苦笑いをするルーシィ、それでもエルザが復活したことで幾分か余裕が出たのか表情は明るい。

その時、青い空を一筋の黒い光が引き裂いた。

「なんだ？」

反射的にクライスが身刀を抜刀し全員を庇うように前に出る。

その間にも黒い光が空を埋め尽くさんと広がっていく。黒い、だが森をすべて照らしているのではないかというほど協力的な光。

「あれは、まさか……ニルヴァーナか!？」

「ニルヴァーナだと？」

ニルヴァーナ、作戦会議で一夜が言っていた破壊魔法。

あれほどの光を発しているのだから一目見てただの自然現象でな

いことはわかるが、それがなぜニルヴァーナだとわかるのか。

ヒビキがなにか知ってるようだ。自分でも確かめた方が早いだろうとクライスは？右目？を発動させる。

黒い瞳に朱の五芒星がぼんやりと灯る。

あらゆる魔法の構造、効果、威力などを瞬時に読み取るその瞳に映し出された内容、複雑なその内容はさすがに一瞬では理解できなかったが理解していくと同時にクライスは目を見張った。

「なんだ、これは……」

「お兄ちゃん……？」

そんなクライスの様子を感じ取ったのかシユウが不安そうに近寄る。

シユウに気づいたクライスがなにかを言いかけるが、思い直したように頭を振った。

「わ、私のせいだ……」

小さく、泣きそうな声でそう呟いたウェンディの声は驚愕したようなルーシィの声にかき消された。

「ニルヴァーナってどうゆうこと！？ まさか、誰かがもう見つけたってこと！？」

「わからない、でも誰かが発動させたに違いない……」

発動させた以上、連合軍である可能性は低かった。

どんな魔法かもわからないうちにそんなことをしたら何が起きるかわからないからだ。

つまり、オラシオンセイスイに先を越された可能性が非常に高い。

「どちらにしろ、ここで討論している暇はない。行くぞ！」
「う、うん！」

「ああ、あれはヤバイ魔法みたいだからな……早々に潰す」
「ん……私も、手伝う」

全員が走り出すが、一人、その場を動かない少女がいた。
ウエンディだ。

その事に気がついたクライスが立ち止まり、乗じてエルザやシャルル達も戻ってくる。

心配の視線を一拳に受けていることにも気がつかず、ウエンディはまるで暗示でも掛けるように呟く。

「……私の、せいだ……私がジエラルを治したから、ニルヴァーナが見つかっちゃったんだ……私の、私のせいで……」
「っ！」

刹那、クライスが拳を固めた。

「許せ、ウエンディ……」

「……え」

「式裂流、絶架ぜっか」

ドシン、と鈍い音が響き、クライスの拳がウエンディの腹部に叩き込まれた。

・
・
・
・
・

黒い光に照らされた森を走っている影が四つ……クライス、シュウ、ルーシィ、ヒビキだ。

クライスは気を失っているウエンディを背負っていて、ルーシィ達に合わせて走っていた。

そこにエルザの姿はない。

ウエンディがジェラルドという名を呟いたと同時に、いつの間にか姿を消していたのだ。

「そろそろ聞かせてもらえるかしら、なんでウエンディにあんなことしたの？」

「……………」

シャルルが怒ったように言うが、クライスは答えない。

なにかを押さえ込んでいるような表情に、ヒビキが、まさか、と呟いた。

「クライス君、まさか君は……ニルヴァーナがどんな魔法か知っているのかい？」

「……………ああ」

走るのをやめないまま、クライスは呟いた。

「正確にはさつき知っただけだな。あ、どうやってかは聞くなよ？ 説明が面倒だからな」

「そうか、だから君はウエンディちゃんを……………」

ニルヴァーナの能力、それは意識してしまうとより良くない方向へと人を導いてしまうものだった。

だからクライスはシュウやニルヴァーナを知っているらしいヒビキはともかく、シャルルやルーシイの前では話したくなかったのだが、こんな会話をしてしまえば言わざるを得ないだろう。

案の定、端から聞いていればわけのわからない会話にルーシイとシャルル、シュウまでもが割り込んだ。

「ちょっと、あんた達だけで自己解決しないで私たちにも教えなさいよ」

「そうよ。エルザもいなくなっちゃうし、これ以上わけのわからないことを増やさないで！」

「ん……私も、気になる」

少女たちの言葉にクライスは小さく溜飲し、ヒビキを振り向く。

仕方ないよ、とでも言いたげな彼の顔を見てクライスはもう一つ溜飲を落とし、話し出した。

ニルヴァーナは光と闇を、人の心に置き換えれば善と悪をいれかえる魔法。だが、あくまでそれはニルヴァーナという魔法の最終段階だ。まだその段階ではないが、今のニルヴァーナが無害かと言ったらそうではないく、光と闇の狭間にいる者を逆の属性にする。たとえば、憎み、妬み、怒り、などの強烈な負の感情を持つ光のものは……闇へと墮ちる。

そこまでクライスが説明するとシャルルがハツとしたような様子で、

「じゃあ、あんたがウエンディを気絶させたのは……」

「自責の念も充分負の感情だ。落ち着かせようにもあの時のウエンディはなんだか瞬く間に入れ替わる状況のせいで落ち着いて物事を考えられるような状況じゃなかったから……。あのままじゃウエンディは闇に墮ちるところだったんだ」

そう、と小さくシャルルが呟いた。

ウェンディは気が小さく、その上すっかりした性格も手伝いそのような面を感じなくてもいい責任まで感じてしまっことがたまにあった。

日常で起きていた程度のことならともかく、今回はことがことなだけにあそこまで強烈な負の感情を持つてしまったのだろう。

幸い、ここにいるメンバーの中には負の感情を持っていない。本格的に誰かがニルヴァーナを操らない限り闇には堕ちることはないだろう。

「そのニルヴァーナが本格的に起動したら、あたしたちみんな悪人になっちゃうの?」

「待ちなさいよ、それじゃあ闇ギルドにいるような奴らが逆に善人になるってことじゃない」

「そうゆうことも可能だろうね。でも、ニルヴァーナの恐ろしいところはそれを意図的に操れることなんだ」

ルーシィとシャルルの言葉にヒビキがわずかに俯きながらいった。そう、まだ起動してすらいらない状態でニルヴァーナは光と闇を入れ換えることができる。

そして完全に起動したら、それを意図的に起こすことができるのだ。

「たとえばニルヴァーナが正規ギルドに使われたとしたら、身内の無意味な争い、いや、酷ければ殺し合いなんてことも起きるかもしれない。しかもそれが多数のギルドに使われたら……それこそ戦争になる」

「……………」

争い、殺し合い、戦争と物騒な言葉の羅列にルーシィは絶句して

しまった。

「……そんなことになったら大変なことになる、急ぐぞ」

クライスの言葉に全員が頷き、さらに走る速さを早めた瞬間、

「あれ？　ねえ、あれってもしかしてナツとグレイじゃない？」
「なんだと？」

ルーシイが指差していたのは流れの緩やかな川。

確かに見てみれば、ナツとグレイがイカダの上にいる。

ただし、グレイはナツをイカダの上で踏みつけ氷の槍を突き刺さ
んと振り上げていた。

「な、なによあれ！　開け、人馬宮の扉『サジタリウス』」
「お呼びでありますか？　もしもし！」

間一髪でルーシイが呼び出した精霊（？）サジタリウスがグレイ
の槍を矢で射抜いた。

それによつてこちらに気づいたグレイが多数の槍を放つがそれも
すべて矢で射落とされた。

「なにやってるのよグレイ！」
「る、ルーシイ……ウブツ！」
「名前呼んでから吐きそうになるのやめてくれないかしらあ！？」

乗り物が極端にダメなナツは酔いで自由が効かないらしくグレイ
が足をどけても立ち上がる様子はなかった。

ルーシイに続きクライス達も駆けつけるが、

「はっ、うつせえんだよお前ら、ウゼエっての。こいつ片付けたら相手してやつから邪魔すんじゃねえよ」

と、決して仲間に向けるものでない対応をするグレイ。

暗く闇のある表情は普段の彼とはほど遠く、まるで闇ギルドのメンバーかと思間違うほどだった。

「な、なによこれ、まさかグレイが闇に落ちちゃったの？」

「ニルヴァーナの影響で闇に堕ちると、ああなってしまうのか……」

「あれ、見て……」

シユウが示す先には、氷付けにされたハッピーの姿。それを見てジロリ、とクライスがグレイを睨んだ。

「グレイから見たルーシー……ギルドの新人、ルックスはかなり好み……少し気がある」

「えー!? な、なによそれ……!」

場違いなグレイの言葉に、ナツが殺されかけていたこともハッピーが氷付けにされているのも一瞬で頭から飛んだのか真っ赤になるルーシー。

当の本人であるグレイは、そんなことを言ったにも関わらず相変わらず暗い笑みを浮かべていた。

「見た目によらず純情、精霊魔導師……ほう、精霊魔導師か」

「え……?」

グレイの笑みがさらに深くなったかと思うと、一瞬で氷の円形刃のようなものを造型しルーシーに投げつけた。

高速回転をする氷……氷といえど、それは完全に凶器と化しルー

シイを切り裂かんと飛翔していく。

「ちっ……」

音速でルーシイと氷の刃の間に移動したクライスが足だけの動きで重厚な氷を砕く。

ウエンディを背負ったままだったが、彼女の小さいからだはクライスの背とゆったりとした和服の影に隠れ破片すら当たっていないかった。

「相変わらず、ヘドが出るようなことをしてくれるな……」

クライスは朱に輝く右目でグレイを見据え冷たく吐き捨てる。

「グレイから見たクライス。黒い奴、見たこともない魔法を使う、ロリコン」

カチン、と空気が凍った。

氷の造型魔導師だからというわけではなく。

ついでに言葉の意味がわかっていないシャルルとシュウ以外も固まった。

「……とりあえずグレイは後でぶつ殺す！」

「お兄ちゃん、怒ったら、悪い人になっちゃっ……」

判っていないだけに普通に接するシュウ、わかっていたらいたでさらに微妙な空気になりそうだが。

クライスはシュウの言葉に何とか理性を保ち治し何回か深呼吸をする。

「ちつ、やっぱり情報不足か。上書きしなきゃよかったな……」

意味のわからないことを呟き続けるグレイ。

「なんだか様子がおかしいわね……ニルヴァーナの影響ってこうゆうものなの？」

「そっか……闇に堕ちるのは善と悪とで心が揺れ動いてる人……グレイがそんな感情に揺れ動くはずがない……あんだ、誰！」

「ククク……ピーリッピーリッ……！」

ルーシイが指摘すると同時に、グレイが奇妙な笑顔を浮かべながら煙に包まれた。

煙が晴れると同時に姿を表したのは、指摘した本人であるはずのルーシイだった。

「あ、あたし!？」

驚くルーシイを、まったく同じ顔をした？ルーシイ？がやはり不気味な笑みを浮かべながら見ていた。

「君、頭悪いだろ？ こんな状況でルーシイさんに変身しても僕たちが騙されるはずがない」

「ヒビキの言う通りだ。むしろ戦闘能力が低いルーシイなんて……僕なら一瞬で切り殺せるが？」

「……で、できれば私の目の前で私を殺すのはやめてほしいんだけど……」

ここにいたなかで一番戦闘に向いていないのはウエンディだが、ルーシイも精霊魔導師である以上それほど戦闘ができるわけではない。

精々鞭を振り回すくらいだ。

もし目の前の？ルーシィ？が精霊魔法を使えたとしてもクライスやシュウの力や速さなら精霊ごと薙ぎ倒してしまうだろう。

「そうかしら？ 男ってのは女に弱いでしょ？」

そついつて？ルーシィ？は無造作に自身のタンクトップを捲り上げた。

ポインッ

……表記するのが躊躇われる効果音がしそうなほど豊富な乳房がルーシィ本人と多数の男子達の目の前にさらけ出された。

とうぜん、ルーシィは涙を流しながら絶叫し、ヒビキとサジタリウスは驚きながらも嬉々とした笑い声を上げるといふ奇妙な状態に陥っていた。

ただ、クライスだけは途端にイカダの上のナツのように気分悪そうに膝をついていた。

「雄ども……つてクライス？ どうしたの？」

「お兄ちゃん？」

ヒビキとサジタリウスがルーシィに蹴り飛ばされて回転しながらすっ飛んでいくのを後目に、クライスは口元に手をやって今にも吐きそうな様子だった。

まさかタンクトップを持ち上げた瞬間にクライスが何かされたのか、とシュウとシャルルが焦りの表情を浮かべた。

クライスが受けてしまうような攻撃ならシュウやシャルルには見えないだろう。だから彼女たちにクライスがなぜ苦しんでいるのかは判らなかつた。

「…………グツ…………グウツ…………ハア…………大丈夫。心配するな、二人とも」

そうは言ったが、苦々しい笑みを浮かべるクライスは二人の目にとてもじやないが大丈夫そうには映っていなかった。

「精霊情報収集完了…………へえすごい、結構鍵持ってるんだ」

ルーシィに蹴飛ばされて付していたヒビキやサジタリウスが体制を建て直していた間に？ルーシィ？は本来の目的を達成していたらしい。

「精霊王に謁見まで？ 魔力の割には中々やるね…………まあいいや…………それじゃサジタリウス？お願いね？」

次の瞬間、クライスとヒビキにいく本もの矢が殺到した。

クライスは通常の衣服ではあり得ない繊維を使った着物と人外の身にその程度の攻撃は通らなかつたがヒビキは防御が間に合わず軽くはない怪我をおってしまった。

普段なら一つ残らず掴み取れさえるであろうその攻撃をクライスがあっさり受けてしまったということは、今の具合の悪さは尋常ではないということだ。

「サジタリウス!？」

「な、なによこの裏切り馬!」

「……………よくも、お兄ちゃんを……………!」

突然の裏切りに驚愕の声が上がる。

シユウに至って確かな怒りを浮かべながらはブラックシューター

を取りだしサジタリウスに向けている。

だが、もつとも驚いているのはサジタリウス本人だった。

「ち、違いますからして……某は、こんなことしようとは……」
「……こんなことまでできるのか」

ヒビキはまだ無理そうだったが、気分が悪そうにしながらもクライスがなんとか立ち上がった。

サジタリウスに銃口を向けているシュウに目線でやめると伝えながら？ルーシイ？を睨む。

「あんたがコピーできるのはコピーした相手のほぼすべて、それでルーシイの精霊を操ったな？」

「え、そんなことが」

「ええ、できるわよ。今のあたしは？ルーシイ？と同じことができるのよ」

ちっ、と小さくクライスが舌打ちをした。

多少気分が悪くてもサジタリウスの矢を避けながら？ルーシイ？を斬るのは簡単だ。だが、そうするとウェンディが危険になる。それに？ルーシイ？を？操っている奴？が出てきたら怒りで闇に墮ちるかもしれない。最低の状況、ここは最初の教訓を生かし引くべきかもしれない。

しかし、無情にもクライスにも矢が襲いかかる。

「ん……！」

ギリギリでシュウがブラックシューターを盾のように構えながらクライスとの間に割り込んだ。

ヒビキとルーシイもヒビキの魔法で矢の雨を防いでいた。

「ルーシィ！ 悪いが僕は戦えそうにないしウエンディもいる……
あいつを頼めるか!？」

「ううん……わからない、けど！ 今はウエンディを連れて逃げて
！」

「悪いな……シャルル、シュウを頼む」

「ええ、早く行きましょ！」

「ん！」

短く会話を交わすと、あたりに飛び散る矢の勢いで舞い上がる土煙の中クライス達飛び出し、青い空に溶けるように彼方へ飛び去っていった。

苦悩（後書き）

感想、アンケート共によろしくお願いします

ジェラール(前書き)

今回は少し短めです。

ジェラール

「……日が傾いてきたな」

樹海から飛び出た岩の一角で僕は淡いオレンジ色の光を放ち始めた日を見つめながらポツリと呟いた。

あの場をルーシイに預けてから数時間が経過した。

僕はすでに吐き気から解放されてはいたが、ウエンディはまだ目を覚ましていない。

式裂流？絶架？……人間の体内を走る神経に特殊な振動と衝撃を与えることで急激な睡魔を引き起こす式裂流体術の一つ。

効果としては、相手を眠らせるだけなので起きたときには逆に調子がよくなるという敵を傷つけずに混沌させる技なのでこのまま目覚めないことはないだろうが、ウエンディほど小さな相手に使ったことはなかったのでいつ起きるのは正直わからない。

「……おにいちゃん？」

「シュウ？ ああ、悪い。起こしちゃったか」

ちなみに眠っているのはウエンディだけでない。シュウは今起きたが、シャルルも寝ている。

どうせすることもないなら体力を回復しておいた方がいいだろうということだ。

意外にシュウの寝相が悪く何度か落ちていきそうになったのを僕が掴み止めたのは余談である。

そのせいで僕はあまり寝ていないんだけど……オラシオンセイスがこないか見張る必要もあったからもとから深く眠るつもりはなかったが、途中からかわいい寝顔をしたまま崖からダイブするシュウ

を止めるといふ目的に変わっていた気がする。

腕を組んだまま全く動かずに眠るシャルルを見習えとは言わないが、むしろ疲れるような気がする。せめて多少寝返りを打つ程度にしてほしい。

小さい方の姿とはいえ、この狭い空間ではすぐに地上にまっ逆さまだ。

「……ちがう。もう、充分」

「そっか。でもウエンディとシャルルが起きるまでは動けないからもう少し休んでいいよ」

「……わかった」

そう言いながら僕に近づいてきてコテン、と小さな頭を僕に傾けてピツタリと張り付いたまま動かなくなる。

起きてるときはあまり動かないのになぜ寝ているとあそこまで動くのか、ある意味なぞだ。

いや、起きてるときに動かないから寝ているときはあんなに動くのか？

そのまましばらく沈黙が続く。

横にいるのがシュウじゃなかったら多少の会話があるだろうが、シュウはあまり饒舌に話すタイプではないので別に険悪な状態なわけではない。

そのお陰であまり感情の起伏も、表情を読まなければならないが……。

「……おにいちゃん」

「うん？ どうした？ シュウ」

あまり話さない、と考えていた途端に話し出すものだから危うく声が裏返りそうになりながらもなんとか答える。

僕は胴長ではないが、立てば僕の腰のあたりに届くか届かないかである今のシュウの身長では自然に見下ろすかたちになる。

その先には、全くでなくともほとんど感情の見えない蒼い瞳が。無表情というよりキョトンとしたような表情を間近で見つめてしまい、思わず吹き出しそうになるが、そのままシュウの次の言葉を待つ。

「……もう、へいき？」
「え？」

舌足らずな、でも鈴の音のように綺麗な声が紡いだ内容が一瞬判らなかつた。

でも、すぐにシュウが言おうとしていることがわかつた。

キョトンとしたような表情だつたのが、わずかに、本当にわずかに変化して心配そうなものになつたのだ。

そういえば、ここに来たのは僕にしてみれば？ルーシー？……ジエミニを操ってシュウとウエンディの心身を傷つけたエンジェルを見て怒りで闇に墮ちる可能性があつたからだが、シュウにしてみたら僕が異常な気分の悪さにやむを得ず退いたのだと思つているのだらう。

普段は、いや、今までまかつたことだけにシュウが心配するのも無理はない。

「ああ、もう大丈夫。休んだからいつもより調子がいいくらいだよ」
「……よかつた」

柔らかい笑顔を浮かべるシュウ。

……グレイが僕をロリコンと考えているようだが、ぜひシュウの笑顔を見せてやりたい。

いや見せたくはないけどたぶん見たらグレイとて普通に流せはし

ないだろう。

シュウの笑顔はどんなものにも例えられないほど愛らしく、まるで魅了の魔法のように引き寄せられるものだ。

そう、たとえるならどこぞの合法ロリアニメ、名前は出さないがして言えばド派手なヘアカラーをした小学生が高校生のコーチとともにバスケをするアニメに出てくる？イノセント・チャーム？という異名を持つ彼女と同じ、いや、それ以上のものだ！

……この長つたらしい例え、転生前の本屋以来の気がする。

僕が頭の中でそんな葛藤をしているとはいざ知らず、シュウはまた無表情に戻り目を細めながら夕日を静に見つめていた。

「……ううん……あれ、クライスさん？」

「お、ウエンデイも起きたか」

くるまっていた僕の着物の下からウエンデイが這い出してきた。座って寝ているシャルルはともかく、シュウやウエンデイをそのまま岩の上に寝かせるわけにもいかず僕が着物を脱いで布団のように敷いていたのだ。

まあ、シュウは転がり出るしウエンデイは掛け布団がないのが気に入らなかつたのか着物の中に潜り込んでいたが。

「……あれ、これって……」

ウエンデイが自分を包んで（自分で自分を包んだのだが）いたものがなにか理解したのか驚いたように着物の上から跳ね退いた。

「す、すいません！ こ、これ、クライスさんの……」

「いいんだよ。僕がやったんだから」

あわあわ言いながらもウエンデイは手早く着物を持ち上げ土ぼこ

りを払う。

何でできているのかは知らないが、あれはかなり特殊なものらしく、物理攻撃はほとんど通さないくらい頑丈だし、汚れても払うか水に濡らすかすれば一瞬で綺麗になるし、言っただけで着る相手に合わせてサイズが変わったりもする。

それでもウエンディは念入りに土を落とし、簡易に折り畳んで僕へと差し出してきた。

「えと、ありがとございました」

「いいよ、礼なんて。それより悪かったな、いきなり殴って」

「え？ ……あ、いいですよ、クライスさんなりの考えがあったんですよね？」

「まあ、ね」

ウエンディが差し出していた着物を受けとり簡単に着直す。

着直すといっても、袖は通さず紐で着物が腰布のように引っ掛かっているだけだ。

「ウエンディ、あのときニルヴァーナが復活したのは自分のせいだって考えてただろ？」

「っ……はい」

嫌なことを思い出してしまったような、辛そうな表情をしながら細くそう呟くウエンディ。

「私が、ジエラルルを復活させたからニルヴァーナが見つかったやつたんですよ？ だから……」

「だけど、ウエンディだけのせいじゃない。僕がちゃんとウエンディを守ってあげられたら、そもそもこんなことにはならなかったんだから」

「……わたしも、おねえちゃんを、助けてあげられなかった」
「……………」

体育座りをしたままウエンディは自分の膝に頭を埋めてしまう。
一瞬、また自責して闇に堕ちてしまわないかと心配したが時間がたつていくらか落ち着いたお陰かそれは杞憂に終わった。

「……私、こなければよかったのかな……」

ウエンディが独り言のように小さく呟く。

確かに、この作戦に志願したのはウエンディだけで僕やシュウやシャルルはある意味勝手についてきただけだ。

ニルヴァーナがこんなに早く見つかったのも、連合軍が散り散りになってしまったのも、確かにウエンディが連れさらわれたせいだ。

悪く言えば少なからずすべてにウエンディが関係しているとも言える、でも、だからといってそれがすべてウエンディの責任であり、足手まといであるということにはならない。

「なにいつてんだよ、ウエンディがもしこの作戦にいなかったら、今ごろエルザは死ぬか腕を一本失ってたんだぞ？」

「……でも、ニルヴァーナも見つかりませんでしたよ？」

「そんなわけないだろ。遅かれ早かれ、この森にあることがわかってたんだから見つかってた……シュウ？」

いきなりシュウが立ち上がり、ウエンディの目の前まで移動した。伏せていたウエンディは自分に誰かの影が落ちたのが判ったのがゆっくりと頭をあげた。

「……ん」

「え、な、なに？」

そして何故かウエンディの頭を撫で始めたのだ。

ウエンディとも結構身長差があるシュウだが、さすがにウエンディが座っていていればシュウの方が目線は上であるため苦なく撫でている。

僕もウエンディもなんでそんなことをしているのかよくわからず、キョトンとしていると、しばらくしてシュウが撫でていた手を引いた。

「シュウ、ちゃん？」

「……だったから……」

「え？」

「……おにいちゃんが撫でてくれると、うれしい気持ちになれた……」

「……おねえちゃんも、同じみたいだったから……」

「……」

意外なシュウの発言に、僕とウエンディはしばらく絶句していた。

悪い意味でなく、予想外のシュウの考えに驚いてだ。

僕はウエンディやシュウの頭をなにかあると癖のように撫でていたが、まさかシュウがそんな風に考えていたなんて思いもよらなかった。

僕は撫でるたびに微かにだけ笑うシュウを見るのが楽しくて撫でてただけだったんだけど、なるほど、だからか……。

納得して振り向くと、キョトンとしていたウエンディがいつのまにか笑っていた。

「ありがとう、シュウちゃん」

「……げんき、でた？」

「うん」

予想外のことではあったが、ウエンディが笑顔に戻ってくれてよかった。

どんなに辛くても、笑ってさえいればネガティブな感情に囚われることはないだろう。

今なら、切り出しても大丈夫かな……。

「なあ、ウエンディ」

「なんですか？」

撫でた後、僕と自分の間に座ったシュウを逆に撫でてあげながら答えるウエンディ。

「ジェラールって、誰なんだ？ 恩人とか言ってたが……」

「……ジェラルルのこと、ですか？」

声が少し小さくなったから聞かれたくないことなのかと思ったが、ウエンディはどこか昔のことを思い出すような表情をしていた。

恩人というからには昔、何かしら助けてもらったようだが、あのときジェラルルを睨んでいたナツを見る限り、どうみても人助けをするな人物とは思えなかった。

「……七年前、グランディーネが姿を消して私は一人、路頭に迷ってました。その時助けてくれたのがジェラールなんです」

たしかウエンディは今十二歳のはず、七年前といえば五歳……グランダイーネ、あんたは五歳の子供を置いて消えたのか？

ジェラルルが助けてくれなかったら今ごろウエンディは……いや、考えるのはよそう。

「つまりジェラルルはウエンディにとって命の恩人ってわけだ」
「はい……それで、一月くらいあてのない旅をしてたんですけど、とつぜん変なこと言い出して……」
「変なこと？」
「……たしか？アニマ？とか言ってた気がします、クライスさん？アニマ？って知ってますか？」
「アニマルなら知ってる」
「それは動物です！」
「すみません……」

「？アニマ？か、こちらではもちろん、前の世界でも聞いたことのない単語だ。」

「シユウは知ってるか？」

「……わかんない」

記憶喪失なのに知っているとされた暁にはどうしようかと思ったけど、やはり知らないらしい。

少し残念そうな表情を浮かべるウエンディだったが、それですね、と話を戻した。

「ここからは危ないからって私を近くのギルドに預けてくれたんです」

「それが？化猫の宿？ってわけか……ジェラルルとは、それつきり？」

「はい。それつきり会ってませんでした。その後噂で悪いことしたってことは聞いてたんですけど、優しかったジェラルルがそんなことしたなんて信じられなくて……」

ウエンディの言う通り、今の話を聞く限り？ジェラルル？という

人物が悪いことをするようには思えなかった。

だが、彼は……僕の予想でしかないが記憶を失っていた。

その後の人格がどうなるか判らない以上、なんとも言えなかった。

「……ジェラルル、私のこと忘れちゃったのかなあ？」

伝えるべきか、止しておくべきか……。

別に伝えてもいいのだが、言った瞬間にまた落ち込まれても困る。今はやめておこう。

できるだけ今は負の感情を感じさせない方がいい。

「大丈夫さ、ウエンディの知ってるジェラルルはきつと悪いことな
んかしてない」

「……そうですよ、あのジェラルルが、そんなこと……」

そう言いながらも寂しそうな表情をするウエンディを見て、僕は
ため息をつきながら手を伸ばした。

「あ……」

「シユウが撫でてくれただけじゃ足りなかったのか？」

「……たりなかった？」

「そ、そんなこと……ない、けど……」

僕の言葉に反応したシユウも撫で始め、二人に撫でられて流石に
恥ずかしくなったのか顔を真っ赤に染めるウエンディ。

これはこれで面白いな、またやろう。

そんなことを考えながら、僕とシユウはしばらくウエンディを撫
で続けた。

.....

異変は唐突に起こった。

「……………！」

「ん……………？　どうかしたのか、シュウ」

あとはシャルルが起きるのを待つだけとなりウエンディもシュウも起きたので浅く眠っていると僕に体重を預けてジツとしていたシュウが唐突に立ち上がるのを感じ意識を覚醒させる。

シュウが見据える先にあるのは相変わらず？　白い？　光を天に放つニルヴァーナが……………ちよつとまで？　白い？　だと？　たしかニルヴァーナは黒い光を放っていたはず。

「ウエンディ、何があつた？」

「え？　えつと、さっきまで黒かつた柱がいきなり白くなって……………それをみたシュウちゃんがいきなり……………」

黒い光が？　白い？　光に変わったのは確からしい。

もしかして、と思ひ？　右目？　を発動させた。

魔力、魔法を一瞬で解析、分析、理解してしまう朱の五芒星で白い柱を見る。

見て、理解する。

理解して、驚愕した。

「ウエンディ、シャルルを起こして」

「え？ いきなりどうしたんですか？」

「ここを移動する」

よくわからなそうにしながらもウエンディがシャルルを起こしにいく。

「あれがヤバイものだって判ったのか？」

「……なんとなく、だけど」

シユウにはなにか隠された力があるんじゃないかと度々思わされる。

実際あるのだろうが、本人はそれを判らないなりになんとなくこなしているのだから毎回驚かされる。

故意的に使えるようになったら負けるかもな、なんて考えているうちにシャルルが起きたらしい。

「……うう〜ん、なにかあったの？」

「随分呑気だなシャルル」

「起きたばっかりなんだからしょうがないじゃない。で、どうしたの？」

「言いづらいが、どうやらニルヴァーナが完全に起動したらしい」

僕の言葉に全員が驚くのとほぼ同時に、森が動き出した。

正確には森の？下？にあるものが森を押し退けようとしているのだ。

僕たちのいるこの岩の下にもそれはあるらしく瞬く間に亀裂が入る。

「ちっ、いったん跳ぶぞ！」

「わかつ　きゃあ!?!」

ダンッ、と僕が足を踏み鳴らすと強風が全員を巻き上げた。

風の魔法で突風を巻き起こして跳ね上げたのだ。

「あれ?の影響が来ないところまで上昇したところで僕の黒いエーラを発動させ停止する。」

「ちょっと！　いきなりやらないでなにか一言言ってからやりなさいよ！」

「悪い、余裕がなかったんでな。それより、見る」

地面を割り、その下から出てきたのは六つの足を持った岩の化身物だった。

中心に古代都市を連想させる町のようなものがあり、そこから巨大な六つの足が伸びている奇妙な姿をしていた。

「これが、ニルヴァーナ……」

ウエンディがうわ言のように呟いた。

当然だ、いくらニルヴァーナが強力なものだと聞かされていたとはいえ都市一つを内包するほどの物だとは考えてもいなかった。

僕が本気で破壊しようと思っても一時間近くかかるかもしれない。

「……こわすの、ムリそう」

「だな。できなくはないが、かなり時間がかかりそうだ」

シユウも同じ考えのようだ。

そうこうしている内にニルヴァーナが歩き始めた。

「歩くのかよあれ!？」

「クライスさん! そんなことより急がないと!」

「わかつてる」

バサアツ、と黒い翼を羽ばたかせニルヴァーナに急接近する。

エーラでは地上を走るほどスピードは出ないがニルヴァーナはそれほど速くはなかったため容易に追い付くことができた。

飛んだまましばらく誰かいないか探してみたが連合軍はおるか、人っ子一人見つからなかった。

シユウ達も探してくれたが結局見つからず、いつまでも飛んでいても埒があかないのでひとまず都市の一部に着地した。

「ふう〜、にしても……これからどうする?」

「……こわす?」

「はい恐ろしい一言をどうも」

なんかこの作戦が始まってからシユウが好戦的になってきた気がする。

「壊すのは無理かもですけど、なんとかしてこれを止めないと」

「そうね、これがこのまま町に出るだけでも大きな被害が出るわ」

こんな巨大な物が町にまで出たら、たしかにそれだけでとんでもない被害が出るだろう。

それに付け加え、町なんかでニルヴァーナの善悪反転魔法を使われたら……盗みや殺しが合法化されたとんでもない未来しか残らないだろう。

しかし、止めるのはいい。僕とシユウが全力で暴れるだけでもこの程度の動く町を破壊し尽くすのは造作もない。それこそ、赤子の

手を捻るが如しだ。

だがこの動く町がどのようにニルヴァーナを発動させるのか判らない以上、無闇に破壊すれば逆効果かもしれない。

どうする、と途方に暮れながら、ふと、ニルヴァーナの進行方向に目を向けた。

そこで、違和感に気づいた。

この町は、どこに向かって歩いている？ 目的もなく動いているのではないとしたら、こんな奥地に進む理由はないはずだ。

「ぐ、偶然よね……そんなこと、あるはず……」

僕が気づく前に、シャルルが気づいたらしい。

ウエンディとシュウはまだ判らないらしくシャルルが挙動不審に歩いていく姿を何事かと不思議そうに見ている。

「シャルル、どうしたの？」

「この方角……このまま進めば……私たちのギルド（化猫の宿）があるわ」

「え……？」

そう、この先には僕たちのギルド、化猫の宿がある。

直線には何も無い、化猫の宿を越した先にも何も無い……だとすれば、消去法でこのデカ物は化猫の宿に向かっていていることになる。何故、とか、なんの目的で、とか、今はそんなことを問う必要はない。

これ（ニルヴァーナ）で出来ることは二つ……精神の破壊か、物理的な破壊のみだ。

「お兄ちゃん……」

「そうだね、シュウ」

いつの間にか戦闘体制だったシュウの言葉を皆まで聞かず、白い刀を引き抜きながら答える。

『……壊そう、これ』

刹那、蒼の光の爆撃と白い無限の刀が町を蹂躪し始めた。

白い刀がすべてをバラバラに、蒼い光がすべてを粉々に……壊し、破壊し、消していく。

二人の魔導師が行っているとは到底考えられない、圧倒的な破壊。夕日を反射するオレンジの刃と、薄暗い町を照らす蒼い光。音と瓦礫がなかったらさぞ美しい光景なのだろうが……今行っているのは単なる破壊である以上、美しいどころかむしろ、恐ろしい。

というか、何より破壊しながら無表情な少年少女がなにより恐ろしい。

「やめなさい！」

スパーンッ！

破壊の中で、やけに響く音。

どうやらシャルルが僕とシュウの後頭部を叩いたらしい。

あの手からどうしてそんなスリッパの裏で叩いたような音がしたのかはさておき……。

とりあえず冷静になってみると、辺りはほとんど瓦礫の山になっていた。広さで言えば大体サッカーコート二面分くらい。

「なに無意味なことやってんのよ！ こんな大きな物相手にそんなしてたら日が暮れるわ！」

「暮れてるけど？ え、なに、まさかもう暮れそうなのにそれまで

に終わらせると！ まったく、シャルルも無理言っな。よし、再か」

「子供みたいな言い訳しないで誰か探しましょ、きつともっと効率よくこれを止める方法があるはずよ」

「……わかったよ、たしかにこの方法じゃ壊れる前にギルドに着いちまうしな。シュウも、いいな？」

「……ん、わかった」

一瞬本気で破壊しようとしたのは本当だが冷静になってみればここからギルドまでの距離と、ニルヴァーナの速さを考えるとかなり無理がある。

ため息をつく。

時間は少ないが、焦るほどではない。むしろ焦ると時間が無駄になる。

制限時間は少し心もとないけど、それでも、僕たちのギルドをやらせないために、なんとしてもニルヴァーナを止めてやる……。

しばらく歩く。

歩く、といっても無駄に歩いているわけではない。

今、僕の右目は朱色に輝き、感覚は周囲百メートルくらいに広がっている。

目を使わなくても感覚だけで探り当てることも可能だったが、これが意外に体力を使うのだ。

最大で一キロ強まで探れるが、一瞬だけの上、結構神経が削られる。

後々のことも考え今に至ったわけだ。

「見つかりませんね……」

ウエンディがポツリと呟く。

いくらニルヴァーナが広いと言えど、たしかに全然見つからない。感覚でも探りをいれているのだから……まあ、運が悪いだけだろう。

「悪いな、ウエンディ。一生懸命探してるんだけど……いないな。今日は運が悪いのかも」

「そんなこと言って、本当にちゃんと探してるの？」
「シャルル！」

ウエンディはシャルルにたいし怒っていたが、それも仕方ないかな、なんて僕は思っていた。

人探しくらい僕力ならすぐだろう……とは思っていたが、いざやってみるとなかなか難しい。

感覚もそうだが、なによりニルヴァーナの上というのがなにより厄介だ。

転生して、僕は魔力というものを感じ、使えるようになった。式裂流の技や感覚が使えなくなったわけではないが、どうもそれら？ 魔力？ に引つ張られる傾向がある。

現に今もニルヴァーナから発せられる魔力によって感覚が結構狂ってしまっていた。

右目にしても邪魔な情報が重なりあってしまい、なにがなんだかよく判らない。

そんな風に僕が四苦八苦しているとウエンディが、あれ？ と小さく呟いた。

「どづしたウエン」

——ッ——ッ——ッ——ッ——ッ——

どこかで竜が叫んでいる。

そんな錯覚に陥りそうな程の大絶叫、それがいきなり響いてきた。

「ナツさん？」

「うるさいわね……」

うるさい、というかこの大爆音の叫び声は、はたして本当にナツ一人のものなのだろうか？

黙視ではもちろん、相当広げているはずの感覚に反応がないということは、あいつは何百メートルもの距離にいる僕たちにまで届く絶叫をあげたということだ。

近くにいたら鼓膜が破けるぞ……。

「今のがナツだってことは、ルーシィやヒビキも無事ってことか……」

「みんながいるかもしれませんし、行ってみましょう！」

「とりあえず、そうだな。行こう」

まるで迷路のような都市の中、僕たち仲間を探し真っ直ぐと駆けていった。

目覚めたる狼（前書き）

僕が執筆している小説の中で初のお気に入り登録100件突破！

さらに10万PV突破！

読んでくださったみなさまには感謝してもしきれません。

本当にありがとうございます！

そしてこれからもどうぞ愛読をよろしく願います。

目覚めたる狼

「みなさーん、大変ですー！」

都市の中を走ること数分、今までの苦勞がバカらしくなるほどあっさりルーシー達を見つけることができた。

見つかったのは、見つけるヒントともなった獅子吼を上げたと思われるナツ、レーザーと戦っていたはずのグレイ、あとウエンディを探すために解散したあと一度もあつていなかったジユラ。

ナツは乗り物酔いのためか気分が悪そうにしているが他のメンバーは大きな怪我はないようで走ってくる僕たちを振り返った。

「あ、ウエンディ！ それにクライス達も！」

「探したよ。ルーシー、ここにいるってことは……エンジェル倒せたのか？ あんたあんまり戦いが得意そうじゃなかったから不安だったんだけど」

「え？ ああ、なんとかね。なんか、あたしの知らない間に終わってたけど……。それにヒビキとも別れちゃったし」

「そっか？ でも、無事でよかったよ」

「クライスさん！ そんなことより……！」

「あ、そうだった」

全員がここにいるんだからエンジェルにしるレーザーにしる倒されてはいるんだろう。

確認は後、今はそんなことよりこの都市のことだ。

「なにかあったの？」

「それが、この都市が僕たちのギルド……ケットシエルターに向か
つてみたいなんだよ。あんたら、これの止め方知らないか？ 壊
すにしても時間が」
「そのことなら大丈夫みたいだ」

（何故か半裸の）グレイの言葉に対し、なにを根拠にして、と言
おうとした瞬間横で小さく悲鳴が上がった。

つられるようにそちらに目を向けてみるとそこにはボロボロにな
っているブレインの姿があった。

そういえばここに来るまでも戦闘音のようなものが聞こえてきて
いたが、これだったのか。

辺りを見回すと砕けた岩や明らかに辺りのものと違う岩が大量に
あることから推測するに、ブレインを倒したのはおそらくジユラだ
ろう。あんな見た目をしていても一応？ 聖十？ という大それた称号
を持っているだけあるということか……。

「じゃあ……」

「おそらくニルヴァーナを操っていたのはブレインよ。操る人がい
なくなればこの都市も止まるはず」

「……気に入らないわね。結局ケットシエルターが狙われた理由は
判らないの？」

嬉しそうなウエンディとは裏腹にシャルルが納得のいかなそうな
声をあげた。

たしかにそうだ。

ブレインがわざわざケットシエルターを狙った理由……あんな小
さなギルド、それも対した収入があるわけでもなく自給自足でたま
に依頼が来るくらいにあんな小さなギルドを狙う理由はなんだった
のか……。

金目的ではないだろうが、善悪反転魔法を使うにしても こう

ゆづのもなんだが　もつと人が多く戦闘に特化したギルドの方がやるとしたら最適だろう。

あまり詳しくはないけど、多分ケットシエルターより近いギルドだつてあるはずだ。

それでもわざわざケットシエルターを狙う理由。

マスターならケットシエルターについてなにか知ってそうだけど、あいにく僕にしるウエンディやシャルルにしる、もちろんシユウもケットシエルターの？詳しいこと？は知らないのだ。

よくわからないが、いやな予感がする……。

「多少気になることはあるが、これで終わるのだ」

「……だといいけど」

ジュラの言葉にポツリと呟いた僕の言葉はしかし、誰の耳にも届くことはなかった。

・
・
・
・
・
・

「どうなつてやがる……」

「なにこれ……」

「いやな予感ほど、当たるんだな……」

都市の中心に位置する巨大な建物、僕たちはそこにいた。

なんでもここは？王の間？というらしい。だが、地面はひび割れ、崩れ落ちてしまったらしい天井を支えていた柱は折れ、今は閑散としているそこが？王の間？だとは思えなかったが、何百年も前ならそうだったかもしれないという雰囲気だけはあった。

けど、それだけ。

ここ情報はリチャード……もとはオラシオンセイスのホットアイだったのがニルヴァーナの影響で善人になり教えてくれた情報に基づくものらしいが。

何もないこの光景を見る限りそれも怪しい。

「シュウ、なにか感じるか？」

「……………」

たまに僕以上に鋭くなるシュウなら、と考えたが返ってきたのは無言の否定。

……はたしてここに何かあるのか、それとも無いのか。

どうしようか……

「どっしりよう……」

僕の心の声と重なるように聞こえてきたのは、コブラと戦い毒を受けてしまったらしいナツとハッピーの治療をしていたはずのウエンディの声だった。

「どうしたウエンディ」

「それが、解毒の魔法をかけたはずなのにナツさんが……」

ウエンディの背後からナツを覗き込むと、たしかに苦しそうにしていた。

「……ウエンディ、ナツのそれは多分乗り物酔いだ」
「え？ 乗り物酔い？ ……あ、ならバランス感覚を養う魔法が効くかも トロイア」

そういうとウエンディは再びナツに手をかざし、柔らかな水色の魔力がウエンディからナツへと流れ込み苦しげだったナツの呼吸が落ち着いていく。

そして次の瞬間には、今まで苦しんでいたのが嘘だったかのように立ち上がった。

やっぱり乗り物酔いかよ、これ（ニルヴァーナ）で酔うって尋常じゃないだろ……。

乗り物に酔わないことが相当嬉しいのか空気を読まずにはしゃいでいるナツに苦笑いしながらも確認するように辺りを見回す。

やはり、なにもない。

そもそもここには魔力が流れてきてない。本当にここが中枢なのか？

「……なあ、本当にここが制御頭なのか？ そもそも、情報は正しいのか？」

「うむ、リチャード殿が嘘をつくとも思えん」

「ちよっと、止めるとか制御とか言う前にもっと不自然なことに誰も気づかないわけ？」

僕とジュラの会話に割り込んできたシャルルの言葉に一瞬間ができる。

ハア、と呆れたようにため息をついたシャルルがこちらを見る。僕に説明しろと……？

やな役回りだな、と僕はシャルルと同じように小さくため息をし、

「つまり、だ。仮定としてここが制御頭だとする。なら、どうして

操縦席とも言えるこの場所に誰もいないのにニルヴァーナは歩み続
けてるんだ？」

そう言った。

いち早く言いたいことに気づいたのはグレイで、血相を変えこち
らを見ながら、

「おい、ちょっとまって……まさかニルヴァーナは自動で動いてるっ
てののか！？ ニルヴァーナの発射まで設定されて！」

あくまで仮定として、だが、そうだったら最悪だ。

僕の目でもニルヴァーナの動かし方まで理解できる訳じゃない。
自動で動いているのだとしたらもう止める方法は皆無といってもいい。
動力源の魔力の流れを断ち切る、という手も考えたが魔力は都市
や足などの細部まで流れていて、重要な足は表面を魔力で強化した
岩が覆っているので間に合わないだろう。

「私達の……ギルドが……」

「心配するな」

ポン、と今にも泣き出しそうなウェンディの頭に手を乗せながら
小さく微笑む。

「クライスさん……」

「たとえば方法がなかったとしても……絶対に止めるから」

そう。

たとえ、？狼？の力を使うことになったとしても、必ず。

「ハア、ハア、ハア、ハア、ハア！」

暗い夜の闇のなかを走る人影、その人影は随分と焦っているように乱れた衣服を直そうともせず、一直線に猫の頭を模したような建物に駆け込んだ。

「みんな大変だー！ ニルヴァーナがここに向かってる！」

そして、その言葉にただでさえ落ち着きのなかった全員が啞然とした。

奇妙な衣装に身を包んだ者たち、クライスたちのギルド？ ケットシエルター？のメンバーだ。

連合軍にウエンデイを含めた四人が参加しているためただでさえ気が気でなかったところにそんな話が飛び込んできたのだ、騒然となるのは当たり前だろう。

「何！？」

「連合軍の作戦が失敗したのか！？」

「バカ言うなよ、あのエルザやジュラだけじゃなくてクライスにシユウまでいたんだぞ！？ 失敗するはずがない！」

「でも、ニルヴァーナはここに向かってるって……」

皆がざわめく中で、悠然と構える老人が一人。

？ ケットシエルター？のギルドマスター、ローバウルだ。

「マスター！」
「なぶら」

手元の酒瓶を傾けながら静かに答える。
落ち着いた雰囲気はやはりギルドマスターというべきか。

ゴクゴク……

『えーーーーー！？』

……落ち着いた雰囲気のまま、酒を注いだコップではなく、酒瓶かららっぱ飲みするローバウル。

見慣れた光景とはいえ、今この瞬間にやるとは考えていなかったギルドメンバーたちはそろって声をあげた。

「って、んな場合じゃない！ マスター！ ニルヴァーナがここに向かってるんだって！」

「何？ ……誠かつ！？」

『酒飲んでから喋れ！ てか聞いてなかったのかっ！？』

前言撤回。いや、全言撤回。

落ち着いていたのではなく聞いていなかったらしい。
マスターやってていいのかこの人。

「ニルヴァーナがここに向かって……これは運命か偶然か……」

と、酒を吐き出しながら喋っていた人物とは思えないほどに雰囲気が変わるが先程のこともあるので思考が表情のとおりかはさだか

ではない。

ローバウルが目を瞑りながら考え込んでしまつと長いことを知っているメンバーは、

「ウエンディ達が無事だといいたんだが……」

「ああ……いざつて時には俺達じゃ力になれないし……」

「でも、クライスとシュウがいたのにニルヴァーナがここに向かつてるなら……」

「おいおい、不吉なこと言うなよ！」

「けどこれは偶然じゃないわよ……」

「ああ、俺たちの？ 正体？ を知ってるやつがいたんだ」

「だからここを狙つて……？」

不安が不安を呼び、集団心理はそれを増幅させる。

クライスにシュウ……ケットシエルターの中では、いや、明らかに大陸でも上位に入るであろう魔導師二人がいたのに、ということもそれに拍車をかけている。

……まさかニルヴァーナが復活するまで揃いも揃って寝ていたとは思つまい。

ざわめきが広がっていき、一人が叫んだ。

「マスター、避難しようぜ。ニルヴァーナは結界じゃ防ぎきれない……」

そのとおりだ、避難しよう、とあつという間に皆が口を揃えてマスターに判断をあおぐ、否、すでにそうすると決めたかのように騒ぎ立てる。

その声を一挙に受け、しかしローバウルは、

「バカタレがアー!!」

たった一言で、そのすべてを否定した。
あまりの剣幕に騒いでいた全員が思わず押し黙る。

「アレを止めようと我らの仲間が、連合軍の者達が必死に戦っている。仲間の勝利を信じている我らがなぜ逃げる必要がある」

……なんてな。

ローバウルはさらにそう呟いた。

「時が来たのかもしれん……儂らの罪を清算するときがな……」

「やっぱり壊そうぜ！」

「こんなでかい物どうやってだよ……」

「壊すことは容易だけど時間が足りない」

「こ、壊せるんだ……」

「ん……できる」

三人よれば文殊の知恵、なにか案はないかと全員で話し合っ
てはみたが……やはりこれといったものはなかった。

止め方がわからない以上仕方がないことだった。

ジユラやナツやグレイもいるのだから五人がかりならとも考
えなかったが、それも微々たる差でしかないだろう。ただただ、
時間だけが過ぎて行く。

「やはりブレインに聞くのが早そうだな」

今まで黙っていたジユラがやむを得ない、といった様子で意見した。

「簡単に教えてくれるかしら？」

しかしすぐにシャルルが反論する。

確かにそうだ、ジユラ敗北したと言えど仮にもギルドの長を担っている身、そう簡単に話しはしないだろう。

「……………なら……………もしかして」

皆が悩んでいるなか、ウエンデイがなにかを呟いた。

「なにか言った？」

「え？ うっん……………なんでもない」

ルーシイの問いに対し微妙な表情を浮かべながら首を振るウエンデイ。

どうしたんだ？

「あ、あの！ 私心当たりがあるので探してきます。行こう、みんな」

「あ、おいウエンデイ！」

「ウエンデイ！ 待ちなさい！」

「お姉ちゃん？」

突然ウエンデイがこの場から逃げるように駆け出した。

ウエンディに続いて走り出していくシュウとシャルルを追いかけようとして、いきなりすることに反応できていない四人＋一匹をみて立ち止まった。

「あゝ、僕たちは違う方法がないか探してみるよ」

返事を待つことなく僕も駆け出した。

・ ・ ・ ・ ・

黒いエーラを使い都市の上を飛ぶ。

ウエンディに追い付いて話を聞けば、『ジェラルルなら止め方をしってるかもしれない』らしい。

確かウエンディは自分がジェラルルを復活させたからニルヴァーナが復活した、とも言っていた。

なるほど、復活させた張本人なら止める方法も知っているかもしれない……というわけで探してはいるのだが、見つからない。

「いない……ジェラルル、いったいどこに……」

「この都市は広いからな、もうちょっと高く飛ぶか？」

「……はい。お願いします」

「了解。シャルル、行けるか？」

シユウと飛んでいるシャルルに声をかける。

僕がシユウを連れて飛んでもよかつたんだけど、微々たる差とはいつてもウエンディよりちっさいシユウの方がかなり軽い。

結果、長時間飛ぶこともかねて僕がウエンディをシャルルがシユウを連れて飛んでいるわけだけど、それでもシャルルにしてみればちっさいシユウでも自身の身長のはあるからきついことは変わらなかったようだ。

「悪いけど、無理。そろそろ限界……」

シユウがいくら軽いとはいっても人間であり赤ん坊ではない以上、十数キロの重さがある。

シャルルの握力がどれだけのものかは知らないが、たとえば五十キロを持ち上げられる握力があっても、五キロを一時間持ち上げ続けるのは辛いのだ。

あれ？ そう考えるとシャルルって結構すごくな？ 目見当でシャルルの体重を三キロ程度としよう。で、シユウの体重はシャルルの約六倍。僕が三百キロの物を持ち上げ続けているようなものだ。しかも、ナツの相棒であるあの青いの……名前は忘れたが、相棒である以上はナツを掴んで飛んだりするのだから……。なんだろう、猫が恐い。厳密にはその握力が。

「……ごめんね、ねこさん。わたし、重い？」

シユウが心配そうに告げるが、シャルルはそんなことはいわよ、と否定する。

「仕方ない、一回降りよう。シャルルに無理はさせられない」

「うん、ごめんねシャルル」

「……ごめん、なさい」

「いいわよ、これくらい」

とは言っても辛いことは代わりなかったのか、早々に着地する。はあ、と三人から疲れたようなため息が吐かれた。

案外飛んでなくても空中で体制を無意識にコントロールしてるだろうからシャルル程でなくとも疲れはするのだろう。

三人が息を整えている間にも意識を広げてみるがやはり、ぐちゃぐちゃしていて良くわからない。

そうでなくてもこれだけ広ければ感覚で見つけるのは難しいだろうとは思うが。

「あー！」

突然ウエンディが声をあげた。

「あの山、見覚えがある……」

「私もよ。だいぶ近づいてきてるみたいね」

ニルヴァーナがギルドに着くまでそう時間がない。

多く見積もっても二十分……いや、そんなにないか。ニルヴァーナの効果範囲は広いはずだ。

「どうしよう……もうダメ、いくら探しても見つからないよ……！」

「あんたが弱音はいてどうすんのよー！」

「シャルル。ウエンディだって不安なんだ、キツイこと言うな」

「……そうね。ごめんなさいウエンディ」

そうは言っても、シャルルが急くのもしょうがない。

僕たちのギルドはもう目の前、なのにまだニルヴァーナの止め方は全くわからない。

クソツ、僕には自分の帰るところすら守れないのか？ ウェンディだって、シユウだって、今回の戦いで傷つけてしまった。やっぱり、僕の力は壊すことしかできないのか？

僕は？また？守れないのか……。

……ん？

「……？また??？」

自分の思考に紛れ込んだ単語に一瞬思考が埋め尽くされる。

？また？……普通に考えればウェンディやシユウのことなのだろうけど、なにか、違う気がしたのだ。

何かを、忘れているような。

何かを、思い出しそうなの。

何かを、失っているような。

何かを、奪われたような。

デジャヴ、とでも言うのだろうか？

ある日の夜に見て忘れていたはずの夢を似たような場面を見て唐突に思い出すような、そんな感じ。

何か、思い出しそうなの。

何か、大事な

「……おにいちゃん？」

ブツン。

「……あ……あれ？ なにか言ったか？」

「……おにいちゃん、ぼー、っとしてた」

「そうですねクライスさん。いきなり考え込んでどうしたんですか？」

「あゝ、いや。なんでもない」

『？』

二人揃って首をかしげる。

……そうだ、僕は何をしていた？ いや、何を考えていた？

唐突に判らなくなった。

ほんの数秒前まで考えていたことが……まるで僕の中から切り取られたかのように。

思い出そうにも、思い出せない。

思い出したいのに判らない　なんとも後味がわるく、モヤモヤした嫌な感覚が残ったけど、今はそれどころじゃないことを思いだし今度は意図的にその考えを振り払う。

目を閉じ　開く。

朱の五芒星が不気味に、まるで生き物のように光る目を見開く。

「とりあえず、探そっか」

「え？」

「僕は、ううん、僕たちは絶対これを止めるんだ。ジェラルルが見つかからない？　なら見つかるまで探し続けるだけさ。諦めたら終わり、諦めなくてもそうかもしれない。でも、希望があるんだ。なら、探し続ければいいだけだよ」

だろ？　と、言った僕を三人がキョトンとしたように見返してくる。

そして、頷いた。

「そうだよ……諦めるちゃダメ。絶対ジェラルルを見つけて、絶対ニルヴァーナを止めなきゃ！」

「まったく、急に黙ったと思ったたらまた急に……でも、そのとおりね。見つからないなら、見つけて、絶対ニルヴァーナを止めるのよ」

「……ん。ぜつたい、とめる」

みんなの目に光が戻り、思わず微笑む。

人間なんてもともと諦めが悪い生き物だ。そしてそれが大切なもののためならなおさら。

みんなが弱音をはいても、挫けても、僕がその背中を押してやる。

「よし、行くうー！」

・ ・ ・ ・ ・

不気味な静けさを壊すように、二つの音がゴーストタウンに響く。

一つは僕が飛ぶ音、一つはシュウが魔導二輪を走らせる音だ。

魔力や体力が限界のシャルルはもちろん、ウエンディもシュウの魔導二輪に乗っていて僕は一人彼女達から少し離れた位置を飛んでいる。

空と地上、同時に探せば効率はかなり上がるはずだ。

ウエンディ達と会話することは不可能だったが、そこはウエンディと僕の首から下がる天使の片翼で補っている。

度々ウエンディ達と現状報告しながら、かなり焦っていた。僕はそこら辺の建物より高い位置を飛んでいる、だからもうわかってるのだ……ギルドがもうすぐそこだということが。今見えている山ひとつ越えたらすぐそこに化猫の宿がある。山ひとつ、とはいえ

ニルヴァーナのサイズからすればちょっとした障害にもなり得ない、ほんのわずかの足止めにもならないだろう。それにジェラルルを見つけ、止め方がわかったとしてももしそれがすぐにできないものだとしたら……。

いや、そんな考えはあとだ。今はジェラルルを見つけることが先決だ。

『クライスさん！』

ウエンディからの念話。

どこか嬉々としたような声音に期待しながら少し上昇しシユウの魔導二輪が見える位置まで移動すると、ウエンディがシユウの後ろから身を乗り出すようにして前方を指差しているのが見えた。

その先には、青い青年とと緋色の女性がいた。

僕の視力はかなりいいが、女性の方は背を向けているため誰だかわからない。

『あの人がジェラルルです！』

『ああ、知ってる。僕もすぐに行くよ』

『はい！』

グンツ、と一瞬高度を上げて一気に降下した。

すでにジェラルルと合流していたウエンディ達に向かって降下して地上ギリギリで減速し、黒い羽をわずかに散らしながら着地する。

「ん？ クライス、お前もいたのか」

「ああ。なんだ、誰かと思えばエルザだったのか」

ウエンディに治癒してもらったあと、ジェラルルの名前を出した途端に姿を消してそれっきりだったが……どうやらジェラルルと合

流していたらしい。

「で、あんたがジェラールか？」

「あ、ああ……」

どこか戸惑ったようなジェラール。

初めてあったから、というよりも誰なのかを気にしているようだ。

「あの、クライスさん。ジェラールは……」

「記憶がない、か？」

「え？ し、知ってたんですか？」

「……いや、そうかもしれないとは思ってた」

予想は、杞憂には終わらなかったようだ。

ウェンディの表情はどこか暗く、シャルルが少し焦っているような怒っているような表情をしていることから、ニルヴァーナの止め方も忘れていたということがわかる。

それでも、と一応確認として聞いてみたが、

「ジェラール、あんたニルヴァーナの止め方も忘れたのか？」

「……すまない」

「私も聞いたけど、もう打つ手が無いそうよっ」

ダメらしい。

打つ手が無い、か。

確かに普通に考えればそうかもしれない。もしすぐにニルヴァーナを止められる方法があるのだとすれば僕たちが来る前にやっているはずだ。

クソッ！ 悪態を尽きながら限刀を抜刀、辺りに大量に出現させる。

「なっ、何をやる気だ！」

「決まってる。今からでもニルヴァーナを破壊する。足を壊せば動けなくなるはずだ」

「バカな！ あの巨大なものを破壊できるはずがない！」

「無理でもやるんだよっ！！」

ダンッ！ 足を地面に叩きつけながら言う、と、同時に都市が揺れ出した。

とつさに、倒れそうになるウエンディとシャルルを支えながら発動したままの？複製眼？でニルヴァーナを見据える。

「……魔力が集まって まさか！」

辺りを見回し、開けた場所を見つけるとそこまで一瞬で移動した。どうやら今まで僕がいた場所は他に比べて少し高かったらしく、そこからはすべて見えた。

そう、信じられないほど膨大な魔力が……化猫の宿に向けられているのが。

「あれ、嫌な感じがする……」

いつの間にか横にいたシューウが呟いた。

僕にしてみれば感じがする程度ではない。ハッキリと、膨大な破壊の魔力が今まさにギルドに向けて放たれようとしているのだ。

あれが撃たれたら、ケットシエルターは跡形もなく消し飛んでしまっ……！！

続いてウエンディたちもやって来る。

「あれは……？」

龍が消滅を引き換えに、ニルヴァーナを相殺していく。一瞬で消えていく龍はしかし、後から後から増長していく。

だが、瞬く間に龍が押され始める。

相変わらず続く咆哮が、俺の横でだんだん弱くなっていくのを感じていた。

限刀は、数が無限と称してはいるがあくまでそれを産み出すのは俺だ。何億何兆の限刀を産み出すのは、それだけ膨大な魔力が消費されると言うことだ。

急激な魔力の消耗で朦朧とする意識、それでも止まらないニルヴァーナ。

最初はニルヴァーナの何倍もあった龍は、すでにニルヴァーナより細くなり、破壊の光は俺の目の前まで迫っていた。

左目で喰らうか？ いや、左目を使えば魔力が使えなくなり飛んでいられなくなる……それにしこれほど膨大な魔力、喰らいきれるはずもない。

ニルヴァーナが俺を消す寸前……俺は、あーあ、と、笑った。

「しかたない、か……起きろ　？ 壹匹狼？（ウエル・カミナ）」

破壊が、不気味に笑らう俺を包み込んだ。

「クライスさん！」

「お兄ちゃん……！」

ウエンディ達がそう反応できたのはクライスがすでに点に見えるような距離まで離れてからだだった。

シユウが咄嗟にのばした腕は間に合うどころかクライスの巻き上げた土ぼこりすらつかめなかった。

そんな彼女たちより前にエルザが踏み出して眼を見開いた。

「あいつは、ニルヴァーナを止める気が!？」

エルザの視線の先にいたのは、白銀の龍。巨大なニルヴァーナを巻き取ることさえできそうな、長大な龍がクライスの背後に悠然と姿を現したのだ。

細く小さな刀があつという間に一匹の巨大な龍と化すのをエルザは信じられないような思いで見つめていた。

彼女も大量の剣を操るが、クライスが操っている刀の数は百や千そこらではない。しかもそれを？龍？という形として完全にコントロールしている。生半可ではない集中力と信じられないほど膨大な魔力を有していない限り不可能な芸当だ。

「そんな……いくらクライスさんでもあんな物を一人で止めるなんて
て
」

「……ウエンディ。クライスは？無理でもやる？って言ったのよ」

「でも！ そのせいでクライスさんがいなくなっちゃったら 私
っ！
」

「お姉ちゃん……」

シユウが肩を震わせながらうずくまるウエンディを見つめ、次の瞬間にはブラックシユーターを担ぎ直しながら白銀の龍を操るクライスを見据えた。

「私が……連れ戻してくる」

シュウに飛ぶ力はなかったが、思いきり跳んで、さらにブラックシューターを推進力として放てば白銀の龍の龍まで届くだろう。それをつたっていけばクライスマでたどり着ける。

もつとも、その前にニルヴァーナ相殺のために龍が動き出したらシュウといえど限刀で作られた龍の上でバラバラになってしまう可能性もあったが……。

今のシュウにはそれがわかっていなかったが、わかっていたとしても飛び出しただろう。

だが、シャルルがやんわりとシュウの肩に手を置きながら、首を振った。

「無駄よ。たとえあんたがやめるように言っても、クライスはやめないわ。そんなこと、言われなくても私たちが一番知っているでしょう?」

全身に力を込め、今にも走り出そうとしていたシュウがシャルルの言葉によく見ていなければ判らない程度に顔を歪ませた。

シャルルでなくても、よくみれば判る表情の変化。普段は完全無表情のシュウがこんな風に表情を変化させるのは必ずしもクライスカウエンディかシャルルに何かあったときか何かしてもらったときだけだ。

シュウが背中中に回すように担いでいたブラックシューターを脱力しながら降ろすと同時に、ニルヴァーナが猛烈な勢いで発射された。白いのに黒い、不気味なニルヴァーナの光を白銀の龍が迎え撃つ。かなり離れているにも関わらずハッキリと聞こえてくる龍の咆哮

否、金属同士が擦れ合い天を裂く悲鳴のような音。

しかし、一時は圧倒的な数と質量でニルヴァーナを圧倒していた龍が、眼に見えて減衰していく。

鋭く、速く、巨大だった龍が、鈍く、遅く、小さくなっていく。

凄まじい力で消されている。

「こ、今度はなん」

エルザが急に言葉を切った。

ニルヴァーナが消されていくのを呆然と見ていたウェンディがそるに反射的に振り返ろうとして、自分が動けないことに気がついた。ウェンディだけではない。この場にいる誰もが、眉一つ動かさな
いでいた。

なにか、圧倒的な力を無意識に体を感じとり、自分の意思とは関係なく身体が全く動かないのだ。

魔力ではない……でも、なにか圧倒的な力。

たとえ怒り狂っている獣がいたとしても、動けなくなるのではないかとという……恐怖すら感じる事ができないほど圧倒的な力。

ニルヴァーナが霧散し、残響も消えた。だが、何も聞こえなかった。虫の鳴き声も、生き物の動き回る音も。

時が止まったのではないかと勘違いしてもおかしくないような静寂の中、固定されてしまった視線の先に……ウェンディはハッキリと見た。

「クライス……さん？」

夜の闇にとけてしまうのではないかと思うほど黒い、どこまでも黒い？なにか？を纏ったクライスを。

目覚めたる狼（後書き）

さて、前書きでも記したように100件のお気に入り登録：読者のみなさまには大変感謝しています。

つきましては記念として番外編などを書くかどうかと予定しています。

という訳で、番外編の内容を募集します！

のんびり進むつもりなので書いてくださればできる限りそれを書きたいと思います。

書き方は題名、内容、登場させてほしい人物などを書いていただければそれを番外編として書きたいと思います。

場合によっては詳しい内容を求める場合もありますが、その場合はご協力よろしくお願いいたします。

そのほかに、今後の（ニルヴァーナ編終了後）予定としては、

- 1・アニメオリジナル編 『竜の誘い』 『24時間耐久レース』 など
 - 2・アニメOVAの『妖精学園』 『フェアリーヒルズ』 など
- などを書くかどうかと思っています。

クライス、シュウの技や武器も随時募集中です。

皆様のご意見、ご感想、アイデア等をお待ちしています。

零番魔水晶（ぜろばんらくりま）

ブンツ。

腕を振っただけだけ。特別な力じゃなく、ただ、振っただけ。たったそれだけの、あたかも八工を払っただけのような動作で強大な力を奮っていたニルヴァーナが簡単に押し返されてしまった。彼は無表情だった。

否、表情を作ったことがないかのような、ピクリとも動かない瞳でその光景を見つめていた。

その目は……赤く、黒い。

瞳だけではなく、本来白はずの眼球そのものまで黒く、赤い獣のような、化け物のような……そんな目をしていながらそこに感情はない。

無感情　ではなく感情がない。

膨大な生き物の中、唯一感情の変化で表情を変える人間とは思えないほど動かない表情。

考えが読めない、否、考えてすらいない。

ダラリと下げた腕、直立しているのが不思議なほど脱力した体。彼は空中に立っていた。

飛んでいるわけでもなく、まるで地面があるかのように立っている。

シン　と、静まり返っていた空気。

一瞬とも永遠とも、そんな表現はなく……わずかな時間が流れたその時、彼の足元に小さく波紋が現れた。

次の瞬間に、彼は黒い刀が生えた腕をまた　ブンツ、と無造作に振り上げていた。

そしてまた、わずかな時間が流れ……ニルヴァーナの足が、王の

間が、音もなく崩れ落ちた。

遅れて音がやって来たときには、彼はそこにはなく、わずかな波紋だけが静かに波打っていた。

「クライス……さん？」

その時ウエンデイの中にあつた感情はなんなのか、それは自分自身でも全く理解できなかった。

クライスが生きていて、ギルドが無事で、一瞬は安心した。だが、黒い？なにか？を纏ったクライスを見た瞬間、一気にわからなくなった。

クライスなのに、違う。別の人間を見ているような錯覚。わかっているのに、本能が違つと言っているような感覚。跳び跳ねるほど嬉しいはずなのに、動けないほどの威圧感。

嬉と恐が入り交じって、何がなんだかわからなかった。

「あれは、クライスさんなの……？」

問うまでもない。間違いなく彼はクライスだ。何を迷う必要がある？

けれど体が否定する。

あれは違う、クライスじゃない、得たいの知れない化け物だと。

「違う……」

否定するも、そこには力がなかった。

頭の中がグラグラ揺れる。なんだかわからないもので、揺れる。そしていつのまにか、ニルヴァーナ自体がグラグラと揺れ出していた。

「キャッ!？」

「っ! お姉ちゃん……!」

グラグラと、ガタガタと揺れだしたニルヴァーナ。

いつの間にか段差　といえど並みの建物より高い　のギリギリにいたウエンディはバランスを崩し、そして一際大きくニルヴァーナがガクンと跳ね上がりウエンディは空へ放り出された。

手を伸ばそうとしたシユウはそのまま傾いた方向に倒れ込み、ウエンディを助けられる者はいなくなった。

奇妙なほどゆっくりに感じる時間。クライスが近くにいるならともかく、今彼は、彼が全力で走ってもウエンディに届かない距離にいる。

助からない……そんな考えが浮かんでもおかしくない中、ウエンディは静かに目を閉じていた。

得たいの知れない化け物にクライスがなっていたとしても、それでもウエンディはクライスを信じた。

絶対助けてくれると。

確かに? なにか? を纏ったクライスからは言い表せないほど、感覚が麻痺するほどの圧倒的な恐怖を感じた。否定したとはいえ、一時はクライスがクライスでなくなってしまったかとも思った。

それでも、この絶体絶命の最中にありながらウエンディは彼を信じた。

もしかしたら命の危機に瀕したからこそ、ウエンディのクライス

に対する信頼が一時の恐怖などで覆るものじゃないことが肯定されたのかもしれない。

「クライスさん……」

何度呼んだかもわからない……ある時は楽しそうに、ある時はちよつと怒りながら、ある時は恥ずかしがりながら、何度も呼んだその名前を祈るように呼んだ。

そして祈りは叶えられた。

気がつくと、ほんとうに気がついたら元の場所に戻っていた。先程までののが幻覚だったかのように、いつのまにか。

ただ、違うことが一つだけあった。

ウエンデイの小さな体は、優しく抱き抱えられていた。

彼女が死を直前にしながらも信頼し、信じた人が。壊れ物を大切に扱うように、騎士が姫を抱き上げるように、ウエンデイを抱き抱えていた。

「え……あ……」

信じてるとはいえ、怖かった。

ウエンデイを抱き抱えて、俗に言うお姫様だっこしているのはどうみてもクライスだ。

着物は着ていないし、目の色もおかしいし、黒い？ なにか？ を纏ってはいいたが、背と足に感じる低い体温や、闇のように黒い髪はクライス以外の何者でもない。

だが、表情がない。

シユウが表情豊かに思えてしまうほどの、仮面のような表情の無さ。

違う方向を向いていた目が、唐突にウエンデイを捉えた。

「……っ！」

悲鳴を上げそうになる。

目が、不気味に輝いているのだ。

眼球まで黒いのに、全体的にぼんやり赤く光っている。

暗闇なら目の形しかわからない程度の暗く、弱い光ではあったが、それでも不気味だった。

嬉しいのに怖い。

そんな感情で動けなくなっているウエンディを見つめていたクライスが、ゆっくりと笑った。

「大丈夫か？」

聞こえてきたのは、いつもどおりの声。

優しいで、過保護なくらい心配性な、いつもどおりのクライスの声と笑顔だった。

やっぱり、クライスさんはクライスさんだよ……。

当たり前だよ、と思いつつもウエンディは安心したように笑いながらさらにクライスに身を寄せた。

.....

？狼？と言ってもまだ俺はこの力を使いこなしてはいなかった。

形はまだオーラ状だし、肉体の変化もない。

そもそもこの力は別に神から貰ったわけではない。

式崎の家の者が代々受け継いでいる化け物らしい。名称などない、とにかくとんでもない化け物狼だ。

俺が産まれた瞬間に親父が俺に移したらしいからある程度体に馴染んでいて一部の力なら使うことができる。

親父が何故俺が式崎の長につく前、しかも産まれた瞬間に引き継ぎの儀を行ったのかは謎だ。

メリットはとんでもない力を振るえること、デメリットは暴走の危険がある、使用中に感情凍結される、下手に使うと死ぬ、あといくつか……。

デメリットが多く、使っている俺本人ですら理解できない力ではあるが……ニルヴァーナを止めるにはこれしかなかった。

止めるついでにニルヴァーナの足と操縦席の上っ面辺りを斬り飛ばしたが、思ったより大きく傾いたのでウエンディが空中に放り出されたときは焦った……はずだったが感情凍結のお陰で、やばいな程度にしか考えられず冷静に判断し空中キヤッチした。

安心したのか、小さく笑いながら俺に身を寄せているウエンディになんとか感情凍結の状態で笑顔を浮かべながら、空中を滑るように歩く。

そのたびに何も無いはずの空中に水面に浮かぶような波紋が現れるが理解するのは諦めている。

「全員無事か？」

驚くほど無機質な声が出たか？狼？の状態である以上しかたがない。

俺の声に反応して少し離れた位置で方膝をついていたシュウが驚くほどの勢いでこちらに移動してきた。

「お姉ちゃん……大丈夫？」

「うん、心配させてごめんね。でもクライスさんが助けてくれたから怪我もしてないよ」

「……よかった」

俺は抱き上げたままでは話しづらいたろうとウエンディを降ろし、シユウがウエンディの腕を握ったりして本当に怪我がないことがわかると小さく安堵のため息をついた。

それから少し遅れてシャルルやエルザたちもこちらに歩いてきた。

「シャルル、平気か？」

一応飛んではいたがなんかふらふらしているシャルルに無機質な声で話しかける。

「平気じゃないわよ……さっきの、いいえ、それはなんなの？」

頭を打つたらしく後頭部をさすりながら俺を、詳しくは俺の？狼？を指す。

「これか？ これは……俺もよくわからん」
「は？」

俺の答えにキョトンとするシャルル。

そんな顔されても、本当にわからないから仕方ないんだけど。親父も詳しくは知らないっていつてたし。

詳しくは、なんてものは式裂の家にはなかったからな。わからないのに式裂流を学び、わからないのに俺は誰よりも強かった。

わからない、なんてものは俺はどうでもいい、使えるから使った。それだけだ。

「……まあいいわ。とにかくそれを解きなさい、なんかそれよくわからない怖さがあるのよ」

無言だった俺に観念したかのようにシャルル言った。

同じ思いだったのか、となりのウエンディとシュウも小さく頷いている。

それに俺は、あく、と俺は言葉を濁す。

「どうしたのよ？」

「いや、俺も解きたいんだけど……いや、いや。ウエンディ」

「はい……？」

「今からこれ解くから、治癒魔法よろしく」

ウエンディがよくわからなさそうにしながらも頷いていたのを確認し、？狼？を俺の……僕の中に押し込めた。

空中の波紋の上にあった足が地面に降り立ち、瞳と眼球の境が曖昧だった瞳がもとに戻り、異常な力と、異常な痛みが消える。

「グッ……ガハッ！」

だが、次の瞬間には全身に大小様々な傷が生まれ立っていられないほどの激痛に襲われる。

父曰く、この力は人の身には強すぎる力だから体が耐えきれずに破壊される、らしい。

「く、クライスさん！？」

いきなり血まみれになりながら倒れた僕に驚いてウエンディが駆け寄ってくる。

そのまま、あわてるよりも早く治癒魔法を発動した。

「な、なんで……こんな……」

声は震えていたが治癒魔法は普段より強力だった。

身体中を蹂躪していた痛みが瞬く間に和らぎ、傷口も徐々に塞がっていく。

さすがウエンディ、だが、後のことを考えると些か使いすぎか……？

少し魔力を押さえた方がいいと言おうとすると、その前にシャルルが近づいてきた。

「クライス、あんた……なんで？」

「ああ、いきなり倒れた理由？ それは……ケホツケホツ……つまり」

「すごい怪我なんですからしばらくしゃべらないでください！」

「あ、ああ。……でもウエン」

「しゃべらないでください！！」

「……………」

ウエンディの剣幕に押されて喋ることすらできなくなった。

そんな泣きそうな顔で言われたら逆らえないよ……。

僕は大人しく目を瞑り、ウエンディの治癒魔法に身を任せていた。

ペタツ。

唐突に額に何か冷たいものが押し当てられた。

力のせいで少々暑くなっていた体にはそれは心地よかった。薄目を開けて冷たいそれを見る。

無論、それはシユウだった。

礼を言おうと一瞬口を開きかけたが、またウエンディに怒られると嫌だから、片目だけを開けて心配そうに僕の顔を見つめているシユウに口パクで『ありがと、シユウ』と言った。
ちゃんと伝わったか心配だったけど、シユウすぐに愛らしい笑みを浮かべた。

しばらくして、体の痛みがほとんどなくなった。

「……ウエンディ、もういい。大丈夫だ」
「でも……」

「治癒の魔法は多用すればウエンディの方が倒れる。さっきのことで僕も魔力が少ないからウエンディの魔力を回復させてあげることできないから、今は、な？」

「はい……」

ウエンディが翳していた手をどけ、僕はほとんど元通りとなった体で跳ね起きる。

元通りとなった、とはいっても本当に魔力がない以外体が全快していることには驚いた。人間の頃なら一ヶ月、人外の再生能力でも半日はかかるであろう？ 狼？ 発動の反動がものの数分で治ってしまった。

ウエンディの様な小さな女の子といえど、ドラゴンスレイヤーの力は侮れない、か。

「もういいのか？」

「ああ、もう問題ない。ありがと」

ウエンディが僕に治癒魔法をかけている間の見張りをしていたくれたエルザが戻ってくる。

隣のジエラルはやはり微妙な表情を浮かべていた。

さて、これからどうする？ そんなことを言った瞬間、空に微力な魔力が現れた。

『聞こえるかい？ 誰か、誰か返事を！』

そちらを仰ぎ見るより早く、聞き覚えのある声が聞こえてきた。同時に空を見上げると、

「あれは……」

無惨な、それでも空を飛んでいる天馬？クリスティーナ？がこちらに進んできていた。

『誰か無事なら返事をしてくれ！』

「この声は、ヒビキか？」

『エルザさん！ ウエンディちゃんにシュウちゃん、クライス君も……みんな無事だったんだね！』

やはりヒビキだった。

ルーシィと一緒に行動していなかったからどうしたのかと思っていたが、どうにか無事だったようだ。

『私も、一応無事だぞ……』

『先輩！ よかった！』

ついでにあのちっさいキモい変なおっさんも無事だったらしい。だが、それ以外には誰も返事をしなかった。

ナツ達はどうした？ 別れてからあまり時間はたっていないはずだが……まさか？

いや、今はそれよりも、だ。

「ヒビキ、それより大丈夫なのかそのクリスティーナ。見たところそれ自体の力で飛んでいる訳じゃなさそうだが……？」

「なんで見ただけで判るのか不思議なんだけど……」

「そういえば、それ森の入り口辺りであっさり落とされたわよね？」
「うっ……」

「まだ飛べたんですね！」

「……………」

「浮かんでる、だけに見える……………」

「ガハッ……………！」

「ちょ、ヒビキ！ どうしたの!?!」

無邪気な少女二人と厳しい猫一匹のツツコミでヒビキの精神的ダメージが限界を迎えたいらしい。

イブの声を最後に念話が一端途絶えたがまたすぐに回復した。

「おーい、生きてるか？」

「精神的にはかなり堪えたけどね……………」

「それにしても、どうなっている？ さっき彼女たちが言ったようにクリスティーナはもう飛べないのではなかったのか？」

エルザがそう言ったが、シュウがさっき言ったようにあれはどうも浮いているだけだ。

破損した部分からは崩れた部品がたびたび落ちているし、片翼は氷でできている。

昼間のようにそらを悠然と飛んでいるわけではなく、グラグラと今にも落ちそうだ。

「うん。確かに今はクリスティーナの力じゃなくて船に乗ってるみんなの力で浮かんでるだけなんだ。壊れた翼はリオン君の造形魔法

で、シエリーさんとレンの魔法でクリスティーナを浮かしているんだ。できれば魔導弾で助けてあげたかったけど、ラクリマが破壊されてて出来なかったんだ」

「あんたたち……」

シャルルがボロボロの天馬を見上げながら呟いた。シャルルの心境は僕もわかる。

右目で見える限り、彼らはかなり無理をしている。できれば、手伝ってやりたいが……。

「クリスティーナの様子を見てわかるかもしれないけど、僕たちの魔力はもう限界だ」

「僕が手伝おうか？ 魔力は少ないがクリスティーナを安全に不着させるくらいなら」

そこまで言つて、今までギリギリバランスを保っていたクリスティーナが大きく傾き、黒煙をあげ始めた。

限界だったのはクリスティーナも同じ、か。

とつさにクリスティーナに左手を向け風で支えようとするが、

「僕たちのことはいい！ 最後にこれだけ聞いてくれ！ ようやく見つけたんだ！ ニルヴァーナを止める方法を……！」

「本当か！？」

思わず魔法を解除してしまった。

これを止める方法、ジエラルが不可能だと言った瞬間に？ 狼？ を使つての破壊も考えたがさっきのことで肉体的にも魔力的にも限界だし、使えたとしてもまたウエンディが無茶するかもしれないからその方法もダメ、なんとか足を切り落としたとはいえ、五本でも足りないことはないだろう。

頭の隅でどうしようか考え続けて、それでも方法がなく力業に頼ろうかと思っていたところにこの言葉は嬉しかった。

『ニルヴァーナの足、六本あるそれは大地から魔力を吸うためのパイプの役目をしているんだ。そして、その足の付け根付近にそれを制御するラクリマがある。それを同時に破壊すれば、ニルヴァーナは止まる』

「ラクリマを同時にね……足一本切り落としたけど、そこもか？」

『え！？ ニルヴァーナの足をかい！？』

「ああ」

「彼の言っていることは本当だ。あれほどの威圧感……お前たちは感じなかったか？」

『さっきのあれは、クライス君のものだったのか……。てっきりニルヴァーナがなにかを発動したかと思つて焦つただけ……。ああそれより うん、足がなくなったなら魔力の供給は遅くなるけどラクリマは同時に壊さないと壊れたところがすぐに修復されてしまふんだ』

「なっ、離れた位置にあるものをどうやって!？」

『僕がタイミングを計つてあげられ いいんだけ もう……念話が ないから』

鮮明だった声にノイズが混じり、所々で音が途切れ始めた。

これほど広域に渡る念話……常時でさえ維持するには多大な魔力が必要なはずだ。

『タイミングを君たちの頭の中にアップロードした……難しいかもしれないけど、これでなんとかできるはずだよ』

念話のノイズに重なって、頭の中に情報が上書きされた。

その情報には各ラクリマまでの道のり、次にニルヴァーナが放た

れるまでの時間がしるされていた。

制限時間は20分か……ラクリマまで十分間に合う時間だ。ラクリマ自体に結界が張られていたりするわけでもなさそうだしこれなら

『無駄なことを……』

念話がまた切れたのではないかと思うほど耳障りなノイズがはしり、低い男の声が響いた。

この威圧的で鈍重な耳につく声……ブレイン、か。

確かジユラが倒したはずじゃなかったか？ いや、殺したわけじゃないしいてもおかしくないな。

それより問題は？ ヒビキの念話に入り込んできたこと？ だ。

つまり今までの会話も聞かれていた訳で……僕たちがニルヴァーナを止める方法を知ってしまったことを知っている。そしてニルヴァーナ復活を望んで行った奴なら……僕たちを止めるだろう。

『オレはゼロ。六魔将軍のマスターだ』

「……あんたか、さつき僕達のギルドにニルヴァーナを撃つてくれたのは」

『ああ？ 誰だか知らねえがその口ぶりからするとせっかくのニルヴァーナを打ち消したのはテメエか。俺の破壊の邪魔すんじゃないよ！』

耳障りな声でゼロが笑う。

ブレイン ? 脳? の名前を持っていたあいつは名前の通り頭脳で戦いいつも冷静沈着というイメージだったが、念話の先で話すこのゼロという男はまるで別人だった。

雑な口調、性格、ブレインの声をした別人……僕のような多重人格者か？ それも、僕とは違い口調だけでなく、思考も性格もまっ

たく違う別人になっているようだ。

『まあいい、どちらにしろオレはすべてを破壊する！ 手始めにテムエらの仲間を三人破壊した。滅竜魔導師に、氷の造形魔導師、精霊魔導師……ああ、あと変な猫もいたな』

『ナツ君たちが……！？』

「……………っ！」

「そんなの嘘よ！」

「ちっ……………」

嬉々とした様子で言うゼロにエルザが唇を噛み、ウェンディが悲痛な声をあげる。

そして、ザワリ、と僕の性格が変わったのがわかった。

先ほどのヒビキの呼び掛けに反応しなかったし、こうしてゼロが念話に入り込んでいたからもしやとは思っていたけど……ちっ、今日はよく？俺？が出る日だな。

『てめえらさつき^{ラクリマ}魔水晶を同時に破壊するとか言ったな？ さつきのガキがニルヴァーナを止めるほどの奴だと見込んだ上でいいこと教えてやる』

「いいこと、だと？」

挑発的なゼロに殺気を込めた声を返す。

『ニルヴァーナのラクリマの在りかを見つけた奴……ブレインと同じ^{アーカイブ}古文書を使えるやつがいるようだが、そいつの言うことには間違いがある。魔水晶は六つじゃねえ、七つだ！』

『なっ！？ バカな、僕のアーカイブには確かに』

『ワハハハハ！！ てめえみてえなガキにブレインと同じくらいアーカイブを使いこなせるわけねえだろ！』

『くっ！』

もっともな指摘にヒビキが悔しそうに唸る。

確認してみるとヒビキからもらった情報には確かに足の付け根にある魔水晶ラクリマまでの地図しかなく、七つ目の魔水晶なんてどこにもなかった。

地図もなしにこの巨大で複雑なニルヴァーナの中から一つの魔水晶を探し出すのは至難の技、なんてレベルではない。

もしかしたら足の先端か、もしかしたらニルヴァーナのど真ん中か、もしかしたら他の魔水晶の真横か……可能性で言えば20分という制限時間内で見つけるのは、零でなくともそれに等しい確率だ。

『ワハハハハ！ このまま場所をいわなけりやまたニルヴァーナを簡単に撃てるが……それじゃつまらねえな』

「ハッ、なんだ？ じゃあ教えてくれるのか？」

『ニルヴァーナのど真ん中だ』

皮肉のつもりが信じられないほどアツサリ答えたので全員が驚いたように絶句した。

それも束の間、俺はこめかみを二、三回叩いて探るように聞き返した。

「やけに素直じゃないか。嘘の情報で混乱させる気か？ それとも、なにかあるのか？」

『ククク、ああ。ニルヴァーナのど真ん中？ 第零番魔水晶？ はオレでさえ近付けぬ呪いの中心地。見つけたとしても魔水晶を壊すことなんぞ出来やしねえ。しかも第一から第六番魔水晶にの内どれかにはオレがいる！ てめえらが何をしようとニルヴァーナを止めることは不可能だ！ ギャハハハハハハハハハハ！』

『……っ！ ゼロとの念話が切れた……』

ヒビキの呟きに答えるものはいなく、皆呆然としていた。

状況は絶望的だった。

六つだと思っていた魔水晶は七つで、その七つ目の魔水晶はナツ達三人を倒してしまっただけの実力をもつゼロでさえ近づけないといっていた。しかも、その魔水晶以外の六つの魔水晶のどれかにはそのゼロ本人がいる。

連合軍全員が万全の状況なら策はいくつかあるのだろうが……今満足に戦えるのはシュウのみ。俺やエルザやジェラルは魔力をかなり消費しているし、ウエンディやシャルルは戦えない。ヒビキたちは俺達以上に消耗してるだろうから加勢は不可能。

シュウとゼロをぶつけてもいいが、それだと第零番魔水晶をどうする。

ゼロの言っていた呪いの中心地という不吉なワード、単なる魔力の強大なところというわけではなさそうだ。

「ゼロに当たる可能性は六分の一……しかもエルザやクライス達以外では相手にならんと見た方がいい。それに、第零番魔水晶……ここはそのゼロさえ踏み入れない地、何があるかわからない。ここには最低でも二人以上で行く必要がある」

ジェラルがわずかに不安を感じさる面持ちで俯く。

今ジェラルが言ったことは俺も考えていたことだ。ゼロの相手は手負いと言えど？ 妖精の尻尾？（フェアリーテイル）の名高き妖精女王^{イターニア}、エルザでも容易くはなくとも不可能ではないはずだ。それは俺も然りだ。

いや、問題は誰がゼロを相手するかではなくゼロがどこにいるかだ。

もしエルザや俺以外の誰かがゼロのいる魔水晶に行ってしまったらニルヴァーナを止められる可能性はかなり低くなる。

それに零番魔水晶、これが実際にあるかないか、本当にここにゼロ口はないのか……クソが！ 次から次へと可能性が上がってきてまともな策すら浮かびやしない！

額を強く叩きながらあらゆる可能性を、そこから叩き出される策を考えようとしてまた、それが駄策と判り再び考える。

これだ、これだから俺は守れない……いざというときに何もできないくらい弱いから、俺は、

「お兄ちゃん、やめて……っ！」

小さい、でもハッキリとした声が聞こえ額を叩いていた手がなにかに固定されたように止まる。

そこで初めて俺は回りの音すら聞こえないほど考え込んでいたことに気がついた。

額からわずかに痛みを感じる……それすら気がついていなかった。額を叩いていた手から力を抜き、眉間に深いシワが寄るほどにきつく閉じていた目をゆっくり開く。

目の前でシュウが俺の手を両手で掴むように止めながら悲痛な表情でこちらを見ていた。

「大丈夫、だから……落ち着いて……？」
「……………」

なんとというか、恥ずかしい。猛烈に。

シュウは俺が自分に気がついたことを確認したあと、いつだか俺がウエンディにやったように両肩に手をのせこちらと視線を合わせってきた。

いや、俺の方が背が高いから合わせられてないが……正直自分が誰かにやったことをやられるのは、しかも相手はシュウだ、かなり恥ずかしい。

だけど、

「……ありがとう、シユウ。僕はもう大丈夫だよ」

「ん……よかった」

頭の中はスッキリした。

グチャグチャと考えすぎだ。やっぱりこの感情の起伏で性格が変わるのどうにかしないとダメだな……。

『クライス君も、いいかい？』

「ん？ なにが？」

「クライス、あんた話聞いてなかったの？」

緊張感がないわね、とシャルルがため息をついた。

意識が完全に考え事に向かっていったから正直聞いていなかった。

『一から六番まではナツ君やエルザさんたちが行くからクライス君

とシユウちゃんには零番魔水晶を頼みたいんだけど……』

「は？ ナツたちが？」

「クライスさん、本当に聞いてなかったんですね……」

あはは、とウエンデイが乾いた笑い声をあげた。

なんか僕がイラついている間に話がかなり進んでいたらしい。

『早、く……念話が……も……ない』

「あ、おい！ ヒビキ！ あー、ったく、わかった！ 零番は僕とシユウが行く」

『そ……か……ありが』

プツン、と今度こそ念話が切れた。

同時に壊音が響く。
クリステイーナが墜落した音だ。

「これで、八人……急ぎましょう」
「ああ、限界まで頑張ってくれたあいつらの思いを無駄にするわけにはいかない」

全員がうなづく。

ヒビキ達のことには心配だけど、今は彼らの残してくれた思いを……
…ニルヴァーナを止めるという、連合軍全員の願いを果たすのが何よりも先決だ。

「その前に、エルザ。ゼロはどうする？ あいつがどこにいるのかわからないと、この作戦も成功する確率が下がるが……」

「それなら心配ない。恐らくゼロは一にいる」

「ナツさんのところだ！」

「は？ ナツのところ？ ……なぜそう言いきれる」

「あいつは鼻がいい、わかってて一を選んだはずだ」

そうか、あいつもドラゴンスレイヤー……ウエンディと同じ、いや、ウエンディ以上に鼻がいいのかもしれない。

「だったら加勢にいこうよ！ みんなで戦えば」

「ナツを甘く見るな。あいつになら、すべてを任せて大丈夫だ」

ウエンディの言葉を遮りながらエルザが言った。

その表情には疑いの色はなく、本当に大丈夫だと信じているようだった。

「その根拠は？」

「ない」

「ないのかよ……」

「ああ、だが……あいつはそんなものがなくても信頼できるやつだ」
「……そっか」

彼女の表情を見ていればその言葉に嘘も偽りもないことは一目瞭然だった。

だから、妖精女王が信じるナツを、ウエンディと同じドラゴンズレイヤーの青年を、僕も信じよう。

「私たちも持ち場に行こう。私は五、ジェラルは六だ。クライスにシユウ、お前達には一番危険な零番だが……」
「なに、心配するな。僕は最強だから」

グツ、と親指を突き立てながらシニカルに笑ってみた。

「……」

「……」

「……」

「……」

「よし、行くぞー！」

「おいしいおいしい！！ 何か言ってくれよおお！？」

「あ、あはは、そ、そうですね！ クライスさんは強いですね」
「！」

「……ウエンディ、嬉しいけどその優しさが辛いよ」

心配させないように言ったのになんかみんな硬直するしエルザに無視されるというなんとも言いがたい虚しさを感じさせられたのは何故だろうか。ウエンディは無意識に、シャルルは意識的に同情の視線を向けてくるし。

シュウは、

「……私は、最き」
「やめるー!」

ガシツ、とシュウの細い腕をつかんで突き立てられようとしていた親指を拳の中に戻す。

やめて! マジで恥ずかしいから!

場の緊張感は溶けたけど後々僕の汚点に繋がるから!

「……?」

「わざとか! わざとなのか!」

「どうしたの?」

「わざとじゃない!」

キョトンとしたシュウ相手に某化 語の主人公とシュウと同じツインテールの少女のやり取りに似たやり取りをしながら小さく溜飲を吐く。

「もういいよ。行こう、シュウ」

「……? わかった」

「あ……クライスさん!」

もうこの場から逃げようと足に力を込めた瞬間、ウェンディが駆け寄ってきた。

そして、

「キャ!」

「あ、ちょ! 危なっ!」

目の前でこけた。

なんとかウエンディが地面にファーストキスを奪われる前に抱き止めるが、何故か僕の胸元に顔を埋めてそのまま動かなかった。

どうしたのかと声をかけようとした瞬間にいきなり頭をあげたので危うく頭突きが決まりそうになりギリギリで回避。

僕を見上げるウエンディの表情は、どこか悲しげだ。

「どうした？」

「……きて……ください」

「え？」

「必ず、戻ってきてください」

涙をこらえるような目でそう言った。

「絶対に死なないでください」

「……………」

さっきで緊張感が解かれたかとも思っていたけど、そうではなかったらしい。

僕とシユウが向かうのは情報すらない危険な所……ウエンディが心配するのは当たり前だ。

「……………」

「クク、心配するな。ウエンディやシャルルがいるのに僕が死ぬわけないだろ？」

「……………」

「あー、ほら。じゃあこれ預かってよ」

ウエンディを立たせ、僕はしゃがみながらその細い首の後ろに手を回す。

僕がウエンディに渡したのは、あの日に買ったネックレスだ。

「これ……クライスさんの、」

「うん。大切なウエンディとの絆だ。それは僕が持っていないと意味がない。だからそれを取りに絶対帰ってくるさ。約束だ」

「……はい！ 約束です！」

笑顔でうなづくウエンディに笑顔を返しながら立ち上がった。

「行くぞ、シユウ」

「うん」

シユウとその場から走り去る一瞬、ギユツと僕のネックレスを握りしめるウエンディを振り返り、さっきのあれも思い返すとかなり恥ずかしい、てか格好つけすぎな台詞だよな、なんて考えていた。

二人が一瞬で走り去ったあと、クライスが人知れず恥ずかしい行動だったと考えているのもいざ知らず、ウエンディは首から下がる彼のネックレスを大切に握りしめていた。

「さ、ウエンディ。クライスとシユウを信じて私たちは避難しましよ。ここにいたら私たちも危険だわ」

「うん」

彼は笑顔で大丈夫だと言ってくれた、自分の首から下がるネックレスがなくともクライスは約束を守ってくれるだろう。

心配する必要なんか無い、クライスはいつでもみんなを守ってくれるから。

シャルルがウエンディを掴み、ニルヴァーナから脱出しようとした瞬間、それを止める者がいた。

「すまないが、ちょっといいか？」

「……ジェラルル？」

いきなりすることにキョトンとするウエンディを、ジェラルルは何かを確信したような、ハッキリした瞳で見つめていた。

呪いの中心地

一組の男女が暗い通路を警戒するように、けれど足早に進んでいた。

青年は黒い着物、黒い髪、黒い目、黒い武器と全身漆黒で男にしては白い肌がなければそのままこの闇に溶けてしまいそうだった。細身の体からはなぜか弱々しさを感じさせず、筋肉質な訳ではないが体はかなり鍛えられている。掌から直接生えた漆黒の刀は青年の強さを呼称するかのように時折輝いていた。

少女は青年と同じく黒髪に黒いロングコート、どうみても彼女の細腕で持ち上げられるはずのない黒い大砲のような武器を背の後ろに回すようにしてかっついていっている。ただ、瞳は空より蒼く、ロングコートの下の露出度の高い服のさらに下に覗く肌は青年とは比べ物にならないくらい白く、この闇の中でも、そして表情がなくなるとも、その愛らしい姿は隠しきれていなかった。

そんな町に出たら、とくに少女の方などはすべての人が振り返るかもしれない程の容姿を持つ二人がなぜこんな薄暗い場所を急いで進んでいるのかと言えば、

「確かに、零番ゼロばん魔水晶まんぷくりまはあるみたいだが……なんだか、ゼロの言う通りだな」

「うん……不気味、それに、嫌な感じ」

「だな。僕の右目も多大な魔力の存在を知らしめてくれてはいるけど……それだけじゃない気がする。シュウの言うみたいに嫌な？感じ？だ。まさに呪い、魔力で感じるのとは違う……何が待ってるんだか」

「でも……私たちが、やらなきゃいけない」

「……ああ。ウェンディのために、僕たちのギルドのために。絶対

に」

その会話を最後に、二人はまた警戒を強めるようにしながら暗い道を進んだ。

それからいく分と経たない内に二人は口を開いた。暗い道を進んだ先、螺旋階段を降り、またさらに進んだ先に光が見えた。

「……予想通り、か」

「……………」

ただ、その光は長い道のりのゴールには不相应の不気味な光。心の弱いものなら見ただけで腰が抜けてしまいそうな、奇妙な力を持った光だ。

そんな光を前に、しかし二人は臆することもなく、青年はむしろ面白いとばかりにニイツ、と細い唇を吊り上げた。

「さて、不気味な光が僕たちを待ち受けてるわけだけど…………？」

「うん。やることは……………変わらない」

少女が担いでいた大砲を光に向けた。

「さすがシユウ、判ってるじゃないか」

少女に比例して、青年もどこからか白い双銃を取り出した。

少女の大砲に蒼い魔力が、青年の銃に銀の魔力が急激に集中、集束されていく。

『せー、のっ！』

場違いなほどに気の抜けた掛け声とは裏腹に、たった二人の男女のものとは思えない魔力の砲撃が打ち出される。

地面を、壁を、天井を削りながら銀と蒼の魔力砲撃が？光？を破壊せんと猛烈な勢いで進んでいく……が、

「は？」

「……！」

二人がまた、場違いな間の抜けた声をあげた。

目の前の光景を変えるほどの一撃、それがあっさり打ち消されたのだ。

打ち消された、というより吸収された。ドラゴンスレイヤーと人の域を逸脱した青年の一撃をあっさり受け止め、吸収してしまったのだ。

広がった入り口から見えるのは、やはり？光？のみ。その先になにもないかのように？光？のみがそこを支配していた。

そして二人が動けずにいると、？光？は意思を持つように、こちらに棒切れのように細い腕のようなものを何千と放ってきた。

「つと、これは予想外！」

「んー！」

先程までの余裕は二人になく、焦りながらも大砲と双銃で腕を撃ち落とす。

どこにるのが本物なのかわからなくなるほどの勢いで移動する二人だが次第に対応ができなくなっていく。

いくら二人が速く、強くとも、この狭い空間で何千という光を相手にいつまでも対応できないのは当たり前だ。

ああ、もう！ 青年が目の前の腕を一掃し、少女の隣まで移動する。

「キリがない、あれに突っ込むぞ」
「わかった」

少女が大砲を？光？本体に蒼い光の魔力砲撃を放つ。

腕は消滅したが、やはりその魔力は？光？に飲み込まれてしまう。
だが、彼らにはその先が目的だった。

空いた空間に腕が入り込む一瞬、すでに少女と青年は光の目の前にいた。

「ハッ！」

掛け声、その一瞬の残響が消えるより早く青年の黒い刀は？光？を切り裂いていた。

瞬く間に閉じようとするその間を縫うように二人は体を滑り込ませた。

先程までの轟音が嘘のように、そこは静まり返っていた。
だが、何もないわけではなかった。

「……………」
「……………」
「……あゝ、判断ミス、かな？」

無表情で少女が青年を見上げ、青年は苦笑いを浮かべた。

？光？の奥には、先程の腕が足の踏み場もないほど、まるで黒い草原が全体を覆っているかのような言葉で表現できないような場所だった。

？光？が球体状に全体を覆い尽くして細い腕のようなものがうごめいているその様子は、この世のものとは思えない物ですがの二人も顔を歪めた。

だが、いつまでのそれが続くわけもなく、一斉に腕が二人に襲い

かかった。

「ちっ、効かないよそんなもの！」

「ん！」

それでも、そんな二人を嘲笑うかのように腕はあつという間に空間を埋め尽くしていった。

時がわずかに前後し、六番魔水晶への通路を歩む二組の影があった。

ウエンデイとシャルルだ。

本来この道を歩くはずのジェラルルの姿はなく、ニルヴァーナから避難したはずの二人が何故か暗いそこを歩いていた。

「クライスさんとシュウちゃん、大丈夫かな……」

「心配しなくてもあの二人がやられるわけないわよ。それよりもウエンデイ、本当にできるの？」

「うん。クライスさんやシュウちゃんばかりに頼ってちゃいけないし、これは私がやらなきゃいけないことだから」

ウエンデイがここにいる理由、それはクライスが立ち去った後にされた会話があったからだだった。

「ジェラール？ 具合悪いの？」

いきなり話しかけてきたことに驚いてはいたが、記憶をなくしているとはいえ自分の恩人、シャルルに一旦降ろしてもらいジェラールに駆け寄った。

「いや……君は確か治癒の魔法が使えたな？」

「え？ う、うん」

刺青の入れられていない方の目、左目を押さえながらもなにかを考えるようにそう聞いてくるジェラールに戸惑いながらも頷くウェンデイ。

さっきクライスの傷を治すときにかなり使ったからあまり魔力は残っていなかったが、まったく使えないわけではなかった。

だが、その話をなぜ今するのがわからない。

ウェンデイが心の中で首をかしげているとジェラールは下を向いていた視線を戻しながら続けた。

「その力でゼロと戦うことになるナツの魔力を回復できるか？」

「それは……」

できる、とは言えなかった。

できるかもしれないけど、手を翳せばすぐに回復する訳じゃない。ウェンデイがどんなに急いでも一番魔水晶に着くまでにナツとゼロは戦い出しているはず……動き回る相手にたいしてできる魔法でもないし、なにより今度使ったらもう動けなくなって戦いの邪魔になっってしまうかもしれない。

折角ジェラルルが自分を頼ってくれているのにそれに答えられないのが辛くて俯いてしまう。

そんなウエンディの心中を悟ったのか、ジェラルルの言葉をシャルルが否定した。

「何バカなこといってんの！ 今日だけでウエンディが何回治癒の魔法を使ったと思ってるのよ？ これ以上はダメ、元々この子は

「
「そうか」

しかし、ジェラルルは判っていたかのようにシャルルの言葉を遮った。

「ならば、ナツの回復は俺がやるっ」

「え？」

「思い出したんだ。ナツという男の底知れぬ力、希望の力を」

「希望の、力……？」

左目を覆っていた手を退けたジェラルルの瞳は、ナツならば大丈夫だと言ったときのエルザのように？ ナツ？ という一人の青年を心から信じている瞳だった。

「君はオレの変わりに六番魔水晶を破壊してくれないか？」

「でも……私、破壊の魔法は……」

いくらジェラルルの頼みとはいえ、ウエンディの使う天竜グランディーネから教わった滅竜魔法の中には補助の魔法や治癒の魔法しかない。

見たわけではないがこの巨大なニルヴァーナを動かす魔水晶だ、石や棒で叩いた程度で壊れるものじゃないはずだ。

「君にならできる。滅竜魔法は本来ドラゴンと戦うための力……圧倒的な攻撃魔法なんだ」

ドラゴンと戦うための力を持った魔導師、ドラゴンスレイヤー。そのドラゴンスレイヤーであるウエンディが攻撃魔法を使えない訳がない、そんな期待のこもった瞳がウエンディの自信なさげな瞳を見据える。

「空気……いや、空……？天？を喰え。君の中にも竜の力が眠っているはずだ」

「天、を……」

その言葉を繰り返しながら、ウエンディは空を、天を仰いだ。

自分の中にある、竜の力……。

そしてジェラルルに向き直ったとき、その瞳には僅かの迷いもなかった。

「うん、私が六番魔水晶に行くよ！」

すまない、そう言って背を向けるジェラルルをウエンディは呼び止めることもなく、自分のやるべき事をなすためにシャルルと共に走り出した。

決して短い道ではなかったがウエンディはどうにか六番魔水晶に着いていた。

弾んだ息を整えながら目の前の巨大な魔水晶を見上げる。

黒く、巨大すぎる魔水晶。直径だけでウエンディの身長倍以上あるそれを今から破壊しなければならぬ。

多少の攻撃ならヒビも入らないであろうそれを前にしても、今のウエンディは臆してはいなかった。

「ドラゴンの力……私の中の、グランディーネから貰った力……」

自分の中の力を信じる。

みんなに助けられてばかりの自分にもできることがある。そう教えてくれたジェラルルの言葉を糧に、ウエンディは力強く魔水晶を見据える。

「まったく、クライスがこの事を知ったら怒るわよ？」

「あはは……そうかもね。でも」

危険なニルヴァーナから逃げずにこんなことをしていると知ったら、過保護なくらいに自分を守ってくれる彼なら確かに怒るかもしれない。

でも、守られているばかりは嫌だった。いつもクライスやシュウばかりに大変な思いをさせて自分が何もできないのは嫌だった。

そう言ってもクライスならウエンディは戦わなくていいと言ってくれるだろう。そんな危険なことしなくていいと言ってくれるだろう。

でも、守られているばかりは、逆に辛かった。

「自分のギルドを守るためなんだ！ 私だって自分の力で化猫ケットシエルターの宿を守りたい！ お願い、グランディーネ。力を貸して！」

クライスから預けられたネックレスを強く握りしめ、自分の中の

力を呼び覚ますように小さく息を吸い目を閉じる。
できないかもしれない、そんなことは考えない。
ギルドのために、みんなのために、クライスとの約束を果たすた
めに……必ず、やってみせる。

決意を固めた少女の名を、白い猫が励ますように呟いていた。

「【式裂流・九の奥義】？裂帝九文字？（れっていくもんじ）！」

一つの刀から一振りで九つの斬撃が産み出され何百の腕を切り裂
いた。

ゼロの言っていた言葉は本当だったようだ。

呪いの中心地、たしかにこれは……呪われてるか

「とっ、とと!？」

目の前を信じられない勢いで腕が通過する。

いつぞや流行ったフィギュアスケートの技並みに背を反らせなが
ら同時に、

「？裂帝九文字？ 二乗！」

両手から伸びた漆黒の刃から放たれた二閃十八斬がそれを切り裂
いた。

この奥義、式裂流の？裂？の字が入っているだけになかなかすこ

い技なんだけど……億、いや、兆を超える？光？に対してはなんの効果もない。ただ、動きを一瞬止めるだけだ。

刀で切ろうと関係ない、魔力を放てば吸いとられる、脱出しようにもどこが出口だかわからない。

攻められず、退けず、防ぐしかない状況がもう何分も続いていた。残り時間は少ない、でも防がなければ殺られてしまう。そんなもどかしい均衡状態。

せめて魔水晶の場所がわかれば……だけど、右目は気持ちの悪い何かを映し出すだけで何が何だかわからなかった。

左目で喰らいたくないしなあ、こんなの……。

「ん……！？」

短い悲鳴、何かと振り向けばシュウが腕に足をとられ釣り上げられていた。

細い紐のようなそれがシュウの細い体を締め付け、切り裂こうとする。

「貴さ　グウウ……そんなことしても十八禁指定になんざさせないぞ、コラー！」

我を失わないように無理矢理ギャグを入れながら腕をつたい跳び、シュウまで移動する。

恐ろしい勢いでシュウを包み込んでいく腕、切るのは難しいか……なら！

身刀をしまい、拳を固め、神速で？光？をシュウごと殴り付けた。

「【式裂流・体術】？外体破離？（がいたいはり）！」

ツツドン！　と鈍く響くような音が響き、シュウを包み込んでい

た腕が弾け飛ぶ。

外体破離は一定の力加減で対象の表面にのみ衝撃を伝える技だ。力の加減では汗だけを吹き飛ばしたり身体中を内出血させたり、あわよくば皮膚を内側から弾き飛ばしたりもできる。

その応用だったが、なんとか成功した。

シユウを連れてその場から跳ぶ、次の瞬間そこは腕で埋め尽くされていた。

「シユウっ！ 大丈夫か！」

「ん……うん。平気、ごめんなさい……私……」

「謝るなよ。休めと言いたいところだけど 無理っばい！」

腕がひとつに固まり、シユウのブラックシューター並の大きさとなり襲ってきた。

右腕でシユウを抱え、左半身を前に押し出しながら身刀を抜刀。腕が左手の甲から伸びた漆黒の刃に当たり火花をあげる。

二股に別れていく腕を見据えながら妙だな、と思う。最初は腕で払えたはずの腕が段々と刀でも切り辛くなってきた。今だって、数分前なら火花をあげたりしなかったはずだ。

そこから導かれる答えは

「これ、いや、こいつら（……）は、まさか意思を持って」

二股に別れていた腕、その切れて平らになった面からいきなり鋭いトゲが飛び出す。

「いいっ！？」

とっさに逃げようとして、間に合わないことを悟りシユウを下方に投げ飛ばす。

た。

一瞬だけど、気を失っていたらしい。

激しい呼吸が聞こえる……僕を抱えながら戦うシユウのものだ。僕もそうだが、シユウもかなり消耗しているみたいだ。

五封刀が使えないことが悔やまれる……魔力がもう零に近く、第壱刀の毒刀すら抜けない。

第参刀 墮刀【滅】……これが抜ければかなり有利になるんだけどな……。

そんな幻想をよそに、もうろうとする意識のなかで気配だけを頼りに身刀を抜刀。

「シユウ……大丈夫、だ。降ろして、くれ……」

「でも……!」

「お前も辛いだろ ほら、反応できてない」

「……!」

ビュン、シユウの首ギリギリを刺突する。

【式裂流・弐の奥義】？飛麗銃？（ひらいがん）……と言う気力もない。

銃の様に突きを飛ばす技……なのだが、今の力では数メートル先ものを弾くだけで精一杯だった。

シユウの頭を喰おうとしていた腕を弾き飛ばしたのだが、普段のシユウなら教えなくても反応できるはずのそれに反応しなかった。

いつもと変わらない無表情だが、その疲労と限界は隠せていない。荒い息、かかないはずの汗、泣きそうな目……これは僕のせいか。

「あ……ヤバ……」

たった今飛麗銃を繰り出した身刀が粒子分解するように消えていく。

五封刀禁忌　第弐解放、ウエル・カミナ 壹匹狼の解放、及び抑圧……慣れないことが続いたせいで魔力が予想以上になくなっていった。あと、頼れるのは体術のみ。なのに体はボロボロ……生きて帰れるか心配だよ、ウエンディ……。

「……なんて、言うわけあるかよ！」

重い脛を無理矢理開き、僕とシュウを包み込もうとしていた腕を蹴り飛ばす。

同時にシュウの腕から這い出し、蜘蛛の巣のようになっていて、光？の一本に降り立つ。

「お兄ちゃん……そんな酷い怪我で、無理しちゃだめ」「大丈夫だって、すぐに治る。心配するな」

横に降り立った疲労困憊のシュウにそう笑いかける。

笑えては、いないだろうが……。

怪我は確かに治ってはいる。しかしそれは僕の零に近い魔力が完全につきるまでのわずかな時間だ。しかも尽きたら逆に体が動かなくなる。

左目を発動しても、喰らえなかった。

最初、魔力を食べて回復すればどうかとシュウに言われたときはなんか気持ち悪くなりそうだから嫌だ、と言ったがそれは悪い意味で本当だった。

気分が悪くなった、しかもかなり。

左目は魔法を魔力として吸収するため火の魔法だろうが氷の魔法だろうが魔力として還元し、取り込んで僕の身体能力や魔法を強化する。

だが、この？光？は魔力の塊であると同時になにか別の力……それこそ呪いのような何か。

魔力を吸収しようとして逆に妙な呪いを食べてしまったような気分だ。

こんなものではとてもじゃないが回復などできなかった。やるしかない、か……飛びそうな意識を唇を噛んで保たせる。

「 シュウ」

「 なに？」

「 時間を少し……稼いでくれ」

「 ……わかった」

それ以上なにも言わずに猛然とブラックシューターを振り回すシュウ。

信用してくれてるってことかな、ならそれに答えないと。

ありがとう、と返しながら肉体の再生に使っていたわずかな魔力をカットする。

それで回復力はかなり落ちたが仕方がない。

わずかな魔力を、ないはずの魔力を限界まで左手に集める。

無理矢理に魔力を引き出しているため意識がとびそうになるが、シュウに心配させないためにその表情は出さない。

数秒の後、ギリギリ魔力が溜まった。

意識は朦朧としているが まだ、後少しだけ……。

「 シュウ、下がって」

「 ん」

トン、軽い音がしてシュウがバク宙の要領で僕の後ろに跳ね跳ぶ。

「 お願いだから……消えてくれよ……」

願うように呟きながら、左手の中指を引き抜くほどの勢いで？そ

れ？を抜刀し？光？に投げる。

墮刀【滅】 消滅を纏いし禁断の妖刀……が、今は苦無ほどの大きさの赤い刃物が飛び出したただけだ。

幸い墮刀は形状を変えられる。魔力の消費を極限まで減らした結果だ。

だがしかし、それでこの刀の能力がなくなるわけではないし、弱くなりもしない。たとえ魔力がなくなるとも、変わらない。

？光？に墮刀が突き立つ。音もなければ変化もなかったが、それでいい。

「削除せよ 墮刀【滅】」

そして、消える。

？光？が、腕が、今までこの場所を覆っていたすべてが消える。

コマを切り落としたかのように、もともとなかったかの様に消える。後には灰色の煉瓦に覆われた何のこともないただの広間。

ただ、その中央には巨大な石が浮かんでいた。

あれがニルヴァーナを支える魔水晶か……。残り時間は三分、僕は間に合いそうにないけどシュウが破壊してくれるだろう。

何にせよ、後はシュウ任せて

「危ない、避けて！」

「な っっ！」

いきなりのシュウの声になんとか反応し、気配を頼りに自由落下していた体を捻り、それを避けた。

避けたはずだったのに、？それ？は瞬間に僕を包み込んでいく。なんで

「なんで？光？が……」

僕が消したはずの？光？が、また空間を埋め尽くしていたのだ。消してから僕が落ちるよりも早く、さっき見たのが夢だったのかと思ってしまうほどに完全に元通りだった。

何故、完全に消したはずだ！　なのになんで！

そんな思考も、次の瞬間に飛び込んできた光景によって遮られた。

「シュウ!?」

「……………!」

シュウもまた僕と同じように？光？に包み込まれていた。

僕より早くに飲まれていたのか、すでに左腕と顔の一部しか見えぬ声すらも聞こえない。

「貴様アアアア!」

火事場のバカ力とでもいうのか、意識を失う寸前だったはずの体に信じられないほどの力がみなぎる。

巻き付く光を引きちぎり、足元の光を蹴って跳躍する。

すでに手首しか見えないシュウに手が届くまで後わずか、そんなところで無情にも腕が僕を包み込んだ。

振りほどきたくても、所詮は満身創痍の身。

【……………呪ってやる、殺してやる、苦しめてやる……………】

そんな不気味な声が聞こえた気がして、僕の意識は閉ざされた。

シュウの過去、真の力（前書き）

難解な文章が続きますが、頑張ったので読んでいただけると嬉しいです。

そして今回は夜桜癒月様から頂いたアイディア、『魔の滅竜魔法』（魔力吸収の力のみですが）を出しました！

シュウの魔法、というより無意識に発動する力みたいになってしまいました。

あまりにもイメージと違っていたらすいません。

それでは、どうぞ

シュウの過去、真の力

自分が自分を認識できない……何が自分で、自分は何なのか……まるで夢のなかにいるようなハッキリとした意識を持ってないような空間。

上も下も、右も左も判らないその空間で彼は苦しんでいた。

自分が何なのか判らないのに、絶え間なく聞こえる自分を責める言葉の数々。

【死ぬ、消えろ、お前に生きる価値なんかない……殺してやる、壊してやる、呪ってやる】

老若男女、折り重なった不気味な声が彼を攻め、狂わせる。

耳を塞ぎたくても耳がわからない、目を閉じたたくても目がわからない、逃げ出したたくても足がわからない……気が狂いそうな空間。

人々の負の感情……恨み、妬み、悲しみ、苦しみ、嫉妬、怒り、痛み、殺意、恐怖、畏怖、怠惰……そして何より憎しみ。

人が人に必ず持つ感情。

人は無意識のうちにそのような感情は自分のなかにしまいこんでいて、それを吐き出すことはあまりない。

強い負は、人を呪う。

たった一人の持つ負の感情ですら、それが深く強ければ……多くの人を呪い、傷つけ、狂わせる。

そんな強烈な負を、彼は一身に受けているのだ。

何百何千万もの人々の呪いの言葉。

強大な力を持つ魔導師ですら精神を破壊されてしまうその中で、彼は苦しみながらも耐えていた。

満身創痍、ただ立っているだけで死んでしまいそうなその体で耐

えていた。

意識もないボロボロの体で……それでも一つの約束を守るためだけに狂うことなく耐えていた。

「……………」

魂が抜けたような表情をしながら、わずかに唇を動かす。
紡いだのは誰かの名前。

今にも死にそうなのに死なないのはその名前を命綱としているからだろう。

けれど、その命綱を切ろうとするものがいた。

呪い　長きにわたり蓄積された人々の怨念が魔力を持ち、生者を呪う怪物として形を持ったのだ。

人の形をした塊が彼の命を絶たんと形のない腕を伸ばす。

形を持ち、より強い呪いを放つそれは一つではなく……黄泉すべての死者が一人の生者の命を奪おうとするかのように数えきれない腕がのびる。

触れれば狂って死んでしまうのに、彼は動かない。

生きてはいても、生きるための力は残っていないかった。消えかけの薪に息を吹き無理矢理燃やしているようなものだ。

わずかに赤く光るだけのそれに水をかけようと呪いが迫る。

「……………」

黒い火が、黒い水に包まれた。

あとは触れれば消えてしまう。

さあ、消そう。

こいつを消そう。

我らと同じ苦しみを味わうがいい。

黒い水が黒い火に注がれる。

そして、火は消えた。あっさりと、音もなく

しかし、すぐに火は灯る。蒼い、蒼い火が黒い水を焼き払ったのだ。

黒い火は、黒い瞳を静かに開き蒼い火を見る。

そして蒼い火も、黒い火を見る。

そして黒い火の瞳が蒼く染まったとき、すべては抜われた。

ここは、どこ？

少女がいたのは白い世界。

地面もない、空もない、風もない、地平線もない、時もない、音もない、色もない、終わりも、始まりもない 限りのない世界。

白い世界で黒髪蒼眼の少女は、その黒髪を揺らしながら世界に負けない白い裸体をさらしながら漂っていた。

自分は誰だろう。

自分とは何だろう。

私は誰？

私は何？

漂いながら自問する。

答えはない。

当然。答えるのは自分だ。自問だから自答するしかない。

ここには誰もいないのだから……も、も、も、
いないのだから。

……何か大切なものを忘れている気がする。

忘れてはいけないもの、忘れたくないもの、忘れるべきではない
もの……それを忘れていく気がする。

それは、自分を助けてくれた。

それは、自分に意味をくれた。

それは、自分を見つけてくれた。

それは私に

「な、まえ……」

私に……私が存在するための名前をくれた。

私の、名前……。なんでだろう、思い出せない。

聞いた瞬間に感じたことのない感情を感じたはずの、大切な名前。
いやだ、忘れたくない。

名前をくれた。 となると、いつもその気持ちになれた。

思い出して、私は。

も、 も、 も、私にとって大切な。

『大丈夫よ』

音のない世界に響く声。

少女にとって、なによりも知っている声。

「アイリス……?」

色のない世界に色が現れる。

小さな少女の前に現れたのは巨大なドラゴン。

蒼い鱗をもった、蒼い瞳をもった、大きく、それでいて優しげなドラゴン。

『私はあなたに名前をあげることができなかった……けど、あなたは貰ったはず』

「……でも、忘れちゃった」

ドラゴンが立つと、地面ができた。

『それは、困ったわね。……じゃあ、あなたに名前をくれた人の名前は?』

「忘れちゃった」

少女が首を振ると、世界に悲しげな風が流れた。

『じゃあ、他に思い出せることは?』

「……アイリス」

『フフ、私はいいのよ。私じゃなくて、あなたが見つけた大切なものの』

「私が見つけた……私の、大切なもの……?」

私に大切なものなんてあったのか、なかったのか。それすら覚えていない。

すべて忘れてしまったのかもしれない。

いや、なかったのかもしれない。

『いいえ。あなたは大切なものがなかったんじゃない、忘れてもない、思い出そうとしないの』

「……そんな、こと……」

『ごめんなさい、私のせいね。私があなただけを一人にしたから、あなたは一人になった。一人の時間が嫌で、あなたはあなたを失ってしまった』

「……………」

ザザッ

柔らかな風が強くなる。

そうだ、私は一人になったんだ。

アイリスが消えてしまったあの日から、私は一人になったんだ。

一人は寂しかった。

一人はつらかった。

それがいやで、私は私をなくした。

記憶を消して、力を封じて、世界を絶って、私はあの森で、意識もなくただ待つだけにした。

そうすれば寂しくないと思ったから、待っていればアイリスが迎えに来てくれると思ったから。

誰かが来ても追い払った。

私が待っているのはアイリスだけだったから。

『ごめんなさい、私はあなたを迎えには行けないの』

「なんで…………？」

空ができる。

曇天。

色ができた白い世界に新しい色、でもそれは、灰色で、悲しい色

だった。

雨が降る。

小さく。

雨は二人を包み、皮膚や鱗を伝って大地に落ちる。

「私……は、悪いこと……なにも……」

少女の頬を伝うのは、雨か、それとも違うなにかか。

『まだ、話せないの。ごめんなさい』

「……………」

『でも、よかった。あなたを救ってくれた人がいて。あなたが好きになれる人がいて、あなたを好きになってくれる人がいて』

「す、き……？」

『ええ、あなたが私以外に初めて心を開いて、好きになれた人たちが忘れてなんかないはず、あなたはその人たちのことが大好きなはずだから』

「すき……スキ……好き……私が、好きな人たち」

閉じていた記憶の扉が、開いていった。

「お姉ちゃん……………」

いつも私に優しく微笑んでくれた人。

「ねこさん……………」

ちょっと厳しいけど、本当は優しい……ねこさん。

「お兄ちゃん」

私を見つけてくれた、私を助けてくれた人。
そして私に名前をくれた人。

『あなたは弱かったから、いつも私以外の生き物から逃げていたわよね』

「……………うん」

『あなたの心を傷つけたから』

「……………うん」

『でも、あなたを見つけてくれた人や、その人の周りの人たちもあなたにそんなことしない』

「……………うん」

『みんながあなたを嫌っている訳じゃないの』

「でも……………怖い」

『本当に？』

「……………え？」

『本当に怖いなら、あなたはその人すら振り払ってまた逃げればいい』

「でも、一人は寂しい、から……………」

『それだけじゃないはず。あなたはその人たちと初めて？楽しい？？嬉しい？という気持ちを持たはず』

「……………あ」

『そうだ、私はみんなと初めて……………楽しいと感じた。嬉しいと感じた。』

だから、寂しくなくなった。

だから……………ずっとずっと一緒にいたいと思った。

『全部、思い出した？』

「うん」

『それじゃあ、その人を助けないとね』

「アイリスも……」

『それは無理なの。ごめんなさい』

「……………」

『悲しそうな目をしないの。あなたを待っている人に、そんな目で見られたくないでしょ？』

「……嫌だ」

『だったら、早く行ってあげなさい』

「……うん。わかった。もう、行くね」

バキリ

世界に亀裂が入る。

崩れる世界のなかを少女はドラゴンに背を向けて歩いていく。

崩れる世界の中で優しげにこちらを見つめているドラゴンを、少女は少しだけ振り返った。

「……………アイリス」

ドラゴンは少女を見ているだけだった。

「私の名前は、シュウ……………だよ」

そう、いい名前をもらったわね。

ドラゴン アイリスがそう呟いたような気がして、少女 シ

ユウは、うん、と笑った。

・
・

・ ・ ・

呪いの言葉で埋め尽くされた世界。

自分を認識できないそんな世界でシユウは意識を取り戻した。

夢だったのかな、そう思った。

でもすぐに違うと信じた。

「アイリス……ありがとう」

ゆっくり閉じられた瞳が再び開いたとき、シユウの瞳には蒼い光が炎のように輝いていた。

「私はもう、逃げないよ……」

シユウが目覚めたことを感じ取ったのか、呪いの魔力が少女に殺到する。

斬っても、撃っても、砕いても、壊れることのないはずのそれは、シユウの体に触れた瞬間蒼い光となって抜われた。

呪いは抜い、魔力は喰らう。

ドラゴンスレイヤーは自分と同じ属性の魔力を喰らい、自分の力にできる。

しかし彼女は魔力というだけで、その呪いすら無効化し喰らっていた。

次々襲いかかる黄泉の怪物たちはシユウに抜われ、逆に彼女に戦うための力を与えていく。

瞳の光が一段と輝き、蒼い双翼がシユウの背から伸びた。

相変わらず感情がなかった瞳が一人の青年をうつした。呪いに消されようとしている、クライスだ。

「お兄ちゃんを」

横に広げた右腕に黒い大砲のようなものが現れる。蒼い双翼が大きくはためいた。

「傷つけないで」

シュウが引き金を引くと、巨大な蒼い光が放たれて呪いを消し去った。

光はクライスをも包み込むが、それで消えたのは呪いだけで彼には傷一つなかった。

呪いが削られたせいで支えを失ったクライスの体が落ち始めるが、その体はまた呪いに落ちる前にシュウによって支えられていた。

クライスを抱えたままシュウは翼をしまい地面に降り立つ。

呪いがまた襲いかかるうとするが、シュウが蒼い光をドーム状に展開し、やはり呪いは抜われた。

全身に生々しい傷跡と血痕があり、今にも死にそうな彼をシュウは心配そうに見つめる。

お姉ちゃんがいれば、そう思ったが今ここにウエンディはいない。だが、早く治療しなければ彼は死んでしまうだろう。

ん、とシュウは場違いにもその場で 周りは化け物だらけだ。無表情のまま考えはじめた。

数秒の後、考えがまとまったのか自分とクライスを包む光を一瞬仰ぎ、うん、と小さく呟き何故か自身の顔をクライスの顔に近づけていった。

「お兄ちゃん……」

段々と自分とクライスの顔を近づける彼女の頬はうっすら桜色に染まっているように見えた。

そして ……

呪いに潰され、意識がないなかで夢を見ていた。
悲しい少女の夢。

ある日、少女は裕福な家庭の長女としてこの世に生を受けました。少女は美しい肌を持つ母に似て雪のように白い美しい肌をしていました。少女は綺麗な瞳を持つ父に似て宝石のような美しい蒼の瞳をしていました。

ただ、髪の色は夜のように漆黒でした。
艶やかで細く美しいその髪は誰もが羨む程でしたが、その家では黒は不吉の象徴とされていました。

家では不吉とされていて少女の容姿は他の貴族達が羨む程のものであったので少女の親は多大なお金をかけて少女を彩りました。

少女はそれを愛だと信じ、幼いながらに精一杯の努力をしました。
作法や礼儀、習い事。

けれど、少女は一つだけできないことがありました。
表情を作ること。

楽しくないのにいつも笑顔でいる、そんなことは少女にはできませんでした。

言葉もわからないうちはしょうがないと言っていた少女の親も、自分達の前以外ではニコリともしない少女に秘かに苛立ちを感じて

いました。

無表情、無感情。

ある人は人形のように愛らしいと、ある人は人形のように不気味だと、少女をみて笑いました。

それでも、わずかに少女が見せる笑顔は他の貴族達の子供が色褪せる程のものであったのでやはり少女の親は少女を彩りました。

少女は笑おうと努力しました。

けれど少女の表情はそれこそ人形のように全く変わりませんでした。

笑えるのは自分が信じている二人が笑ったときだけ。

他の大人達が浮かべる笑顔は気分が悪くなるだけで、むしろ顔を歪めたいくらいでした。

笑いもしないのに大人達から持て囃されている少女。

当然、同年代の子供たちからイジメられることは日常茶飯事でした。

靴が捨てられていても、積み木をぶつけられても、泥水を頭からかけられても、やはり表情を変えない少女。

段々と孤立していくのは当たり前でした。

毎日のようになにかしらの汚れや傷をつくり、持ち物をなくしたりしてくる少女を見ても、少女の親はなにも感じませんでした。

他のみんなはあなたを見て嫉妬しているだけ、羨んでいるだけ、だから気にしなくていいのよ。

少女はその言葉を信じました。

表情はなくとも少女の心はとても傷ついていましたが、少女は両親に愛されていると信じそれに耐えました。

少女が産まれて四年の月日が流れた頃、少女の家に二人目の女の子が産まれました。

その娘は少女ほど美しい肌を持つてはいませんでした。

その娘は少女ほど綺麗な瞳をしてはいませんでした。

けれど、その娘は綺麗なブロンド色の髪をしていました。

そして、いつでも笑っていました。

外見で言えばその娘は少女に遠く及びませんでした。ブロンド色の髪と可愛らしい笑顔で少女以上に他の貴族達から羨まれました。その娘が産まれてから、パタリと二人から少女への愛はなくなりました。

二人はその娘だけを本当に愛し、少女には上澄みだけの言葉だけをかけていました。

少女は表情を変えはしませんでした。いつも一人で泣いていました。

それでも少女の親は少女のことを愛することはありませんでした。それから二年。

ある日、唐突に少女たちは家から遠く遠く離れた山奥へとキャンブにいきました。

その日は少女に全員が優しくしてくれました。久々に笑いかけられました。

少女は久しぶりに笑いました。

また、自分を愛してくれるのだと。

また、自分を見てくれるのだと。

そして、夜遅く。

少女が目覚めたとき、少女は一人でした。

メイドもいません、執事もいません、妹もいません、そして、信じていた両親もいませんでした。

捨てられた。

瞬時に理解した少女、けれど少女は信じませんでした。

三日三晩歩き続け、ボロボロになりながらも少女は記憶を辿り家に帰り着きました。

けれど家には入れませんでした。

厳しい顔をした門番に押し退けられ、蹴り飛ばされ、家には入れませんでした。

さらに三日三晩。

美しい肌は泥に汚れ、骨が浮き出て、綺麗な瞳はどんよりと光を失い、なにも映していなく、豪華なドレスは破れ、排泄物や嘔吐物にまみれて、少女は捨てられた猫より酷い姿をしていました。

そんな状態にありながらも少女は二人が迎えに来てくれると信じていました。

自分を愛してくれていたのだから、と。

そして七日目の夜。

まだ六回しか季節の巡りを見たことがない少女の命は尽きかけていました。

そんな少女の前に一人の女性が現れました。

少女は、ママ、と美しい鈴のような、しかし濁った声で呟きました。

しかし、女性は少女を見下すだけでなにも言わずにその今にも尽きそうな命の炎を消そうとしました。

蹴る、叩く、殴る。

汚ならしい、醜い、穢らわしい。

少女が血を吐いても、泣いても、語りかけても、彼女は狂ったように少女を痛め付けました。

お前を愛したことなんて一度もなかった。

もう泣くことすらできない少女にそう言い残し、女性は去っていききました。

愛したことなんて一度もなかった。

少女は頭のなかでその言葉を繰り返しながら立ち上がり、暗い森の中へ歩いていきます。

表情もなく、ただ、歩いていく。

絶望したわけではなく、諦めた。

だから飢えも乾きも苦しみも痛みも苦悩も悲しみも憎しみも感じることなく、意味もなく、少女は暗い森の中へ歩いていきました。すべてを拒絶して、すべてを諦めて、ただ、歩いていきました。

『これが、あの子の物語よ』

「辛いな」

『ええ。何百年も生きている私でもわからないほどに辛かったはず』
『よ』

「すべてを忘れてしまうほどに、か？」

『あの子の時は、私と会った瞬間に始まり、私と別れた瞬間で終わってるの』

「いいや。そんなことはないよ」

『そうね、あの子の本当の物語はあなたによって始まった』

黒い青年はなにも見えない闇のなかで誰かと話している。

『ねえ、あなたはあの子のことを愛してる？』

「さあね。まだ会ってあんまり経ってないから判らないかな」

『でもあの子は幸せそうよ。私といたときよりも』

「バカな。半月ばかりの付き合いでしかない僕という方が力を与え育ててくれたあんたというより幸せだつて？」

『あなたはあの子に名前をくれたじゃない』

「大したことじゃないよ」

『あの子にとつてはそうじゃないのよ。名前はその人を世界に存在させるための印。それはあなたはあの子にあげたのよ』

「ふうん。そんなものなのかな」

『ええ』

ふうん。青年はまた静かに呟く。

『あの子を愛してあげてね』

「大丈夫。少なくとも僕は彼女のことを好きだから」

『それは愛？』

「ちよつと違う」

『それは残念ね』
「でもまあ」

彼女の物語を知ってしまったから、これまで以上に彼女の好意には答えてあげたいけど。

青年は呟いた。

『偽善者』

「使い方が間違ってるよ」

『そんなことないわ。今の言葉じゃあなたはあの子に同情しているだけじゃない』

「だからどうした？」

『え？』

「同情は偽善じゃない。本当に愛しいと思っていなければ同情すらしないよ」

『あら、あなたはあの子を愛している訳じゃないんじゃないの？』
「？」

「愛しいと愛しているはちがうさ。まあよかったよ。彼女が異常に僕達に愛を求める理由が判って」

『あなたはそれを今までただの好意だと思っていたんじゃないの？』
「まあ、ね」

でも、と青年は続ける。

「彼女は？愛？を知っている訳じゃなさそうだから……さながら好意でも間違っていないみたいだけ」

『それは仕方がないわよ』
「仕方ないね」

さて……そう青年は一段と声を張り上げた。

「そろそろ行くよ。貴重なお話をどうも」

『いえいえ。私もあの子を助けてくれた人とお話ができよかったわ』

段々と意識が闇から遠退いていく。

「最後に聞きたい」

『何かしら？』

「なぜあんた達ドラゴンは姿を消した？ 僕の連れにもう一人ドラゴンに育てられた子がいるんだけど、その子が知りたがってた」

『……………』

「それに、あんたが姿を消さなければあんたが愛してやることもできたんじゃないか？」

『……………』

「話せないのか？」

『ええ』

「それは？本物の？あんたでもか？」

『私は私よ』

「残留思念の癖に」

『……………やっぱりあなたはあなたなのね……………』

「ん？ なんだって？」

『いいえ。何でわかったのかって聞いたのよ』

「僕の腕をド派手に覆っておいて何言ってるんだ」

『それもそうね』

闇から覚める一瞬、最後に彼女は青年に囁いた。

『ありがとう。そして、これからもあの子をよろしくね』

闇から意識が引き戻された。

なるほどね、僕がやられるほどとは……さすが呪いの中心地か。

人間の負の感情を寄せ集めたて魔力で具現化させたような場所だ。
んん？

それにしても、痛い。

痛いというのが判るということはつまり僕が認識できているということだ。

さつきまで夢のなかでもできなかったのに……てことはつまり僕は誰かに助けられた？

誰に？

いや、一人しかいないけどさ。

後頭部に感じる柔らかく冷たい感覚。

額に添えられた冷たいなにか。

そして近づいてくる人の吐息……

「……って、おい待てええええー！」

「んんっ!？」

ガンツ、と上げた頭がなにかにぶつかった。

いきなり頭を上げたせいで多少貧血ぎみ……いや、いろいろ足り

てはいないんだが……。血とか魔力とか。

それでも目を開けてみると、案の定、目にわずかに涙をためながらうつすら赤く染まった額を押さえている美少女 シュウが。

「痛い……」
「……なにをしようとしてたんだ、シュウ」
「？ ……あいじょうひょうげん？」
「この場で？」
「うん」
「この状況で？」
「うん」

痛む体をギギギツ、と回しながら辺りを見回す。
なにやら蒼い光がドーム状に展開されていて、腕の侵入を防いでいた。

シュウの新たな……いや、本当の力か。
邪悪を祓い、力としてその魔力を吸収する。
シュウの魔力は右目で見てもわからないが膨大な魔力をその身に溜め込んでいるのは判った。
ふう、と息をついて立ち上がる。

「愛情表現は後にして今はとりあえず本来自の目的を達成しなきゃ」
「……？」
「まさか、忘れたのか……？」
「……………」

いや、無言で頷かれても困るんだけど……。
しかも常時魔力を吸収しているせいでほんのりと頬が上気しているからなんかその表情はヤバイ。
無表情だが……いや、無表情だからこそ。
とりあえず、と痛む体で無理矢理立ち上がり着物の左袖から腕を引き抜く。

そこには蒼い刺青……ひし形を三つ重ねて線の外側と内側に古代

文字が書かれた奇妙な刺青があった。

シユウに生きる力を与えたドラゴンの力が宿った印。僕がシユウに？シユウ？という印を与えたお礼に彼女　アイリスが僕に与えてくれた力だ。

今考えれば、シユウがああ森で一人でいながら生きていたのはあの十字架、つまりさつきまで僕の腕に赤い十字架の刺青を刻んでいたあれは去るしかなかったアイリスがシユウを生かすために残していった力だったのだろう。

シユウは呪いすら被い、力として吸収する。

あの十字架はシユウが吸収するための魔力を産み出していたわけだ。

そして、シユウをその場から助け出した人間にとり憑き、その人間が本当にシユウを傷つけず愛してくれると判断したとき、ただの赤い十字架の刺青だったそこにいたアイリスの残留思念は消え、その者　つまり僕の力となったのだ。

シユウを助け出したあの日以来何も感じなかった刺青から感じたことのある魔力、シユウから感じる魔力と同じものを感じる。

ただ、これは今の僕一人で発動できるものではない。

魔力が万全なら発動はできるかもしれないが、これの本当の力を発動させるためにはもう一つの力が必要だった。

「シユウ……」

「……ん」

魔力が共鳴しているせいか、いつも異常に心が通じあっている気がする。

僕が名前を読んだだけでシユウは僕の意味を感じとり、僕の目の前まで歩いてくる。

そして、僕が差し出した手にシユウの細く柔らかい指がゆっくりとからめられる。

『ユニゾンレイド
合体魔法』

刹那、蒼い魔力が爆発する。

すべてを被うその力は空間を埋め尽くしていたすべての呪いを被い、魔力の塊とした。

だが、呪いは人々の感情。

ニルヴァーナが大地から魔力を吸収しているかぎり、呪いは魔力を使いここを埋め尽くす。

そして、二度も消された呪いたちはさらにその力を強力なものにしていた。

黒い、見るものを威圧するような漆黒の骸骨が爆発の中心にいた僕とシユウを見下ろす。

回りの白く黒い、黒く白い光から腕が次々と延び巨大な黒い骸骨が何体も産み出される。

一体がこちらを認識し、その巨大な拳を僕に降り下ろした。

「効かないよ」

僕は目を閉じたままでその腕を軽々と受け止めた。

普通に触れれば逆に飲まれてしまうはずのそれを、その黒く巨大な拳にまけないほどに巨大な腕で止めた。

それは蒼と黒で彩られ僕の身長と同じくらい長く、手は僕の上半身を隠せるほどに大きい。

肩口から上がる蒼い光を境界線に機械質な巨大な腕が僕から延びていた。

掌に比べて異様に長い指、腕周りは大きさに対して人間の腕とさほど変わらない。

だが、この腕には確かにシユウと同じドラゴンの力が宿っていた。閉じていた両目を開ける。

繋いだ手の先、そこにいるシュウを見る。

シュウも同じように僕を見ていて、それが可笑しくて僕もシュウも小さく笑った。

彼女の左の瞳からは、蒼い炎のような光があがり、彼女の瞳に映った僕も同じ蒼い左目に蒼い光を纏っていた。

黒と蒼のオッドアイか……どうせなら両目が蒼くなればいいのに……。

そんなことを考えながらも顔を目の前の骸骨に戻す。

「ブレイス
爆発」

そう唱えると、蒼い光が猛烈な勢いで腕の先に集束し爆発した。

反動で腕が反るが、直撃を受けた骸骨はバラバラになりながら一瞬で吹き飛んでいく。

腕を一振り、砂煙を払い除ける。

「時間か……。シュウ、僕がラクリマ魔水晶を破壊する！ 道造ってくれ

！」

「ん……わかった」

繋いでいた手を離し、僕は陸上選手のようにクラウドチングスタートの体制をとり、同時に横に左腕を広げる。

横からは膨大な魔力が集中する気配。深呼吸をしながらシュウが魔力を集めていた。

そして

「蒼竜の 咆哮っ！！」

夜の闇すら被ってしまいそうな、膨大な蒼い光がシュウから放たれた。

その光は腕を被い、骸骨を被い、そしてすべてを被う。
また、空間を覆っていた全てが被われ中央の魔水晶が露見した。
また闇がそれを覆い尽くさないうちに、僕は地面を砕きながら魔水晶に飛びかかった。

巨大な腕を鞭のようにしならせながら魔水晶めがけて振り降ろす。

？

——ツツ！！！！？

腕。

先ほどの骸骨の背丈ほどもある巨大すぎる腕が僕の目の前に現れ、魔水晶への道を遮断した。

地の底から這い出た咎人のような声とも言えぬ声が傷だらけの僕の体を引き裂かんと鳴き叫ぶ。

僕だけだったら、あるいははそれで力尽きていたかもしれない。

でも、僕には守らなきゃならないものがある。

僕の ケットシェルター ウエンディの、シュウの、シャルルの、帰る場所を、化猫の宿を護るために

「邪魔だあああああああああああああああああああああああああああ
ああつつつ！！！！」

一閃、腕と魔水晶がバラバラに切り裂かれた。

シュウの過去、真の力（後書き）

ちなみにクライスとシュウの『合体魔法』の時のクライスの巨大な腕はコード アスの紅 の右腕の色違いをイメージしていただけばいいです。

この展開は最初っから考えてはいたのでシュウの『魔の滅竜魔法』の魔力吸収とワンセットにしてみました。

詳しい能力などは作中にかいていこうとおもいます。

それではこれからもご愛読よろしく願います！

あ、ご感想や魔法及び武器のアイディアなども引き続きお待ちしています

クライス、死す！？（前書き）

物語は題名が命ですが、何でしょうか、今回の題名は不吉なものに……。

更新が遅れてすみません。

原作を（特にウエンディに関わること）かなり変えているので辻褄が合っているか不安で何度も書き直していたらいつの間にか15000文字近くまで伸びてしまいました。

とはいえ、合っていないかもしれませんが……。

それでも！ 今回の話は渾身の作です！

前置きが長くなりました、それではどうぞ。

クライス、死す!?

魔法水晶ラクリマが砕けると長い年月を経てなお風化すらしていなかったこの部屋に大きな亀裂が入り、ニルヴァーナが崩壊し始めた。

七つの魔法水晶ラクリマを同時に壊しニルヴァーナを止める、どうやらそれは成功したらしい。

よかった、僕たちはギルドを守れたんだな。

崩れる部屋の中で目を瞑り大の字に寝転がりながらそんなことを考えていた。

竜の力をふるっていた僕の左腕はすでに人間のものに戻っていて、先程までの魔力は感じない。

そのせいではないだろうが全身をすさまじい怠倦感が襲っている。もうこのまま寝てしまいたい……そんなふうに思ってしまうほどに体が疲れきっている。

例えるなら一日運動しまくってベットにダイブした瞬間みたいな状態だ。

「大丈夫?」

ニルヴァーナが崩壊する音とは別に頭の上からとつぜん声が降ってきた。

睡魔のせいで重い瞼をなんとか持ち上げると、シユウが両膝を抱えて僕を見下ろしていた。

「ああ、疲れてはいるし怪我也酷いけど……大丈夫だよ」

「ん……なら、よかった」

安心したように微笑んで、シユウは動かずに僕を見たままこたえた。

その可愛らしいシユウの表情につられるように、僕も自然と微笑む。

こんな笑顔を浮かべるシユウは、愛しい人に裏切られ、捨てられ、傷つけられた悲しい過去を持っている。

今、僕に愛らしい微笑みを向けてくれるシユウは、そんなふうには見えなかった。

それは、辛いことを忘れているからだろう。

辛いから忘れるしかなかった、諦めてしまっしかなかった。

助けてくれる人も、辛いことを忘れさせてくれる人もいなかった
孤独な少女は、逃げることしかできなかったんだろう。

逃げ続けたら、いつか思い出したとき逃げた分だけその辛さをかさ増して受けることになるはずだ。

でも、僕には今シユウにそう言うことはできない。

忘れているなら、それでいい。裏切られることは悲しいから、一人は寂しいから……孤独は悲しすぎるから。

でも、今のシユウには僕がいる。ウエンデイがいる。シャルルがいる。いつか辛い記憶をシユウが思い出すときが来ても、その時は僕やみんなが助けてやればいいだけのことだ。

だから、僕がアイリスから聞いたシユウの物語を、今は話さない。それがいいことだとは思わないけど、この笑顔が曇る瞬間を僕はみたくない。

それは単なる悪あがきだ。いつかシユウは自分の過去を完全に思いつ出すだろう。でも、だからこそ、辛いことを思い出しても平気なくらい、楽しい記憶をこれからみんなで作ってたくさん作る。一人じゃないと、みんながいると……どんなに辛くても、支えてくれる人がいるんだと知ってもらうために。

そんな僕の心中も知らずにこちらを相変わらず愛らしい微笑みを浮かべながら見下ろしてくるシユウ。

愛を知らない悲しい少女になんて声をかけようか、そんなふうに考えたが今はとりあえず、

「じゃあ、帰ろっか？ みんなのところに」
「ん」

なんでもないように、いつもどおにそう言ったただけだった。

両腕を頭の横につき足を上半身に振り上げて、すぐに足を戻しながら手を伸ばしいつきに跳ね起きる。

次の瞬間、背後で懐音が さっきまで僕の頭があった場所に穴が開いていた。天井を作っていたレンガの一つが落下してきたのだ。それを合図にしたかのように大きく揺れだすニルヴァーナ。

魔水晶がすべて破壊されたことでこの巨大な都市を動かす動力源を失ったのだ、こんな不安定な建物が魔力もなしにいつまでもその形状を維持し続けることは無理に決まっている。だから崩れるのは当然だ などと考察している間にもどんどんと壁が崩れ地面に亀裂が刻まれていく。

「うわ、これはやばいな。シュウ、さっさと脱出するぞ！」

返事を聞く前にその細い手を取って落下してくる瓦礫を縫うように小さな出入り口に向かって跳躍する。

少なくとも傷のせいではいつものような速さで走ることはできないがそれでもなんとか落ちてくる瓦礫を避ける。

光の壁が埋め尽くしていたときは見えなかった出入り口だが、その光が破壊されたことで壁のなくなったそこは難なく入り込めた。

軽い音をたててそこに着地した瞬間、一際巨大な瓦礫が落下し小さな出入り口は押し潰されてしまう。

危づく生き埋めにされるところだったな、と間に合ったことに小さく安堵の息をつく。

「ここは、危ない。早く出なきゃ……」

「ああ。つて、シユウ?」

シユウが繋いでいた手を離し、僕の前を走り始める。魔力もなく、体も満足に動かない僕を気遣ってくれているらしい。たしかに、今の僕じゃ走ることには専念するだけで精一杯だからいつもとは違い僕は守られる側につくしかない。

瓦礫を弾き、僕が走りやすいようにしてくれている先行してくれているシユウをみながらふと思う。

守られる側ってのはあまりいいものじゃない、と。

自分の無力さになんというか、こう……イライラする、というのだろうか? しかもいつも守っているシユウに守られているというのは……なさけすぎて泣きそうだ。

しかし、そうは言っても今の僕がどう足掻いたところで満足に動けるわけもなく、できる限り急いで走るしかない。

階段を駆け上がり、狭い通路を走り抜ける間も相変わらずニルヴアーナの崩壊は激しくなる一方で、狭い通路はさらに狭くなってゆく。

これは、まずいかも……。

そう思った矢先、

「やばっ!」

前方に見えていたシユウの小さな背中を押し同時にその反動を利用しながらバックステップを踏む。

満足に受け身もとれずに倒れた僕が起き上がったとき、道は見事に塞がれていた。

瓦礫が落ちてきて、なんてもんじゃない。上の階がまるごと落ちてきて道を押し潰してしまったらしく叩いたくらいじゃ破壊できないことが嫌でもわかった。

「シュウ！ 無事か！」

ゴツ、と返事の代わりに反対側から目の前の壁を叩く音が聞こえてきた。

僕が押した瞬間にシュウは自らも床を蹴って跳んでいったようだったから潰されてはいなかったらようだ。

だが、まずいことになった。

シュウと離ればなれになってしまったことはもちろん、魔水晶があつた場所から地上まではこの一本道しかわからない。他の魔水晶とは違いヒビキが見つけることができなかった。ここは魔力を感じながらなんとか来ることはできた。だが、途中にも分かれ道は少なからず存在し、情報がない以上探りながらだった。まあ、ストレートに言ってしまうなら道がわからないって訳だ。来た道を戻るだけならともかく、どこに繋がっているのかもわからないような脇道を通って簡単に脱出できるとは思えない。

この道を塞いでいるものを退かす、という手も考えたがまるごと落ちてきている以上破壊してもまた塞がれてしまうだろうし、破壊したことによって被害が拡大したりしたら今より酷い状況。それこそ生き埋めにされかねない。

「シュウ！ これを壊すのは危険だ！ 僕はなんとか迂回してみるから先にここから脱出しろ！ わかったらなら三回叩いてくれ！」

すぐに返事がなかったたことと道が完全に塞がれているため聞こえているか不安だったが、しばらくして小さくゴツ、という音が三回響きなんか止まりながらもシュウの気配は遠ざかっていった。

僕を助けようとしてくれたようだが、僕と同じように壊した方が危険だと察してくれたのだろう。

「……さて、行くか」

満足に動かない体、全く足りていない魔力、今すぐにも倒れてしまいそうだったが心配しているであろうウエンディ達のことを思い浮かべ意識を奮い起たせる。

薄暗く、今にも埋まってしまいそうな道を僕はふらつきながらも再び駆け出した。

「ウエンディ、こつちよ！」

「キャ！ ま、まっつてよシャルル！」

六番魔水晶ろくばんまの通路、魔力を失って今にも崩れて潰れてしまいそうなそこをウエンディ達は必死に走っていた。

最初は魔水晶を破壊するなんて無理だと言っていたウエンディはしかし、魔水晶を自分の力で破壊していた。

ジェラルルの言葉とギルドを守りたいという強い思い、自分だけが安全なところで守られているのは嫌だという気持ち……それらが彼女の中に眠る竜の力を呼び起こしたのだ。

だが、竜の力を持つとはいえウエンディはまだまだ幼い少女。いつ潰されてしまうかもしれないという恐怖の中、暗く狭い地上への道をシャルルに手を引かれるようにしてなんとか走っていた。

「急がないと生き埋めにされるわよ！」

「う、うん。でも、ニルヴァーナが止まっただってことはみんな無事ってことだよな？」

「こんな時でもあの二人の心配？」
「だって……」

クライスとシュウ、この二人が向かったのはゼロが呪いの中心地と言った不吉な場所。同時に、ナツとグレイとルーシィ、三人の魔導師をたつた一人で圧倒してしまうほどの実力者であるゼロ自身が自ら赴く必要がないと言った場所だ。

二人がやられてしまうとは思えなかったが、クライスが万全の状態ではなかったことを考えるとどうしても嫌な方へと考えてしまう。誰かの心配よりもまずは自分の心配。

今の状況を考えればそれが正論だったが、ウエンディはどうしても心配せすにはいられないらしい。

そんなウエンディを後目に崩壊は激しくなる一方で、走る間にも背後からどんどんと道がなくなってきた。

「心配するのはわかるけど、後にしなさい。どちらにしる二人が無事に脱出してもあんたがいなかったらなんのいみもないのよ？」

「……うん」

たしかに今ここにウエンディがいると知られただけでもクライスがおおいに心配するのは容易に想像できた。

性格上まったく考えないようにすることは無理だったが、それでも自分が心配させては意味がないとウエンディは走る速さを一層と早める。

来るときには感じなかった道のりが異様なまでに長く感じられたのは恐怖のためか、急ぐばかりの気持ちのせいか。
そんなとき、

「……キャー！」

小さく悲鳴をあげながら唐突にウエンディがバランスを崩し転んでしまった。

崩壊の影響でできた亀裂に足をとられたらしい。

「ウエンディ！ 危ない！」

「え？」

シャルルの声にウエンディが顔をあげると天井に大きな亀裂が。悲鳴をあげる暇もなく道を形作っていた天井が動けない少女を押し潰さんと落下する。

シャルルがギリギリで駆け寄ったが、それは犠牲を増やしただけとしか思えなかった。

なん百キロあるかわからないが、人一人潰すには十分すぎるほどの岩が二人に迫る。

だが、それは壁を貫いてきた青い光によって跡形もなく消し飛ばされてしまった。

「二人とも、平気？」

響いたのは本来ここにいるはずのない少女、シュウのものだった。

「え……しゅ、シュウちゃん？」

ウエンディが腰が抜けてしまったかのようにペタンとに座り込んだままシュウを見上げる。

今は背に担いでいるブラックシューターの砲撃で壁を貫いてのものだったためシュウは大穴が空いた壁の奥にいた。

「なんで、こんなところに……？」

「お姉ちゃん、こそ」

「そ、それは……その……あははは……」

シユウは無表情に首をかしげながら言ったが、しかし一番痛いところを突かれたウエンディはイタズラが見つかった子供のように渴いた笑いを浮かべた。

だが、ただ純粹に思ったことを言っただけのシユウにはなぜウエンディが笑っているのか判らないらしくさらに首をかしげるだけだった。

「そういえば、クライスはどうしたのよ？」

一人でいるシユウを見て思い出したようにシャルルが呟いた。

その言葉にシユウは悔しそうな、悲しそうな、むずかしい表情を見せた。

「……………」

「シユウちゃん？」

「……大丈夫。すぐに来る」

「え？ どうゆーい」

「今はそれよりも、脱出するのが先」

シユウが表情を隠すように一瞬目を閉じる。

そして開かれたとき、瞳は蒼い光を放ち、その背中からは蒼い光の翼が現れていた。

「急ぐから、掴まってて」

「う、うん」

「ねごさんも、いいい？」

「……ええ。いいわよ」

なにか言いたげなウェンディとシャルル有無を言わせる間も与えずにシユウは二人を抱き上げ、蒼い翼を大きく広げる。

「……………」

一瞬だけ自分の来た方向を振り返りながら、しかし蒼い光が輝く瞳をすぐに前へ向けシユウは風を切る音を残しその場から飛び去った。

・ ・ ・ ・ ・

暗い森に轟音を響かせながら崩壊するニルヴァーナ。

すでに輪郭を失い、六本、否、五本の足で支えられていた都市部も自身の重さで地に伏せようとしている。

そんなニルヴァーナから夜を切り裂くように一筋の蒼い光が飛び出す。

流れ星のように美しく一瞬で空中を翔ていくそれは、崩れた建物から雨のように落下してくる瓦礫を平然とよけ、さらに加速していく。

その勢いは小さな石ころ程度の瓦礫なら避けずとも風圧で弾き跳ばしてしまっほほどで、光は一直線に進む。

数秒の間、蒼い光は最後まで減速することなく、むしろ最初の何倍もの勢いで崩れゆくニルヴァーナを翔抜けあつという間に空へと飛び出した。

暗い夜の空に輝くそれは、本当に流れ星のようにも見える。

しかしそれは星などではなく、一人の小さな少女と白い猫を抱えた黒髪の少女で、その背と瞳に輝く蒼い光が星のように輝いていただけらしい。

風を受けることができるはずがない光でできた翼にもかかわらず確かに少女達は飛んでいる。

黒髪の少女に対していささか巨大すぎるその翼は少女を彩るアクセサリーにも見えた。

「あ、シユウちゃん、あそこ！ みんながいる！」

黒髪の少女……シユウに抱えられたままのウエンデイが森の一角を指差す。

そこには魔水晶を破壊するために別れた連合軍が集まっていた。

「行こう。もしかしたらクライスさんが戻ってきてるかも！」

不安と期待、それらを足して二で割ったような声音で言うウエンデイにシユウは無言でうなづく。

それに呼応するように翼が大きくはためき、崩壊するニルヴァーナの被害を受けない場所まで移動した後急降下する。

さすがに先程のような空を切り裂くようなスピードで降下していたわけではなかったがシユウたちが降り立つ前に鋭いエルザが三人の存在に気づいたらしく振り返り、安堵したかのように表情をほころばせ、何故か次の瞬間に険しい表情をする。

エルザが気がついたことで自然に他のメンバーたちもシユウたちに気づき、同時に目を見開く。

シユウの背に輝く光の翼に目を奪われたのだろう。

奇妙な視線を受けながらもやはり無表情のままシユウは音もなく天界から舞い降りた天使のように 狙ったわけがなく 着地し

た。

「な、なんか【化猫の宿】のメンバーってみんな飛べるのね……」
「さすがに、私は飛べませんよ」

ルーシィの指摘に苦笑いしながらシュウの腕から飛び降りるウエ
ンディ。

「全員無事……いえ、全員じゃないみたいね」

「あ、そうだ！ クライスさん、ナツさん、それにジェラルルも……
みなさん見てませんか？」

「……すまない、私は見ていない」

「私も……」

「わりのが、俺もだ」

「まさか、まだニルヴァーナの中に……？」

「そんなんっ」

今この場にいたるのは、エルザ、ルーシィ、グレイ、一夜、ハツ
ピー、ジュラ、ウエンディ、シュウ、シャルルだけ。

ヒビキやリオン達はクリスティーナにいても、一番魔水晶
と零番魔水晶に向かったナツとクライスはこの場にはいなかった。

「クライスさん！」

「ナツー！」

近くにいるかもしれないと声をあげるウエンディとルーシィの声
に返事が返ってくることはなく、悲しく暗い夜に木霊する。

ナツにしる、クライスにしる近くにいるなら気づかないはずがな
い。

そう判っていても不安で呼ばずにはいらねいらしく二人は何度

も声をあげる。

「……………」

エルザが険しい表情のまま崩壊が止まり始めているニルヴァーナを見上げる。

彼らがあそこに取り残されているかもしれない。

そんな考えがうかんだが、すぐに否定するようにエルザもルーシイ達に混ざって大声をあげる。

「ナツう〜……………うぎゃ!?!」

と、同じくナツを探していたハッピーが唐突に悲鳴をあげる。

いきなり地面が軟化し噴水のように競り上がりハッピーを持ち上げたらしい。

敵か、と全員がそれを睨むようにして身構えたがその下から現れたのは探していたナツとジェラルルだった。

「愛は仲間を救う、ですよ」

そして二人を助けたのは元六魔將軍のメンバーであり、今はニルヴァーナの影響で仲間(?)になっているリチャードだった。

彼は岩を柔らかくする魔法を使う。

ニルヴァーナはそのほとんどが岩で作られていたため怪我もなくここまで逃げてこられたらしい。

「おお、ナツ!」

「ナツ!」

「まったく、ヒヤヒヤさせやがる……………」

状況があまり飲み込めていないのか頭に「？」をうかべているナツに妖精の尻尾フェアリーテイルのメンバーが嬉しそうに駆け寄る。

その光景をジユラや一夜も安堵の表情で見つめていたが、そこにウエンデイが嬉しさとはなにか違った様子で加わった。

「ナツさん！」

「ん？ おお、ウエンデイ。ニルヴァーナが止まってよかったな！」

「あ……はい。みなさんのお陰です。ありがとうございました」

律儀にも頭を下げるウエンデイ。

だが、すぐに胸元の翼を掴みながら頭を戻した。

「あの、それで……クライスさんを、見てませんか？」

不安と期待、二つを重ねたような表情で聞く。

もしクライスがまだニルヴァーナの中にいるのだとしたら、それを見ている可能性があるのはもうナツ達しかない。

もし取り残されているのであればウエンデイは今から、たとえば一人だとしても助けに行くつもりだった。

「クライス、か？ 俺は見てねえぞ？」

「っ。そう、ですか……」

翼を強く握りしめていたはずの小さな拳からは力を抜き、ウエンデイ絶望したような表情を浮かべながら俯く。

ナツが見ていないのであれば、同様にリチャードもジェラルドも見えないということになる。

そもそも見ていたのであれば、たとえば岩の下敷きになっていたとしてもリチャードの魔法を使い一緒に戻ってきていただろう。

そんな簡単なことを忘れてしまうほどにウエンデイは焦っていた。

オラシオンセイスは全員倒れた、ニルヴァーナは止まった、ギルドは無事。だが、そのためにクライスが死んでしまったのであればウエンディにとって、化猫の宿全員にとって全てがなんの意味もないことになってしまう。

それに、ある程度の危険を伴うものだったとはいえ、死人がたとになれば化猫の宿だけでなく連合軍のやったことがめでたしめでたしで終わらない後味の悪いものになる。

大を救うための小なる儀礼は付き物。そんな戯れ事を言えるのは傍観者が人間失格しかない。

場に嫌な沈黙が落ちるなか、シャルルがなにか思い出したようにシユウを振り替えた。

「そつえば、あんたはクライスと一緒にだったはずよね？ なにか知らないの？」

その言葉に全員がハツとしたようにシユウを振り替える。

零番魔水晶に向かったのはなにもクライスだけではない。シユウ

も一緒に行ったはず。

ここにそのシユウがいるのであれば彼女に聞くのは至極当然のことだった。

だが、シユウはその問いに無言で首を振った。

「……判らない」

「判らない？ そんなわけじゃないじゃない。少なくともあんたはクライスと魔水晶を壊すまでは一緒にいたはず……もしかして、脱出の最中になにか……？」

「……ん」

「！ なにが、なにがあつたの！」

小さく頷いたシユウに掴みかからんばかりの勢いでウエンディが

その腕をとる。

できたなら肩を掴んで揺さぶっていたら今の身長差ではそれはできず、ウエンディはとったシュウの腕とロングコートの裾を引っ張るようにしてその先を急かす。

「……途中で、道が完全に押し潰されて……壊すのは危ないし、とどまるのも危ないから、って……そこで、別々に……なった」
「そんな……」

口下手なシュウの言葉だったが、彼女の言いたいことは全員が理解できる内容には違いない。

道が塞がれたためやむを得ない別行動をし、その後のクライスは誰も知らない。

ここにいるのはほとんどが魔水晶までの通路を通っているためあの狭い場所で道が押し潰され身動きがとれなくなる光景は容易に思い浮かべられただろう。

同時に、別々になりここにシュウだけがいるという状況からそれが何を意味するのかも。

「それじゃあクライスさんは、まだ、ニルヴァーナの中に……？」

ウエンディが呆然としながらすでに瓦礫の山と化したニルヴァーナを見上げた。

瓦礫の山、というのは比喻でもなんでもなく言ったまま、まさに瓦礫の山と化しているあのなかにクライスが取り残されているのだとすれば、しかも道を塞がれて引き返していたのだとすれば彼はニルヴァーナのもっとも中心地兼最深地にいたことになる。

支えを失い落下した都市部の中心地に人が生きていられるほどのスペースが残るとは考えづらい。

すなわち、クライスがニルヴァーナの中で生きている可能性は…

…限りなく低い。

「ッ！」

「な、待て、ウエンディ！」

ニルヴァーナに向かって走り出したウエンディをエルザが腕を掴んで引き止める。

「離してください！」

「今ニルヴァーナに近づくのは危険だ！ それに、行ってどうするつもりだ！」

「それは」

「エルザの言うとおりよ、ウエンディ。焦る気持ちは判るけど、今は危険よ」

「でもっ、クライスさんが！」

普通の彼女からは想像もできないような、まだ言葉もわからない子供が駄々をこねるように繰り返して動くはずのない腕を振りほどこうと必死に引く。

その様子は思わずエルザが手を離してしまいそうになるほど必死だった。

だがそれでもエルザが手を離さないでいると段々とウエンディの動きが小さくなりついには力尽きたように崩れ落ちた。

「……………うっ……………」

力尽き崩れ落ちた状態のまま泣き出すウエンディ。

助けに行けないのが辛いのか、死んでしまったかもしれないことが悲しいのか、なにもできない自分が情けないからか、もしかしたらすべてかもしれない　ウエンディは胸元の翼を掴んだまま泣き

続ける。

その姿は誰から見ても同情を隠せないような悲痛なものだったがだからといってこのまま放っておけばまだ所々崩れているであろうニルヴァーナに乗り込んでウエンディまで大怪我を、最低の場合は死んでしまうかもしれない。

行かせてあげたいけど、行かせるわけにはいかない。

ひき止めたエルザを非難の目で見る者はいなかったが、そんな視線を受けているような気分だった。

あくまで正しい判断ではあっただろうが、わずかに情が混じってしまったためかエルザは一瞬力を緩めてしまった。

「しまっ
」

気づいたときには遅く、その一瞬の隙にウエンディは驚くほどの速さで駆け出している。

今までのが嘘泣きであったのかと疑うほどの気転だったが、その瞳には月明かりを受けて輝いている雫がたしかに見えた。

いくら隙をついたといえどウエンディの歩幅ではたとえルーシイとて追い付けたらうが何故か今の彼女にはシユウすら届かない。

だが、その姿が暗い森の中へと消えるかと思われた瞬間、

「あつ……」

木の根に足をとられ、小さな体が急激に傾く。

目立った傷はなくとも、膨大な魔力を使う治癒の魔法を何度も使っていたため疲労が限界に達していたのだろう。別に武芸の心得がなくとも本来なら反射的に衝撃を殺そうと手を伸ばすだろうが、それすらできずにただ傾いていく。

ただコケるだけ、下は柔らかい土。

危険なニルヴァーナに向かおうとしていることを考えればそれは

大したことないものだ。

なのに、倒れてしまつのがどうしようもなく恐ろしいと思った。倒れれば、痛いだろう。倒れれば、連れ戻されてしまうだろう。なんでもない、でも、そんなことが何故か恐ろしかった。

「……ごめん、なさい……」

蚊の羽音のように小さな声で謝った。何に謝ったのかはもわからなかったがそれでも謝った。

すぐに来るであろう痛みを覚悟するように目を閉じる。

……だが、痛みがやって来ることはなく、ウエンディの体は空中で止まっていた。

「え……」

否、止まっているのではなく支えられていた。

誰が自分を支えてくれたのか、その『誰か』を見るために閉じていた目を開きながらウエンディが顔をあげる。

ウエンディが『誰か』を見て固まるのと同時に、同じく『誰か』を見て連合軍のメンバー全員も驚愕の表情を浮かべた。

「大丈夫か？」

『誰か』は斜めに傾いたままだったウエンディの腕をとり助け起こしながら言う。

『誰か』の黒い着物は土埃や自身のものと思われる血液で汚れ、黒い瞳は疲れたように半眼で、むしろ大丈夫なのかと言いつ返したくなるような見た目をしている。

でも、その『誰か』はまぢがいなく、

「クライス、さん……」

「おう。ただい」

「クライスさんっ!」

「おお!? ちょ、ま、ウエンディ! 僕怪我してる……って、あぶ イテッ!」

ウエンディのタックルをもらにくらったクライスが思わず後ろ向きに倒れ込む。

その時にウエンディが危なくないように完全に自分が下になるように体をずらしたのはさすがだが、

今の彼女はそんなことは気にしていなかった。

倒れたままクライスが痛がるのも構わないかのようにギョツ、と抱きついている。

クライスはしばらく戸惑っていたが、抱きついたらままだウエンディが小さく嗚咽をあげていることに気がつき傷の少ない左手を彼女の小さな頭にまわし包みこむ。そのまま自分を心配してくれていた少女の頭を優しく撫ではじめた。

「泣くなよ、せつかく帰ってきたのに」

「すい、ませんっ。でも私……私っ、クライスさんが、死んじゃったかもしれないって……! そう、思ったら……!」

「……ごめん。僕のせいだよね」

よっ、とクライスは軽い掛け声を上げ起き上がり、ウエンディと向き合うようにして座る。

「ごめんね、心配させて」

「……そう、ですよ」

「はは、まあ魔力やらなんやらもかなりギリギリの状態だったからな」

「言い訳しないでください……本当に、心配したんですから」

「だからごめんって」

「許しません」

「えー。せつかく死に物狂いで脱出してきたのに酷くない？」

「……………」

「おーい。ウエンデイさーん？」

泣き笑いの表情をしていたかと思うといきなり俯いてしまったウエンデイ。どうしたのかとクライスが近づいた瞬間、ゆっくりとした動きでクライスの首の後ろに腕を回した。

「……おかえりなさい、クライスさん」

ウエンデイが離れると、クライスの首には青く光る石が埋め込まれた銀色の翼がかかっていた。

彼自身が零番魔水晶に向かうとき、必ず戻ってくると 後々後悔するような気取った台詞を残し ウエンデイに預けたものだ。

クライスは自らの首からたれる片翼と、涙をうかべながらそれでも笑顔をむけてくれる、そんな健気な少女を交互に見つめ、

「……………ああ、ただいま」

その柔らかな髪を撫でながら、優しく微笑んだ。

「で……何この状況……」

「あ、動いちゃダメですよ」

「ん……動いちゃダメ」

「……すみません」

崩壊するニルヴァーナからなんとか脱出し、『勝手に殺してくれるなよ』的な感じで帰還したまではよかったんだ。

狙ったわけじゃないけどなかなか感動的だったと思うんだけど……何故か僕は今、二人の少女に介抱されていた。

それも、シユウには膝枕されて。

いや、はたから見ればシユウみたいな美少女に膝枕されるのはかなり嬉しいことかもしれないけどいざやられてみるとかなり恥ずかしい。

なにせ連合軍のメンバーに見守られてるなかで、しかも今のシユウの見た目は僕とたいして変わらない年代の少女だ。

僕とて健全な男子高校生、後頭部に感じるシユウの細く柔らかかな太股の感覚が　って僕はシユウに対してなんて邪悪な思考をしてるんだあああ！　精神統一だ！　心頭滅却だ！　平常心だ！　なんでもいいからとにかく別のことを思い浮かべる！！

「……？　どうか、した？」

「え？　いや、なんでもないよ」

とりあえず平常を装ったが今のはかなり驚いた。

シユウ、力を思い出したついでにさらに感覚が鋭くなってないか？

「うん、終わった。クライスさん、もういいですよ」

「お、ありがとうウエンディ」

助かったとばかりに僕の傷の手当てをしてくれたウエンディに礼

をいいながら起き上がる。

あの体制のままじゃ僕の精神力が持たない。ありがたいけど、女性耐性値低いんだから勘弁してくれ。

ちなみにウエンディは治癒の魔法を使っていたわけじゃない。

何故魔法を使わないでの手当てなのかといえば、最初は治癒の魔法を使おうとしていたけど僕やシャルルが説得しなるとかやめさせたからだ。

ウエンディ自身もさすがに無理だと判断したからか割りりと簡単に折れ、せめてもの応急手当てをしてくれたのだ。

簡単に傷口に布を（僕の着物やらなんやらの布）巻き付けたただけだが僕の場合安静にしていれば三十分とせずには傷口は塞がるだろう。魔力が十全に足りていれば一瞬で治るだろうが、魔力があつたならそもそもこんな怪我していない。

「それにしても、無事でよかったわ」

手当てしやすいように脱いでいた着物を着直しているとシャルルがエーラをしまいながらそう言ってきた。

「あんたがいつまでも戻ってこないからウエンディがどれだけ心配してたか、是非さっきのウエンディの姿を見せてあげたいわよ。なにせあのエルザを振り切るほどだったもの」

「しゃ、シャルル！ 恥ずかしいから言わないでよ！」

「へえ、あのエルザをね……」

少し離れた位置でジェラルと話しているエルザに目を向ける。

消耗はしているようだったが、とてもウエンディが逃げることでできる相手じゃないと思うが……まあ、それだけ心配してくれていたってことか。嬉しいけど、ウエンディにこんなに心配をかけるのは今回限りにしないといな。

そういえば、と僕は視線を戻す。

「シユウ、別行動になったあと何もなかったか？」

シユウは正座をしたまま小さく首を振った。

見たところ怪我はしてないみたいだし先に帰っていたし聞くまでもなかったことだが一応聞いたただけだ。

それでも心配だったんだよ、悪いか。

「……………あ」

「どうした？」

「途中で、お姉ちゃんたちがいたから助けた」

「……………へえ」

ピクツ、と一瞬硬直しゆっくりと逃げようとする少女と猫をとりあえず捕まえる。

「詳しい話を聞こうか、二人とも。大丈夫、怒ってないから」

「く、クライスさんが怖いよシャルル！」

「だから言ったじゃない……………」

話を聞いてみればなんとウエンディは魔水晶を壊すのに参加していたらしい。

ジェラルルの頼みだったらしいが、まさかウエンディが魔水晶を一つ破壊していたとは思わなかった。

「なんと言つか、ある意味すごいな……………。でも、なんて危険なことをするんだ。無事だったからよかったけど、下手すれば大ケガしたかもしれないんだぞ？」

「うう、ごめんなさい……………」

「まあ、僕も逃げるとは言わなかったけど、だからって」
「仕方ないじゃない、この子だって守られてばかりじゃ嫌なのよ」
「……………」

守られてばかりじゃ嫌だ、その言葉に思わず黙ってしまった。それは、たしかにそうかもしれない。

僕も脱出の際守られることに自分の情けなさを感じていた。だがウエンディも守られているばかりのことが辛いと感じているとは思わなかった。

うーん………… ウエンディも自分の力でギルドを守りたかったのか…
…そう考えるとあまりこのことを強く言うのも酷ってものだな。

「そうだな、その気持ちはわかる。怪我もしてないんだろ？」

「え？ はい」

「そっか、ならこの話はもうおしまい。ウエンディが自分の意思でやったことだし、心配かけたのはむしろ僕だからね」

そう言っただけでガシガシと少し荒くウエンディの頭を撫でた。

魔水晶をウエンディが壊していなければならぬルヴァーナは止まっていなかった、むしろありがとうと礼を言うべきかもしれない。

それに、守っているはずが縛ってしまったんじゃそれはウエンディのためにやっているわけじゃなく僕の自己満足になってしまう。操り人形を守っている訳じゃないんだから、ウエンディの意思を尊重してあげるべきだろう。

「痛てメエーン!？」

そんな思考をぶつ壊す悲鳴がいきなり視界の外から響いた。

座ったまま振り返ると力の香り（パルファム）とやらで巨大化していた一夜がなにもないところで立ち止まっていた。

「どうしたんだ、オッサン」

「トイレのパルファムをと思ったたら、なにかにぶつかっただろ！」

グレイの問いに答える一夜は、確かなにかに阻まれているかのように不自然な姿勢をしている。

それを見てとっさに【複写眼】（アルファ・ステイグマ）を発動させた。

この世界で起こる奇妙な現象はだいたいは魔法によるものに違いないからだ。

しかし、それは右目を使うまでもなかった。

「地面に文字が……」

ウエンディが自身の目の前で怪しく光る魔力で書かれた文字を見下ろしていた。

図形のような文字。僕はこの世界の文字を読めるから、多分魔法式を書くために使われる文字だろう。一瞬、僕はその文字を理解することはできなかった。

だが、魔力で書かれている……それが解れば僕に読めないわけではない。

【複写眼】で目の前の魔法を超速で処理、理解、解析、分析しその効果や魔力量などを見とる。

【この中に入ったものは外に出ることができない】……どうやらこれは僕たちを閉じ込めるためのものらしい。

術式の中に入った者にルールを強制的に課すものらしく、式の書き換えでもできない限りここから出ることはできないようだ。

「いつのまに……クライス、あんた気づきなさいよ！ 得意でしょ！」

「無茶言つなよ!? 僕だって四六時中気配を感じ取れる訳じゃないんだから。てか得意つてなに! 僕は探知機か?」

一応僕は重傷者だぞ?

まあまあ、とシャルルを宥めに入ったウエンディに礼をいいながら術式を見直す。

高度な上に複雑な術式、一個人が発動できるような代物ではないはずだ。

「私たち閉じ込められちゃったの!?!」

「誰だコラー!!!」

ルーシィやナツ達もいきなりのことに混乱しているらしい。

怒り狂ったナツが不可視の壁を殴り付けるが術式は揺らぎすらしない。

「……………」

ゴツッ!!

……物凄い音がした。振り向くとシユウがブラックシューターをナツのように壁に叩きつけていた。

相当の力で叩きつけたようだがそれでも穴が開いたりはしていない。

やはり力でどうこうできるものではないらしい。

「無駄ですよ」

闇の中から唐突に男の声が響いてきた。若い声だが、どこか人を見下したような声。

魔法で隠していたらしく僕ですらその気配を探ることができな

った。

だが、声と共に大量の足音が僕たちに近づいてきた。長い杖に口ブのようなものを纏った聖職者のような集団。五十人はいるだろうその集団が前と後ろから現れ僕たちを完全に取り囲む。

彼らに殺気はなかった。威圧的な態度ではあったがこれから戦いを始めようとする人間のものではない。

だが、ニルヴァーナを破壊し心身ともに疲れきった連合軍に礼を言うでもなくいきなり術式の中に閉じ込めてしまうようなやつらだ、害意はなくとも警戒しておいて無駄ということはないだろう。どんな目的にせよ、閉じ込めたということはこれから僕たちが逃げるかもしれないことを行うということなのだから。

「な、なんなの……？」

脅えたようにウエンデイが着物を掴んで僕の背後に隠れる。

左腕を広げてさらにウエンデイをやつらから隠しながら片膝をついていつでも立てるように傷ついたからだに力を入れたが、満足に動けないことを知っているシユウがさりげなく出したままだったブラックシューターを担いだまま僕の横に並ぶ。

そんな僕たちの様子を見てか、ジユラやエルザも他のメンバーを庇うように構えていた。

「そんなに警戒しなくても結構ですよ」

警戒の意を隠していたつもりはなかったが、一人の男がそういいながら集団の中から歩み出てきた。

男にしては長い髪を頭の後ろで縛っていて整った顔をさらに強調するようにその表情は口調とは裏腹に鋭い。わずかな染みもない衣服をまとい、一挙一動にも隙がないその男がさっきの声の正体だということとは僕でなくともわかったはずだ。後ろに控える男たちより

若いようだったがたぶん彼が集團のなかで一番の権力を持っているのだろう。

それほど強力な魔力を持っているわけではないようだったが、それでも僕たちが警戒を解かずにいると、

「手荒なことをするつもりはありません。ただ、しばらくの間そこを動かさないでいただきたいのです」

「手荒なことをするつもりはない？ 姿も気配も消していきなり手負いの僕たちを閉じ込めておいてよくそんなことが言えたな」

「……それについては謝罪しますが、こちらにも理由があるのです」「理由があれば何をしてもいいのか？ ……まあそんなことを言うていてもキリがない。あんたは、あんたらは誰だ？」

殺気こそ込めてはいなかったが僕の物言いに腹をたてたのだろう、わずかに眉をひそめていたが自らに非があることを認めたらしく眼鏡の位置を意味もなく直しもとの感情を悟らせない表情に戻ると、

「私は新成評議員第四教皇検東部隊隊長、ラハールと申します」

淡々と、そう名乗った。

クライス、死す！？（後書き）

はい、別に死にませんよ。

死んだら終わっちゃいますからね。

次回は、やはり一週間近く先になりそうですが、できるだけ急ぎます！

これからもご愛読よろしくお願ひします！

別れのち別れ……および、できてる〜（前書き）

はい、なんだそのタイトルはという質問は受け付けません！

またはシリアスのちシリアス、および……まあお楽しみということ
で。

それでは、どつぞ

別れのち別れ……および、でききてえる。

「新成評議員だと！」

「もう発足してたの……！？」

突如として僕たちの前に現れた『新成評議教皇検束部隊隊長』のラハールとやらにグレイヤルシーが目を丸くしていた。

僕は詳しく知っているわけではないが、たしか評議員はジェエールによつて壊滅状態だったはず……その記事が出回つてから一月経っているかいないかですでに発足してたとすれば、目を丸くするのもおかしくはない。大きな組織が壊されてしまふとその組織の信用、権力、人員などが著しく零落してしまうことは避けられないのだから。

それをこの短期間で回復させたというのだ。

金か、もしくは武力か、それとも宗教の類いや圧倒的な権力か、単なる偽善者の集まりか……なんにせよラハールの背に控える男達には隙がなくそこらへんの魔導師を上回る実力を持ち、なおかつそれがきちんと統率されているのがわかる。

そんな部隊の隊長が直々になんの用なのか、まさかニルヴァーナ破壊の礼を言いに来たわけではあるまい。

しつこいようだが、こいつらはニルヴァーナを破壊した僕たちをいきなり閉じ込めて、さらには抵抗すれば戦闘もやむを得ないとも思っているのか男達が持っている杖には攻撃用の魔水晶が嵌め込まれている。

今の彼らからはなんの敵意も感じない以上、ラハールの言う通りなにもしなければなにもしてこないのだろう。

ならば、こいつら何をしに来た？

「我々はポート政教を守るために生まれ変わった、いかなる悪も決

して許さない」

たいした大義名文だ。

バカらしい、僕はこうゆう『自分こそが正しい』みたいな理屈を重ねる奴は大嫌いなんだ。

どこの世界でもいるんだな、こうゆうのは。

「で、決して悪を許さないあんたたちが何をしに来たんだ？」

「オイラ達、何も悪いことしてないよ？」

「お、おう……」

なんでそんなに自信がないんだ、ナツと猫。

「存じております。我々の目的は六魔將軍オラシオンセイヌの捕縛……そこにいるロードネーム・ホットアイをこちらに渡してください」

「なっ!?! 待ってください!」

さも当然のようにホットアイ　リチャードを指差すラハールの目の前にジユラが立ちふさがった。

聖十の称号を与えられし【岩鉄】の二つ名を持つジユラが、だ。

その名はたしか評議に与えられるもの、ここにいる評議の部隊隊員達がジユラの顔を知らないはずもないだろうが、六魔將軍を庇おうとするその奇行に驚いたのか思わずといった様子でおのが杖を構える。

奇行といえば奇行だろう。今回の作戦は六魔將軍の捕縛、及びニルヴァーナの破壊だ。最優先目的であるはずの六魔將軍の一人、ホットアイが目の前にいるのに評議に引き渡すのを拒むと言うのは聖十の名を持つジユラがしていい行動ではないはずだ。

「いいのデスよ、ジユラ」

だが、ジュラを制したのはほかでもないリチャード本人だった。

「リチャード殿……」

「たとえ善意に目覚めても、過去の悪行は消えませんデス。私は一からやり直したい、その方が弟を見つけたときに堂々と会える、デスよ」

「……フツ、ならば僕がかわりに弟殿を探そう」

「！ 本当デスか？」

「うむ。弟殿の名前を教えてください」

……おい、なんかいろいろ置いてきぼりだぞ。

てかあの二人に何があったんだ、いつの間に旧知の戦友みたいになつてたんだ？

あれか？ 昨日の敵は今日の友ってか？

「名前はウォーリー、ウォーリー・ブキャナン」

「ウォーリー？」

リチャードが言ったその言葉に反応したのはジュラではなくエルザだった。

「ウォーリーといったか？」

「？ はい。どうかなさったのデスか？」

「ああ、その男なら知っている」

「ほ、本当デスか！」

「私の友だ。今は元気に大陸中を旅している」

思いがけないところで弟の今を知れたからか、リチャードは泣き崩れた。

「ああ……！　これが、光を信じるものだけに与えられた奇跡と言
うものデスカ……！」

リチャードは掠れたような声で、自分に向かってそう言った。

「ありがとう……ありがとう……ありがとう……！」

リチャードは、大金さえ払えばどんな下劣な仕事もしたという。
それはもしかしたら、自分の弟を、たった一人の家族を探し出す
ためだったのかもしれない。

一度は悪の道に踏み込んでしまった彼は、ニルヴァーナという力
を使って暗い闇のそこから這い上がってきた。

今、彼がこうして光の中にいられるのは自分の力ではない。

それでも、世界は小さな光を掴み闇から顔を出した彼を見捨てる
ことはなく一つだけ、小さな奇跡をくれた。

都合のいい考え方もかもしれないが、世界はこれから自分の意思で
闇から這い出る彼のために一つだけ目標を、幸せをくれた。

小さな光は、それでも彼の道標になってくれただろう。

清々しい顔をしたリチャードは評議の男二人に手を引かれながら
暗い護送車の中へと消えていく。

敵であったとはいえ、その姿には同情するものがあつた。

「可哀想ですね……せっかく弟さんが元気だつてわかつたのに」

いつのまにか僕の背から隣へと移動していたウエンデイがリチャ
ードの背中を見つめながらそう呟いた。

「ああ。リチャードだつて根っからの悪人つてわけじゃなかったん

だろつな。そうじゃなきゃいくらニルヴァーナで善人になってもあそこまで改心しようとは思わないだろうから」

「そう、ですよ。早く罪を償って弟さんに会えるといいですね」

「甘いわね、あんた達は。一応敵だったのよ？」

「シャルルが敵しすぎるんだよ」

「……私だって、あいつが悪いやつじゃなかったってことは判つてるわよ」

フンツ、とシャルルはそっぽを向いてしまう。

もうちょっと性格が柔らかければ可愛らしい猫ではあるんだろうけど。

「も、もういいだろう！ 術式を解いてくれ！ 漏らすぞ！」

「やめてー！」

さすがにシリアスな空気を読んでか静かにしていた一夜が耐えきれないというように声をあげた。

ルーシイが叫ぶのもわかるよ、その巨体でモジモジされるとなんというか、こつ……その首をスパツとやりたくなるからね。

「く、クライスさん……顔が怖いですよ？」

「……ああ、なんでもないよ」

いつの間にか手刀を形作っていた右手をいったんブラブラと振ってとりあえずウェンディの頭に落ち着けた。

いや、だって嫌だよあれを見てるの。さっさと術式解いてくれると助かるんだが。

僕からも言ってみようとまだ痛む体を持ち上げようとす。

「いえ、私たちの本当の目的は六魔將軍ごときではありません」

「なに？」

上げていた腰を思わず下ろしてしまった。

オラシオンセイイス
六魔將軍ごとき、だと？

こいつは何を言っている。六魔將軍は闇ギルド最大勢力の一つであり、傘下にも強力なギルドをいくつも従える無視できない勢力の一つじゃなかったのか？ ごときと言えるほど小さなものではないはずだ。

……いや、今こいつはなんと言った。本当の目的、六魔將軍の捕縛以外に目的？ ここにこんな大部隊を用いる必要があるなにかがあるのか？

「評議員への潜入」

ビクリとウエンディの体が跳ねた気がした。

「破壊、エーテリオンの投下……もつとんでもない大悪党がそこにいるでしょう。……貴様だ、ジエラール」

視線が、ある一人の男に集まる。

青い髪をした青年、記憶を無くし自分すらわからない青年……ジエラールに。その隣ではエルザが愕然とした様子で全身を震わせながら俯いている。

「来い。抵抗するなよ？ 抵抗した場合は抹殺の許可も降りている」

カチャカチャという音と共に魔導師たちがいつせいに魔法杖を構える。

なるほど……言った通り？ 僕達には？ 危害を加えるつもりはないようだ。

「その男は危険だ。二度とこの世界にはなっではいけない。絶
対に」

ゆつくりと、ジェラールが術式を越えてやつらの方へ歩いていく。
元より抵抗するつもりはなかったのか、ジェラールは拍子抜けな
ほど簡単に錠をかけられた。

頑丈そうな錠、魔法でさらに強化されているようだったが今のジ
エラールはたとえそれが紙切れであったとしても腕を動かそうとは
しなかっただろう。

「ジェラール・フェルナンデス、連邦反逆罪で貴様を逮捕する」

無感情に響く、ラハールの声。

「待ってください!」

全員が立ち尽くすなか、ウエンディだけがそれを追って走り出し
た。

だが、そこには見えない壁がある。術式、僕たちを囲う壁。
それを両手で押すようにしながらウエンディは懇願する。

「ジェラールは記憶を失っているんです! なにも覚えてないんで
すよ!?!」

「刑法第十三条により、それは認められません。記憶をがないから
といって許されるほど、彼のしたことは簡単なことじゃない」
「……………」

記憶がない、ならば罪をなかったことにしましょう。そんなこと
が通るはずもなかったがそれでも目の前で恩人が連れていかれるの

を黙ってみていることはできなかったのだろう。

「で、でも！」

「いいんだ。彼の言っていることは正しい」

なにもできない、そうわかっていても訴えかけようとするウエンディをジェラルルが遮った。

「君のことは、最後まで思い出せなかった。本当にすまない、ウエンディ」

引け目を感じてか、ジェラルルはウエンディを見ようとせず俯いたままそう言った。

そんな光景を見て、黙っていられるほど僕も大人じゃない。

痛む体に鞭を打ち、なんとか立ち上がるとウエンディの肩に手を置きながらその隣に並んだ。

「ウエンディは、昔あなたに命を救われたんだそうだ。今ここで生きていられるのも、ギルドで生活してこれたのも、これからの人生があるのも、あなたがこの子の命を救ってくれたからだ。そんなあなたが何をしたのか、なんでしてしまったのか、そんなことは僕もウエンディも知らない。ただ、ウエンディは……いや、僕もウエンディに救われた身だから……僕たちは、僕達だけはあるあなたに感謝してる。僕からはそれだけだ」

「……クライス、といったな」

「ああ」

「ウエンディも、俺に記憶はないから正直恩人や感謝と言われても俺はなんともいえない。俺にあるのは、ただただ、自分が最低なやつでナツやエルザ、それ以外の多くの人間を傷つけた最低なやつだという感覚だけなんだ」

「……………」

置いた手からウエンディの震えが伝わってくる。それは悲しみか、苦しみか。僕にはわからない。だが、ジエラールはさらにそう続けた。

「だれかを助けたことがあったのは、嬉しいことだ」

それだけというと、ジエラールは初めて視線をあげた。

「エルザ」

その先には苦悩の表情を浮かべるエルザが、だが、その視線はジエラールと交わってはいない。

なにか思い詰めているようだったが、そうでなくとも意識的にジエラールの視線を避けているようだ。

「いろいろ、ありがとう」

本当に、心から感謝しているとわかるその言葉にもエルザは顔をあげることはなかった。

・ ・ ・ ・ ・

止めなければ……私が、止めなければジェラルが行ってしまう。

せつかく、悪い夢から目覚めたジェラルをもう一度暗闇の中へなど……行かせるものか……！

記憶を失い、それでも自分を改めようと頑張ってくれたのに、何故こんなにも早く闇の中へと引き込まうというのだ。

ジェラルがしたことは確かに許されることじゃない、でも、それでも

「行かせる、ものが……」

ギツ、拳を握りしめ歯を食いしばる。

私イテイルがしようとしてしていることはいわば評議員への反逆だ。妖精の尻フェアリ尾テイルの一員でいることも、できなくなるだろう。

「他に言うことはないか？」

「……ああ」

何故だ。何故そんなにも悲しいことを言うんだ、ジェラル……！お前はそれでいいのか。覚えてもいない罪で暗闇へと誘われるのだぞ！

忘れているから咎めないとはいわない。

お前は私の仲間を、シモンを、傷つけ殺しぼとくした。

だが、だからといって、何故そんなにも簡単に諦めてしまうのだ。

「死刑が無期懲役は免れないぞ。二度と誰かと会うこともできんぞ」

「ああ」

そんな言葉をかけられて、なぜ平気なんだ、ジェラール……！
矛盾している。

自分でもわかっている。
ジェラールは、罪を償うべきだ。多くの仲間を傷つけ殺したのだから。

でも、それでも私は　ジェラールを再び闇の中へなど、行かせるものか……！

「行かせるかあーっ……！」

「なっ……！」

ナツ！？　なぜ、お前が、

私を含めた全員が啞然とするなか、ナツは評議員を押し退け突き進む。

「ナツ……！」

「何してるの！　相手は評議員よ……！」

二人がそう叫んでも、ナツは止まらない。

すぐに評議員が何十人も集まりナツは身動きが取れなくなる。
それでも、

「うおおおおオオオ……！　離せ！　そいつは仲間だ……！」

仲間だと、叫ぶ。

「連れて帰る……」

「……よせ……」

啞然としたようなジェラルルの声が聞こえた。

「お前はエルザといるべきだ！ 絶対に連れて帰るぞ、ジエラール
！！」

ああ、なぜ……、

「ああクソッ、こうなったらナツは止まらねえからな……行け！
ナツ！」

「グレイ！？」

「ええ！ グレイまで何してるのよ！ 相手は評議員だって言うて
るでしょ！」

なぜ、お前達は……、

「気に入らねえんだよ……ニルヴァーナを防いだ奴に一言も、労い
の言葉もねえのかよ！」

「……それには一理ある。その者を逮捕するのは不当だ！」

「悔しいけど、その人がいなくなるとエルザさんが悲しむ！」

「もー！ どうなっても知らないわよー！」

「あいさー！」

「お願い！ ジエラールを連れていかないで！」

なぜ、お前達はそんなにも真っ直ぐなんだ。

「クッ、なぜ術式を解除したのですか！ 私は許可を出してないぞ
！」

「い、いえ。誰も術式を解いては」

「ごめんね。僕が喰った」

予想外の事態に混乱するラハールの目の前に不適な笑みを浮かべ

るクライスが音もなく現れる。

あの大量の魔導師たちのなかを、どうやって……？
驚愕に目を見開くラハールにクライスがさらに顔を近づける。

「喰った……だと？」

「ああ、僕は魔法を喰って無効化することもできるんだよ」

「誰だ貴様は！ 公務執行妨害だぞ！」

「面白いこと言うよな、あんた。さっきから聞いてればうだうだうだ……僕は世界に関わった時間がまだ短いし、ジェラルルが何をしたかも雑誌で読んだくらいだ。でも、許されないことをしたのはわかってる」

「ならば何故邪魔をする！ 貴様はジェラルルとなにかあるような口ぶりだったな……どんな関係かはしらないが私情を持ち込まないでもらおうか」

「別にジェラルルを連れ戻そうなんてしてないよ。僕はウエンデイが助けたそうだから手助けをしただけだ。こんなことしてもなんの意味もないことなんてわかってる」

「ならば」

「だがな」

ゾクリ 背中に氷を入れられたような、まさにそんな感覚が私にまで届いた。

こちらからは見えないクライスの表情。

それでもラハールのひきつった表情を見ればそれがどれ程恐ろしいものかわかる。

「ニルヴァーナを破壊し僕たち連合軍を助けてくれたのは、そのジェラルルだ。それだけは考慮しておいてくれ」

「！」

それだけ言うと、クライスはいつの間にかいなくなっていた。

気配に僅かに首を振ると、背後でウエンディの周りの魔導師たちを巨大な筒のような物を持った少女と共に投げ飛ばしているのが見えた。

『僕は、僕達だけはあなたに感謝してる。僕からはそれだけだ』

そう、彼は言っていた。ジェラルルはウエンディを助け、クライスはウエンディに助けられた。

ジェラルルは、やはり優しい人間なんだ。

彼がそんなふうにいるのに、それが判っているのに、私は動けもせずただ見守っているだけなのか？

「ジェラルル！ お前はエルザから離れちゃ行けねえ！ ずっと傍にいろ！ エルザのために！」

ナツが動けないことも構わずに叫ぶ。

私のために、皆がジェラルルを助けようとしている。

ナツもグレイモル―シィも、聖十の称号を持つジユラや、まだ幼いウエンディまでもが。

なのに、私は……、

「ぜ、全員捕らえろー！ 公務執行妨害だ！」

皆が捕まっっていく。

力のある魔導師といえど、皆はニルヴァーナを破壊した直後だ。

このままではジェラルルだけでなく連合軍の全員が闇の中へ連れていかれてしまう。

私は、それでいいのか？

私は……私は……私は……私、は　　！

「もういい！ そこまでだ！！」

私は、そんなものを見てはいられない。
驚いたような、何故と問うような、そんな視線に晒されながらも
私は続ける。

「騒がせてすまない。……責任は、すべて私がとる」

だから私は、

「ジェラールを……連れていけ」

こう言うしかないんだ。

「エルザ！ お前」

「座ってる！！」

ナツを一喝する。

私の声を聞き届けてくれたのか、他の誰も再びジェラールを連れ
戻そうとはしなかった。

表情を変えないまま、ジェラールは護送車へと歩を進めていく。

……これで、いいんだ。

私にできることは、なにもない。 私は、何も間違っではないな
い。

「……そうだ」

そのまま行ってしまえばかり思っていたジェラールが、私を振
り返った。

その表情は、優しげで楽しそうな……子供の頃にしか見ることが
なかった、そんな笑顔。

「お前の髪の色だった」

……ああ、だからそんな顔で笑ってくれたのか。
こんな私に。お前一人を救うことができなかつたこんな私に、笑
ってくれたのか。

私の、名前 エルザ・スカーレット。

お前がつけてくれた、私の、大切な名前。

「さよなら……エルザ」

そんな声が……最後に聞こえた気がした。

もうすぐ夜が明ける。

そんな時間帯まで起きていたのはいつ以来だろう。

いつもなら夜更かしができないはずのウエンデイも今日ばかりは
眠そうな表情を見せることはなかった。

ただし、悲しそうに泣いている。

「げんき、だして？」

「……ありがと、シユウちゃん。私は、大丈夫だよ」

なにが大丈夫なんだか……そんな泣き声で言われてもシユウだっ
て騙されないよ。

「ん……よかった」

「……つて、ええええええ！！ 騙されてる！？」

「……？」

いや、小鳥みたいに首をかしげられても……。小さくなると知能も見た目通りになるのか？

「……………」

「……はあ、ウエンディ」

「なんですか……？」

小さな肩を抱くようにしながらまだ泣いているウエンディを引き寄せる。

いつもなら顔を真っ赤にしているところだろうが、いまは落ち着けるのかさらに身を寄せてくる。

リチャードのことではないが、せつかく恩人を見つけることができたのにちゃんと話をする暇もなく引き裂かれてしまったんだ……。しっかりといてもウエンディもまだまだ子供、とても辛いことだろう。

いや、ウエンディだけでなくエルザも同じか。

エルザにもウエンディに劣らない繋がりがあるみたいだけど、だからこそジェラルルを助けようとするみんなを止めたあの叫びは、黙っているより何倍も辛かっただろう。

しばらく一人にしてほしい、そっぴい残しどこかへ行ってしまったエルザは、多分そのどこかで泣いているんだろう。

そもそも、エルザに聞こえるように『意味がないことなんてわかっている』と言ったのは僕だ。

あそこで止めたのは正しい判断だったはずだ。

だからと言って僕がジェラルルにかけた言葉に嘘があったわけで

はない。

感謝もしてる。

ラハールにそう念を押ししたのも、あいつが僕の嫌いな性格だったからと言うわけではない。

けれど、どんなに理屈を並べたところでウエンディの悲しみが消えるわけじゃない。

「シユウじゃないが、元気だせよ。辛いことだろうけど、あいつが許されないことをしてしまったのは事実みたいだ」

「……はい」

「でも、ジェラールがお前を助けてくれたと言う事実は変わらないよ。だから、落ち込むなよ」

「わかってます。ジェラールがなにをしても、私の大切な人です。だから、今だけです。今だけ……」

「ウエンディ、お前は……」

「え？」

ジェラルルのことが好きだったのか？

そう聞こうとしてやめた。

そんなことは今聞くべきではないだろう。そうだったとしたら、二度と会えないかもしれないという現実には辛すぎる。

「なんですか？」

「……いや、なんでもないよ」

ごまかすように丁度いい位置にある小さな頭をぼんぼんと軽く叩いた。

「そうですね……あ、それに、ですね」

「ん？」

ピッタリ寄り添った状態からウエンディがさらに僕に近づいてくる。

なんだ、キスでもする気か？ というほどに。

まあそんなことはなく、ウエンディの手は僕の胸元　そこにある片翼と自身の片翼に延びていた。

伏せているせいでよく見えないが、その表情はうつすら桜色に色づいていた。

「それに……今の私には、クライスさんがいますから」

「……へ？」

え？ なに？ それってどうゆうこと？　なんかキスより恥ずかしい台詞をこの暗い空気のなかでさらりと言われた気がするんだけど？

ええと……なんだって？　私にはクライスさんがいますから？

………え？

「ぬうああアアアああアアア　！！！！」

「きゃ！　ど、どうしたんですか！？」

なんだかわからないけどめっちゃくちゃ恥ずかしいイイイイ！！
いや、僕自身もなんで僕が恥ずかしがってるの？　みたいな感じはあるんだけどとにかく恥ずかしい！

く、やはり女性耐性の低さか！　だからこんなウエンディの純粹な言葉が恥ずかしいのか！

やばい、なんか顔がいつになく火照ってるのがわかる。鏡があったら多分真っ赤になった僕がいるだろう。

……あれ。ちよっとまでよ？　ウエンディも顔赤くしてなかった？

「……………」
「く、クライスさん？」

いつの間にか顔を覆っていた指の隙間からウエンディの顔を見ている。

あ、やっぱり赤い。

てーことはなんだ、ある程度ウエンディも恥ずかしい台詞を言っている自覚はあったわけだ。

それをこのみんなが聞こえる範囲であるにも関わらずさらりと言ってくれたんですかこの子は！

意識してみると周りから『え？　そうゆう関係？』みたいな視線が向けられている（気がする）。

『……………』

うわあああああ………暖かい目で見られているのがなおのこと羞恥を煽る……………。

わかっていないであろうシユウはキョトンとしているだけだけど何故シャルルまでもがそんな目で……………。

「でえきてえる〜　ヒイイ!?!」

青い猫にとりあえず殺気ならぬ殺意を猛烈にぶつけて、硬直、墜落し、ガタガタ震えだすころようやく落ち着いた。

いや、よく考えてみればウエンディだってただ純粹にそれだけ僕を頼りにしてくれているっただけだろう。

猫がほざいたように不純な感情ではなく、ただ純粹に。

なら恥ずかしがることなんてないじゃないか。

深く深呼吸をして完全に落ち着いたあとウエンディに向き直る。

「……！」
「いや、なんで驚くんだよ……」

そこには僕を真っ赤にしてくれた少女ではなく、自分の言葉を思い返し自爆しているウエンディがいた。

天然なんだか純粹なんだか……僕は苦笑しながら、

「そうだな、うん。ウエンディには僕がいるし、シャルルやシユウもいる。だから前を向いていこう。悲しいときは泣けばいいし、嬉しいときは笑えばいい。どんなときでも僕は、ウエンディの傍にいますから」

ボンツ、そんな音がしそうなほど急速に赤くなるウエンディ。

ふっふっふ、さっきのお返しさ。

そのとき背後から聞こえた『やっぱりあいつらって……』という誰かの台詞は聞かなかったことにしよう。

緋色の朝日が上り暗い夜が明ける頃、仲のいい兄妹のような二人の顔が真っ赤に染まっているように見えたのは……その美しい緋色の朝日のせいだということにしておくとしてしよう。

別れのち別れ……および、でききてる〜（後書き）

感想お待ちしています。

偽りの仲間、本当の仲間

深緑の森のなかにポツンとその姿を隠すように建っているギルド【化猫の宿】（ケット・シエルター）。

普段は来客もないそこにこの日はギルドメンバー以外の人間が何人もいた。連合軍に参加した【妖精の尻尾】（フェアリーテイル）【青い天馬】（ブルーペガサス）【蛇姫の鱗】（ラミアスケイル）のメンバー達だ。小さな集落がまるごとギルドになっているここは半日以上も戦い続けた魔導師たちが羽を休める場所には最適な場所だったのだ。

古風な作りの民家が多い中、とにかく目を引く猫の頭を模したような建物。そこに一人、戦いの傷を癒すよう静かに眠っているに男がいた。

「……………」

寝息すらたてない。死んだように眠るとはこの事だろう。
黒い。

とにかく十人に見せたら十人が第一印象を黒いと表現するであろう男だ。

木製の簡易ベットに自らの物であろう彼岸花が描かれた美しい着物を敷き、細身の体を大の字に広げながら安らかに眠っている。広げられた手足には血で黒く染まった包帯が幾重にも巻かれていたが見る限り色白なその肌には一筋の傷跡も見受けられなかった。

いつまでも眠り続けるかと思われた黒い青年は、唐突に目を開いた。

「……………っん……………はぁ……………」

眠っていなかったかのような起床の仕方だったが、しっかりと寝ていたようだ。まだ寝ぼけているのか、半眼のままとりあえずとでもいうようにのびる。バキツ、ゴキツ、と人とは思えぬ音を発しながら首をならし深く息を吐く。

そこでやっと覚醒したのか上半身だけ起こした状態で辺りを見回す。

んゝ、と別に意味もなかったらしくまた体をほぐすようにのびてから布団がわりにしていた着物を雑に羽織る。

「時間は……あー、もう昼か……」

窓から漏れる日の光を目を細めながら見つめ、誰にともなく青年は呟く。

そもそも彼が寝たのは朝なのだからもう少し寝ていても悪くないはずだ。とはいっても、彼がこんな場所で寝ていたのはある少女二人からちゃんと休むようしつこく言われたからであって別に寝ていたいわけではなかったたので起きるのはもう少し早くても構わなかったのだが。

彼は寝起きであり、だらしく着物を着ていることもあるがなんともものんきな姿ではあった。事情を知らないものが見れば数時間前まで死闘を演じていたとはだれも考えられないだろう。

「んゝ……あ、そういえばウェンディ達はどこいったんだろ」

そのままフラフラとあてもなく歩き出す。呟きも無意識のものらしくどこかに行こうという明確な目的はないようだ。

彼が寝ていたのはたいして広くもない部屋の一角、歩くところもさほどなく、同時にここは普段彼が普通に生活している場所なので欠伸などをしながら外に出ようと適当にドアを開けた。

「あ、ウエンディそれもいいかも。……あ！ やっぱり可愛い」
「あら、ルーシイにしてはなかなかセンスがありますわね？ です
が私はこっちの方が似合うと思いますわ」

「る、ルーシイさんもシェリーさんも……私は着せ替え人形じゃな
いですよ」

「ん……わたし、は……」

「あそうそう！ シュウちゃんも！ ん、シュウちゃんはもともと
とお人形さんみたいだからな……これとか？ あ！ これなん
かも似合うんじゃない？ これも！」

「ちよつと！ あなたばかりずるいですわ！」

「ふーんだ。あんたは自分が一番なんですよ？」

「なんですつてー！ ルーシイの分際で私に皮肉を言いますの！？」

「事実じゃない？」

「キーツ！」

「お、落ち着いてくださいルーシイさん！ シェリーさんも！」

「……？ ……あ、おにいちゃん」

「え？」

「ゲツ……」

見てはいけない場面を見てしまったことで否応なしに硬直してしま
い、今やつと見なかつたことにしようという決断にいたり扉を閉
じようとしていたクライスに無情にもシュウが気づいてしまった。

場に嫌な沈黙が落ちる。

クライスが誤って踏み入れてしまったここでは女性陣による着せ
替え大会（対象はウエンディおよびシュウ）が行われていたらしく、
下着姿の少女二人の周りに替えの服がなかったのか【化猫の宿】の
民族衣装を着たルーシイとシェリーが二、三着の服を持ったままや
はり硬直していた。その二人に挟まれるようにしてウエンディも硬
直している。

いろんな意味で誰もが動けない状況のなか、一人、空気の読めない蒼眼の少女がクライスにトテトテと走りよる。

「おきても、大丈夫？」

「……あ、ああ。もう魔力も戻ったし、傷も塞がったよ」

「ん」

「……」

「……」

「……」

「……？」

「いや、服着てこいよ」

「……ん」

以上、抱きつこうとしたシユウをクライスが止め、そのことを疑問に思っているシユウにクライスが注意するまでのやりとりでした。ルーシイたちが硬直していたため、結局いつも通りのフード付きの黒いワンピースを着てシユウがクライスにこれでいいだろとばかりに飛び付く。

そんなシユウを撫でてはいたが、クライスの視線はウエンデイの視線と重なったまま動かない、否、動けないでいた。

なにか一言でも話せばすぐになにか起こってしまいそうな状況。ここでクライスをフォローするとしたら彼の視線はあくまでウエンデイの？視線？に向かっているだけであって、断固として首より下のものを見ているわけではない。

逃れたいのであれば扉を閉めて出ていけばいいだけではあるのだが、まさか無言で立ち去るわけにもいかずクライスは謝罪することにした。

「え〜と……とりあえず、ごめ」

「て……」

「て？」

クライスが謝ろうと頭を下げたが、それを遮るようにウエンディがなにかを言う。

「て……」

「え、ちよ……なにするつもり！？」

不審に思いクライスが頭をあげるとそこにはガタガタ震えながらもドラゴンスレイヤーの魔力を、クライスに見とることのできないその強力な魔力をその小さな体から溢れださんばかりにかき集めているウエンディがいた。

「……天竜の咆哮ーっ！！！」

「ぎゃあああああああああああああああああああーっ！？」

雲一つない晴天、不思議と楽しい気分になるようなその日の【化猫の宿】で一人の青年の悲鳴が空高く響いたのだった。

・ ・ ・ ・ ・

「……あゝ、やっと治った」

先程までボロボロだった腕を日の光にかざしながらそう呟いた。

あー、頭痛い。

何せ寝起きに立て続けているいろいろ起きたからね。

なかでもウエンデイの？攻撃魔法？で吹き飛ばされたのは僕の人生のなかでも一番の驚きだった気がする。攻撃魔法使えないんじゃないかなかったつけ、と思って聞いたら魔水晶を破壊するときに覚醒した新しい魔法らしい。

着替えを覗いたのは悪かったけどさ、故意的じゃないから許してくれとも言わないけどさ、いくらなんでもバカでかい魔水晶マクリマを簡単に破壊するほどの威力をもつ咆哮でぶっ飛ばさなくてもいいと思うんだ……。しかもフルパワーで。僕じゃなかったら全治数カ月の大怪我だよ？

「治り、ましたか？」

「うん。完全に。……心が痛いけど、ね」

「す、すいません」

今ではどつちが加害者が被害者が判らなくなっていたが、ウエンデイが謝ってくる。

「いきなり魔法を撃ったウエンデイもウエンデイだけ……クライス！　そもそもなんであなたは着替え中に入ってきたのよ！」

「いや、ルーシィよ……僕寝起きだったんだよ？　それにあの部屋から外に出るにはここを通るか窓からでるかしかないし」

「そんなの関係ないわよ！　ちゃんとウエンデイに謝りなさい！」

「申し訳ございませんでした」

「あはは……」

怪我をさせてしまったのは自分だし、でもそれは下着姿のところ

にいきなり入ってこられたからだし……みたいなことでも考えているのか苦笑いをするウエンディ。

てかルーシィ、なんであんたが仕切ってるんだ？

シユウはウエンディの魔法が直撃する瞬間に効果範囲外に放り投げられたことが気に入らなかつたのかジト目で僕を見るし、なんで起きたばかりなのにこんなに疲れなきやならないんだ。

「そついえばウエンディ、珍しい服だな？」

もうこの話題から離れようと無理矢理話を変えてみた。

「あ、はい。ルーシィさんたちが選んでくれたんですけど……どうですか？」

このギルドにはなぜだから知らないがウエンディの服がたくさんある。織物の生産がさかんなギルドなので服がたくさんあるのは当たり前なのだが、ウエンディ曰く、僕が来る前からさっきのように着せ替え人形にされていたらしくそのたびいろいろ作るせいでのりの数になつてしまつたらしい。

というわけでウエンディは普段着にはあまり困らないらしいが、数が多すぎて着ない服もある。

いまウエンディが着ているのは埋もれていたうちの一つらしく、僕が見るのは初めてな緑を基準としたラフなワンピースだったが背中が大きく空いている派手なデザインだった。一応露出した背中はや腰までのびた髪で隠れているっちゃ隠れてるが……どうなんだろうか、これは。いや、露出した背中は今ほ小さいが戦闘時になるとなぜかあんな姿になるシユウをいつも見てるからなんとも思わないよ？ 疚しい意味ではなく純粹に可愛いデザインだなく、とは思うけど。普段から真っ黒な着物を着てる僕がデザインを語る資格はない気がするけどさ。

「えと……クライス、さん？」

「……………ん？ ああ、どうした？」

「どうですかとは言いましたけど……………そ、そんなにジツと見られると、その……………」

ワンピースの裾を恥ずかしそうに掴みながらそう言ってきた。

……………まずいよね、たしかに女の子をジロジロ見続けるのはまずいよね。

「クライスってやっぱり、ロ　キヤア!？」

見えないほどの速さでのびた刃かルーシイの首を撥ね飛ばすギリギリで停止する。

「あはははー、なにかなルーシイ君」

「な、なんでもありません！」

「たく、僕を変態にしないでくれ。そっぴやあんだもうち（ケット・シエルター）の服着てるんだな？」

「あ、うん。私たちが着てた服はボロボロになっちゃったから貸してもらったの」

「この服もなかなかいいですね。まあ、私はわたくしなにも着ても似合いますけど」

「あっそ」

このシエリーって女は作戦中あんまり見ることがなかったからあんまり交流がなかったんだが、男である僕に対して平然と自画自賛してみせると言うことはよほどのナルシストなのか、はたまたただのバカなのか。僕が流したことにも気がつかず鏡に写った自分をニヤニヤしながら見ている限り……………ナルシストだな。うん。

僕としてはあまりこういった性格の女は苦手、というより女性全般が苦手なのであまり関わりたくない。

ウエンディとシュウは違うのかって？ 子供は好きだよ、純粹だから。今不純な考えを持つてるんじゃない、とか考えた奴こっちへ来い、バラバラにしてやる。……って僕は誰に言ってるんだ。

「せつかくだからシュウもなにか着てみたらどうだ？」

「……ん、おねえちゃんみたいなの？」

「まあ服の種類としてはね。ギルドの民族衣装着たことなかったよな？」

「そういえば……シュウちゃんっていつもそれ着てるよね」

まあ人のこと言えないがシュウはいつも同じ服装をしているのだ。ウエンディも同意見らしい。

フードつきでノースリーブ、左胸元に白い星があるだけであとは黒いだけのシンプルなワンピース。それが小さい時のシュウの服装だ。寝るときはさすがにウエンディのお下がりの寝巻きを着てはいるが日昼はそれ意外を着ている姿は見たことがなかった。

あえて薦めたことはなかったが、せつかくの機会だから違う服装もみてみたいと言うものだ。

「……わかった」

「そうか？ じゃあ……ってちょっとまったああ！」

「わああ！ シュウちゃんダメー！」

「ん……？」

なんの躊躇いもなく服を脱ぎ出したシュウをウエンディと二人がかりで止める。

羞恥心無さすぎだぞシュウは。

僕がいたらまたえらいことになりそうなのでウエンディ達任せ

て僕はとりあえず外で待っていることになった。無論、さっきまで僕が寝ていた部屋ではない。

「あら？ もう起きてたの？」

「ん？ ああ、シャルルか。おはよう」

することもなく、ボーっと外を見ていたらどこからかシャルルが現れた。

エーラで飛んできたわけではなく歩いてきたらしく視界の外からの声に少し驚いたが別に気張っていたわけでもないのでシャルルに不意を付かれたからといって不思議ではない。

「おはようって時間ではないけど、まあいいわ。起きてたならちよつどよかった、マスターが話があるってみんな外の広場に集まっているのわよ」

「シャルルは僕たちを呼びに来たって訳か。みんなって言うと、連合軍とギルドのやつらか」

「ええ。ウエンデイたちはどうしてるの？ 着替えるって言うてから一時間はたつわよ？」

「一時間も経ってたのかよ……。僕は数分前に起きたけど、ウエンデイを着せ替え人形にしてたらしいよ。タンスがぐちゃぐちゃだった」

「何してるのよまったく、みんな待ってるのよ？ クライス、呼んできなさい」

「いや、こんどはシユウを着せ替え人形にしてるらしいから無理」

肩越しに背後の部屋を指差す。

『やっぱりこれとかどう？ シユウちゃんには似合うと思うけどな』

『』

『あら、ルーシィが選んだ服より私が選んだこっちの方が可愛いですわ』

『なんであなたはいちいち突っ掛かってくるのよ!』

『あなたのことが大嫌いだからですわ』

『こっちの台詞よ!』

『ふ、二人とも落ち着いてくださーい!』

仲悪すぎるだろ、あの二人。

「……………とてもそうは思えないわよ?」

「いや、僕に言われても……………とりあえずシャルルが呼んできてよ。

女四人の中に男一人でいくのは難だから」

「それもそうね、じゃああなたは先に行っててちょうだ」

バンツ!

シャルルの言葉を遮るようにドアが開く。

振り返るとそこにいたのはシュウだった。シュウだったのだが……………

「……………シュウ」

「……………?」

「誰の推薦だ?」

「……………おねちゃん」

ええええええええええええー……………。

シュウが着ていたのは俗に言う『ゴスロリ』と呼ばれるものだった。

黒のドレスに白いフリル、ヘッドドレスもキチンと頭に乗っている。素足であることが非常に不自然だったがたしかにシュウが着ているのはゴスロリだった。ウサギの人形でも持たせて窓際にでも置いておけばビクスドールに見えるだろうというほど似合っている。

だが、だがな。たしかシユウは【化猫の宿】の民族衣装を着てみないかという話だったはずだ。民族衣装どころかゴスロリ……てかどこからゴスロリが出てきた。なにか？ このゴシックな服が民族衣装の一部とでも言うつもりか？

「ウエンディ……」

「えっと、探してたら出てきたので似合うと思って……」

「いやまあ、似合ってるけどさ。どうしてあるの、こんなの」

「私も初めてみたから、たぶん誰かが買ってきたんだと思います」

僕が来る前の【化猫の宿】ってどんなギルドだったのか非常に気になるよ。

「シユウは、それでいいのか？」

「ん……どう？」

「まあ、可愛いとは思って……」

「じゃあ、いい……」

いいの!？

この世界の人間の服装を見る限り今のシユウの格好で外を歩いたところで奇異の視線は向けられないだろうけど、どうしよう。こんなコスプレ姿でマスターの大事な話とやらを訊きに行ってもいいのが非常に不安だ。

マスターのことだ、そこまで重要な話をするとは思えない。でもなんか本能がダメと言っているような……。

「いいじゃない本人がいろいろ言ってるんだから」

「……それもそうだな」

みんなを待たせているわけだし、服装を気にするより急ぐべきか

だな。

僕だつて十分この世界からすれば浮いた格好してるわけだし、とくに問題ないだろう。

「じゃあ行くか」

「え？ どこに行くんですか？」

「マスターから大事な話があるんだつてさ」

「大事な話ですか？」

「おじいちゃん、どうかしたの？」

「シユウはいい加減おじいちゃんつて言うのをやめような？」

「……？」

いや、ゴスロリ着てるせいかもしれないもより可愛いと思うけどマスターをおじいちゃんつて言うのはいろいろ問題あるからね、シユウ。目立つ姿をしていても相変わらず無表情なシユウに肩を竦めながら、大事な話つてなんだろうと僕は曖昧に考えていたのだった。

「フェアリーテイル、ブルーペガサス、ラミアスケイル、そしてウエンディにクライス、シユウにシャルル。よくぞ六魔^{オラシオンセイイス}將軍を倒し、ニルヴァーナを止めてくれた。地方ギルド連盟を代表してこのローバウルが礼を言う」

暖かい日が照らす広場にマスターの低い声が静かに響く。

マスターの言う礼にはニルヴァーナから『化猫の宿』を救つてく

れたことへの感謝も含まれているのだろう。証拠にギルドメンバー全員がこの広場に集まって連合軍へと頭を下げていた。

もちろん僕やウエンディ達もだ。

共に戦ったとはいえ連合軍の力がなければ間違いなくギルドはなくなっていたはず、礼を言うのは当然だ。

「どういたしまして。マスターローバウル！ 六魔將軍との激闘に次ぐ激闘……楽な戦いでは、ありませんでしたが、仲間との絆が我々を 勝利に導いたのでーす（キラキラ）」

『さすが先生！』

「……奴ははたして誰かと戦ったのか？ エンジェルに倒されたところしか見てないけど」

「戦ってたんじゃないですか？ ……たぶん」

ウエンディがそう呟くが、どう考えても戦ってなかった気がする。最後に魔水晶を破壊したのはあいつだが、それだけの気がする。いつ？ 激闘に次ぐ激闘？をしたのかお聞かせ願いたい。

「この流れは、宴だろ！」

「あいさー！」

「ハイハイハイハイ一夜が」 『一夜が！』

「活躍」 『活躍！』

「それわっしょい！ 『わっしょい！』 わっしょい！ 『わっしょい！』 わっしょい！ 『わっしょい！』

「宴か」

「脱がないの！」

「フツ……」

「澄ました顔してなんであんたも脱いでんのよ！」

一夜につられてものすごい勢いで場が無理矢理宴ムードになって

いく。

てかなにげに『一夜が活躍』っていったよな。それでいいのか連合軍よ。

てかその奇妙な躍りはなんだ。

「みなさん楽しそうですね」

「うるさい奴等ね」

「……？」

「あんだだけ暴れてなんで平気なのか、僕は理解に苦しむよ」

ふとハイテンションな連合軍のなかで一人、暗い表情をしているエルザが見えた。

まだジェラルルのことを引きずっているのらしい。

ウエンディだってもう笑顔をうかべられるのに、二人の過去に何があったのか。気になるところではあるが他人でしかない僕には知る理由はないだろう。

「さあケットシエルターのみなさんも一緒に！」

いつのまにかブルーペガサスからフェアリーテイルまで感染していた奇妙な躍りをしながら一夜がこちらに気持ち悪い笑顔に向けてくる。

そんなもの誰がやるんだよ、少なくとも僕やシュウ、シャルルやウエンディもやらな

「わっしょい、わっしょい」

「……」

……ウエンディとシュウがやってる！？

え、僕もやらないとダメなの？ 空気読まないといけないの？

「クライスさんもやりましょうよ」

「え、マジ？」

「ん……」

誘われたー！

どうすればいいのこの状況。僕としてはお断りなんだけど二人のお誘いを蹴るのも心が痛い。

「わっしょい！ わっしょい！ わっしょい……」

血へドを吐くような思いでやろうとした瞬間、唐突にわっしょいコールがやんだ。

どうやら『化猫の宿』のメンバーが誰一人として乗ってこなかったためいくら一夜と言えど続けづらくなったらしい。

静寂。遠くで鳥が囀る音が聞こえるほどに静かだった。

いくらなんでもおかしいと思い、みんなを振り替えると全員がまるでエルザのように暗い表情をしていた。

……おかしい。

一夜のテンションについていけないとかそうゆうレベルではない。みんなはこんな表情をする人ではなかったはずだ。悲しいことがあった訳じゃない、ニルヴァーナは止まり、六魔將軍は捕らえられた。ナツのいうとおり宴を開いてもいいくらいなのに、何故かみんなの表情は誰かが死んでしまったかのように暗い。

僕たちが帰ってきたときのみんなはそれこそ宴を開かんばかりの大騒ぎだったはずだ。

そんな表情をする理由がわからない。

「みなさん。ニルビット族のことを隠していて、本当に申し訳ない」

ニルビット族。

その話を僕は寝る前に聞いているので知っている。

ニルヴァーナを作った一族の名前。そして『化猫の宿』が全員その末裔であるということも訊いていた。

ブレインが他のギルドを無視してまっさきにこのギルドを狙っていたのはそれが原因だったそう。唯一ニルヴァーナを封印できる一族、それを消そうとしていたらしい。

だが、結局それはニルヴァーナが破壊されると言う結末を経て終結したはずだ。

大事な話というのはそれなのだろうか。だとしたらやはり大した話じゃないようだ。

「そんなことで空気壊すの?」

「全然気にしてねえのに。なあ?」

「あい」

「……マスター、ナツの言うとおりですよ。隠していたからと言って別に咎められるようなことじゃ

「クライス」

「……なん、ですか」

マスターの目が、僕の目を射抜くように捉える。

息が詰まる。目を逸らせない。

なんだよ、なんなんだこの威圧感は、いつものマスターとは別人じゃないか。初めて会ったときに感じたあの威厳、そのあと酒を戻したりするから気のせいかとも思っていたそれがはつきりと伝わってくる。

人間のものじゃない……百年そこら生きてただけの人間が発せられるものじゃないぞ、こんなの!

「お前は、このギルドに来た日に儂にこう問うたな」このギルドは

なんだ、あなたは何者か』と」

「は、はい」

「そして僕はいつか話すと返した」

「……それが、今だと？」

無言で肯定される。

このギルドの秘密、今の僕なら右目を使うだけで簡単にわかるだろう。でもそれはマスターの口から聞くべきだと思う。

マスターの視線が連合軍に戻されると同時に僕は右目を閉じた。

「みなさん、これからする話をよく聞いてください」

マスターの、ローバウルの威圧感が伝わったのかそれまでの軽い空気は消え去り誰一人として動かない。

「まず、僕らはニルビット族の末裔などではない。ニルビット族そのもの……四百年前、ニルヴァーナを作ったのはこの僕じゃ」

「え……」

「四百年前……だと？」

思わず口にしてしまう単語。

四百年前にニルヴァーナを作ったのは自分自身だとマスターは言った。

全身からあふれる威圧感がそれを真実だと物語っている。

「四百年前、世界中に広まった戦争を止めようと僕は善悪反転の魔法……ニルヴァーナを作った。ニルヴァーナは、僕らの国となり平和の象徴として一時代を築いた」

六魔將軍によって世界を混沌へと導かんとしていたニルヴァーナ

は平和の象徴として創られた。

瓦礫の山と化したニルヴァーナを見上げながらその言葉を復唱する。

平和の象徴が、破壊をもたらす災厄の魔法として曲解されているとはなんと皮肉な話だ。

「しかし、強大な力には必ず反する力が生まれる。人々の闇を光に変えたぶんだけ、ニルヴァーナはその闇を纏っていた。人々の闇と光はバランスを持っている。それを無制限に光だけにすることは危険なことだった。闇に対して光が生まれるように、光に対して必ず闇が生まれる」

人の心の善悪の比率なんてそれこそ人それぞれだ。

それでも善と悪が二つとも存在していることに違いない。

ニルヴァーナは魔法によってその比率を無理矢理狂わせる、ある意味それは心の破壊。

危険なことだったというのは間違いではないだろう。

「人々の闇……殺意、憎悪、悲しみ、苦しみ、その強大で邪悪なそれはニルヴァーナを介し儂らにまわり憑いた」

「そんな……」

「……地獄じゃ」

啞然としたように呟くウェンディを一瞥し、マスターはもっとも簡単に最悪を連想させる言葉を呟いた。

「戦争をしている人間の膨大な悪意、儂らは共に殺し合い……全滅した。生き残ったのは、儂一人だけじゃった」

どんな、気分だったのだろう。

ついさつきまで笑いあっていた家族や友人が殺し合い死んでいくなか、一人で正気を保っているのは。みんな死に絶えて、絶望し、その絶望はニルヴァーナによって打ち消され、また絶望する。そんなことを繰り返す気持ちは、どんなものなのだろうか。

僕とシユウが死にかけたあの場所にあった呪い、あれは遙か昔に自ら殺し合い、その怨念だけが残ったものだったのだろうか。

死してなお恨み続ける。

平和の象徴は、永遠の憎しみに人を閉じ込める監獄だったのだ。

「今の儂は人などではない。あんなものを作り出してしまった罪を償うためにこの世に残るただの思念体、力無き亡霊じゃ。ニルヴァーナを封じることしかできなかった弱き儂に変わりニルヴァーナを破壊できるものが現れるまで、四百年前……今、ようやく役目が終わった」

「そ、そんな、はなし……」

何故、黙っていたのかそんなふうに言いたげなウエンディ。

しかし、マスターは静かに笑うだけだった。

刹那、その笑顔が揺らぐ。

「なにこれ、みんな!?!」

「あんだ達!?!」

「みんな、なんで……きえていくの……?」

「ッ!」

もう、限界だ。

眼球が飛び出さんばかりに目を見開く。

朱に輝く瞳が写すのは、みんなの、魔力の、消失。?みんな?という形を持っていた魔力の消失だ。

消えていく。みんなが、昨日まで一緒に暮らしていたみんなが消

えていく。

「やだよ……みんな、消えちゃいや　っ!!」

ウエンデイが叫んでも、誰も答えない。笑って消えていくだけだ。あたり、前だ。？みんな？は……、

「騙っていて、すまなかつたな。ギルド者は皆、俺が造り出した幻じゃ」

「　ッ!？」

「なんで、そんなものを作ったんだ」

僕の問いに、マスターはどこか昔を思い出すように空を見上げた。

「俺は、ニルヴァーナを見守るためにこの廃村に一人で住んでいた。じゃが七年前、一人の少年がある少女を連れてやってきた。そして少女預かってほしいと頼まれた。あまりに真っ直ぐなその瞳に、俺は思わず承諾してしまった。そして、少女のために、俺は……偽りの仲間を造り出した」

「ウエンデイのために、あんたはこのギルドを作ったっていうのか……」

「嫌……そんな話し聞きたくない！　みんなもなにか言っつてよ!!」

ウエンデイのために、このギルドは造り出された。

偽り。すべて偽りだったんだ。

みんな過ごした時間も、仕事も、生活も、なにかも偽りだった。

「ふざ、けんなよ……」

偽り。偽り。偽り。偽り。偽り。偽り。偽り。偽り。

「つたら、もう……」

「クライス、儂があの時最後にいった言葉を覚えているか？」

あの時、僕が初めてこのギルドに来たときにした会話のことだろう。

最後にいった言葉、マスターが最後に言った……、

「本当の、仲間になってやれ……」

マスターは、笑顔を浮かべた。

「ウエンディ、シャルル……もうお前達に偽りの仲間は今もう要らない」

「……………」

「お前達には、もう本当の仲間がいるではないか」

僕たちを指差すマスターには威圧感も、威厳もない。

「お前達の未来は、始まったばかりだ」

そこにいたのは、ただただ幼い少女を見守ってきた優しい老人だった。

「マスターっ！」

微笑みを残しながら消え逝くマスターを引き留めようと、ウエンディが声を張り上げながら走り出す。

でも、その小さな手はマスターに届くことはない。

光が、マスターだった光が空へと帰っていく。長い長い役目を終えた光が昇っていく。

『クライス、シュウ』

その声は、僕たちだけに届いた最後の言葉だった。

『騙っていて本当にすまなかった。僕はウエンディとシャルルを深く傷つけてしまった。これから逝くだけの僕にはもうなにもできない。だから二人とも、ウエンディとシャルルを護ってあげてくれ』
「はい。この命が尽きるまで、その言葉を護ります」

「……ん。わたしも……絶対に」
『ありがとう。これで思い残すことはない、やはりお主らは頼りになるのう……』

光が消え、逝ってしまったことがわかった。僕とシュウに、すべてを任せて。

七年前ウエンディを預かってギルドを一人で造った事といい、最後までお人好しだったな、マスターは。

左腕を着物の裾から引き抜くと、『化猫の宿』である正銘のマークが肩から消えていくところだった。

本当に、終わってしまったんだ……もう誰も『化猫の宿』の人間はいなくなってしまった。

「マスターーっ！　　うっつ……うっつ……ああああ！」

マスターが立っていたその場所で、ウエンディが泣き崩れている。七年間共に過ごしてきたみんなが一度に消えてしまった。その悲しみは一生かかって僕に判るものではないだろう。

永遠の別れ。

願おうが、叫ぼうが、泣こうが、なにをしたところでもう会うことができない。

一度に何十人の大切な人と永遠に会えなくなってしまうたウエンディに、僕はどんな言葉をかけてあげればいいのだろう。元氣出せよ？ 落ち込むなよ？ そんな安っぽい言葉しか思い浮かばない。それでも僕は泣いているウエンディに近づいた。

「ウエンディ」

「……クライス、さん……」

涙でぐちゃぐちゃになった顔。

可愛い顔が台無しだよ。そんなふうに軽口で悲しさを忘れさせることができるのか？

無理だ。そんなに浅い傷ではない。

たとえどんな言葉をかけようが、それは変わらないだろう。だから

「泣けばいいさ」

「あ……」

優しく、抱き締める。

誰かが手を差しのべても、今のウエンディには涙でその手が見えないだろう。

だったら涙が枯れるまで目一杯なればいい。

泣いて泣いて、涙がかれてもまだ悲しいとき……そのときは、ちゃんと僕が手を差しのべてあげよう。

悲しみを忘れる必要なんかない。むしろいつまでも覚えておくべきだ。

悲しみを知っているからこそ、人は人に優しくできるんだから。

「で、も……みんな、いなくなっちゃって、……クライスさんや、シューちゃんまで、いなく、なっちゃうような気がして……嫌、嫌

だよ、一人にしないで……ずっと一緒にいてっ！」

「いなくなるならいよ」

「え……？」

「当たり前のことだ。ウエンディが泣いて泣いて、声が枯れて涙が枯れて、泣き疲れて眠って、起きてまた泣いて……何回それが繰り返されても僕もシユウもいなくなるならい。ずっと、ウエンディが望む限り僕たちはそばにいるよ」

「本当に？」

「ああ。絶対にだ。僕たちの絆は、この翼がなくても繋がってるんだから」

僕とウエンディの首にかかる『二人はいつでも繋がっている』そんな意味が込められた翼。

そう。これがなくても絶対的な絆はいつも僕たちを繋いでいるんだ。

ウエンディと僕を、シャルルを、シユウを。

みんなが消えてしまったのは悲しい。

悲しいなら泣いてもいいけど、一人だけで背負わせちゃダメだ。

悲しさに潰されるだけじゃダメだ。

悲しさを糧にして、これからの未来を歩んでいかなきゃいけないんだ。

「泣いていいよ。今は、思いつきり。僕がずっと傍にいるから」

「……うん」

小さくて、弱くて、優しく、ちょっと恥ずかしがり屋な少女は……いつまでも泣き続けた。

「それで、あなた達はこれからどうするの？」

しばらくして、ウエンディが泣き止んだ頃にルーシイが話しかけ
てきた。

これからというのは、言葉の通りこれからの事だろう。

『化猫の宿』がなくなってしまった今、僕たちはこれからどう生
活していけばいいのか。

ここに住み続けると言うてもある。やってできないこともないだ
ろうしウエンディとシャルルが望むならそれでもいいが、このギル
ドはたった四人で住むには広すぎる。

「どうしよっかな……」

「どうしよっかな、ってそんなことで大丈夫なの？」

「平気、でもないかな」

僕は曖昧な笑顔を浮かべるしかなかった。

僕だってこの世界に来て一、二ヶ月しか経っていないのだ。

どうしよう、マスターからすべてを任されたはいいけど早速壁に
ぶち当たった。

「ウエンディ達はどうしたい？　ここに留まるか、それとも四人で
旅でもしようか？」

「旅？　……そういえばあんた、ここに来る前は一人旅してたんだ
ったわね」

「まあね」

シャルルの指摘に自分の設定を思いだしなんとか相づちを打つ。適当に言ったことだったけどそれもいいかもしれない。この世界を見て回るのも悪くない。

だが、ウエンディは僕の着物に頭を埋めたまま顔をあげなかった。嫌、なのだろうか？

「……クライス」

ウエンディにもう一回聞いてみようとした瞬間、意外な声が僕を呼んだ。

「エルザ？　どうかしたか？」

「宛がないのなら、私たちのギルドに来ないか？」

「あんたのギルド、フェアリーテイルに？」

「ああ。ウエンディはたくさん仲間を一度に失ってしまったんだ、その悲しみは計り知れない。大切なものを失う悲しみは私も知っている」

大切なものを失うか、ウエンディがギルドの仲間を失ったようにエルザもまた、ジェラルルを失った。だからこそ、ウエンディの悲しみが判るのだろうか。

「悲しみは一人では支えきれない。仲間が必要だ」

「だからフェアリーテイルに来て？」

「会って間もない私が言うのもおこがましいが、そうだ。彼女の悲しみは、みんなが埋めてくれる」

フェアリーテイル、問題が多く評議員からも問題視されているが優秀な人材も多く、なによりメンバー全員が家族のような絆で結ばれていると評判の高いギルドだ。だからと言って新人だけ置いてい

かれるわけでもなく来るものを拒まず、むしろ毎回宴を開くほどだ
という話も聞いたことがある。

ウエンディの心を癒す場所としてはうってつけの場所だろう。

「どうする？」

僕はみんなを振り返る。

「私はウエンディがいいならいいわよ」

「ん……わたしも」

「……………」

「ウエンディ、どうする？」

あくまで静かに、急かすのではなくいつまでも待つと言おうように
ウエンディに訊く。

半身を隠すように僕の腰辺りに抱きついたらままのウエンディ。

泣いた後だからか時折しゃっくりをあげながらも考えついるのが
判る。

嗚咽が聴こえなくなったころ、ウエンディはゆっくりと顔をあげ、
意外な言葉を放ったのだった。

「私は……フェアリーテイルに　行きません」

偽りの仲間、本当の仲間（後書き）

はい、オリジナル展開を入れてみました。

次回がどうなるか、お楽しみに！

雪花

「マスターハデス」

不気味な装飾の施された船内、若い女がその中央の玉座に座る老人に声をかける。

不気味な角の生えた兜に漆黒のマント、老人とは思えぬ覇気をまとった男は女の声に目を閉じたまま答える。

「なんだ、ウルティア」

「ご存じかもしれませんが、連合軍は六魔將軍を倒しニルヴァーナを破壊したとのこと」

「ふん、？表？の連中もなかなかやる」

女　ウルティアの報告を聞いても男　ハデスは目を開けようともせずに淡々とそう返したただけだった。

「だが、我々の目的はその程度の誤差で揺るぎはしない」

「ええ。我々の目的は？ゼレフ？を封印した鍵を探し出すこと……ニルヴァーナごとく消えようと関係ありませんわ」

自分で報告しておきながらさして興味がないかのように手に持った水晶を腕の上で弄ぶウルティア。

含みのある会話をしているにも関わらず二人の間にはどうも緊張感がなかった。

そんななかウルティアがとつぜん水晶を止めた。

「ただ……」

「ただ、なんだ？」

「面白い報告も入ってきています。？彼？が帰ってきたと」

「なんだと？」

カツと目を見開き、今までの落ち着いた雰囲気は完全になくしハデスはウルティアを睨み付ける。

「？彼？とは、ゼレフのことか？ それとも……やつのことか？」

「やつ、で合っています。今はまだ、なにも思い出していないようですが」

「ふふ、ふははは……そうか、やつまでも帰ってきたか。これは近々、面白いことが起こりそうだ」

右の肩に触れながらハデスは笑う。

そんなハデスを見ながら、ウルティアも意味ありげな笑みを浮かべる。

「あのギルドが動き出すかもしれませんね。どうします？」

「あのギルドか……なに、気にすることはないだろう。奴等は人間である我々のことなど気にも止めまい」

「ですが、私たちがゼレフを手にいれるには……」

「？奴？も？奴等？も邪魔だろうな。？奴？の力は我々も欲するところだが、まず我々が優先するのはゼレフだ」

「では、放っておくのですか？」

「ああ。すべてはゼレフの封印を解いてからだ」

「……わかりました」

鳥も飛ばないような雲の上を進む不気味な舟のなか、二人は誰にも聞かれることもない会話を静かに終えた。

ハデスに背を向けてあるいていくウルティアは、一瞬なにかが見えた気がしてガラスの向こうの空を見上げた。

こんな上空を生身で飛ぶことのできる魔導師がいるはずもない。バカな鳥でもいたのかしら、口の中で小さく呟きながらウルティアは自分の部屋へと戻っていくのだった。

まだ朝日も上らないような時間、若干肌寒い森のなかに僕とシユウの声が木霊する。

日課の鍛練。ニルヴァーナを破壊した次の日である今日もそれを欠かさすわけにはいかなかった。

「『喚装』……ウォーハンマー」

ただ、これまでの鍛練とは違いシユウは自分の力を取り戻している。今までの模擬戦とは訳が違った。

自身の身長を遙かに越えるであろう巨大なハンマーをシユウは僕目掛けて躊躇いなく降り下ろしてくる。頭上で身刀をクロスさせながらそれを受け止めるが、衝撃に地面の方がこらえきれず踝辺りまで体が沈む。足が固定され動きを制限されてしまう。

それをシユウが見逃すはずもなく何百キロあるとも知れぬハンマーをまるで木の棒かのようにぐるりと回転させ再度に叩きつけんと振りかざす。回避は間に合わない、そう悟り肘から伸ばした身刀でそれを受け止めるが、その程度で勢いが止まるはずもなく埋まっていた場所からブツ飛ばされた。

空中で回転し、勢いを殺しながら木の幹に平行着地する。

「たく、なんなんだよあのバカ力は」

バキリと嫌な音をたてシュウの攻撃を受けた身刀が中程で折れ地面に突き刺さる。

いや、身刀って僕の魔力が万全なら単原子体の物質と同じくらいの強度を持つんだけど。多少押さえているからって一撃で折れるか普通？ バカ力とかそうゆうレベルじゃないぞ。

そんなことを考えながらもその場から一瞬で移動する。

次の瞬間、蒼い光が一瞬前まで僕が着地していた木をへし折った。てか消し飛ばした。

その横の木の葉に隠れながらシュウを見据えると白煙が上がるブラックシューターを担ぎ直し、光の翼を空に伸ばしこちらに飛んできようとしているのがみえた。

さっきハンマーでブツ飛ばしたと思ったらもうブラックシューターを撃ってくるとは、喚装の早さも尋常なものじゃなくなっているらしい。

シュウが予想以上の力を持っていることに嬉々としながら僕も枝を蹴りシュウを迎え撃つ。

「【式裂流・壱の奥義】？空牙絶刀?!」

「ブラックシューター、ブレイドモード……は!」

風を纏った漆黒の刃と、光を纏った巨大な刃がぶつかり合い耳をつんざくような音が森のなかに響き渡る。

「互角、かな？」

「むう……」

ガランツ、大きな音をたてて着地したシュウの横にブラックシューターが落下する。

同時に僕の身刀もバキリと音をあげ砕け散る。

僕は五封刀を使ってないし、シュウは力を解放していない。魔力も押さえてはいたが自ら封じていた力を解放したことでシュウはとんでもなく強くなっていった。

今日の鍛練をいつもより早く始めたのは確かめたかったからだ。シュウの本当の実力を。

ため息をつくしかなかった。

規格外だ。ドラゴンスレイヤーとはこれほどまでに強大な力を持っているのだと改めて思い知らされた。

ウエンディの治癒の力を見たときも驚いたが、シュウの戦闘特化の滅竜魔法も目を見張るものがある。

魔法といってもシュウの力はほとんど武器で戦うことを想定したものらしく身体能力の強化が主らしいが、まだまだシュウは見せないだけでとつもない力を持っているのだろう。

と、まあ長々語っては見たが一番驚いたのはシュウの武器だ。

なんだよ僕の身刀を何本もへし折って刃こぼれしない武器って。欲しいわそれ。

「さて、全戦引き分けだけど、今日からは忙しくなるんだしそろそろ帰ろうか」

「うん。そろそろ、お姉ちゃんも起きる頃」

本当ならフェアリーテイルにいた頃なんだけどな。

山の影から顔を出し始めた日の光に目を細めながら、僕は昨日のことを思い返してみた。

『私は……フェアリーテイルに　行きません』

そう言ったときは思わず何故だと聞き返してしまったが、聞いてみれば何てことない？今は？行かないと言う意味だった。

七年も過ごしたこのギルドには並々ならぬ愛着があったのだろう。エルザ達にはひとまず帰ってもらった。フェアリーテイルにいないことにしたわけではなく、準備や片付け、移動なども含めて七日以内には行くと言ってある。

昨日の晩に四人で話し合った結果、これからすることはみんなの荷物や畑の整理、各民家の掃除、その他にもいくつかあり、最後にお墓を作ることにしている。

マスターとみんなのお墓。

みんなを忘れないために、それは広場の真ん中に作るうと言うことになっている。

それらがすべて終わったら、このギルドを去る。それがみんなで決めたことだった。

そんなことを考えているうちに家についていた。

顔洗ってくる、とシュウが洗面所に行ってしまったので僕はウエインデイを起こしに行こうとしたが、そんな必要なかったらしい。

リビングの方からいい匂いが漂ってくる。

「あ、詩織！ おかえり。もうすぐご飯できるから待ってて」

案の定、エプロンをつけたウエインデイが朝食の準備をしていた。

「あいよ。僕は食器でも出してようか？」

「うん。じゃあ三番目のお皿を四枚ね」

「はいはい」

棚を開けて木製の皿を四枚机に並べる。

それにしても……

「慣れないな〜……あ、お肉もーらい」

「あ！ つまみ食いしちゃダメだよ詩織！」

「ん〜……」

「？ どうしたの？」

「いや、その……呼び方なれないなーってね」

ウエンディ何故かあの後から僕のことをクライスではなく詩織と呼ぶようになった。

詩織と呼ばれるのは本当に親しい者にだけ、と親父から言われていたので滅多に呼ばれたことがないのだ。

ウエンディが僕を詩織と呼んだところで別に問題ないのだが、呼ばれたことがないだけにまだなれない。

「やっぱり、だめ……あ……ですか？」

「丁寧語に直さなくていいよ。丁寧語だとなんとなく他人みたいだし、詩織って呼ばれるのも慣れないだけで嫌じゃないしな」

「じゃあ、詩織ってよんでもいいの？」

「むしろ呼んでくれ。ウエンディとシユウとシャルル以外が呼んだら切るけど」

「あはは、みんなに気をつけてって言わないと」

「そうだね〜……肉も〜らい」

「ああ！ つまみ食いしちゃダメだってば〜！」

もう、と怒りながらもウエンディは笑顔だ。

昨晚みんなが寝静まった頃、一人でないのを見たときは心配したけどどうやらそれでスッキリしたらしい。

強い子なんだろう、ウエンディは。力とか魔力とかじゃなくて、心が強い。

今からこんなに強かったら僕と同じ年になる頃はどうなるんだろうか？

『詩織！ 私この人と結婚するね！』

『な！？ 待つてくれウエンディ！ そんなこといきなり……』
『もう決めたの、バイバイ』

いやいや、なんだよこのビジョンは。悲しすぎるだろおい。強さ
関係ないし。

でも本当にそうならどうしよう………よし、死ぬか。

「詩織！」

「……………」

「むう、詩織ってば！」

「イダッ！？」

な、なんだ！？

なんか人生のバットエンドを見ていたような気がするが……とり
あえず、

「なんでいきなり叩くの？ てかそれ椅子だよね？」

「この前フライパンで叩いても平気な顔してつまみ食い続けてたんだもん。だからこれならって」

えー……。

なんかウエンディがアグレッシブになりだした。たしかにそんな
記憶もあるけどさ、いきなり椅子ってランクアップしすぎじゃない？

「ん……おねえちゃん、おはよう」

「あ、シュウちゃん？ おはよう。ご飯できたよ」

「ん」

「まてまて、顔を拭いてこい」

「……………」
「はあ」

顔を洗い終えたのかシュウがリビングに入ってきたが、顔がびちやびちやのままだった。

いつも、ではないがたまにこうゆうことがある。やっぱりシュウは小さい方の姿が本来の姿なのだろう、やることがいちいち幼い。にもかかわらず僕に勝るとも劣らない実力の持ち主なのは……………なぞだ。

「ほら、顔だしてみろ」
「ん……………」

タオルで顔をがしがしと拭いてやる。あーあー、服までびしょびしょじゃないか。しかもゴスロリのままだから拭きにくいっいたらない。

シュウの着てるゴスロリ、これ昨日のと違うよね？
まさかゴスロリ気に入った？ いやいや、今はいいけどマグノリアの町ではさぜんそんな格好。
と、またドアがあいてシャルルが入ってきた。
いつもはウエンデイが一番遅いのである意味珍しい光景だ。

「あら、みんな早いよね」
「おはようシャルル。今日は一番遅いな」
「しょうがないじゃない、誰かさんが泣いてるせいでよく眠れなかつたんだから」

「おは え！？　しゃ、シャルル、起きてたの！？」
「僕も起きてた」

「わたしも……………おきてた」
「……………」

わかつてはいたが起きてたのは僕だけじゃなかったようだ。
みんな寝ていると思っていたのか（まあ寝たふりしてたのは僕たちだけ）ウエンディは顔を真っ赤にしている。

「うう、だつて……」

「ウエンディ」

「？」

「泣きたいなら僕の胸に飛び込んでおいで」

「……詩織なんて知らない！」

グサア！

ウエンディの攻撃「詩織なんて知らない！」！

クライスの心に大ダメージ！

クライスは力尽きた。

「……うん。僕はまた一人旅にでるよ。バイバイ！ みんな元気でね！」

「わー！ まつてよ詩織ー！」

「おにいちゃん……どこいくの？」

「はあ……」

多くの仲間が消えてしまった『化猫の宿』、端から見れば寂しいその場所には僕たちの声だけは騒がしく響いていた。

一時間後、朝食を終え僕たちは各々の作業に向かっていた。

グループとしてはウエンディとシャルル、僕とシュウだ。ウエンディ達はみんなの荷物整理などで、僕達は畑や家畜などの始末。チーム分けに意味はないが、しいて言うなら力仕事をするかしないかだ。

農作業はかなり力を使うし、荷物整理はみんなと付き合いが長いウエンディたちがやった方がいいだろうということだ。

まず僕とシユウが向かったのは木材置き場だった。いろいろ使うからと常時大量の木材が蓄えられているここは後々のことを考えると一番始めに片付けた方がいいと思っただけからだ。

予想通り、そこにはなん十本もの大木が積み重ねられていた。

「さて、これどうするか。放っておいても腐るだけだろうし、だからといって燃やしたりするのもなんだし……。よし、森に戻してくるか」

「もりに、もどす……？」

「そう。木は元々森にあるものだから、森に転がしておけばそのうち土にかえるだろう」

よくしらないけど、そう言いながら持ってきたロープを手早く丸太に巻き付ける。

これも最初は手間取ったよな、ジェイコブになんて注意されたか……。そんなことを考えながらも計十本の丸太に巻き付け終えた。二人で五本づつ、三回くらい往復すれば終わるだろう。

シユウに五本のロープを渡そうと振り返った。

「……なにしてんの」

「こうすれば、はやくおわる」

そこには並べられた丸太の上にさらに丸太を重ねているシユウがいた。おいおいなんかピラミッドみたいになってるぞ……。てか片手でポイポイ積み重ねるのやめようよ、怖すぎるよその腕力。

そんなわけで一回で丸太運びが終わってしまった。普通ならこの作業だけで一日終わるはずだよな、なんて考えも浮かんだが僕とシユウ相手に常識なんて通用しないのだから気にしても意味がない。

常識、なにそれ美味しいの？ だ。

その後も、シユウのめちゃくちや理論で一日かかると思っていた仕事が半日で終わってしまった。畑の野菜は魔法空間に放り込むし、家畜（鳥など）は森の中へぶん投げるし、ゴミは消し飛ばすし、もうめちゃくちやだった。

まあどちらにしても昼にはいったん集合する予定になっていたのであっけなく終わってしまった片付けに拍子抜けしながらも、働いたからいいだろとばかりに僕の背中を陣取ったシユウをつれながら帰宅した。

まだ整理してるかと思っていたがウエンディたちはもう家にいるらしく昼食の匂いが漂っていた。

「あ、おかえり詩織」

「ただいま、ウエンディたちは先に戻ってたんだな」

「うん。思ったよりすることなくて……みんなの持ち物とか一緒に消えちゃったみたい」

「……そうか」

偽りの仲間にいっまでも依存しないように、もともと残るものを持たないようにしてたんだろ。

昼食の合間に聞いた話だと、作っていた織物や野菜はともかく、私物はほとんど残っていなかったらしい。外界との接触が極端に少なかったのも、今思えば残るものを増やさないためだったんだろ。織物や農作物はウエンディがもし一人になってしまったとしても生きていけるため、マスターが消えてしまった今ではそれは憶測にすぎないが、すべてこうゆう結末を予見してやってきたことだったんだと思う。

今思い返せば帰ってきたときのギルドはいつもより物が少なかった気がする。ニリヴァーナが破壊された時点で全部予想されていたってことか。

「僕たちの方も終わったよ。シユウのお陰で一日かかると思ってた
仕事は半日で終わったよ」

「ん……ときはかねなり」

『……………』

どこで知ったんだ？ あはは……。みたいなやり取りが僕とウェ
ンデイの間で起こっていることにも気がつかずシユウはサラダにて
を伸ばしていた。

たしかどこかに図書館があったような気がするが、もしかしたら
そこに辞書でもあったのかもしれない。

あ、図書館か……そういえばあそこはどうなってるんだろう。

漫画やライトノベルなどはよく読んでいた僕だがこのギルドにそ
んなものがあるはずもなくあまり行く機会がなかった場所だが、お
ぼろげな記憶を掘り返してみればそこそこ貴重そうな魔導書があっ
たはず。よもやそれまで消えていることはないはずだ。

そのこの片付けでもしょうか……どうせやるなら徹底的にやるべき
だろう。

「午後は図書館の整理でもしょうか」

昼食を食べ終えデザートのみんごをつまみながらそう提案する。

「図書館？ あ、それもいいかも。本まで消えちゃうことはないと思
うし」

僕が無駄に時間をかけて作ったりリアルウサギりんご（完全にウサ
ギを再現したもの）を勿体ないなと眺めていたウェンデイはそれ
を口に放り込みながらそう返してきた。

消えないだろうという予想はすぐに思い当たったらしく僕と同じ

ことを言っている。

魔導書はウエンデイが来る前からあったものらしいが、だからといって思い出があるわけでもない魔導書が消えるわけではないはず、むしろこれからのことを考えれば残しておいたほうがいいものだ。

「よし、じゃあ行くか」

最後のりんごを食べていたシユウが食べ終わったのを確認し僕は席をたった。

結果から言うと予想は半分正解で半分外れと言ったものだった。

古びた木の匂いがたちこめる図書館には大量の本が残っていることには残っていた。

図書館というには少し狭い場所ではあるが、『化猫の宿』の図書館はべつに情報収集をするだけのものではないので十分広いとも考えられる。

ここに保管されているのは書物は魔導書が五、アルバムなど『化猫の宿』に関する資料が三、たまにウエンデイや僕たちが町に出て買ってくる『週間ソーサラ』などを含めた雑誌類が二といった割合だ。

魔導書、雑誌類は予想どおり相変わらず埃を被ってそこに保管されていた。

だが、よくみんなが見ていたからなのか埃を被っていないアルバムは、中が残っていないかった。

「ウエンデイ、気を落とすなよ」

「うん。大丈夫だよ……もしかしたらって、思ったから」

ギルドのみんなはマスターが作り、僕たちに見せていた幻の仲間。この世界の魔法で撮る写真の詳しい原理を知っているわけではな

いが、現実のみんなが消えた今、写真の中のみんなも消えていた。写真の中には笑っているウエンディと難しい表情をしたシャルルだけが写っている。

徹底しすぎでしょマスター。過去くらい残してあげましょうよ。

「偽りの仲間はもういらない、マスターだってそう言ってたもん。だから、もうこれも捨てなきゃ」

たった三冊しかないアルバム。

日誌などもあるにはあったがこれもやはり文字は消えていた。敵しさもまた優しさ、そうは言っが……。

「クライス、ウエンディがそう言ってるのにあんたがうじうじしててどうするのよ」

「シャルルはあっさりしすぎだよ……でも、そうかな」

今となつては白紙のノートでしかない日誌をドサドサと積み重ねるシャルルを振り返る。

ウエンディがそこにアルバム積み重ねる。

一瞬写真くらい残しておけばいいじゃないかと言おうとしたが、自分しかいないアルバムをとっておいても後で見返したときに悲しくなるだけだろう。その悲しさは忘れるべきではないだろうが、ウエンディが自分で手離すと決意したなら僕が口出しするのも蛇足というものだ。

「魔導書も読まないよな？」

「私は読まないけど、詩織は読まないの？」

「そうよ。これから何があるかわからないんだからあんたが持つておけばいいじゃない」

「いやいや、こんなに要らないし。そもそも僕は武器で戦うのが主

だから」

「いいから見ときなさい。私たちはあつちを手伝ってくるから」

ウエンディ達がシユウの方へといっせいでしまいい僕はその場に取り残されてしまった。

しかたない、あつても困らないかと何冊かパラパラと捲ってみる。普通に眺めていればただの図形にしか見えない文字が羅列された魔導書。しかし、一度目を閉じて右目を発動させるとあつという間に理解できるようになった。

僕の読める文字に変換されているわけではなく漠然と理解できるだけだが内容を見るには困らない。

最初はこの感覚になれなくて使いこなせなかったが、使っている内にだんだんと慣れた。

このギルドに来たその日、僕がこの目を十全に使いこなすことができれば、あるいはウエンディ達がこんな辛い別れをすることはなかったのだろうか。

「これは、いらぬいな」

三百ページの魔導書を本の数秒で読み終えて先程のアルバムの上に重ねる。魔法に関することを一瞬で理解してしまうこの瞳なら三百ページなど大したことはない。

今そんなことを考えたところで現在いまが変わる訳じゃない。マスターの言葉を、ウエンディ達の始まったばかりの未来これからを僕は守るために、いまより強くならなきゃならない。

二冊目の魔導書を放る。

さすがに『化猫の宿』、攻撃に関するものより呪いの解除や薬の合成魔法についての記述が多い。

その後も似たようなものが続き、十冊ほど読み終えた辺りで嫌になつてきた。

いや、どんだけ怪我する前提だよ。ここにある魔導書ってむしろ薬術書だよ。

でも読んどかないとシャルルが怒るだろうな、と思い直し再び魔導書に目を向けた。

適当に取った魔導書の題名は【風の書】。これは、当たり前じゃね？僕は一応風魔法を使うが主はシュウの魔導二輪に乗るときや、速く空を飛ぶときくらいで使い時が少ない。これは僕にとって最良の魔導書だろう。年期のはいったもののようにだし少なくとも僕が気に入る魔法があるはずだ。

そんな期待をいだきながら一頁目^{ページ}をめく

「詩織〜！」

「……タイミング悪いな」

ろうとした瞬間に遠くで僕を呼ぶ声が聞こえた。

多少後ろ髪を引かれるような気分で魔導書をその場に置き、その声の方へと向かう。

乱雑に放置されている様々な本、これじゃ片付けてるんだか荒らしてるんだかわかりやしない。

暗い図書館の中、どこだ〜、その声をあげると本棚の影からウェンデイが飛び出してきた。

「どうしたんだ。掘り出し物でもあった？」

「う〜ん、とにかく見てみて」

ウェンデイが僕の手を取り引っ張りながら走り出す。

されるがままに付いていくと、すぐにシュウとシャルルも見えてきた。

二人は古い本棚の前に立っていた。

なにか見つけたのかと思っていたが二人はなににも持っていない。

その視線の先にあるのは、なにも入っていない本棚だけだ。
不思議に思いながらもウエンディに続いて二人の横に並ぶ。

「どうしたんだ？」

「ん……おにいちゃん。これ、おかしい」

「これ？ 本棚しかないけど」

「……おかしい」

「この子さつきからこればっかりなのよ。あんた何とかしなさい」

シャルルよ、それは無茶振りだろ……。

どうみてもシュウが指差しているのは本棚だ。中になにも入っていないしそれは間違ってるないだろう。

僕にはただの古い本棚にしか見えない。

ウエンディに顔を向けてみたが僕と同じらしく頭を振るだけだった。

シュウがおかしいと言うからには、おかしいのだろう。

棚を上から下まで見たり叩いたりしてみたがやはりとくになんの変轍もない本棚だ。

「シュウ、なにがおかしいんだ？」

「……これ」

「いやいや、具体的には、だよ」

「……」

「」

シュウが指差しているのは相変わらず本棚だったが具体的に聴いたらこう言った。

つまり本棚がおかしいのではなく置いてあるこの場所がおかしいと言っことだろうか？

「……ウエンディ、シャルル、シユウ。ちょっと下がって」「なにをするの？ 危ないことなら……」「心配するな、ちょっと試してみたいことがあるだけだから」「うん……」

三人が下がったことを確認し再度棚に振れてみる。

マスターが推理小説を読んでいるたのかは知らないけど、とりあえず王道を試してみる。

ガララ、

横に引つ張ると棚があっさり動いた。その奥には何やら怪しげな術式が壁に書かれていた。

「すごい。どうして判ったの？」

「なんとなく、動くんじゃないかってね。僕もここまで単純なものだと思わなかったけど」

「それにしても、なにかしらこれ？ 術式、みたいね……」

術式には【この中の物を他者が見ることはできない】そんなようなことが書かれていた。

それにしても、術式の後ろになにか見えるような気がする。

なにかの魔力……ここは図書館の奥の方だからあまり人が来ることがない、なにかを隠すとしたら最適な場所だ。

こんなことをしてまで隠していたもの、人間として中が気になるのは当たり前だよな？

「よし、開けてみるか。なにが入ってるのか非常に気になるし」

「え？ でも、隠してたつてことは見られたくないものつてことだからこのままにしておくべきじゃ……」

「何を言うかウエンディ君。目の前になにか隠されていたら見てみたいだろう」

「し、詩織がおかしくなつたよシャルル！」
「放っておきなさい、そのうち直るわよ」

なんか物扱いされた気がするが気にせず術式を解きにかかる。
以外に複雑な術式を右目で見て解きながらほとんど崩れていく。
しばらくして術式が完全に崩れ去り、その奥には狭いスペースがあつた。ウエンディが体を丸めればギリギリ入れる程度のスペース、そこに置かれていたのは人の頭くらいの大サイズの白い石だつた。その辺に落ちているような無骨なものではなく、角の取れたまんまるな石。

どうやら術式の後ろに見えた魔力の正体はこれだつたようだ。微弱だが魔力が見える。

埃が溜まつたそこへ汚れないように着物の裾をまくりながら手を突っ込む。手に持つてみるとその石は見た目ほどの重さがなく、同時に奇妙な暖かさがあつた。暖められたような瞬間的なものではなく、生き物のように石自体が熱を発しているかのような不思議な温かさだ。

だが、軽さと温かさを除いてしまえば少し魔力を持つだけの軽石のようなものと思えず、これと違って奇怪な物とも思えない。

「うーん……魔力を持った軽石、かな。少なくとも僕にはそう見える」

「軽石？ そんなものをこんなに嚴重に隠してたつて言つのか？」

「僕に聞かれても……。マスターの縁の品なんじゃない？」

「シユウちゃん、この石がおかしいの？」

「ん……かして」

僕の右腕から石を取ろうとして、手が届かず背伸びするシユウに石を渡してやる。

瞬間　ボンッ、と何かが弾けるような音がして白煙が部屋のな

かを覆い尽くした。

とつさに顔を腕で覆ったが、有害なものではなかったらしく体に異変はない。だが、右目で見る光景には異変があった。

強力な魔力の塊が見える、これもまた有害なものではないらしいがとにかく強力な魔力が白煙の向こうに見える。その方向にいるのは、動いていないのであればシユウがいる方向だ。

しかし僕にシユウの魔力をこんなに鮮明に見ることができないはずがない。

ならばあの石から何かが現れたと考えるのが妥当と言っものだろう。

魔力を解放、狭い室内に充満し視界を奪っている白煙を爆風で窓の外へと追い出す。

舞った埃に噎せながらもシユウがいる方向に目を向けると、

「なんじゃなんじゃ！ 辺りは煙に包まれているわいきなり風が吹くわ、寝起きに騒々しいったらない！」

「……は？」

その先にいたのは、異様に尻尾の長い白い喋る狐を無表情に抱き抱えているシユウだった。

いやまて、白い狐は判る。僕が見たことがないだけでこの世界にはいろんな生き物があるだろうからそれくらいでは驚かない。でも、その狐が人間の言葉を話すとなれば別だ。いくら魔法が溢れた世界とはいえ話す狐がいるわけがない。

いや、シャルルという例外もいるけど少なくとも動物が喋るなんてのはまずあり得ないことのはずだ。

そもそもこの狐はどこから出てきたんだ、まさかあの石から出てきたのか？

「むう？ お前、誰じゃ？」

「僕の台詞だよ……。てか、どっから現れたんだお前」
「儂か？ 儂の名前は雪花、こつ見えても神様じゃ！」
「はあ……」

見た目は子狐、声はたぶん少女のものだと思われるのだがなんと妙な口調で妙なことを口走る狐に圧倒されるように適当な返事を返す。

雪花と名乗った狐は、なにを考えてかシュウの腕のなかでもがくが、ガツチリホールドされているのかダラリと長い尻尾が虚しく揺れるだけだった。どうやら逃げ出したいらしいが、無表情ながらその手触りを気に入ったのであるうシュウがホールドを緩める様子はない。

それでも狐は動き続け、

「……なあ！？ 誰じゃ儂を掴まえているのは！」

動き疲れてぐったりした頃、やっと気づいたというように頭を反らせてシュウを睨み（？）つけた。

睨みつけられているシュウはいえはその行動の意味すら理解していない様子で無表情にそれを見つめ返している。

そのまま固まってしまったシュウと狐の後ろでどうすればいいのかとおろおろしていたウエンディがシャルルを抱えたまま今がチャンスとばかりに僕の方へと小走りに近づいてきた。

「し、詩織、あの白い狐は……？」

「たぶんあの隠されてた石ころだろうね。シュウが触れてから出てきたってことは、なにかの呪い関連の力であの石になってんだと思う。でも、だからといってあの狐自体には悪い魔力は感じない」「そうなの？ シュウちゃんが気に入ってるみたいだから怖いモンスターとかじゃないってことはわかってたけど……そう言えばさっ

き儂は神様じゃ、つて言つてたよね？」

「あんな微笑ましい行動をする狐が神様だとは思えないな」

「あはは……」

突如として現れた妙な狐、シユウから逃げようとして逃げられずもがいているという文字通り微笑ましい光景を僕とウエンディはしばらく微妙な表情で見っていた。

・ ・ ・ ・ ・

「で、狐」

「狐ではない、雪花じゃ！」

「はいはい。で、狐」

「じゃ・か・ら、雪花じゃあー！」

ところ変わって自宅。

リビングの簡易ソファに僕とウエンディとシユウとシャルルは座っていた。

そして目の前では全身が白く緑色の瞳をした異様に尻尾の長い狐が叫んでいる。

神だかなんだか知らないがいつまでもあそこで立ち話をしているも一向にまとまらないというわけで一旦戻ってきたのだ。

なかなか狐を離そうとしなかったシユウをなんとか説得しよう

やっと落ち着いて話そうとしているのだが、ご覧の通りの会話が繰り広げられていて一向に話が進んでいない。

ちなみに、シユウが隙を見ては狐に手を伸ばすので仕方なく僕の膝の上に乗って動けないようにさせている（これはこれでシユウも気に入っているのか特に抵抗しないし）。

今のところこの狐について判っていることは、名前が雪花、自称神様だということだけだ。

まあ今こうしている間も目の前の狐はフワフワと翼があるわけでもないのに浮かんでいるし、内包している魔力の量も生半可なものではないところを見る限り、神という単語も本来の神様という意味ではなくこの狐の一族の中では神様の存在だったということを表すという意味なら頷ける。

「で、きつ ああ、もういいや。じゃあ雪花」

「気安く呼び捨てにするでない！ 雪花さま、じゃ！」

「……殺そうかな、この狐」

「だ、だめだよ詩織」

ウエンディに腕を掴まれてなんとか思い止まる。

なんでこんなババア喋りする狐（見た目は子狐、声は幼女の癖に）に上から目線で物事を言われなきゃいけないんだ。

そんな僕の怒りがわかってかウエンディも苦笑いをしている。

「で、雪花」

「じゃから雪花さ」

「おーい、シユウ。この狐好きにしていぞ」

「ん……」

「ぎゃあああああ！ ま、待て！ 待つのがじゃ！ 判ったから！ 呼び捨てでいいから！」

残念そうに座り直すシユウの耳元で後で好きにしていいいからと呟いておき雪花に向き直る。

シユウに掴まえられて弄られるのがよほど嫌なのか今まで偉そうに浮かんでいたのにちゃんと机の上にも机の上、というのもなんだが お座りの姿勢をしている。

黙っていれば可愛い狐なので、座っている姿に惹かれてシユウが暴れだすが、雪花がいじけると面倒なのでホールド。

不満そうなシユウをひとまず無視して雪花に話しかける。

「で、雪花。お前はなんであんなところにいたんだ？」

「あんなところ？ ああ、あの本がたくさんあった場所のことか。

……うーむ、判らん」

「わからないことないだろう。お前はなにか呪いに関する力で石として封じられてたみたいだし」

「封じられたのは覚えておるわ。儂自身が頼んだのだからな」

「誰に？」

「なんと言ったかな、何せ四百年前じゃ記憶がうやむやでどう」

「お前今いくつだよ……」

「寝ていた（封じられていた）時間も合わせるなら……ざっと七百年と言ったところじゃ」

おいおい、神様の存在だったとか思ってたけどマジで神様じゃないのかこの狐は。

七百年といえばマスターより長生きじゃないか。

いや、七百年といってもその内の四百年は封じられていたわけだから……ってどちらにしる気が遠くなるような年月には違いないな。

「雪花ちゃんって長生きなんだね」

「ウエンディ、こんな訳のわからない狐の言うこと信じちゃダメよ」

「なんぞ猫。儂の言うことが信じられないのか？」

「信じられるわけないじゃない。自分の事を神様とかいう自意識過剰な奴のことなんて」

「ほほう、自意識過剰か。ならば僕の力を見せてやろう。皆、表へ出るのじゃ」

そうゆうと雪花は壁をすり抜けて外へ出て行ってしまった。

しかたないと全員で外へ出ると雪花は広場の真ん中でやはりフワフワとうかんでいた。

「よし。この中で一番弱いのは誰じゃ」

「主語をつけるよ。どんな区切りの中での強弱だ？」

「決まっている、戦いのじゃー！」

「じゃあウエンディだな」

「そうだけど、即答されると傷つくよ？」

「ふむ。ウエンディか。よし、こっちに来るのじゃ」

雪花が地面に降り立ちながら前足を器用に使ってウエンディを呼ぶ。

ウエンディが僕を見上げ、いい？ と口だけで伝えてきたので小さく頷く。

雪花が何を始めるのかはわからないが、雰囲気的には危ないことではないようだし、もしウエンディに危害を加えようものならその場で切り捨てるだけだ。

僕がすぐに頷いたことに安心したのかウエンディは躊躇わずに雪花へと歩いていく。

「む？ ドラゴンの魔力を感じる。お前、滅竜魔導師か」

「あ、うん。天竜グランディーネっていうドラゴンから教えてもらったんだ」

「なるほど、滅竜魔導師がお前たちの中では最弱か。面白い。ウエ

ンディ、儂を持つんじゃない」

「え？ えつと……こう？」

ウエンディが無造作に雪花へと手を伸ばし、その指先が触れた瞬間広場が真っ白な何かに包まれた。

雪花が現れたときのように白い何かが発したのだ。

僕たちまで届いた白い何かに触れてみると、白いそれは氷のように冷たく、それでいて触れた端から消えていく。

「これは、雪か？」

「そうじゃー！」

真っ白な雪に埋め尽くされて見えないが、雪花が僕の言葉に答える。

雪の煙が晴れてその向こうにいたのはウエンディだけだった。

「……なんだ、それ？」

「わ、私にもわからないよ」

しかし見た目がおかしい。

今のウエンディは瞳が雪のような白に染まり、腰までだったはずの髪は地面ギリギリまで伸びていて深青色のなに所々が白混ざっている。

そしてなにより、戦闘が苦手なウエンディには不釣り合いな純白の刀だ。雪を固めて作ったようなその刀は美しい見た目とは裏腹に異常な程の魔力が見える。

「見たか！ これが儂の本当の姿、雪刃【花一門目】（せつじん・はないちもんめ）じゃー！」

その刀の刃から幽霊のように半透明な雪花が現れどつたとばかりに声を張り上げる。

たしかにその雪刃【花一門目】とやらがいい刀であることはいくつもの妖刀を所持している僕でなくともわかるだろう。

妖刀の力としては雪や冷気を産み出し操る物のようだ。

……て、あれ？

「お前今これが僕の本当の姿とか言わなかった？」

「言ったぞ」

「お前刀なの？」

「む？ 言っただけでなかったか。僕は七百年前に刀として作られ、二百年の歳月を極寒の中に生きる一族に守り神として崇められ続け、その人々の祈りによって？ 意思？ というものを持ったのじゃ」

「えーと……」

つまりあれか、長すぎる年月を過ごした物が意思を持つっていうあれか。

キューブ的なあれか！

でも今守り神としてっていったよな……。つまり、

「お前、ある意味で本物の神だったんだな」

「やっとならなかったか？ これじゃから頭の固い人間は困るのう」

「ちよつとクライス！ こんな奴の言うことを真に受けるの！？」

「いいじゃん。今の話が嘘でも本当でも悪いやつじゃないみたいだし」

疑り深いシャルルをなだめていると半透明な雪花がユラユラと僕に近づいてきた。

「クライスと言うのか、お前は」

「ああ、そういえばまだ自己紹介してなかったな。僕は式崎・K・詩織だ。ちなみに詩織って呼んでいいのはウエンディとシャルルとシユウだけな」

「親しき者のためだけの名と言うことか……では僕はクライスと呼べばいいのじゃな」

「そうしてくれ、というかいつまでウエンディの体に憑いてるつもりなんだ？」

「む？ ああ、すまない」

半透明な雪花が刀に戻ると同時にウエンディの姿がもとに戻り雪花も狐の姿に戻った。

どうやら雪花の力は使用者の能力を爆発的に高めるものらしいが、今はそんなことができるということだけを見せたらしい。

もとに戻った雪花が地面に降り立とうとして、その瞬間を狙っているシユウに気がついたのか焦ったように安全地帯はないかと辺りを見回し、すぐにふわふわと僕の頭の上にその長い尻尾を自らに巻き付けるようにして丸まった。

たしかにシユウの身長では僕の頭の上には届かないが……安心している雪花に僕の着物をよじ登りシユウが迫っていることは伝えな
いでおこう。

「やはり心が清らかな者に憑くのは気分がいい。僕が最後に憑いた人間の心は悲しみで埋め尽くされていたからな」

「最後つていうのは四百年前に封じられた時か？」

「うむ、あれは酷かった。一族同士の殺し合いの最中じゃった」

「一族同士の殺し合い？」

唐突なその発言におもわずあと少しで雪花に手が届きそうだったシユウを押し戻す。

四百年前、一族同士の殺し合い……年代も、内容も、マスターの

話に一致する言葉が多すぎるのだ。

そういえば、範囲内の人間全員の善悪を反転させるはずのニルヴァーナ……なぜマスターだけがその影響を受けず、なおかつ一族全員の殺し合いの最中に一人だけ生き残ることができたんだ？

僕の知っているマスターは膨大な魔力を持っていた。だがそれは四百年という歳月がマスターにもたらしたものだし、そもそも魔力の強さでニルヴァーナが防げるといっているのであれば六魔将軍のリチャードは善人になどならなかつたはず。

なら、その時マスターを救った何かがあつたはずだ。

「なあ、お前を封印したやつとお前を最後に使ったやつって……もしかして、同一人物か？」

「うむ。そうじゃが、よくわかつたな？」

「まあな。それで、その人間の名前思い出せるか？」

「むう……さつきも言ったが記憶が曖昧なのじゃ。覚えとらん」

「……ローバウル、って名前だろ」

「！」

その名を口にした瞬間、雪花が頭の上から跳ね上がった。やっぱり、そうなのか……。

いきなりマスターの名を出したからか、ウエンディが驚いたように僕の着物を引っ張ってきた。

「え、え？ ど、どうゆうこと？」

「落ちてウエンディ、雪花が詳しく話してくれるさ。な、雪花」

「ああ……思い出した、そうだ、思い出したぞ！」

僕の言葉も聞こえないように跳ね上がったまま空中で固まっていた雪花が嬉々としながら飛び回っていた。

「そうじゃそうじゃ！ 四百年前、それまで儂を祀っていた一族が死に絶え、一人取り残されて孤独に世界をさ迷っていた儂をローバウルという名の青年が助けてくれたのじゃ」

青年、その言葉に違和感を覚えたがマスターとて生まれたときから老人であつた訳じゃないのだから雪花が出会つたのはまだマスターが人間として生きていたときのことなのだろう。

「あいつはこんな儂を気味悪く蔑むでもなく、孤独だつた儂に温かな仲間の一員にしてくれたのじゃ。儂が自分は長い年月の中で生まれた憑神という存在であることを明かしても、それは変わらなかつた。そんな心優しい青年じゃつたからな……儂が惹かれていくのもそう遅くなかつた」

「……はい？ ……話に割り込むようで悪いけど、惹かれていく？ つまり恋仲だつたと？」

「似たようなものじゃ。人と神という立場の違う身、形だけのものではあつたがな」

マジかよ、初めて聞いたぞそんな話。

自分の正体が幽霊みたいに何百年も生きているものであつた以上、マスターが過去について詳しく話してくれたことはなかつたし、別に聞いたこともなかつたが……まさかマスターの愛しの人が狐だつたとは思わなかつた。てか、狐どころか刀だろ？ 意思を持つているとはいえ。

マスターも生きていた頃は意外にチャレンジャーな人だつたらしい。

「ローバウルの住んでいたのは自らに作り上げたニルヴァーナという建造物の上でな、心優しいものばかりで恋仲だつた儂らに嫌みを言うような輩はいなかつた……まあ儂の見た目は刀か狐しかなかつ

「だから奇異な生き物を連れてるようにしか見えなんだかもしれんが」

「奇異な見た目であることは自覚していたのか……」。

「じゃが、ある日を境にそこは地獄と化したのじゃ。いきなり皆が同士討ちを始め、女子供、老人までもが殺し合い、あつという間に緑溢れていたニルヴァーナは赤く染まり、花の香りは人間の血の生々しい臭いで打ち消された」

マスターの話にもあった、ニルヴァーナが人の悪意を吸いすぎ、溢れ出たそれがニルビット族に振りかかった日。

その地獄はニルヴァーナで生活していた雪花も目にしたのだろう。

「何が起こったのか、その時の儂には判らなかったが……魔力が関係していることはわかったから儂の力でローバウルだけは守った。できることなら皆も助けたかったのじゃが、儂は刀、儂の力が及ぶのは一人にだけなのじゃ」

刀一本に対して、その刀を使うことができるのは一人だ。一本の刀を何人もが使うことはできない。

雪花はそう言いたいのだろう。

「守り神とはいえ、？刀？の憑神なのだ、刀としての使われ方しかできないということらしい。」

「マスターが一人だけ生き残れたは……雪花ちゃんのお陰だったんだね」

「うむ、一人だけ、否、儂も合わせるのだとすればたった二人で生き残るのも考えてみれば辛かったのじゃがな。む？ ウェンデ

イ、お前ローバウルを知っているのか？」

「え？ う、うん。『化猫の宿』、私たちのギルドマスター」
「なんと、ローバウルはギルドマスターになっていたか……」

ああ、そういえばその話をしてなかったな　ウエンディと雪花
の言葉に今さらのように気づいた。

今まで中身のない会話ばかりだったところいきなり雪花が驚愕
の事実を話し出すものだからすっかり忘れていた。

マスターの今を知りたいからか、雪花がウエンディの方へふわ
わと長い尻尾を振りながら近づく。

「して、ローバウルは今どこにいるのじゃ？」

「あ、えと……それは……」

狐の顔で器用に無邪気な笑顔をつくり聞いてくる雪花。

そんな期待のこもった瞳のせいか、ウエンディは答えることが
できないようで意味のない言葉をはくだけだった。

優しいウエンディのことだ、雪花がマスターの大切な存在である
ことを知った今、本当のことを伝えるのは難しいのだろう。

なら、僕が言おう。

「もういないよ」

「いない……じゃと？」

「詩織！」

「事実なんだから仕方ないさ。ニルヴァーナを壊せるものが現れる
までの四百年見守り続けて、昨日逝った」

「……そうか、逝ってしまったか」

それはの聲は今までと変わらない、幼い少女を思わせる声音だっ
たにも関わらず、どこか感慨深いものだった。

「ニルヴァーナを壊したのは、お前達なのか？」

「ああ。とはいってもここにいる以外の仲間の力も借りてだけど、ニルヴァーナは壊した」

「……………」

「雪花ちゃん……………」

ウエンディの言葉も聞こえないらしく、逝ってしまったかつての想い人を探すように空を見上げる雪花。

「儂が目覚めたのだ、それわ判っておったのだが、改めて考えてみると辛いものがあるのう。まあ、あいつも儂の呪いから解放され、長い生から解放され、やっと眠ることができたのだな」
「雪花の、呪い？」

口を挟むべきではなかっただろうが、感傷の台詞の中に含まれる数々の気になるワードについて口を開いてしまった。

空を向いていたエメラルドのような緑色の瞳が僕へと向き直る。視線があつたまましばらく無言が続いたが、長い尻尾がユラリと揺れたかと思つと雪花は口を開いた。

「ニルヴァーナを壊し、あいつを救ってくれたお前達になら、話してもいいじゃろう。クライスよ、人間の寿命は何年じゃ？」

「？ 平均的に見れば八十、長くても百いくつってところだと思うけど」

「そうじゃ。ならば、ローバウルは何年生きた。四百年じゃぞ？ 人間がいくら魔力を使ったところでそんなことが可能だと思うか？」
「いや……………」

一回死んで転生した僕が言つのもなんだが、まず人間には不可能だろう。

僕のような再生能力を持ったところで、人体の老化を止めることはできないはずだ。

この世界の魔法がどの程度発展しているのかは知らないが、ウエインディヤシャルルが否定しないのを見る限りまず可能なことではないのだろう。

「ではなぜ、あいつがそんなにも長い時間を生きられたと思う？」

「……それが、呪いのせいだとも？」

「【ニルヴァーナが有る限り、生き続ける】それが僕のかけた呪い。等価等呪、双方に等価の制約を成すことで双方を呪う僕の力じゃ。

生き続けるという命の呪いをあいつにかけたから、僕への呪いは【ローバウルが生きている限り石となり封じられる】じゃ」

「……それじゃあ、二人が二度と会えない呪いじゃないか」

「呪いじゃからな。呪いが良いものをもたらすわけがあるまい。ローバウルには長すぎる生が、僕には長すぎる闇が、そして二人には永久の別れ、それだけが残った」

なんでそんなことを そんな台詞は吐き出す前に愚問だと判

た。

マスターが言っていた、ニルヴァーナを作り出してしまった罪。

マスターはそれを償いたいと願い、雪花がそれを叶えた。

その決断に行き着くまでのことは、僕たちが踏み込んでいいものではないのだ。

「僕が目覚めたのが、あいつが逝ってしまった次の日とは……なんとも、やはり、呪いは呪いじゃな」

「寂しいのか？」

「お前にローバウルの名を聞かされるまでさっぱり忘れておったのじゃ、うむ、と素直に頷けぬのが……そうじゃな、少し、寂しいか

もしれぬ」

雪花は今は狐だ、動物の顔は人間の顔とは違い表情を作るようにできていない。それでも、雪花が寂しさを含んだ表情をしているのが判ったのは、同情からくるただの思い込みだろうか？ 声音からそんな気がしたただけだろうか？ たぶん、同じ悲しみを昨日見たばかりだったから判ったのだろう。

隣のウエンディに視線を落とす。

長さは違えど、ウエンディも雪花と同じローバウルという人間に救われ、短くても共に時間を過ごしたのだ。

そしてそれを失った。

僕だつてそうだ。初めてこのギルドを訪れたあの日、マスターにギルドに誘われたからこそ僕はここにいる。

悲しみに大小はないだろう、ローバウルという人を失ったのは、ここにいる全員に共通することなのだ。

四百年、そんな長い時間をマスターに捧げた雪花。起きたときには誰もいないとわかっていても、マスターのために自分を呪った雪花の気持ちはどんなもだったのだろう。雪花を残して逝くしかなかったマスターの気持ちはどんなものだったのだろう。

雪花は僕がマスターの名前を言うまで記憶がうやむやで封じられた、否、自分自身で呪ったことも、マスターのことすら覚えていなかったと言った。それは、もしかしたら無意識のうちに思い出さなくないと思っていたのかもしれない。

現に、思い出した瞬間は嬉しそうだった雪花は思い出せば思い出すほど、その声音は辛いものになっていた。

シユウと似たようなものだろう。

どちらの方が辛いとも言えないが、思い出さなくないことというのは同じだったはず。

今にも泣き出しそうな雪花に、僕は何を言うべきだろう。

別になにも言わなくてもいいだろう。なにせさつき会ったばかり、

昔のマスターの恋人のような存在であるようだし、会話こそしているが、まだ友人とすら言えないほどに親しくない。関係ないとは言わないが、まだ他人と言っていないほどしか時間を共にしていない彼女ののために気の聞いた言葉をかけてやる必要がどこにある？

ないだろう？ だから、僕は、

「寂しいなら、僕たちといれば？」

ぶっきらぼうに、思い付いた言葉を言うだけだ。

「し、詩織？」

「クライス、あんたいきなりなに言ってるのよ!？」

「……？」

「だってさ、マスターの知り合い、というか恋人？ ならさ、僕たちと全く無関係って訳じゃないし。それにこんな話を聞いてちゃったわけだし……ウエンディもシャルルもシュウもそう思わない？」

思い付きでの提案なので、理由があるのかと聞かれれば特にない
としか答えられないが、悪い提案ではないはずだ。

親しくないとはいえ、知り合ってその事情も聞いてしまった。天涯孤独の身である雪花に対しての発案としては、雪花の気持ちも考えずに提案したとはいえ間違ったものだとは思ってない。

……と、思うのだが、ウエンディ達の無言が長いのはなんで？

唯一シャルルからは呆れたような（何故？）雰囲気を感じるが、ウエンディとシュウはなんだろう、なんともいえない表情をしている。

さすがに不安になり、聞いてみようとした瞬間、ウエンディが小さく吹き出した。

「なんで笑う？」

「あ、ごめん！ ……でも、詩織はやっぱり優しいんだな、って思ったらつい」

「そうね、呆れるしかないほどに」

「……優しい？」

ウエンディとシャルルの言葉に首をかしげる。

どうゆう意味だ？

優しいという言葉の意味がわからないわけではないが、僕はただ雪花に同情しただけだ。もしくは、マスターへの恩返しにもなるかもしれないと思っただけなのだが、それがなぜ優しさか？

……まあ、反対ではないみたいだな。うん。とりあえず後回しにしよう。

どう受けとるのは、このかわいそうな狐次第だ。

僕の提案を聞いてから、静かに空中に浮いたまま身動き一つせず
にいた雪花の小さなエメラルド色の瞳を見据える。

「さて、ウエンディ達も嫌だというわけではないみたいだし、雪花、
どうする？」

「……さすが、あいつの仲間じゃな。言うことが、おんなじじゃ…

…」

「うん？ なにか言ったか？」

寂しげな、それでいて嬉しそうな雪花の呟きが聞こえたような気がして聞き返す。

独り言のつもりだったのか、雪花は聞き返した僕を見てビククリ
したように毛を逆立てた。

そして、間に合うとも思っているのか、なんでもないふうを装
い長い尻尾を優雅になびかせ、

「べ、別になんでもないわ！ 行く宛もないからのう、お前がそう

言うのであれば仕方がない、居てやってもよいぞ！」
「……………」

ほう、素直じゃねえな…………。

「よし、今こそ解放つ、シュウ！ あの狐をめちやくちやにして
こい！」

「ん……………」

「え？ ちよ、まつ きゃあああああああああああああ
—————っ！……………」

「…………えっと、シャルル？ 詩織は、優しい、よね？」

「さあ、どうかしら」

「え、あれ？ どこいくの？ ま、待ってよシャルル！」

「あ、おい！ ウェンディ、シャルル！ 僕を置いてくくなよ！？」

青い空を照らしていた日が赤く染まりながら傾く頃、だれもいなくなつた『化猫の宿』に、黒い髪と蒼い瞳をもつた少女から必死に逃げる狐の悲鳴と、白い猫を追いかける少女の声と、その少女を追いかける青年の叫び声だけが、騒がしく響いていた。

紅（前書き）

今回は一作丸ごと意味のわからない内容が続きます。

後々かなり関係してくるので、なにとぞお許しを。

では、どうぞ

紅

ガラスのように透き通った床石が、丑三つ時を連想させる漆黒の夜空の中に浮いている。

ひとたびそこに立てば、自分は宇宙の中にいるのではないかと錯覚してしまいような、不思議で、幻想的な空間。

出口も入り口もない、縦横わずか二十メートルほどのそこには幾人かの人影があつた。

無邪気な幼い子供のような者もいれば、経験を積んだ軍人のように鋭い瞳をした者もいる。

多様な人種が揃つてはいたが、人数だけでいえば両手の指で数えられるほどの人数しかその場にはいなかった。

ある者は床石から足を投げ出しながら夜空を見上げ、ある者は不用心に眠り、ある者は分厚い本を読み、個人個人が自由にこのなにもない空間での退屈をしのいでいた。

「あゝ、まだこねえのか？」

「うるさい。お主の声は耳に障る、少し黙っている」

「ああ？ テメエ何様のつもりだ？」

静寂を裂くように、その空間に声が響く。

気だるそうに不満を洩らしているのは、色の抜け落ちた白髪を短く切り揃えた男だった。白煙が立ち上るタバコを吹かし、両の腰に刀と剣を二本ずつさし、白いロングコートを腕を通さずに羽織っている。褐色の肌に刻まれた古傷が数多の戦場を生き抜いてきたような雰囲気があつた。歳は四十を越えているようで、皺の刻まれた顔も手伝い、その貫禄は凄まじい。

そんな男を前にしていながら眉一つ動かさずに毒舌をはいているのは着物姿の女だった。否、まだ少女といふべきか、十四、五歳ほどのまだ幼さの残る顔つきをしている。

青い髪に紅い目、磁器のようになめらかで白い肌には生気がない。白、黒、緑、赤、紫、青、鮮やかな東洋の十二単じふにひとえを着込んでいながらその見た目は頼りないほどに小さかった。

だが、自身の顔ほどもある古書の奥から男を睨み付ける様はなんととも言えぬ威圧感に満ち溢れている。

十二単のみを纏っているのか、宙へと放り出されたなにもつけていない白く細い足を優雅に組み替えながら少女は本に視線を戻す。

「一時間や二時間の遅れ程度、なにを気に病む必要がある？ 妾のように本でも読んで静かにしておれ」

「うるせえぞチビ、俺はテメエと違ってそんなチマチマしたことしねえんだよ」

「お主の腰にあるものは飾りか？ その無駄に吊り下げた刃物でも振り回していればよからう」

「ケツ、ここでんなことできるかよ」

「そうか。ならばとりあえず失せる。その異臭を発するキセルをこちらに向けるな」

「キセルじゃねえよ、タバコだ」

「どちらでもかわらん。つまり、臭いから近づくな、というわけだ」

「……殺すぞ？」

「面白い、妾とて忙しいわけではない。相手になろう」

言い争いの末、なにやら物騒な結論に至ってしまった男と少女がゆっくりと向かい合う。

端から見れば実力云々の前にその体格差だけでも少女が殺られてしまうように見えたが、油断なく構える男を見る限り見た目と実力は果てしなく反比例しているらしい。少女も少女で戦闘用なのか先

程まで読んでいた本とは比べ物にならないくらい巨大な本を宙に浮かしながら男の動きを見逃しまいと本の影から鋭い視線を投げつける。

これから殺し合いを始めようという雰囲気、広く狭いその空間にピリピリと張り詰められていく。

そんな物騒な光景、誰かが止めてもいいようなものだがその場にいる誰もが我関せずを通して。止めようか迷っているものもいるようだが、その他のメンバーは見慣れたとばかりに振り向きもしない。

邪魔の入らないその状況は二人をさらに死闘へと誘う。

男が、剣に腕をかけ、次の瞬間には鐸鳴りが遅れて聞こえるほどの勢いで抜刀して無造作に空を切り裂きながら右下に降ろす。

少女が、巨大な本の奇妙な文字を聞き取れないような勢いで読み上げながらいくつもの魔方陣を空中に書き上げていく。

たったそれだけで空間が揺らぎ、今にも消滅しようと思鳴をあげる。

キヤー、と小さな悲鳴が誰かから上がったが二人は気にするどころか今にも爆発せんとその瞳に鋭い殺気を込めている。

男がタバコを吐き捨て、少女が魔方陣書き上げ、同時にニヤリと笑い、同時に飛び出した。

そして、この空間を破壊しかねない二つが重なりあう瞬間、

「やめて」

その二つの間に何かが入り込み、一瞬で消し飛ばしてしまった。

邪魔された、とばかりに悪態をつく二人を遠くから見つめているのは幼い少女だった。

紅すぎる少女。血のように紅いワンピースと同じく紅いケープ、肩の辺りまで伸びた銀の髪は絹のように透き通っている。歳不相応に落ち着いた雰囲気は少女がただの人間ではないと物語っていた。

少女は、二人の攻撃を止めるために掲げていたと思われるてを下ろしながら裸足の足を地に付けることなく、まるで霊か何かのように空中を滑りながら男と少女に近づく。

「あなたがこんな場所で力を解放したらここが壊れちゃう。だからやめて」

「チツ、判りましたよ」

「もともと妾は乗り気ではなかったのにこいつが勝手に突っかかってきたのだ、こいつが謝るなら妾は気にせんぞ」

「おいコラチビガキ、マジで殺すぞ？」

「おやおや、我らがマスターをチビガキ？ 恐れ多い男だ」

「ちげえよ！ テメエだよ！」

「わかってるから落ち着いて」

「たく、胸くそ悪い」

悪態をつきながら男が新しいタバコに火を付けながらどこかへと去っていった。

少女も戦闘用ではない古書を取り出しながら床石のそとへと白い足を放り出す。

二人は先程まで争っていたとは思えないほどあっさりと引き下がっていた。マスターと呼ばれた紅い少女には、一つの空間を破壊するほどの力をもつ二人ですら叶わないらしい。

紅い少女が古書に目を落としている少女の横にフワリと下り立ち腰を下ろした。短い足を宙でブラブラと揺らしている様は、先程のことがなければ紅い少女を愛らしいととらえられただろう。

そのまま無言が続くかと思われたが、意外にも紅い少女が感情を感じさせない淡々とした声を発した。

「彼はまだもどってこないの？」

「ふうむ、まだみたいじゃ。だが、妾の書を一冊貸したのだ、死ん

ではいいい」

「そう。……あ、噂をすればなんとやら、みたい」

紅い少女がなにもない空間にすつとその指を踊らせると、なにもないはずの闇の中に一筋の紅い線が刻まれた。筋は音もなく広がっていき、ついにはぽっかりと人が通れるほどの紅い大穴が開いてしまふ。

そしてそこから一人の青年が現れた。

「ありがとうございます、マスター」

「うん、いいよ。怪我とかしてない？」

淡いブロンドの髪を背中まで伸ばした青年が頭を下げ、紅い少女はそれに優しく微笑んだ。

青年が少女たちの横に降り立ち、なんでもないとアピールするように両手をあげる。

「はい、特に怪我などはありません。ただ、私の剣士としてのプライドが傷つきましたね」

「やっぱり、今の？あの人？にすらリベルは勝てなかった？」

「……はい。？狼？を引つ張り出すことすらできませんでした」

「はっはっは、それで妾の『兵団の書』に頼ってなんとか逃げ延びたわけか」

「いえ、これは十分に全滅しました」

「……………」

肩をすくめながらリベルと呼ばれた青年がボロボロの古書を差し出す。

少女は無惨な古書を複雑な表情で見つめ、小さく唸りながら十二単の袖の中に放り込んだ。

「ふん、せっかく妾の書を貸してまで六魔將軍あんなやっしの傘下のふりまでしたのだ、？王？について何かしらの情報はつかんできたのであるかな？」

「私もそれが気になる、？あの人？は今どうだった？」

「どう、と言いますか……一番大きな違いは強さですかね。？あの方？自身の要望でサン一対一の勝負をすることができましたけど、かなり弱かったです。私負けましたけど」

「弱かった……やっぱり封印されてるまま、か。やっと戻ってきたと思ったのに、これじゃ私を見てもわからないかな。それどころか、見つめあっても」

「だと思えます。？狼？と？五封刀？の二重封印、さらには神の力まで加わっているみたいでした」

「神の？」

「はい。？あの方？は一度外界に飛ばされ、そして死んで戻ってきています。その際に天界あっちで何かされたのかもしれませんが。記憶もないみたいでしたし、力もまったく使ってませんでした」

「そっか、うーん……」

面倒だなー、と紅い少女は淡々とした声で言いながらすつと掌を広げる。

すると、現れたのは自分の着ている服と同じくらい紅い彼岸花。

そこら辺に生えている普通の彼岸花とは違うようで、淡い光に包まれたそれは鮮やかに紅く光っている。どうやら少女が生み出した特殊なものらしい。

「……会いに、行こっかな」

『はあ！？』

小さな手でその彼岸花を愛しげに弄びながら紅い少女が呟き、そ

れにリベルと少女が同時に間抜けな声をあげた。

そんな二人を無視するように紅い少女は彼岸花にそつと息を吹き掛け、まるでロウソクの炎を吹き消すがごとく、その不思議な彼岸花を消しながら音もなく立ち上がりフワリと宙に浮かぶ。

「ちょ、ちよつとマスター！ 今の？あの方？は下手に刺激しないように見守るのが最善じゃないんですか！？ あなたが直接会いに行くなら私がわざわざ面倒なこととしてきたいみはなんだったんですか！？」

「うーん……無駄」

「ばつさり言われた！？」

愕然としながらもリベルが紅い少女を引き留めようと手を伸ばすが、すでに床石を飛び出し闇へと進んでいるので届かない。リベルの横で古書を広げている少女なら届くかもしれないが、さきほど奇声を上げたせいが無理に平成を装おうとして無理矢理読書に集中しているらしく紅い少女に見向きもしない。

紅い少女は、床石ギリギリに立ちながら自分を見ているリベルに小さく手を振りながら、

「大丈夫、会うだけだから」

少しだけ楽しそうに呟いて、自ら開けた紅い光の中へと入っていた。

リベルは消えてしまった紅い少女がいた所をしばらく硬直したように見つめ、呆れたようにため息をついたのだった。

太陽が真上からちよつと西に傾くような時間帯、簡単に言えば昼過ぎ。僕は目の前にそびえ立った巨大な墓石の前に、達成感というよりは脱力感の方を強く感じながらそれを見上げていた。

墓石と言ってもギルド近くの森の中に小さな洞窟があり、その中から比較的きれいで頑丈な岩を選んで削り取り、それを長方形に加工（身刀で斬った）してそこにみんなの名前を刻んだだけの粗末なものだ。別に豪華なものにしようと考えていたわけでもなかったが、これはこれで地味すぎる気もしてくるから悩みどころだ。とはいえ派手な墓ってなんだよ、というはなしだが。

昨日、雪花という新たな仲間が加わったわけだが、だからと言ってやることが変わったわけではない。

僕が墓石を作り、ウエンディ達は墓に供える花などを採りに行っているので僕は今一人だ。

目の前の半日で完成させた墓を一人で見つめていると、少なくとも五日くらいはかかるだろうと実践していたにも関わらず、実際にやってみたら二日とたたずにやることなくなっているというのが虚しいやら悲しいやら、そんなふうに考えてしまう。

ウエンディやシャルルには時間はあるんだしギリギリまでここにいようか、とも言ってはみたが、曰く、やることもなくいつまでもいたらここを離れてフェアリーテイルに行くという決意が鈍ってしまいかもしれないからやるのがなくなればすぐにでも出発する、らしい。

七日という期限は僕が決めたものだったが、それは七日全部を整理に当てるという意味ではなくいきなりではなく少しだけ今まで通りの生活をして、ちゃんと心の整理をしてからという意味も込めていたのだが、どうやらウエンディもシャルルも心の整理などづくについていたらしかった。

虚勢を張っているわけでもなさそうだし、それならそれで今日の日暮れにはすべて終わることができそうなので、本当にすぐにであればもう今日にはここを出発することができるところだ。まあ、その場合は暗い夜の森を走り抜けなきゃならなくなるが……。

なんで電車を使わないかって？ お金がないというごく平凡な理由だ。今思うと、マスターは人格を持つ幻覚を作り出せるほどの魔力の持ち主、いつぞや僕が貰ったあのお金も幻だったのではないか、そんなふうにおもえる。証拠に、このギルドのどこを探しても紙幣一枚コイン一つ見当たらない。

ああ、僕とウェンディは知らないとはいえ犯罪を犯していたんだな……。

指名手配とかされてないといいけど。いや、あるときマスターは疚しい金じゃないって言ってたし、あれだけは本物だったんだろう。うん。そう信じないと別の意味でマグノリアに行けなくなる。

「あ、お墓もう出来てたんだ？」

「ああ……って、いきなりあらわれたな」

いつのまにか妙な方向へずれていた思考から僕を引き上げたのは背中にシャルルを付けたウェンディだった。横に雪花を頭にのせたシユウも蒼い翼を折り畳むようにして消しながら着地していた。

それぞれの手には色鮮やかな花の数々、ただお墓のみを広場の真ん中に置いておくだけでは素っ気ないというわけで四人（二人と二匹？）には森で花を採ってきてもらっていたのだ。

「さすがクライス、仕事が早いわね。あんなに大きな岩を一時間で加工しちゃうなんて」

「ん……すごい」

「そうじゃな、一人でやると言ったときは信じられなかったが、これはなかなかの物じゃ」

「この程度のことだなに言ってるんだ、大したことないよ」

黒い岩を四角く加工してギルドメンバーの名前を全員ぶん彫り込んだだけでここまでの称賛をしてももらえるとは思っていなかったのです。さすがに恐縮してしまふ。

「とりあえず称賛してくれるのは嬉しいけど、このままだとさすがに寂しいし、花を供えてあげてよ」

「うん。みんなも、きれいな方が喜ぶよね」

小さく頷きながらウエンディがそつと、自分の髪のように青い花を僕の作った墓石に添える。

シャルルもシユウも雪花も、赤や黄色、白などの花をそつと置いていく。

自分で作っておきながら地味だ地味だと思っていたそれも、色鮮やかな花に囲まれているだけでいくらかましになった。

そもそも墓が地味じゃなかったらおかしいじゃないか、見たことないよド派手なお墓なんて。

『……………』

みんなで黙祷する。

ここにあるのはなにも埋まっていない形だけの墓だけど、それでも無意味なことではないだろう。

これは印だ。

みんながここにいて、ここで生活していて、ここで僕たちを見守っていたということを忘れないための印。

「……………みんな、忘れないからね」

小さく、本当に小さくウエンデイの眩きが聞こえた。
心の眩きか、それは僕にしか聞こえていなかったようだ。
優しく僕たちを包んだ風のなかで、ここにいないはずの誰かが微笑んだような気がしたのは、気のせいじゃないはずだ。

.....

「.....」

ベットから上半身だけを起こし窓の外を見ると、暗い夜の闇をきれいな月が淡く照らしていた。

寝室には僕以外のみんなの寝息が響いている。

ガンツ、と何かがぶつかる音に振り向くと、ウエンデイと一緒に寝ているシュウがベットの仕切りに体当たりしていた。ベットから毎度のようにダイブするシュウを見かねて僕が作ったそれは、すでにボロボロで壊れてしまいそうだ。

でも、もうそれを直す必要もない。

午前中で荷物や農作物の整理も終え、暮も夕方には作り終えたがいくらすぐにとっても夜中にフェアリーテイルに行ってもさすがに誰もいないだろうということを出発は明日の朝になった。

だからこの家で夜を過ごすのは今日が最後だ。

だから、というわけでもないだろうがなかなか寝付けなかった。

「……はあ、散歩でもしてくるかな」

みんなを起こさないように無音でベットから抜け出し、寝るときは脱いでいる着物を羽織り、薄暗い廊下をぬけ外に出た。

外は、まだ暑さの残る季節とはいえ今は真夜中、わずかに肌寒さがあった。

誰もいない静かすぎる『化猫の宿』に僕の足音だけが響いている。この広い集落には今は僕を含めて五人（三人と二匹？）しかないのだ、家から離れてしまえばすでに不気味と言えるほどの静けさがここを満たしていた。

子供じゃあるまい、怖いとか寂しいとかいうわけではないが、こう、あまりにも暗く静かだと世界に一人だけ取り残されたような錯覚に陥る。

変かもしれないが、僕はこの感覚が好きだ。

孤独を好んでいるわけではないが、たまには完全な孤独を味わってみるのも一興というものだ。

集落をぬけ、広場をぬけ、僕はいつのまにか闇に包まれた森のなかにいた。『化猫の宿』には結界が張られていて夜の森からモンスターが迷い込んでくることはないのだが、僕はすでにその外にいる。

（まあ、この静寂を壊されるのも嫌だし、気配は消しとくか。）

自分の気配を消してまでなんで夜の森に繰り出すのか、自分のことなのによくわからなかった。

今までも夜の散歩をすることはあってもギルドから出ることはなかったのに。最後の夜だと自分で言っておきながらギルドの外にまで来ているのか、そんな疑問も浮かびはしたが特に気にせず無意識に歩を進める。

緑に包まれているはずの森は、今は黒だけが覆っていて表しがた

い不気味さを放っている。

昼間とは違う森の雰囲気を楽しみながら、僕は歩を進める。

そして、ゆっくりとした時間が流れ、そろそろ戻ろうかと考え始めた頃、

(……なんだ?)

視界の隅に『紅』が見えた気がした。

僕の着ている着物の彼岸花のように、あるいは人の血のように、どこまでも濃く、鮮やかな紅^{あか}。

そして、『紅』が微笑んだような気がして、僕はいつのまにか『紅』を追っていた。

軽い音をたてながら木の枝を蹴り、追う。

なんで追っているのか、僕にも判らなかつたけどとにかく必死に『紅』を追う。

それでも、風より速く駆けているはずなのに、『紅』に追い付けない。見えないのに見える『紅』は、跳べば跳ぶだけ、遠ざかっている気がする。

(なんなんだ……)

本当に、なんなんだ?

魔法を発動、風を纏いながら全力で翔る。

なんで、僕はこんなに必死なんだ?

目の前に視線を向けても、紅なんて見えない。だけど、『紅』は見える気がして、『紅』が手招きしているような気がして、『紅』が、

「誰だ……」

『紅』が、

「お前は、誰なんだ……？」

僕の、？大切な何か？気がして、わけもわからず走る。

走る。走る。走る。走る。走る。走る。走る。走る。

走る。

走る。走る。走る。走る。走る。走る。走る。走る。

走る。

そして、

「！」

取り乱し、必死に走り、苦勞の末たどり着いたのは、紅い場所だった。

森の中の、ほんの一部、木も草もないちょっとした広場のような場所。

そこが？紅？で埋め尽くされている。

月の光すら打ち消して淡く光る？紅？……その正体は彼岸花だった。

前の世界で調べたことがあるが、その名前の由来は彼岸に咲く花だから、もしくは自身の持つ強い毒性から彼岸（死）をもたらす花だからなどの説があり、死人花や捨子花などの不吉な異名を持つ花だ。

花言葉は『再会』『悲しい思い出』『想うはあなた一人』『また会う日を楽しみに』。

自然に生えたものにしては、不自然なほどに美しいそれは、同時に不気味だった。

なんで、こんなものがここにあるんだろうか。

彼岸花は僕の好きな花の一つだ。でも、だからと言って、十キロ

以上も離れた位置から（……………）見えたのは
おかしい。

魔力は感じないし、見えない。殺気や害意も感じない。それでも、直感がここから立ち去った方がいいと告げている気がした。

でも、同時に誰かが離れてはいけなと言っている気がした。

二つの思想がぶつかり合い、動けなくなる。思考だけが加速して
いて、何故か混乱する。

「あ……………」

「っ！？」

唐突に響いた声に、思わず足を引き、拳を固め臨戦態勢をとりながらギロリと声の方向を睨み付ける。

紅い、少女だった。

紅い彼岸花のなかに、彼岸花のように紅く儂い美しさを持った少女がポツリとたたずんでいる。絹のように透き通っていて、紅く輝く彼岸花の光を反射している銀の髪がサラサラと揺れ、その奥には年不相応に落ち着きを含んだ金色の瞳がこちらを見つめている。歳は、大体シユウ以上ウエンデイ未満の八から十歳といったところだろう。

どちらにしても、幼いことに違いない少女がこんな真夜中の森の奥地に何故いるのか。そんな疑問が浮かんだが、僕はそれを口にするともなく、理由もなく少女との間に生まれた沈黙を保っていた。臨戦態勢をとっていた体も、現れたのが少女だとわかった瞬間にいつの間にか解いていた。

時おり吹く風と、その風で揺れる草花や木々の音だけが完全な静寂を許さない中、僕は紅い少女をジッと見つめる。

可愛いからとか、そんな不純な理由ではない。

？どこかで？見たことがある気がするのだ。名前すら知らない、この少女を。

曖昧で確信もなにもない、強いて言えば心ではなく感覚がなんとなく記憶しているような、不確かなもので、わからないもの。いつまでもそうしていたら、果たして僕はこの少女のことを思い出したのだろうか。ふいに、紅い少女が年相応の無邪気な笑顔を浮かべた。

「星が、綺麗ね」

「……え？ あ、ああ。真っ暗な森の中だからね、星がよく見えるさ」

「うん。とっても綺麗」

初めて聞いた、厳密には二回目のその声はこの森の中の空気のように澄んでいた。

空を見上げる少女に吊られるように僕も空を見上げると、確かに星が綺麗だった。

ここに来るまで『紅』だけを目指してきたものだったから、もしくは差して気にもとめていなかったからまったく気づかなかった。この世界に星座があるのかは知らないが、だからといって星や月の美しさは衰えることはなく、チラチラと不確かに輝いている。

吸い込まれるようなその空をどれくらい見ていただろうか、視線を感じ少女を見下ろすと、今度はあの年不相応な瞳が僕を見ていた。

「あなたは、彼岸花……好き？」

「彼岸花……この花は君が育ててるのか？」

「うん。綺麗でしょ？」

「はは、僕は見ての通り彼岸花の柄付きの着物を着てるわけだし、私観的に言わせてもらえば……この彼岸花はともいいものだと思うよ。類い稀なる美しさ、なんてな」

「……そう、よかった」

あれ、少し寂しそうだ。なにかダメだったのだろうか？

彼岸花はやはり不吉な花と言うこともありあまり好かれないのだが、こんな若い少女で僕と同じく、しかも自分で育てるほどに彼岸花を好んでいるのは珍しいと言えば珍しいだろう。

僕の答えが意外だったのか？ もしくは友達からその事でいじめられていてそれを思い出したとか？

しかし、その表情はいつの間にか幻のように消えていて、少女はどこからかサンドイッチでも入れてありそうなバスケットを取り出していた。

いや、マジでどこから取り出した……その華奢な体の影に隠しておいたとでもいうのか？

「よかつたら、食べる？ サンドイッチだけど」

「なんでそんな物持つてるんだ？ ……って、こんな夜中に一人で出掛けてくるくらいだ、夜食くらい用意してあるのは当然か」

「そうゆうこと」

「でも、いいの？ 君のものなら……」

「量なら問題ないよ。いつも作りすぎちゃって下手すれば明日の三食は全部これなんだから。それに、せっかく隣にあなたがいるんだから、自分だけで食べるっていうのも寂しいでしょ？」

「なんだそりゃ、どんだけ少食だ……。てか比率的に考えて作りすぎだろ、僕が一輪車いっぱいのお食べ物抱えてるようなものだよ」

「あは、たくさん食べるんだね」

「男の子だからな」

「私は女の子だから」

「そっか」

「うん」

彼岸花の中に二人で腰を下ろし、星が輝く空を見上げながらサンドイッチを咀嚼する。

名前も知らない物同士、なんでこんなにくつろいでるんだと違和感が拭えないわけではなかったが、取り合えず気にしない。

サンドイッチの中身はレタスとトマトで、軽食としては中々いいチヨイスだ。

「おいしい？」

「ああ」

「よかった」

単調な会話が挟まれただけで、あとはただ星を見上げる。

サンドイッチを一つ食べ終えて次に手を伸ばすと、紅い少女はまだ四分の一程しか食べていなかった。

僕の視線に気づいたのか、少女がこちらを見上げ、少し怒ったような表情を浮かべながら小さな口を出きただけ大きく開けてサンドイッチにかぶりついた。どうやら僕が無言で「遅くね？」とでも言っているように感じたらしい。

「遅くない、あなたが早いだけ」

「僕はなにも言っていないんだけど。読心術でも使えるのか……」

「なんとなく判った」

「僕たち会ってから半時も経っていないんだが、いつのまになんとかで読心ができるようになったんだ？」

「……じゃ、ないから」

「ん？ なんか言った？」

僕の声が聞こえていないのか、少女はサンドイッチを一口。

まあいいか、僕も新しくサンドイッチを手にとり一気に半分ほど口に入れながら空を見上げた。

少女はそれを見て、また少しだけ大きく一口。

僕は残りすべてを口に放り込む。

少女が無理だとばかりにサンドイッチを啜えたまま頭を振るが、僕は素知らぬふりをして新たなサンドイッチに手を伸ばし、すぐに完食した。

その後、僕はしばらくサンドイッチを食べられなかった。

約一時間が経過し、サンドイッチもなくなりただ彼岸花に包まれながら座っているだけになっていた。

時間は、三時といったところだろうか？

僕の体は基本的には睡眠と言う行為を行わなくても一月くらいなら問題ない。だが、今日まではだいたいウエンディやシユウたちに合わせて零時までには眠る生活が続いていたので少し眠かった。

対し、紅い少女はまるで眠そうではない。

彼岸花の花びらをついたり空を見上げたりと、まったりとした仕草をしてはいるが、眠さを振り払おうとしているというより楽しんでるようだった。

さすが真夜中に一人で森に出てくるだけのことはある、夜更かしに慣れているらしい。

「ふぁ……眠いな」

「そう？ 私はそうでもないよ？」

「夜更かしは健康に悪いぞ。幼少時の不摂生は将来に響くぞ。女の子なら肌とか外見とか」

「大丈夫。ビジュアルには自信ある」

「……ませてるな」

「そうかな」

正直女性嫌い（子供の場合は別に性別が気にならないから平気だが）の僕にはビジュアルうんぬんはよく判らないが、シユウやウエンディなどある意味美少女である二人といつも一緒にいるのでこの

紅い少女が普通なのか美少女であるのかは、よくわからない。

淡く光る彼岸花の中の紅い少女……このシチュエーションだけみれば絵にしたいくらい綺麗ではあるが……やめよう。この落ち着いた雰囲気の中でそんな考えは無粋というものだ。

思考を変えてみよう。

ああ、そういえば僕はなんでこの子とこんな場所にいるんだっけ？

たしか……寝付けなくて、散歩して、いつの間にか森に出て、それから……あれ？ それからどうしたんだっけ？ なにかを見つけて……いや、なにかを見たような気がして、それを僕は知っているような気がして……あれ、知っているような気がしたのはこの？ 紅い少女？ に対してじゃなかったっけ？

眠いせいか思考が安定しない。

え〜と、僕は何かを追っつけてきて、この彼岸花畑にいたら紅い少女がいて、それで僕は紅い少女を知っているような気がして……ん？ なんだ、僕は初対面の少女に対しての口説き文句でも考えていたのか？ いやいや、僕はそんな変態ではないはずだ。

じゃあこの感覚は一体

「　　つと、なにか来たな」

「え？　どうしたの？」

「モンスター……いや、獣の気配だ」

思考を中断し、突如現れた気配に意識を向ける。

害意をもった獣の気配、僕はともかくこの少女が気配を消すなんていう芸当ができるわけがないから、それにつられてきたらしい。

「……仕方ない、倒してくる」

「危なくない？」

「平気だ、こう見えても僕はかなり強いんだから。ここから動くな

よ？　すぐに戻ってくるから」
「……………」

紅い少女の返事も待たずに地を蹴りながら音もなく跳躍した。
そのまま木から木へと跳び移りながら気配を探り、獣に近づいていく。

木の影から見えたのは狼だった。
四本のしなやかな足で地面を踏みしめ、姿勢を低くしながら少女のいる方向へと向かっている。

僕はそれを木の上から見下ろし、身刀を右手から生やしながら隙をうかがう。

皮膚を浅く斬るだけでいい、獣なのだからそれくらいで逃げているはずだ。これが知性をもったモンスターだったり、何十匹もいたりしていたら殺すくらいの勢いでやらなければやばかっただろうが、幸い狼は一匹、目を瞑っていたって撃退できる。

唸りもせず、僕に気づくこともなく狼はこちらに向かってくる。
これが終わったら帰るかな、あの女の子には悪いけど明日は走ってフェアリーテイルまで行かなきゃならないわけだし少し寝ておきたい。あ、でも心配だから家まで送ってあげた方がいいかな……。
って、そんなことより狼撃退しないと。

思い出したように視線をしたに方向けると狼はすでに僕の真下にいる。……丁度いい、このまま降りて最短距離で狙わしてもらおう。
枝の上で直立し、自然落下するようグルンと回転し狼に向かって落ちる。

振りかぶられた刃にはまだ気づいていない。よし、このまま

ギィィィィィィィィィィ……！

そのまま、狼の皮膚を切り裂くはずだった刃は金属が引つ掻き合ういやな音と共に弾かれた。

「ふん」

軽く鼻を鳴らす。

焦ったのは一瞬、僕はこの世界で起きるすべての？あり得ないこと？については魔法かもしくはそれに準ずる力が働いているのだと常に考えながら行動するようにしている。

だからこそ、僕の身刀が狼ごときに弾かれたからと言って動揺したりすることはない。なんてことない、ただこの狼が普通じゃなかったというだけだ。

灰色の堅毛の奥から鈍色の瞳がこちらを認識した。

だが、すでに僕は地に手を付き、体を捻りながら次の攻撃へと移行している。

「【式裂流】

螺扇脚らせんきやくつ」

扇のような軌跡を残しながら横回し蹴りが狼の横っ腹にクリーンヒットし、木に激突した。

斬れないなら叩くまで、斬れない時点で普通じゃないと判っているので殺すつもりで蹴ったのだが、狼は平然と宙で一回転してこちらを見据えてきた。

互いの距離は十メートルほど……斬れないわ叩いても平気だわの相手にどう戦う？ 異常な狼であることは十分に理解できたが、それをどう打破するかが問題だ。

狼が大口を開け、閉じる。

威嚇のつもりか？ そんなもんで人間を脅せるわけがないのに。身刀で斬れないならさらに切れ味の高い限刀を使うしかないだろう。そう考えて右手を左手に持っ*て*いこうとして、

「は？」

そこでやっと、右手が肩ごとなにかに喰い千切られたが如く挟りとられていることに気がついた。

噛み千切られた？ 誰に？ いつ？ どうやって？

そんなこと、火を見るより明らかだ。

「……起きろ、ウエル・カミナ壱匹狼！！」

背後の光景が変わるほどの勢いで僕の腕を？噛み千切った？狼へと襲いかかる。

こいつは危険だ、野放しにしておいてはダメな存在だ。

解除時の副作用なんか気にしてる場合じゃない、紅い少女だつて気にしてる場合じゃない、この狼は今ここで潰さなければならぬ存在だ！

そう判断しながら、叩きつければ百メートルプルプル十個分以上の水すら入る大穴を開けることができる拳を狼に振り下ろす。

だが、クレーターを形作ると思われたその拳は、なにかに受け止められていた。

いや、同時に意識が急速に遠退いていき腕が止められたということしかわからない。

「やっぱり、今のあなたじゃこの程度なんだね」

なにかが僕に囁く。

「本当はこのまま連れていきたいけど、まだその時じゃないんだよね」

なにか 『紅』が呟く。

「でも、いつか私は本当のあなたをあなたに思い出させてあげるから、その時まで、もう少し待っててね」

視界も思考も黒く塗りつぶされて、最後にはやっぱり『紅』だけが見えて、

「またね、

」

そこで、僕の意識は完全に闇に落ちていった。

紅（後書き）

ちなみに、今日からテスト期間ということで次話が投稿出来るのは来月になるかもしれません。

長い間が空きます。

ですがやめるわけではないので、どうかしばしお待ちください

それでは

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9840t/>

～とある刀のフェアリーテイル.....あれ？違くない？～

2011年11月23日19時54分発行